
銀魂—土方葵の真選組日誌—

冬瀬志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂―土方葵の真選組日誌―

【Nコード】

N7717U

【作者名】

冬瀬志保

【あらすじ】

突如現れた土方の妹・土方葵。兄とは真逆な性格のこの少女には、何か辛い過去がありそうだった。

そんな葵の味方についたのは、かの万事屋三人組こと、坂田銀時、神楽、志村新八。

そこに乱入するは「狂乱の貴公子」、桂小太郎にそのペットのエリザベス、あの「攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男」と恐れられる高杉晋助と「春雨の雷槍」と呼ばれる神威！？

他にも真選組が解散したり葵がヘタレでないオタクになったり、高

杉が稲荷橋で暴走したり。

シリアスなバトル、笑いや涙が織りなすドタバタコメディーが、今、始まる！

第零訓 人物紹介

どうも、初めまして、冬瀬志保です。

このたびは、私が大好きな空知先生の作品・「銀魂」で小説を書かせて頂くことに致しました。

小説を書き始めたばかりなので、駄文だし、文法めちゃくちゃだし、オリキャラをいきなり投入したり、最悪の場合、構成が崩れて登場するはずのキャラクターが出てこなかったりする可能性もあります
が、ぜひお付き合い下さい（ハ―ハ）。

えーと、ではまずはオリキャラの紹介を……。

名前 土方葵
歳 15歳
性別 女

好きなもの（食べ物）：正義 マヨネーズ 甘いもの
嫌いなもの（食べ物）：悪 酢昆布

葵は、名字から察していただけるように、副長の土方十四郎の妹です。ノーマルなDSな楽天的なタイプで、実の兄妹なのにあまり土方とはなれ合ってません。近藤からの推薦で、土方がいなかった際には、副長の役目を、15歳ながら果たします。沖田とは、DS同士仲良くやっていて、近藤を土方や沖田同様すごく慕っています
が、山崎には辛辣な言動をします。

初めて出会うも、甘党の銀時とはものすごく馬が合って、沖田と同じように、銀時のことを「旦那」と呼び慕いますが、酢昆布嫌いなので神楽とは犬猿の仲です。新八は……「ダメガネ」扱いですね。

武器は沖田と同じ、バズーカ（破壊力半端ないです）と刀、です。
「鬼の副長」と呼ばれる兄に対し、「救いの副長」と真選組内では
かなり慕われています。通り名は、「攘夷殺し」で、攘夷浪士なら
迷わず叩つ切ります。

一応描いてみました。（でも、たぶんまた書き直すと思います。キ
レイに）

> i 2 8 2 2 2 — 3 6 4 5 <

これ以上紹介したら、ネタばれになっちゃう（ハ―ハ；）ので、今
度はぜひ本編を読んでみて下さい。

最初の話はこんな必要ないかもしれない登場人（それもたった一人）
の紹介でしたが、お付き合いありがとうございます（ハ―ハ）。

第零訓 人物紹介（後書き）

えーと、読んでいただきありがとうございました。

先日、編集した折、挿絵を入れてみたのですが、ご想像を裏切るかもしれません。

すみません；；

第一訓 兄弟って似ているようで似ていなくて、似ていないようで似ているもん

「あのー！すいまっせーん！いい加減開けてくれませんかー！？」
その日の朝の真選組屯所の門前に、一人の少女が立っていた。門は、しつかりと閉じられている。

「トツシー！いるんでしょ！聞いてんでしょ！しらばっくれてないで開けてよ！ここ来てからもう五時間経過してるんですけど！」

しかし、そんな少女に、言葉を返す者はいない。

「マジでいい加減にしないと、あたしキレるよ？いいの？ねえ、いいの？あ、いいんだ。じゃあキレます。」

そう独り言を言った後、少女は「三つ数えるねー。」と言い出し、どこからかバズー力を取り出した。

「はい、ー！」

ドオオオオン！

真選組の門が、一瞬にして全壊した。

「って二と三はどこ行った！っていうかそれどこからか丸パクリだろ！」

開いた——というより壊された扉の向こう側に、アフロの髪型をした、鋭い両目を持つ男——土方が現れた。

「いやだなあ、パクったんじゃないよ。松平のつつあんが教えてくれたんだよ。『男は一だけ知つとけば生きていける』って。」

にこにこしながら答える少女に、土方は言い返す。

「あのな！お前女だろ！それに総悟と同じくバズー力搭載すんな！お前が真選組の敷地内に一歩入ったら、もう総悟と暴れまくって収拾がつかなくなるだろーが！」

「あー、そーちゃんいるんだー。ねえ、会わして。会わしてよトツシー。」

笑顔を絶やさずそう言い放ってくる少女を見て、少女は刀を抜いた。
「トツシーって呼ばれたくねエんだけどオオオオオ！」

刀の切っ先を向けられた少女は、アハハ、と笑い飛ばした。

「いいじゃん。トッシーはトッシーだもんね。あたしのお兄ちゃんだもんね。」

「お兄ちゃんって普通に呼べるなら、普通にお兄ちゃんって呼べや！」

「えーやだー。そうやってトッシーいじめるのが私の生甲斐だもん。」

怒りで顔を真っ赤にし、ぶるぶる震える土方。ついに堪忍袋の緒が切れたのか、手に持っていた刀を振り上げた。

「ふざけんのも大概にしるオオオオ！」

しかし、その時、背後から刀を誰かに掴まれた。

「何してんですかイ、土方さん。アンタの妹じゃーねエですかイ。」
土方を止めたのは、栗色の髪をした、涼しい顔をした青年——沖田総悟だった。

「俺ア久しぶりにあっちゃんと遊べると思ってたのに、土方さんに止められたらそんな楽しみもなくなるんですア。だから土方死ねコノヤロー。」

「たったそんだけの理由で俺の人生に終止符打とってか！？ふざけんな！」

土方は、未だに怒りを鎮めない。

「ほらほら、怒りをおさめる。一時の感情に身を任せちゃいけないでしょ。侍でもある者がさ。」

「いかにも正論っぽいこと言うんじゃないか！っていかそそも俺の怒りの発端はデメエだぞ！」

「アハハ。ごめーん。」

ふざけながらも、一応は謝る少女を見て、土方の怒りも、幾分か収まってきた。土方は刀を鞘におさめると、溜息をついた。

「言っておくが、俺アお前をこん中にいれねえぞ。俺ア……。」

「あー、そうだよ。そーちゃん一番隊隊長だもんね。」

「それでなア、土方コノヤローが……。」

土方が言い終わる前に、当然の如く沖田は少女を真選組屯所の中を案内しようとしている。

「って俺のことおいていくんじゃねエ！」

しかし、沖田と少女は土方の叫びに耳を貸さず、どんどん真選組敷地内へと足を踏み入れるのであった。

「お久しぶりです、近藤さん。」

少女——土方葵は、座敷の上座に座る真選組局長、近藤勲に頭を下げた。

「いやあ、久しぶりだねエ、葵くん。俺たちが上京してから会っていないから、もう何年ぶりの再開だな。」

はい、と微笑しながら頷くと、葵は持っていた、「京菓子」と書かれた箱を近藤に差し出した。

「これ、どうぞ屯所のみなさんで召し上がってください。」

そう葵が言つと、近藤は微笑みながら箱を受け取った。

「ありがとう。」

感謝の言葉を述べた後、近藤は思いついたように口を開いた。

「そう言えば、葵くん、君はここで暮らすんだよね？」

葵は土方をちらりと見、少し困った顔をした。

「兄が認めてくれれば、ですが……。」

土方はぷいとそっぽを向いて、鼻を鳴らした。

「残念だったな、葵。俺ア認めねエぞ。」

しかし、そう言つた土方を苦笑しながら見ると、近藤は葵に言つた。

「トシの言うことは気にするな。それに、総悟も楽しみにしているようだしな。」

目を向けてみると、確かに沖田は、珍しく神妙そうな顔で、ことの成り行きを見守っていた。

「心配するな、総悟。葵くんはここに泊まるぞ。」

それを聞いて、沖田は目を輝かせた。土方は、気に食わなそうに荒々しく立ち上がると、舌打ちをして部屋から立ち去った。葵は、そ

んな兄の姿を見て、肩を落とした。

「まあまあ、そんな顔をするな。すぐに気が変わるさ。」

近藤の言葉を聞いて、葵は頷いた。

「……本当のことを言つと、私が悪いんです。私が、あんなことしたから……。」

「え？」

近藤は、片眉をあげた。しかし、葵はいつものノー天気な顔に戻ると、笑いながら首を振った。

「いえ、何でもありません。」

それから立ち上がると、葵はぺこりと頭を下げた。

「すみません。知り合いとの待ち合わせの時間がせまっているので、おいとませねばなりません。よろしいでしょうか？」

近藤は快くそれを承諾すると、葵はもう一度頭を垂れ、部屋から去って行った。

「にしても近藤さん。」

ふいに、沖田が口を開いた。

「あの兄妹、全然似ていやせんねエ。土方さんと違って、葵はノー天気だし、楽天的なタイプですし。」

その言葉に、近藤は二人が去っていた襖の方を見て、呟いた。

「いや、そういうわけでもないぞ。」

近藤のそんな呟きに、沖田は首をかしげた。

第一訓 兄弟って似ているようで似ていなくて、似ていないようで似ているもん

実在した新撰組、「鬼の副長」・土方歳三には、のぶと周というお姉さんがいたらしいんですが、今回のオリキャラは姉ではなく妹なので、この二人から名前をいただくことは断念しました。……というより、はっきり言うと、どうやってもじろつか迷ったので、結局全然関係のない「葵」に決めました（^^;）。

第二訓 人には表と裏の顔があるから気をつける

前述からご察しの通り、この土方葵、土方十四郎の妹である。髪は墨を流したような黒髪のロングストレートで、決して兄と同じ無造作な髪ではなく、毎日手入れをしているようなとても美しい髪だったが、時々見せる真剣な表情や、人を睨む時の鋭い双眸は、どこからどう見ても兄譲りだった。

さて、そんな葵が向かった先——それは、小さな茶屋だった。人気の多くない、しんとした細い道に、一軒だけ、甘味屋が建っているのである。

葵は、茶屋につくと、迷いなく、笠を深くかぶった男の真後ろに座った。

「どうだ、久しぶりの再会は。」

どこか嘲笑を含んだ声でそう言っていると、男はそばにあった湯呑から、湯気の立つ緑茶をすすった。

「大して変わらないよ。それに、アンタが聞きたいのは、そんなことじゃないだろ。」

鋭い漆黒の瞳で後ろにいる男を睨みつけると、葵は続けた。

「お前に言われたとおり、真選組の中にもぐりこんだし、いざとなれば副長と同じ座に居座れるくらいの地位にはなった。……次は？」

男は、独特の気味の悪い声で笑うと、口を開いた。

「賢いテメーのことだ。もうわかってるんじゃないのか？」

葵は、目を瞑った。

「真選組を調査し、徹底的に洗い出したところで内部から潰す……か？」

「わかってるじゃねーか。」

冷たいが、どこか人を寄せ付けるオーラを纏うその男は、口元に不気味な微笑をたたえた。

葵は、そんな男に言った。

「どうやら、アンタら鬼兵隊、宇宙海賊の春雨と繋がってるらしいじゃないか。いまどき真選組から潰したところで、何が変わる？それよりも、春雨と地球制服して、そのまま將軍の首を獲れば？」

男は、声に出さずに笑った。

「仲が悪くても、やっぱり兄妹か？未だ真選組を捨て切れてねエとはな。兄思いな妹なこった。」

「そんな話はしていない。それに、あたしは兄のことなんて何とも思っていない。……あの人は、ただの道端に転がってる屍さ。何の役にも立たない。」

鋭い声でそう返された男は、しかし、続けた。

「おいおいヒデーな。実の兄だろう？それとアンタ、一体どこでそういう情報手に入れんだ？春雨と鬼兵隊がつながってるのを知っているとえば、俺が斬りたくて斬りたくてうずうずしている、あの銀髪のアホ侍ぐらいしかいねエんだが。」

「銀髪のアホ侍なんか知らないよ。それに、あたしが話している話はそんなじゃない。何度言えばわかる？」

語尾に、わずかだが殺気を感じ取った男は、葵の問いに、冷笑しながら答えた。

「……俺は本当は幕府の犬なんぞに興味はねエ。逆に言っと、関わりたくもねエ。」

その言葉に、葵は鋭い声で返した。

「なら、なぜ真選組を……。」

「だが、テメーらと戦争おっぱじめた方が、春雨の手を借りなくすむ。俺アあの宇宙の喧嘩師の野郎をあまり好いていねエんだ。天人を俺の船に乗せる気はねエ。」

宇宙の喧嘩師？

その言葉に、葵は少し眉をしかめた。

「俺ア出来るだけ奴らに借りを作らず、俺自身の手を汚さずにやっていきてエのさ。」

男が発した言葉を聞いて、葵は、持ってこられたお茶を飲んでから、

ぽつりと呟いた。

「……あたしは、アンタのことが好きだよ。」

葵の発言を聞いて、男は口元に冷たい笑みを浮かべながら後ろの葵に目を向けた。

「……アンタは剣の腕もあれば、頭もある。だけどね、そうやって自分の手を汚さずに、自分の意思を貫き通そうという考えは、聞いただけで胸くそ悪くなる。」

男は、ゆっくりと立ち上がった。しかし、葵はそれでも続ける。

「かの吉田先生が、アンタにそんなことを教えたとは思えない。」

「それに、アンタの腹が読めない。あたしら真選組なんかを利用して、何をするつもりだ？」

男は、笠を少しだけ上げると、にたりと笑った。

「俺はただ壊すだけだ……。この腐った世界を！」

そう言った男の片目には、暗い殺気が宿っていた。

第二訓 人には表と裏の顔があるから気をつける（後書き）

暇があれば二日～四日おきに更新すると思います。
よろしく願います（＾ー＾）

第三訓 人の話聞かないヤツってだいたい気楽なヤツが多い

「たっだいま〜！」

前のシーンとは比べ物にならないくらいの明るい声でそう告げると、葵は真選組屯所内に足を踏み入れた。

「おう。帰ってきたかい。」

そう葵を迎えるのは、一番隊隊長、沖田総悟である。

「あれ？トツシーは？」

尋ねる葵に、沖田は答えた。

「あー、土方さんなら、今奥の部屋で、近藤さんと旦那たちと何やら喋っているようだぜ。」

「旦那？」

片眉を上げる葵。

「万事屋の旦那さ。」

その答えを聞いて、葵は興味深そうに頷き、沖田の言った、「奥の部屋」へ向かった。真選組の廊下は入り組んでいて、初めて来たのなら、大の大人でも迷ってしまうくらいの大きさだったが、葵は躊躇なく、自分の正しいと思った回廊を突き進み、やがて、奥の部屋へ辿りついた。

「テメー、高杉と何か関係があるんだろ。」

襖の向こうから聞こえた、高杉、という名を聞いて、一瞬、葵の背筋が凍りついた。

「あん？アイツがどうしたってんだよ。それに、ただの知り合いなだけだ。それも随分昔のな。」

気だるそうな声が、兄の鋭い言葉を返す。

「っていうかお前……。」

座敷の中の兄がぴりぴりして爆発寸前なのを、葵は「妹の第六感」で感じ取った。

「取り調べ中になんでそうやってがっかつカツ丼食いながら寝そべ

つてられんだよ！ふざけんじゃねーぞ！取り調べナメんな！」

その時、がらりと襖が開いた。

「俺がいつ取り調べナメたってんです？」

会話に乱入したのは、当然のことだが沖田総悟。

「俺がナメてんは土方さんだけでさア。」

沖田の姿を見た瞬間、中にいた土方の動きがぴたりと止まった。しばらく、誰も動かない。だが、少し後、土方の眉がぴくぴくと動いた。

「……総悟。お前に言っただけ。それに出て来るなつつたろ。」

「あーすいやせん。聞いてやせんでした。」

土方はゆっくりと立ち上がると、鞘から刀を抜きだした。それから、目をカッと開くと、大きな声で叫んだ。

「人の話聞けって何回言ったらわかんだよオオ！っていつか葵はぜってえ連れてくるなって言っただろうがアアア！」

「あー、すいやせん。聞いてやせんでした。」

同じ返答を繰り返す沖田に、土方の刀を握る手が動いた。

「ふざけんじゃねエぞオオオ！」

その瞬間、葵が前に出て、土方の刀を両手で挟み、攻撃を防いだ。

「トッシー。怒り鎮めろって何回言えばいいのさ。」

「葵……。」

眉をしかめながらも、土方はその言葉で刀を鞘に収めた。

「おーい、俺もう帰っていいの？帰っていいの？今日土曜日なんだけど。ジャンプの発売日なんだけど。俺もんのそい続き気になるんだけど。」

隣にいた、口いっぱいにカツ丼をほおばっている銀髪の侍が、土方と近藤を生気のない目で見つめた。

「お前いつまでたつてもジャンプから卒業できねエのか。マガジンに移行しろ、マガジンに。」

土方のその言葉を聞いて、銀髪は片眉を上げた。

「バカ言っちゃいかんよ土方くん。アレは神だぜ？ジャンプは神だ

ぜ？マガジンなんかと比べちゃダメだよ。」

「あ？バカ言ってるのはテメエだろーがこの甘党パーマ。マガジンは神を超える存在だぞ？ジャンプと一緒にすんじゃねエ。」

銀髪の侍と土方の間で、ばちばちと火花が散った。

「おいおい土方くん。今なんつった？ん？その言葉取り消せ。なんならそこにいるお嬢さんに聞いてみようじゃねーか。男女どちらにも人気がある漫画雑誌こそナンバー１なんだよ。」

「残念ながら、そこにいるお嬢さんは俺の妹だ。」

「あれ？土方くんは妹さんなんかいた？こんなサラサラストレートヘアーのかわいい妹さんいた？あつれー、おつかしいな。マヨラーの無造作ヘアーにこんな妹さんいたんだー。誰か違う人の妹さんなんじゃいの？ん？土方くん。」

「悪かったな、無造作ヘアーで。っていうかそう言うお前は無造作ヘアーより直すのが難しそうな天然パーマじゃねーか。」

そこまで言って、二人は葵に殺気がこもった目を向けた。

「で？どっちだ。ジャンプか？マガジンか？」

尋ねられた葵は、一瞬どうしようか迷ったが、やがて答えた。

「どちらかっていうと、ジャンプ派です。」

その答えを聞いた二人は、それぞれ感嘆や落胆の声を上げる。

「うっしやー！」

「……。」

銀髪の侍が、にまりと下品な笑いを口元に浮かべた。

「悪いねエ、土方くん。どうやら君の妹の心をつかんだのは、ジャンプの方だったらしいぜ。」

土方は鋭い双眸で銀髪を睨んだ後、今度はその目を葵に向けた。

「お前、ジャンプ読んでたのか？」

葵はアハハー、と笑いながら頷く。

「ごめんね、トッシー。本当は言いたかったんだけどさ、そーちゃんに、『落胆した時の土方さんの顔見れば、俺たちサド気質の人間の心をくすぐるぜ。』って言われてさア。で、トッシーが落胆する

っていたら、やっぱりマガジンのことじゃん？だからジャンプ読んでるの秘密にしてただ。んでさア、やっぱり思ったけど、そーちやんのいうこと百発百中で当たるよねー。ホントトツシーの落胆顔見るの面白い。」

「だろ？あつちゃん。俺の言うことは100%正しいんだぜ。」

それを聞いて、土方は思った。二度と沖田のサド野郎を葵に近づかせてはならない。じゃないと、いつか自分が死ぬような目にあうだろう、と。そして、ふと考えなおす。

(……俺さっきまで何してたんだっけ？あ、そーいや、万事屋の野郎の取り調べを……。)

「っておい！」

思いっきり土方が叫んだ。

「テメエらの乱入のせいで、取り調べのこと忘れてたアアア！」

そう言うってから、土方は気分を変えようとタバコを取り出し、マヨライターで火を点けると、寝そべっている侍を再び問いただした。

「もう一度聞くぞ。高杉晋助との関与を、お前は認めねェんだな。」

「ああ認めねーよ。とおーい昔の知り合いだよバカヤロー。」

何度も言いたくない、とでも言うように、面倒くさそうに答えたその侍を見て、葵は興味深そうに、しかし、静かに問うた。

「……お侍さん。お名前をお伺いしてもよろしいですか。……あた

しは、真選組の副長補佐、土方葵と申します。」

丁寧にお辞儀する葵を見て、銀髪の侍は少し驚いた顔を作った。

「あ……。俺は万事屋の坂田銀時だけど……。っていつか、え？何？君本当に多串くんの妹？」

その言葉に、葵はうなずく。

「はい、多串くんの妹の、多串葵といます。」

「ってソイツのノリに乗せられて、勝手に改名するんじゃない！」

そう兄にツッコまれて、葵は口をにつこり笑った。

「トツシーのその顔見たかったんだ。アハハ。」

土方は怒りに震え始めた。

「総悟、テメ葵に何を吹き込みやがった……！」

沖田は、そう叫ばれて、何もなかったかのように答えた。

「俺ですかイ？俺は、ただ単に、あっちゃんに、人をいじめるのは面白い。特に土方死ねコノヤローというような堅苦しい存在が『やめてくれ』とせがみつくまでやるのは遣り甲斐があると言いやしたかねエ。それが今回の件に関係があるんですかイ？」

「関係おありだアアア！テメエのせいで葵ろくな人間にならねエよ！いつかサド女王とか呼ばれるようになるぞ！まだ十五歳なんだぞ、葵！っていうか土方死ねコノヤローってもう既に固有名詞じゃねエかアアア！」

頭をぱりぱりとかくと、沖田は首をかしげた。

「サド女王のどこが悪いんです？サド気質の最強の女として、サド界に君臨できませんぜ？」

「君臨しないでいいよ！逆に迷惑！誰がそんな地位に就きたいんだよ！」

「いやー、葵なら、俺とともに……。」

「ごめんだな！」

わざとらしく大きいため息をつく、沖田は土方を困った眼で見つめ、銀髪の手——銀時に視線を移した。

「旦那ア、何とか言ってくだせえ。この土方死ねコノヤロー、サディズムを理解していやせんぜ。」

「あー、もう別にいいんじゃない？」銀時は片眉をあげた。「コイツにはサディズムが理解できるほどの頭がねエんだよ。コイツはもう違う世界で生きていくしかないんだよ。」

「違う世界で生きてくのはお前ら！」

大きいため息をつく、土方は後ろで黙っている近藤を振り返った。「近藤さん。悪いが、もうこの取調べはやめねエか？」

が、しかし。

「……ってアンタも真面目に仕事しろオオ！」

近藤は、懐から取り出した、端麗な美女が写っている写真をじつと

見つめ、気味の悪い笑みを口に浮かべながら、たまにため息をつく。土方はそれを見て頭を抱える。

「嗚呼、もうダメだ。コイツらじゃ話になんねエ。俺ちよつと食堂
いって、マヨ井食ってくるわ。」

そう言ってから、土方は部屋を後にする。

「ごめんねトッシー。また今度いじめに行くからさ。」
「来なくていい！」

妹のその言葉に、廊下の奥から土方の叫び声が上がった。

第三訓 人の話聞かないヤツってだいたい気楽なヤツが多い（後書き）

挿絵（？）です。（銀さん）

> i 2 8 2 2 0 | 3 6 4 5 <

第四訓 人には他人が入れない過去がある

「へえー。万事屋かあ。珍しい職業ですね、銀時の旦那。」

数十分後、銀髪の侍、坂田銀時は、取り調べから解放され、我が家、万事屋への帰り道を辿っていた。その時に葵が発した言葉を聞いて、銀時はなれなさそうに頭を掻いた。

「いやあ、銀時の旦那って、何か意外にいい響きしてんなあ。今まで銀髪の旦那とか普通に旦那って呼ばれることはあったんだけどさ。……っていうか、めんどくさくね？そんな長い名で呼ぶの。」

言われて、葵は首を振った。

「いえ。真選組の副長補佐として、それ相応にきちんと分をわきまえないといけませんので、なれなれしくあだ名等で旦那を呼ぶことはできませんよ。」

微笑みながらそう語った葵を見て、銀時はうなずいた。

「もうすぐで家に着くから、上がって行けよ。」

それを聞いた葵は、頭をぶんぶん振った。

「だ、ダメです。トッシーに叱られます。」

「あのマヨ方なんてどうだっていいだろ。俺を送るという仕事のー環だと思って、上がって行けや。」

何度断つてもその度に「上がって行け」と同じ言葉を銀時に、葵はとうとう承諾した。

「……じゃ、じゃあ、せつかくですの。」

銀時が止まったのは、とある二階建ての木造住宅の前だった。一階には、「スナックお登勢」という看板の、小さな古びた居酒屋があり、その上には、「万事屋銀ちゃん」と書かれた看板がベランダに設置されている二階があった。

「ここが、銀時の旦那の……。」

「そう、万事屋だ。」

葵の言葉を継いだ銀時は、二階へ通ずる階段をのぼりはじめた。葵も、それに続く。

「ただいま。」

がらりと引き戸を開けた銀時は、大きな声で、部屋の中にいるであろう人々にそう告げた。

「お、お邪魔します。」

葵も小声でそう言う。

「あ、お帰りなさい、銀さん。」

最初に出てきたのは、メガネをかけた、あまりさえないさそうな、十五、六歳の少年。葵の姿を見ると、ぺこりと頭を下げた。

「……銀さん、依頼人の方ですか？」

その問いに、銀時はブーツを脱ぎながら答えた。

「いんや。ちげえよ。後で話聞きゃあわかるって。」

銀時と葵が靴を脱ぎ終わり、万事屋に足を踏み入れたその直後、二人目の人物が現れた。

「銀ちゃん、今までどこで何していたアルか。ティズニールランドでも行ったアルか。お土産買ってきたアルか。ならさっさと出して私たちに渡すネ。」

「その脅迫的な発言が初登場の仕方かよ。もう少し考えてから出てこい。」

銀時にそう言われて、その人物——赤いチャイナ服を着た少女は、一瞬にして瞳の色を変えた。

「お帰り、あなた。今からどうする？お風呂？晩御飯？それとも、わ・た・し？」

「ちげえよ！そういう意味で考え直すんじゃないやねエよ！逆に悪い方向行ってる！」

頭を抱える銀時に、少女はムツとした顔をして口を開いた。

「じゃあどんな登場の仕方がいいネ。マンガの方でも、私初登場の時いきなり銀ちゃんたちのスクーターで轢かれたアル。あのシーンは最悪だったヨ。あれ何？私のことバカにしてるアルか？っていう

かゴリラのヤロー、私をもつと巨乳に書くヨロシ。こんな幼稚な姿、心は乙女の私には似合わないアル。」

「いや、お前心乙女じゃないだろ。姿のまま幼稚な怪力娘だろ。」少女はそれを聞いたとたん銀時の上にのしかかった。

「今なんて言ったコラ、ん？今なんて言った。」

「待て待て待て待て！余計にキヤラ悪くなってる！頼むから新八くらしいさわやかに登場してくれ！」

焦る銀時の言葉に、少女は新八と呼ばれた少年を上から目線で睨みつけた。

「フン。新八なんかと一緒にしないでヨ。いつまで経っても新八の新八と私を同レベルにするなんて、いくら銀ちゃんでも許せないネ。」

そこまで言うてから、少女は葵を見つめた。

「っていつかコイツ、誰？」

……今まで気付かなかったのかよ。

そんな思いが、少女以外全員の頭の中に浮かんた。

「へエ。あの土方さんの妹さんですか。」

メガネの少年、新八がお茶を葵が座る長椅子の前の机に差し出す。新八の言葉を聞いた葵は、「はい。」とうなずく。

「フン。コイツ、マヨラーの妹アルか。コイツも絶対マヨラーネ。チャイナ服の少女——神楽は言う。」

「いや、マヨラーとは限らないよ。」と新八。

葵は一礼すると口を開いた。

「改めまして、自己紹介を。あたしの名前は、土方葵。真選組副長補佐です。……ちなみに、メガネくんとチャイナちゃんが気になっていたようなので言います。あたしもマヨラーです。」

「結果的にマヨラーなんだ。」と一応新八はツッコむ。

「あ、でも他にも、甘いものとか大好きですよ。小豆とか。」

「お、そこら辺は俺と趣味が合いそうだな、葵くんよお。」

葵の隣に座っていた銀時は、にまにましながら、葵の肩をばんばん叩く。

「銀ちゃん。私嫌ヨ、銀ちゃんがこの葵に染まって行くのを見るのは。コイツ、雰囲気からしてあのサド野郎と仲良さそうアル。ま、コイツが酢昆布好きなら許してあげるけどな。」

偉そうに威張る神楽に、葵は即答する。

「ご免なさい、あたし、酢昆布どうしてもダメなんだ。小さい時好きだったんだけどね、それかじってた時に家にゴキブリ出て、酢昆布ってゴキブリ呼ぶと思ったからそれ以来食べてない。」

その言葉に、万事屋三人組の記憶に、先日の悲劇が呼び起こされ、三人は何とも言えない顔になった。

あの巨大ゴキブリ。バカ皇子——じゃねエや、ハタ皇子。五郎とか言う女王。ってか何で女王なのに五郎？それ以前にあのバカが逃がさなかったら、地球滅ぶこともなかったんじゃない？死ねよ、バカ！いろいろな（嫌な）思い出（と疑問と苦情）が頭の中にうずまく。っていうかあの事件、誰が五郎殺したんだろ？殺したヤツには賞金百万だな、この地球を救ったんだから。

そう思う三人は知らない。五郎を殺したのは、この家の住人の一人（一匹）であるということ……。

「いやあ！」神楽が絶叫した。「テメ、何してくれるネ！いやな記憶思い出しちゃったじゃねエかコノヤロー！ギャー、ゴキブリ！ゴキブリが私の目の前にいるヨ！私を殺そうとしてるヨ！ハロー！ハローエブリーワン！」

「ヘルプミーな。」銀時が発狂しそうになっている、というよりもすでにしている神楽を冷めた目で見つめながらツツコむ。「ってかこのツツコミ結構前にしたろ。マンガの方で。」

「ダメヨ銀ちゃん！やっぱこの女を万事屋の中に入れたら、必ず不運がもたらされるヨ！ギャー！ゴキブリ！グッバイ！グッバイエブリーワン！」

「ヘルプミーな。」再び注意する銀時。

「銀さん。」新八も冷たい視線で神楽に浴びせる。「神楽ちゃん、止めてあげないとダメじゃないんツスカね。」

「あー、もういいんじゃない？」銀時はひらひらと手を振り、葵を振り返った。「俺たちには新しいヒロイン、土方葵がいるんだからさ。なんなら坂田葵とかどうだ？俺の妹として、万事屋銀ちゃんに働けば、必ず幸運がもたらされるぞ。」

しかし、そう銀時が言い終わった瞬間、神楽の鋭い蹴りが葵に向って炸裂された。

「お前がヒロインなんて、私は認めないアルウウ！」

「いだい！いだい！やめて！ちよっ、ホントマジやめて！そこ古傷あるの！背中にデッカイ古傷あるの！頼むからやめてエエ！」

叫ぶ葵を見て、神楽は葵をがしと踏みつぶしながらフンと鼻を鳴らす。

「お前がウソついてることくらいわかるってるんだヨ！お前、絶対に古傷なんてないネ！背中にデッカイ古傷なんて、まるでどこかのマンガの主人公ネ！」

「いや、マジだから！ホント止めて！」
痛そうにする葵。

「じゃあ見せるヨロシ！もしなかったら、もっと苛めるぞコラアア！」

その言葉を聞いて、新八はげっそりとした顔を作った。

「銀さん、今日の神楽ちゃんちよっとおかしいですよ。いつもこんなこと言わないのに。何かいつもの神楽ちゃんがドSになった感じですよ。」

うんうんと銀時は頷く。

「まあ、アイツもそういう年頃なんだよ。」

「そういう年頃ってなんだよ!?」新八がツツコむ。「サド気質になる年頃なんて聞いたことねエよ！っていうか神楽ちゃんてSだったんですか？」

「知らねエよ。……って、ええ!?!」

銀時が驚きの声を上げた。目の前では、神楽が無理やり葵の真選組隊服を脱がしている。

「え！？マジで脱ぐの！？マジで脱ぐの！？」

「ダメです！銀時の旦那はあっち見ててください！っていうか本当は脱がされたくないし！」

葵はそう弁ずるが、神楽はぐいぐいと真選組の服を脱がしていく。

銀時は、こっちを見ようかあっちを見ようか迷ったが、結果的にこっちを見ることにした。

「だからダメだって！銀時の旦那、ホント、マジ向こう見ててください！」

しかし、そう言った瞬間、葵の背中が丸出しになった。前の方はまだきちんと着ているが、後の方だけ取れてしまったのである。

「ちょ、ちよつとチャイナ！なんてことしてくれてんのよ！これはこういう小説じゃないでしょ！」

だが、葵の背中が見えた瞬間、万事屋三人組は無言になった。そんな三人の瞳には、葵のまっ白い背中が肌映っている。けれど、そんな真冬の雪のように白い背中に、二つ、ちよど×の形のように大きな切り傷があった。茶色く黒ずみ、何年も前の傷だということがうかがえる。

「……ほ、ホントにあった。」

神楽は口をあぐり開け、そのまま動かなかった。銀時は神楽の顎を定位置に戻すと、少し眉をしかめながら、葵に言った。

「……その傷、どうしたんだ。」

葵は、しばらく地面の一点をじっと見つめ、何も答えなかったが、やがて顔を上げると、にっこりと笑った。

「……話せば長くなります。それに、あたしの身の上話なんてしていたら、日が暮れるでしょう。……あ、そう言ったら、もう本当に日が暮れてきましたね。」

銀時の事務机の後ろにある窓を見つめながら、葵が言った。窓から差し込む淡い紅色の日差しが、少し曇った顔の葵の顔を照らし出す。

「トツシーが心配するかもしれないので、あたし、もうそろそろ帰らなくちゃ。」

そう口を開いてから、葵はごそごそと隊服を再び着こむと、ぺこりと頭を下げた。

「今日は、お世話になりました。また今度来るんで、その時もよろしく。」

笑顔でそう言った葵に、銀時たちは、「あ、ああ……。」というような、あまり解せない顔で頷いた。

「んじゃ、また来いよ。」

「はい。」

葵は、そう言ってから万事屋を後にした。

夕暮れの太陽が、真選組へ帰ろうとする葵の影を浮かび上がらせた。その影は、まるで漆黒の闇のようだった。

第四訓 人には他人が入れない過去がある（後書き）

葵の過去……。それはいつたい何なのでしょう！？

一応考えてはあるんですが、書いている途中に違う過去になってしまいかもれません。

小説を書くときは、普通はマンガでいうプロットみたいな構成を作らなければならないのにも関わらず、私という人間は、そういうものは頭に入らずに書き始めます。書いているうちに、自然にキャラクターたちが動いてくれるんです。

でも、そのおかげで私の小説はいつもダメになりますけどね。途中から、「あれ、こんな話だったっけ。」という風になります。

なまじ今回は操りにくいキャラクターがたくさん出てくるので（特に桂、高杉、神威、）、私はものすごく苦戦するかもしれませんが、どうぞご支援お願いいたします。

あとがき長くなってすみません（汗）。

銀さん：次回はヅラと神威が出てくる！……かもしれない。

神楽：はつきりしろヨ。

新八：今回の神楽ちゃん、なんかいつもと違う気が……。

第五訓 道で怪しい奴に声かけられたら即逃げろ

「ねエ、阿伏兔。」

宇宙の彼方、暗い暗い戦艦の中で、二人の人物がひっそりとたたずんでいた。一人は、橙色の髪の毛を後ろで三つ編みにした、まだ年若い青年。もう一人は、中年半ばまで行っていそうな男。どちらもチャイナ服を身につけており、その手には番傘が握られている。

「俺たち、今どこに向ってるの？」

尋ねられた中年の男——阿伏兔は、呆れた顔で答えた。

「すつとこどつこい。団長さまは、自分の目的地もわからずに船に乗るとはねエ。団長、俺たちが向かっている先は、地球だ。」

青年は、にっこりと微笑んだ。というよりも、すでに口元に浮かべていた笑みを、さらに大きくした。

「へエ。じゃあ、あの銀髪のお兄さんにも会えるって言う訳か。」

「同時に、アンタの妹さんにもな。」

阿伏兔が言つと、青年は阿伏兔には顔も向けず、前を向いたまま、
「阿伏兔。」と呟いた。その声は穏やかだったが、その穏やかさの奥に、深い、暗い、恐ろしい殺気がこもっていた。それを聞いて、阿伏兔は無言になる。

「その話はしない約束だろ？……それに、何度も言うようだけど、俺は弱い奴には興味はない。俺が興味を示すのは、強者のみ。あの銀髪のお侍さんや、そこにいる……。」

青年は、くると振り向き、後ろの壁にもたれかかっている男に目を向けた。

「あの獣だけさ。」

男は身を起すと、手に持っていたキセルを吹かし、にやりと笑った。

「獣……ねエ。俺には似合ってるかも知れねエな、その呼び名。」
ククツと不気味な笑みを浮かべると、男は続けた。

「テメーらは、地球で何をするつもりなんだ？」

キセルの男に問われて、青年は答えた。

「俺たちは、あの銀髪のお侍さんを倒す……。」

しかし、青年が言いかけた時、阿伏兔が青年の頭をごつりと叩いた。
「ちげえだろ。俺たちア元老のジジイ共に命令されて地球に向ってんだよ。アンタに付き合うのはついでだ。本当の目的はビジネスだ、ビジネス。」

だが、そんな阿伏兔の言葉も聞かず、男はにやりと笑った。

「それなら俺と同じだな、神威。俺もあの銀髪を殺したくて殺したくてうずうずしてんだ。……いや、それ以上の趣向も用意しているぜ。なかなかいい腕前の敵さんを、銀時のほかに用意してやってんだ。」

それから、青年の目をじつと見つめると、言った。

「どうだ？俺の作戦に、乗ってみるか？」

青年と阿伏兔は、そう持ちかけた男の緑色の瞳を見つめ返した。
二つの暗い殺気の塊の間で、何かが変化した。利用し、利用されるような間関係ではなく、何か、違うものが二人の間で結ばれた。――それは、闇と闇とを結ぶ、確かなものだった。

「で、何で君がここにいるのかな、ヅラくん？」

「ヅラくんじゃない、桂だ。」

万事屋銀ちゃんのベランダには、長髪の男と、不思議な生物が立っていた。

「……ここは攘夷浪士の会合場所じゃないんだけどな、ヅラくん？」

「ヅラくんじゃない、桂だ。」

一瞬、長髪の男と向かい合っていた銀時の心に、言い知れぬ怒りが煮え滾った。

「ここにいられると迷惑なんだけどな、ヅラ。」

ひとつオクターブが低くなった銀時に気付きもせず、男は返す。

「ヅラじゃない、ヅラくん。……あ、間違えた。桂だ。」

「つていい加減にしろオオオ！」

銀時は、長髪の男、攘夷浪士の桂小太郎を蹴り飛ばすと、つり上がった目で叫び始めた。

「何でコイツがいんだよ！何でコイツが俺ン家の前にいんだよ！？頼むから消えてくれ！俺もいつか消えるから、その前にコイツ消してくれエエエ！」

「それは言いすぎではないのか、銀時。」桂は、蹴られた頭の部分を撫でながら起き上った。「俺はお前にいい情報を持って来てやったのだぞ。」

それを聞いて、銀時の顔が、少しだけ変わった。

「いい情報？」

「ああ。」桂は神妙にうなずいた。「実はな、先日Oweeの新ソフットの……。」

だが、かわいそうなことに、桂は、言い終わる前に、銀時のアップパーカットを食らい、気絶してしまった。

「こんにちは。」

葵は、声をかけられて気がして、ぴたりと足を止めた。兄に言いつけられて、マヨネーズをスーパーから買う帰る途中だった。

「こんにちは。」

もう一度挨拶されて、葵は自分の周りをキョロキョロと見回す。しかし、あたりには自分と、声をかけてくる人物の姿以外、見当たらない。

「君だよ、君。」

言われて、葵は後ろを振り返った。

そこには、チャイナ服を着た青年が立っていた。可愛らしい微笑みと、橙色の髪が、強く印象的だ。

「えーと……。土方、葵……。ちゃん？」

葵は小さくうなずく。

「そう。俺は神威。高杉の知り合いだ。」

笑いながら、神威は挨拶しようとしても言うように、片手を差し出してきた。だが、葵は、その手を見て、思わず後ろへ下がった。

「……恐がらなくてもいいのに。何もしいよ。」

そう言われても、その手には、何かがあった。掴まれたら、死んでしまう——。そんな恐怖が、葵の全身を包んだ。なまじ、葵は真選組の一員。真選組の隊員には、危機察知能力が絶対に必要とされる。血縁関係で副長補佐になったとはいえ、葵は侮れない危機管理能力を持っている。そんな葵が、ものすごい恐怖を感じたのだった。

「聞いている？俺、何もしいって。」

神威は、硬直して固まっている葵の手を無理やり掴んで、握手させた。それから、手を離すと、さらに笑みを深くさせ、葵の瞳をじっと見つめる。

「ね？何もなかったでしょ。」

葵は、動かなかった。片手につかんでいたスーパールのレジ袋をばさりと落とすと、腰を低く構え、手に持っていた刀を前に突き出した。

「……戦うの？嫌だなア、俺はそんなことしに來てないんだって。ただ、俺は君に高杉からの伝言を伝えに來ただけだよ。」

その言葉で、葵は眉をしかめ、構えを解いた。

「……今は待機しておけ。時が來たら、お前がやるべきことを俺が伝える。それまで待っている。」だって。ああ、あとも言うってたな。『裏切ったら殺す。』

葵は、フンと鼻を鳴らした。

「高杉らしいな。」

そして、葵は神威の青色の瞳を見つめると、

「高杉に了解したと伝えてくれ。」
と答えた。

「わかった。」

神威は、快く引き受けると、暗い路地の中に消えていった。その後ろ姿は、自分の世界——闇に帰る鬼のものだった。

第五訓 道で怪しい奴に声かけられたら即逃げろ（後書き）

神威、阿伏兔、高杉の三人の口調がいまいちわかりません……；；

第六訓 一歩引いて全体を見れば、それまで近すぎて見えなかったもんが見える

感想を書いて下さった方、本当にありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いいたします^^。

第六訓 一歩引いて全体を見れば、それまで近すぎて見えなかったもんが見える

真選組の隊員は、全員六時に起床する。大体、朝ごはんを作るのは当番で、一番隊から十番隊の隊員たちが毎朝担当している。

しかし、副長・土方十四郎の妹、土方葵が真選組に来てから、朝ごはんも昼ごはんも晩ごはんも、ほとんど毎日葵が作っている。「しなくてもいい」と言われるのにも関わらず、葵は笑顔で料理当番を引き受けていた。

午前六時半から八時までトレーニングをし、隊員たちは八時からそれぞれの任務をこなす。

さて、その日の副長補佐、土方葵の場合は――。

「葵さん！事件です！」

「どうした？ジミー。」

自分に向って走ってくる山崎に向って、葵はそう言い放った。

「……いや、あの、ジミーっていうの、やめてくれませんか……。」

「ごめん、ジミー。聞こえないや、ジミー。もう一回言ってくれる？ジミー。」

そう言われて、山崎は注意する気が失せ、趣旨だけを話し始めた。

「……あの、殺しがありました。」

「いつ？」

「今朝七時半です。」

尋ね終わると、葵は持っていた書類に目を通ながら、山崎を見ずに言った。

「それじゃあ何か適当に犯人見つくるうことにしたからさあ、適当にやっというて。」

「ちよっ！それは警察のすることじゃないでしょ！？それに……。」

山崎の言葉がそこで止まった。

「それに？」

書類から目を離した葵は、山崎の目をじつと見つめた。

「それに、その、あの……。殺しがあつた場所、万事屋の旦那の家です。」

山崎がそう言い終わつた瞬間、葵の姿は消えていた。

「……。」

葵は、万事屋の玄関を開けた瞬間、目を大きく見開いた。

万事屋の奥の部屋、すなわち銀時の事務机がある部屋には、三人の人物が倒れていた。血が床に広がり、窓から差し込む光を受けて光っている。その周りでは、一番隊の沖田やその部下たちが、忙しく動き、現場検証を行っていた。

「ウソ……。」

一瞬、一人の人物の顔が頭に浮かんだ。あの攘夷派浪士の中で、最も過激で最も危険な男——。あいつがやつたんだ。いや、もしかしたら昨日会つた、神威とか言う青年かもしれない……。

「銀時の旦那……。」

葵は銀時に近づいた。——が、その瞬間。

「ほわちゃああああ！」

死んだはずの神楽がいきなり起き上がり、血だらけの顔で葵をふっ飛ばした。

「……え？」

ぱちくりと瞬きする葵。何が起きたのか、さっぱりわからない。

「ハハハ！引つかかったアルな！」

神楽が、倒れた葵の前に仁王立ちした。

「何？コレ。」

周りを見ると、一番隊の隊員たちも、啞然とした顔を作っている。

「いやあ、悪いね、葵ちゃんよ。」

倒れていた銀時と新八が、むっくりと立ち上がった。二人とも、顔も服も血だらけだった。

「何かね、神楽がドツキリを企てたんだよ。でね、その標的になっ

たのが君って訳さ。」

きらりとウインクする銀時。それを見て、葵は尋ねる。

「じゃあ、コレ、ドッキリだったんですか。」

「うん。」

笑顔で答える銀時。

「それで、あたしをだました。」

「うん。」

「で、そのドッキリを考えたのは、そこにいるチャイナ。」

「うん。」

葵の顔に、笑みが浮かんだ。

「ああ、ならよかった。てつきり銀時の旦那が死んじまったかと思つて……。ビビっただろおがアアア！」

その刹那、葵の身体が動き、神楽を中心に、銀時と新八も吹っ飛んだ。

「いや、何で俺たちまで……。」

銀時が文句を言おうとすると、葵は再び微笑んだ。

「いやあ、銀時の旦那も、一応このドッキリに参加していた仕掛け人というわけですから、あたしの制裁が下るのも当然な訳で。」

「いや、制裁、つて……。」

新八が呟く。

「じゃああたし帰るので……。そーちゃんたちも引きな。」

鬼のように恐ろしい顔をした葵に言われて、沖田は「あ、ああ……。」とうなずいた。

だが、玄関へ向かった葵の前に、妙な格好をした人物が立ちはだかる。

「どうも、宇宙キャプテンカッラです。」

長髪の、海賊のような服を着た男は、そう名乗った。葵は無言になる。

「……えーと？あなたも、ドッキリとやらの仕掛け人？」

「仕掛け人じゃない、ツラだ。」

そう受け答える宇宙キャプテンカッーラを見て、銀時たちの顔が蒼白になった。

——ウソ！？まだコイツここにいたの！？

「ッラ？まるで鬘ですね。」

「鬘じゃない、かつ……。」

しかしそこまで言った瞬間、銀時が宇宙キャプテンカッーラの口を塞いだ。

「いやね、コイツはね、『鬘じゃない、カッラツチだ。』って言うとした訳よ。いや、コイツ頭悪いから、気にしないで。」

葵は何も言わずに通り過ぎ、万事屋を後にした。銀時たちは、それを、訝しげな視線で見送る。

（余計な心配したあたしがバカだった……。）そう思いながら葵は歩を進める。（大体、銀時の旦那が高杉たちと関わりを持つわけがないんだよ。だって銀時の旦那は……。）

だが、そこまで心の中で呟いた時、高杉の言葉を思い出した。

『春雨と鬼兵隊がつながってるのを知ってると言えば、俺が斬りたくて斬りたくてうずうずしている、あの銀髪のアホ侍ぐらいしかいねエんだが。』

葵の足が、ぴたりと止まった。

（だって銀時の旦那は……。）

『テメー、高杉と何か関係があるんだろ。』

『あん？アイツがどうしたってんだよ。それに、ただの知り合いなだけだ。それも随分昔のな。』

葵は、万事屋を振り返った。

何故、あの取り調べの時に気がつかなかったのだろう。ただでさえ、高杉という名前が出ていたのに。

葵は、見逃していた事実を見つめ、茫然とした。

第七訓 物覚えが悪いとテストで悪い点数を取る

「ねエ、高杉。」

名を呼ばれて、キセルの片目の男——高杉は、チャイナ服の青年、神威を振り向いた。

「あの女の子、別に強そうじゃなかったよ。腕前のいい敵さんって、彼女のことだろ。」

高杉は、常時浮かべている不気味な薄笑いを冷笑に帰ると、尋ねた。

「銀時……。アイツが、一見強そうに見えるか？」

「いや。でも、本気を出せば、鳳仙にも勝てる強者だよ。」

その返答を聞いて、高杉はキセルを吹かす。

「あの女も同じさ。ギリギリの時じゃなきゃあ、本気は出さねえんだ。……もうすぐでアイツも本気を出してくるだろうよ。アイツを本気にさせる方法を、俺は知っている。アイツに、究極の選択を迫ればいい。お人好しのあの女は、絶対に……。」

しかし、高杉が言い終わる前に、阿伏兔が部屋に現れ、口を開いた。

「団長オ！大変だア！」

「どうしたの？」

神威は笑顔のまま振り向くと、ひきつった顔をした阿伏兔に言った。

「団長……。あの機械のことなんだが……。」

片眉を上げる神威。

「あの機械？」

「あの機械だよ、団長。覚えてないのか？」

当たり前だとも言うように、神威は大きく頷く。

「すつとこどつこい！」阿伏兔は頭を抱えた。「おいおい、何でも俺たちの団長さまは、物覚えが悪いんだ！」

「ひどいな、阿伏兔。俺は、めんどくさいことは忘れるだけだよ。決して物覚えが悪いじゃないよ。」

阿伏兔は大きな吐息をつき、高杉に顔を向けた。

「どつちでもよくなってきたぜ。……アンタも、団長と一緒にこちらの部屋へ来てくれ。元老共が会議を開こうとしてるんだ。」
それを聞いて、高杉と神威は、実にゆっくりに足取りで、阿伏兔が案内する会議場へと足を向けた。

第七訓 物覚えが悪いとテストで悪い点数を取る（後書き）

気付かなかったけれど、昨日は三つも書いていたみたいです。
自分で言うのもなんですが、驚きです。

（あの機械は、第二章か第三章にでてきます）

第八訓 腹減ったらとりあえずファミレスに行こう……お金があれば、だけど。

「あー、もうおなか減って死にそうアル。銀ちゃん、何かないアルか。」

神楽の死に絶えそうなその言葉に、銀時は生気のない声で答える。

「今月は何の依頼もなかったから、何もねえよ。パフェも宇治銀時井も最新号のジャンプも……。」

「いや、それ食べたり読んだりするのは銀さんだけでしょ。……なんかおなか減り過ぎて、ツッコミする気力もなくなってきました……。」

新八がそう言うのと、万事屋三人組はいつせいにため息をついた。

「銀ちゃん、何か座つてると気持ち悪いヨ。私、ちよつと外出てくるネ。」

「動くと余計腹減るぞ。」

しかし、神楽は銀時の言葉も聞かず、玄関へ足を向けた。

「銀さん、僕、ちよつとCD屋行ってきます。」

今度は新八がそう言った。

「……あのアイドルのニューアルバム手に入れるために、絶対に万引きとかするんじゃないぞ。」

銀時の忠告を聞いて、新八は、「僕が万引きするわけないでしょ。」と口を開いて、万事屋を出た神楽の後を追うように姿を消した。

「あー……。」

銀時はため息をついた。

「俺パチンコ屋行きてえよ……。」

虚しい銀時のその言葉が、万事屋の何とも言えない空気に溶け込んだ。

「あの……。御免下さい……。。」

数十分後、腹の虫がぐうぐう鳴っている銀時は、真選組屯所の前に

立っていた。

しばらく誰も出てこなかったが、やがて、地味な男——山崎退がひよっこり姿を現した。

「あれ……。どうしたんですか、旦那。そんなげっそり痩せこけた顔して……。」

「……葵呼んでくれる？」

頼まれて、山崎は戸惑いながらも引受け、屯所の敷地の中に入って行き、少しの後、葵を連れて戻ってきた。葵は、銀時の顔を見て、目を丸くした。

「銀時の旦那……。どうしたんですか？」

葵を見た瞬間、銀時の、糸をピンと張ったような緊張がふつとほぐれ、銀時は葵の上に倒れこんだ。

「ちよつ、銀時の旦那!？」

山崎と葵は顔を見合わせると、二人は力を合わせて銀時を屯所内へと運びこんだ。もちろん、葵の兄、土方十四郎には内密で——。

「ん……。ん……。うまい！」

銀時は、漁るようにどんぶりに顔を突っ込みながら、宇治銀時丼を食べていた。

「ん……。いやあ、悪いね……。葵……。くん……。」

食べながら言う銀時に、葵は苦笑した。

「食べてからでいいですよ、銀時の旦那。」

言われて、銀時は大きくうなずき、がつがつと心おきなく用意された食事を食い漁る。食卓に置かれた豪華な食事は、見る間に減って行き、やがて、少し経つと、すべてが銀時の腹の中に吸収された。

「ああ！食った食った。こんなに食ったのは久しぶりだ。礼を言っぜ、葵くんよお。」

「いえいえ……。」葵は首を振る。「銀時の旦那のお役に立てられたのなら、これ以上嬉しいことはないで……。」

「そうだろうなア。」

後ろから、鋭い声が降ってきた。振り向くと、そこには、鬼の副長、土方十四郎が、今までにないくらいの鋭い目で、葵を睨みつけていた。

「なんで野郎がここにいる。お前が入れたのか？」

きまり悪そうな顔をして、葵は答えた。

「あ、うん……。お腹減って倒れこみそうだったから、少しご飯を……。」

土方は、銀時が平らげた食事の後を見ると、再び葵に視線を移した。

「この飯……。お前の一日分の食事だろ。」

それを聞いて、銀時は驚いた顔を作った。

「え……。これ、ああ……。」

だが、銀時が言い終わる前に、葵がそれを手で制し、兄の鋭い双眸を、じっと見つめ返した。

「あたしなら平気。一日くらい食べなくなたって、大丈夫。銀時の旦那は、三日何も食わず飲まずだったんだよ。あたしの空腹なんかと比べ物にならないでしょ。」

「だが、それはソイツの自業自得だ。何故ならソイツは、万事屋なんて稼業を営んでいる自営業なんだからな。」

言い返されて、葵は、自分も、兄とそっくりの射るような眼差しで、土方を見据えた。

「銀時の旦那のことを悪く言わないで。」

「俺はお前を思って言っているんだ。そんな奴と関わっても、ろくな人間になりやしねえんだからよ。ソイツは、お前が最も忌み嫌っている人種——攘夷浪士だった男だ。攘夷戦争で最も活躍したとも言われる、白夜叉……。それが、この坂田銀時、って男なんだよ。」

その言葉を聞いた瞬間、葵は愕然とした目で銀時を見つめた。

「白、夜叉……。」

いきなり視線を移された銀時は、たじろいだ。

「な、何だよ、いきなり……。」

土方は、銀時に顔を向けると、ぼそりと告げた。

「土方葵——。異名は『攘夷殺し』。現在、攘夷浪士である者、以前、少しでも攘夷活動に加わった者に制裁を与える鬼神——。」

「え？」

「葵には、幼いころ、想いを寄せていた少年がいた。だが、彼は攘夷浪士によつて殺された。それ以来、葵は攘夷浪士を嫌い始めたのさ。『国を守るなんて言つて、所詮は人を斬り、国の上に立ちたいという貪欲な願いを持つにせ侍共。そんな奴ら、消えてしまえばいい。』……葵はそう思ったんだ。」

銀時は、土方の言葉で、葵を見つめた。葵の顔には、驚きとともに、強い衝撃があつた。

「そんな、銀時の旦那が白夜叉だなんて……。」

葵の身体が震え始める。

「ウソ……だ。」

「ウソじゃねエ、本当だ。」

土方がはつきりとした口調で口を開く。

「違う！銀時の旦那が、攘夷浪士だなんて、絶対に信じない！だって……。だって銀時の旦那は！」

しかし、葵が言葉を終える前に、銀時がうつむき、小さな声で言った。

「ウソじゃねエよ。」

はじめたように、葵は顔を上げた。

「……悪イな、葵……。お前を傷つけたかねエが、嘘もまっぴらだ。……そこにいるマヨラーの言っていることは確かだ。」

葵は、興奮して震えていた肩を、がくりと落とした。

「あ、そう……。」

ふらりと立ち上がると、葵は銀時と土方に背を向け、部屋を去っていた。……その時の葵の表情は、まるで魂が抜けた屍のようだった。

ごめんね、日向……。

あたし、銀時の旦那好きだよ。

攘夷浪士だったけど、大好きだよ。

あたし、わかったんだ。高杉みたいな連中もいえるかもしれないけれど、銀時の旦那みたいな人もいるって。

……あたし、いつから、どうして高杉なんかと付き合い始めたんだろうね。この世で最も嫌いな、何も考えず、ただ破壊を求める攘夷浪士立ちなんかと……。

でも、あたしはアイツらとうまく付き合っていかなきゃならない。

理由？

さしてないよ。ただ……。

助けてもらったから。

恩は、忘れてはならないから。

第九訓 万引きなんて言語道断！

「お、通ちゃーん……。」

死にそうな声で新八は呟いた。目の前にあるのは、寺門通のニューアルバム如山。

「あ、あは、あはは……。万引きしちゃおうかな……。」

なんて冗談交じりに言う新八。しばらくじっとニューアルバムを見ていたが、腹が満たされないことに気が付くと、くるりと方向転換をして、万事屋への帰り道をたどりはじめた。

傘を差してかぶき町の町を歩く神楽。その顔には、前のシーンの新八同様、生気というものが微塵も感じられなかった。

「もうダメアル……。倒れそうネ……。」

しかし、そう呟いた時、神楽の青い瞳に、とんでもないものが映し出された。

口元に常時浮かべている笑み。自分と同じ色の髪と瞳。チャイナ服。番傘。

「……そ、んな……。」

神楽は、すっと気配を消し、小さな路地へ入って、再び確認した。しかし、確かめるも何も、あれは、紛れもなく、自分のバカ兄貴――神威だった。

「何で、アイツがこんなところに……。」

その瞬間、神威の視線と神楽の視線がぶつかった。

「言っただろ。あんなヤツにかかわって、お前に得なんてねエ、って。」

土方の厳しい口調に、しゅんとなった葵は、小さく頷いた。

「お前はまだ十五。ガキと言われても当たり前前の歳だ。ここは、そんな子供が生きていける場所じゃねエ。……この屯所内でも、江戸

でも、お前は生きていけねえんだ。旅費を渡すから、武州へさつさと帰れ。」

葵はしばらく微動だにしなかったが、やがて蚊が泣くような声で、ぼつりと言った。

「……い。」

「え？」

「……ない。帰らない。」

兄は、妹のその言葉を聞いて、静かだが、低い声で告げた。

「お前の我儘には付き合いきれねえ。頼むから帰ってくれ。ここにいられると、迷惑なんだよ。」

葵は、土方に鋭い視線を向けると、言った。

「嫌。帰らない。それに、あたし、銀時の旦那が攘夷浪士だとしても、あたしはあの人が好きだよ。あの方は真つすぐな人だ。自分の心に嘘をつかない、はつきりとした人——これが、たぶん、あたしが求めていた侍っていうものなんだよ。」

土方は、その言葉を聞いて、カツと目を見開いた。

「何度言やあわかるんだ！さつさと帰れ！何度も言わせるんじゃないやねえ！ここはお前がいるところじゃねえし、お前にいられたとしても俺はとてつもなく迷惑なんだよ！何度も言うがなア、俺はお前を妹としてなんて認めねえぞ。今まで色々世話してやってきたが、俺の言うことが聞けねえつうんなら帰りやがれ！」

「あたしだってアンタが兄貴だなんて認めないよ！そうやっていつも人を見下して、命令ばかりして。だから鬼の副長だ何だって言われるハメになるのよ！アンタ、自分がこの世で一番偉いとも思ってるわけ！？アンタなんかねえ、あたしから言わせてみりゃ、ただ幕府に飼われている犬よ！アンタなんか、本当の侍なんかじゃない！少しは銀時の旦那を見習ったらどうなのよ！？」

その言葉を聞いた瞬間、土方の何かが切れた。

「んだと……。」

大きな声は抑えていたが、発する言葉には今まで感じたことがない

くらいの怒りがこもっていた。

「俺に、あの万事屋を見習え、だと……。俺が侍じゃねエ、それも幕府に飼われている犬、だと……。」

血走った目で葵を睨みながらも微笑むと、土方は口を開いた。

「まるで攘夷浪士のようなこと言うじゃねエか。」

いったん言葉を切ると、土方は再び続けた。

「……山崎から聞いたぞ。誰かが真選組の情報を横流しにしていると。まさか、攘夷浪士を嫌う振りをして、奴らに俺たちの情報を流していたんじゃないだろうな……。」

土方の言葉を聞いた刹那、葵の身体に一瞬だけ震えが走った。

「どうやら、そのようだな。」

土方は、葵の目をじっと見つめた。

「……このことは不問にしてやる。だが、二度とここへ——真選組と、俺たちが護る江戸の町へ足を踏み入れるんじゃないねエ。そして……。」

葵に背を向けると、土方は最後に言った。

「俺を『トッシー』なんてなれなく呼ぶな。今日で勘当する。」

……出て行け。」

葵は、そう告げられて、今までに感じたことのない恐怖を覚えた。それは、神威と対峙した時より、何倍も大きな恐怖だった。

「何でお前がここにいろの？神楽。」

神楽の前に立つと、神威はにこにこ口元に笑みを浮かべながら尋ねた。かぶき町の大通りに集まっていた人々は、神楽と神威が向かい合うのを見た瞬間、一歩後ろへ下がった。……いや、下がりざるを得なかった。それほど、この兄妹の「気」が、すさまじかったのである。

「お前こそ何でここにいろアルか。」

その返答を聞いた神威は、笑みを絶やさずに再び問う。

「何でお前がここにいろの？神楽。」

一瞬、答えない方がいいと思ったが、口が勝手に動きだしてしまう。

「……私の家が近くにあるアル。」

「へえ？あの銀髪のお侍さんの？」

自分がしてしまった発言に、神楽は、しまった、と思った。

「じゃあ、こちら辺をうろついていれば、あの人に会えるんだ。」

「生憎、銀ちゃんはここにはいないネ。仕事で出張アル。」

自分が言ってしまったことに、必死で収拾をつけようとする神楽。

銀時や新八たち相手にウソをつくのには慣れているのに、今回は久しぶりに会った兄だからか、どうしてもウソをいつていることが、顔に出てしまいそうになる。

「出張？」

神威が聞き返えすと、神楽は頷いた。

「いやだなあ、ウソなんかつかなくてもいいのに。顔に出てるよ。」

神楽は、それを聞いて、首を振った。

「ち、違う！銀ちゃんは本当にこちら辺にいないアル！」

微笑みを口に浮かべたまま、神威は言った。

「それにね、神楽。俺は、お前が言わなくても、あの銀髪のお侍さんがここに住んでいるのは知っていたよ。俺にはわかる。あの銀髪のお侍さんの匂いが、ここからはするんだよ。」

そして、さらに笑みを深くさせる。

「強者は強者を呼ぶ、ってね。……今度俺たちが殺り合うときに邪魔したら……。」

神楽は、神威が言葉を切った瞬間、すさまじい恐怖を覚えた。神威は微笑を消し、最後に言った。

「殺しちゃうぞ。」

第九訓 万引きなんて言語道断！（後書き）

今日も三つ書いてしまいました。

まだまだ書けそうです。

第十訓 女のカンは当たるってよく言うけど、男のカンは当たらないの？

実際のことを言うと、あたしは攘夷浪士が嫌いだ。トッシーが勘違いしたように、嫌いなフリをしているわけではない。でも、銀時の旦那は、好きだ。高杉も、恩人として、好きだ。

……でも、真選組の中では、それを偽るしかなかった。高杉も、どの攘夷浪士も、この世でいちばん嫌いだと。

あたしって、どれだけバカな人間なのだろう。兄や仲間を欺き、生きていくなんて。

朝の万事屋に、

「すいませーん！銀時くんいますかぁー？」

と、どこか府抜けた声が響く。

デスクに座っていた銀時は、それを聞いた瞬間硬直した。

「新ハイ。出るなよ。」

言われて、新八は片眉を上げる。

「え？いいんですか。依頼人かもしれませんよ。」

銀時はひらひらと手を振り、「いいから出るな。」と口を開く。

ピンポンピンポン！

「銀時くん。遊びましょ！」

ピンポンピンポン！

同じ言葉を繰り返すその人物にだんだん奇立ちが募る銀時。

ピンポンピンポン！

「銀時くん！遊ぼうって言っているのが聞こえんのか！」

ピンポンピンポンピンポン！

「ダァーッうるせえーよ！何だよこんな朝っぱらから！」

ガラリと乱暴に引き戸を開ける銀時を見て、外にいた長髪の男――桂が、嬉しそうに微笑んだ。

「やっと出てくれた。今日は……。」

「またOweeの話だったら、しょつぴくぞ。」

その言葉を聞いて、桂は少し驚いた顔を作った。

「何を言っている。Oweeの話に決まっているではないか。」

ピシャツ！

銀時は扉を閉じ、必死で桂が開けないようにする。

ピンポンピンポンピンポン！

「銀時！ここを開けんか！」

「Oweeの話なんてもういいよ！さつさと帰れや！」

「さつきの冗談だ！」

「冗談だと言って、今度はPSの話でもするつもりか！？ハハハ！その手にはのらねエぞ！」

「違うと言っておろうが！今日はマジメな話をしに来たんだ！」

「マジメな話！？笑わせてくれるな！お前がマジメな話するはず…

…。」

しかし、銀時の言葉が終わる前に、桂が小声で言った。

「高杉と春雨のことだ。ここを開けてくれ。」

それを聞いた銀時は、一瞬迷ったが、ガラリと引き戸を開けた。桂はすつと忍び入ると、銀時とともに、奥の部屋へ足を向けた。

「新八イ。お前、ちよつくら外に出ててくれねエか？」

言われて、新八は驚いた顔をしたが、珍しく銀時が真剣な顔をしているのを見ると、首を縦に振り、万事屋を後にした。

「……あの中華娘はどうした？」

「あん？神楽か？」

「ああ。」

銀時はため息をついた。

「しらねエ。今朝早くボロボロで帰ってきて、朝飯もろくに食わずにまたどこかに出かけやがった。」

「そうか。」

それを聞いた桂は、長椅子に腰を降ろすと、一息つき、やがて口を開き始めた。

「いきなり本題に入るが、いいか。」

銀時は、じつと桂を見つめ返す。桂はうなずくと、続けた。

「……鬼兵隊に加担している何者かが、真選組に侵入していると聞いたのだが、どうもそれが、副長の土方十四郎の妹、土方葵という娘のようだな。彼女が、鬼兵隊に、真選組内部の情報を横流しにしているらしいのだ。」

それを聞いた銀時は驚いた顔をした。

「……あ、葵が？」

「知っているのか。」

尋ねられて、銀時は俯いた。

「あ、ああ。……でもアイツが真選組を裏切るなんてこと、するはずねエよ。」

「言い切れるのか？」

桂の厳しい口調に、銀時は一瞬もだしたが、やがて答えた。

「……ホントなら言い切りてエところだが……。言いきれねエ、かも知れねエ。アイツ、兄貴とものすごく仲が悪そうだったからな。」
そこまで言って、銀時はふと思いついたことを桂に言った。

「だけど葵、攘夷浪士のことが嫌いらしいぜ。異名も、『攘夷殺し』だし。それに、ちゃんとした理由もあるらしいしな。」

桂は、それを聞いて、銀時に口を開いた。

「だが、幕府のこともよく思っていないようだぞ。幕府絡みで、父親が殺されたらしい。」

銀時は、大きく目を見開いた。

「……ってことは、あのマヨラーの父親が、幕府関係で殺されたのか？」

「ああ。」

桂が首肯するのを見て、銀時は眉をしかめた。

「じゃあ、なんであの野郎は幕府の真選組なんかに……。」

「よほど、局長の近藤勲を慕っていたのだろうな。……だが、妹の方は、幕府を恨んだ。そして、幕府と攘夷を同じ秤にかけ、攘夷に

付いた——。こんなところか。」

俯くと、銀時は桂に言った。

「それで？俺に何をしろって？」

真剣な顔をした桂は、銀時に近づき、銀時の赤い瞳をじっと見つめた。

「いいか。いずれ、鬼兵隊と春雨は、ここらを狙ってくるかもしれない。そうすれば、恐らく、一番危険な目に遭うのは、お前だ、銀時。……慎重に動くのだぞ。」

そこまで言って、桂はいったん言葉を止め、再び続けた。

「それから、高杉の情報が、少しでも耳に入れば、教えてくれ。俺も、できるだけここに寄るようにする。」

銀時も、神妙に頷くと、「わかった。」と了解した。

——何かが起こる。

二人は、そう感じ取った。

——何かが動き始めている。

ただの勘違いかもしれない。だけど、この肌がぴりぴりする感覚は何だ。

二人は、それぞれ成すべきことを、じっと考えていた。

その日の夕焼けは、妙に明るかった。まるで鮮血のように鮮やかな赤で満たされた空は、これからの江戸の姿を、空という大きな鏡に映したかのようにだった。

第十訓 女のカンは当たるってよく言っけど、男の Кан は当たらないの？（後書

思い切って書きちゃいました。

これから、どんどんストーリーが大きくなると思います。（たぶん）

最後の「これからの江戸の姿」は、第二章・または三章につながります（もしくはもう少し後です。）

第十一訓 決意は遅くとも、実行は神速なれ（ドライデン）

「どうやら、ボロ出したらしいな。テメエにしちゃあ珍しいじゃないか。」

春雨の船の中に、四人の人影が。一人は、片目の男、高杉晋介。それから、橙色の髪の神威、その部下の阿伏兔、そして、真選組の元副長補佐、土方葵であった。

「……ごめんなさい。」

素直に謝る葵に、高杉は片眉を上げる。

「謝るとはオメエらしくないな。だが、謝るだけじゃすまねエぞ。」

高杉の殺気こもるその声、葵はうつむく。

「本来なら処刑されてもおかしくねエが、オメエは真選組を壊すには十分な情報を、俺たち鬼兵隊にもたらしただ。……よって今回は不問にしてやらあ。だが、」

高杉は、言葉を切った。

「今度やらかしたら殺す。」

葵は、またもや神妙に頷く。

「さっそくだが、次の命令だ。」

高杉の言葉に、葵は顔を上げた。

「……ヤツを……。銀時を連れ去ってこい。」

「え？」

驚いた葵は、高杉の顔をまじまじと見つめた。

「銀時の旦那を連れ去って、どうするんだ？」

「命令内容の趣旨ははっきりとしているはずだ。銀時を生け捕りにして春雨本部まで連れてこい。」

有無を言わせない、高杉の厳しい声。それを聞いた葵は、うなずくしかなかった。

——しちゃいけない。高杉の命令に、したがってはいけない。

心の中では、きちんとわかっていた。

たった一人の兄に勘当され、もう帰る家はない。自分を飼っている鬼兵隊や春雨の下で、命令通りに動くしかない。そんなことは、とつくの昔に理解していた。だから、言われたとおり、銀時を連れ去るべきだと。

しかし、どこか心の中で、葵は、高杉の命令には従ってはならないと思っていた。

アイツらは絶対に、銀時の旦那を殺そうとする。殺せば、それこそ、もう自分に残されている道は、高杉たちのしたで働くことしかない。

——連れ去れない。連れ去りたくない。

だが、内心そう思いながらも、葵の身体は、思うより早く動いていた。

江戸の町、かぶき町。

雨が降る万事屋にこっそりと忍び入ると、葵は、大きな軒が聞こえる寝室へと足を向けた。

ゆっくりと襖を開ける。そして、気配を消しながら中に入り、すやすやと眠っている銀時の鳩尾を殴って気絶させようとした。だが、その時、銀時の肩がぴたりとやみ、それと同時に葵の拳も、銀時にあたる直前で急ブレーキした。

「……このままでいいと思ってんのか。」銀時が、瞼を閉じたまま、ぼつりと言った。「高杉やあんな春雨のガキなんかに扱き使われて、いいと思ってんのか。」

葵は、自分の心の迷いを一瞬にして読み取った銀時の言葉を聞いて、何と答えればよいのか迷った。

「お前の道が、これしかねエとも思ってたんのか。……一度誰かに言ったと思うんだがなア、人生に関しては、俺たちは読者の方じゃねエ、作者のほうだ。テメエがテメエで、自分の道を切り開くもんなんだよ。」

銀時に言われて、葵は俯いた。

「ごめんね、銀時の旦那。あたしの人生だけは例外なんだ。あたしは読者でもなければ、作者でもない。どちらかって言えばね、担当編集者、っていうヤツさ。自分は、作者から示された選択肢の中からしか、自分の道を選べないんだ。それに、今、あたしの前に提示されている道は、ただ一つ。」

葵は、静かに言った。

「それは、鬼兵隊と春雨のためのみを想い、働くこと。これしかないんだ。」

視線を床に落としていた葵は、そう言い終わると、立ち上がった。

銀時は、それを見て、布団の脇に用意していた木刀を手に取る。

二人の間に、険悪な空気が流れた。
バツ。

二人の手が動いた。それぞれ、木刀と真剣を手に持ち、襲いかかった。剣と剣が絡み合い、その度に両者はいったん後ろへ下がり、また飛びかかる。

「いまいちわからねエことがある。」銀時が、木刀を握り締めながら口を開いた。「お前は、何で高杉のために働くんだ？アイツと、何か関係でもあるのか？」

尋ねられても、葵は答えない。葵は、答えを待つ銀時の懷に潜り込み、その腹を斬った。――峰打ちで。その瞬間、銀時は凄まじい痛みでもだし、地面にひれ伏した。それを見た葵は、最後に銀時の鳩尾を、一発殴った。銀時は血を噴き出し、昏倒した。

「おはよーございまーす……。」

いつ戻りの時間に出勤する新八。しかし、扉を開けた瞬間、新八は違和感を覚えた。いつもなら、銀時と新八が朝ごはんの卵かけご飯でもめている怒声が聞こえるはずなのに、何も聞こえない。

「銀さん？」

依頼人を出迎える部屋に入った新八の目に最初に飛び込んできたのは、未だパジャマ姿の神楽が膝を床につき、一枚の紙を一心に見つ

めている光景だった。

「……どうしたの、神楽ちゃん。」

新八は、神楽の顔を覗き込むと、驚いた。――泣いていた。あの神楽が、泣いていたのである。新八は、神楽が手に持っていた紙を一読した。

――残念。俺が一枚上手だったようだね。銀髪のお侍さんは、俺たちがもらいうけたよ。それと、念を押しておくね。俺は弱い奴に興味はない。だから、絶対にあのお兄さんを連れ返そうなんて思っ、俺たちを追いかけないでくれ。

その紙には、しっかりとした文字で、そう書かれていた。

「わ……私のせいアル……。私があんなこと言っただから……。私が、銀ちゃんの場所をアイツに言っちゃったから……。」

震える声で、神楽はそう呟いた。

「どういうこと？これ、誰からの……。」

しかし、その瞬間、新八は、昨日耳にした噂を思い出した。かぶき町の大通りに現れた、橙色の髪をした青年と少女の噂。もし、その少女が神楽だとしたら、もう一人は――。

「神楽ちゃんの、お兄さん……。」

神楽は、新八の言葉を聞いて、うつむいた。

「あのバカ兄貴……。銀ちゃんを……。銀ちゃんを連れ去ったアル……。」

もしも銀時が神威に殺されれば、これは間違いなく自分のせいだ。神楽はそう思い、チャイナ服に着替えて髪をいつものように結うと、番傘を手に持った。

「……銀ちゃんを……。銀ちゃんを取り返しに行ってくるアル。」

「え？」

新八は、玄関へと向かう神楽を止めた。

「待つて。僕も行く。それに、行くって言っただって、お兄さんがど

ここにるか、まだ見当もつかないじゃないか。」

そう言った新八を、神楽はギロリと睨みつけた。

「ヅラの所へ行くネ。アイツなら何か知ってるかも知れないヨ。お前なんか来ても足手まといなだけアル。付いて来るナ。」

「ダメだ。僕も行く。……吉原の時にわかったんだ。今までの僕らじゃ、絶対に勝てない、何もできない、って。でも、もしかしたら、今なら勝てるかもしれない。」

神楽は、新八を振り返った。

「ね、神楽ちゃん。僕も行かせて。」

だが、新八が言い終わると同時に、神楽の飛び蹴りが炸裂した。いきなりの攻撃に驚いた新八は、茫然とし、瞬きをした。しかし、新八が口をあんぐりと開けている間、神楽はどこからか取り出した縄で新八を拘束すると、銀時のデスクの下に押し込んだ。

「か、神楽ちゃん！？な、何を……！」

「何度も言わせるナ。」

神楽は冷たく言い放った。

「お前ら地球人なんて足手まといアル。お前はそこで待つてるネ。」

「ちょ、神楽ちゃん……！」

新八の呼びとめる声も無視して、神楽は万事屋を後にした。

——ゴメン、新八。

神楽は、心の中で新八に謝った。

本当は、連れていきたくかった。いや、付いて来てほしかった。一人であの兄と対峙するなんて、絶対無理だった。だが、もしも自分に付いて来たせいで、新八が死んだら？あの時、阿伏兎とかいう男にやられたように、今回も新八が危険な目に遭ったら？最悪の場合、死んでしまうかもしれない。阿伏兎は、まだ手加減をしていた。だが、兄は——。神威は、絶対にそんなことはしない。夜兎の本能が命ずるまま動き、自分のみならず、新八を殺してしまうかもしれない。

ダメだ、新八をそんな目に遭わせるなんて。

もう、仲間を殺されたりしない。一人ぼっちになんかなりたくない。二度と、孤独に何かなりたくない。

神楽は、自分の目標を再確認した。自分の目標――。それは、人を傷つけるのではなく、護れるようになること。仲間を自分一人で護れるくらい、強くなること。

戦い続け、一人で生きていくことが宿命である夜兎一族の自分を、孤独の中から救い出してくれた人々――。銀時や新八をはじめ、お妙、ヅラ、真選組の面子（気に入らない奴も多いけど）――。仲間たち――自分の護るべき者たちの顔が、神楽の頭に浮かぶ。

――銀ちゃん、私、絶対に銀ちゃんを助けてみせるネ。そして、私がどれほど強くなったか、みせるアル。

かぶき町の大通りを歩く神楽は、泣きそうになるのをこらえながら、桂の元へ急いだ。

第十一訓 決意は遅くとも、実行は神速なれ (ドライデン) (後書き)

一日で五話も書き上げてしまいました。

人間、がんばれば何でもできるんですね。

これから、どんどんストーリーが大きく展開していきます (たぶん)。

よろしくおねがいします ^^

第十二訓 人を元気づけようとするときは、細心の注意を払え

銀時は、はっと目を覚ました。だが、瞼は開けなかった。なぜだか眠いと感じるのもあったが、その前に、自分が今、どこで、どんな状態に置かれているかを確かめようと思ったのだ。それは、いつもはぐうたらしている銀時には、賢い判断だった。

自分は今、冷たい床に寝そべっている。手と足が動かないところを見ると、手錠をされ、拘束されているのだろう。それから、ピチャン、ピチャン、と、水が滴れ落ち音に、鼻をつくような、嫌な臭い。まるで、何かが腐っているかのような。口の中には、何か苦いものが残っている。催眠薬でも、飲まされたのだろうか。耳をすます。

——カラカラ……。

奇妙な音が聞こえるが、人の足音はしない。

銀時は目を開けると、きよろきよろと辺りを見回した。銀時は、牢獄の中に押し込まれていた。隣の獄には、やせ細った、耳の長い女の天人が座り、逆さまにした古びた腕を、ぐるぐると回している。

「丁かエ、半かエ……？」

尋ねてくる女に、銀時は思わず、「ちょ、丁。」と答えてしまった。女は腕を坂間さの腕を開けると、中に入っていた二つのネジを見て、「残念……。半じゃ。」と気味悪く笑いながら返した。

すると、その時、廊下の奥から、コツ、コツ、と、複数の人間の足音が聞こえた。

「あらら、残念だね、銀髪のお侍さん。」

銀時の牢獄の前に現れたのは、微笑んでいる神威と、呆れた顔をした阿伏兔、冷笑を口元に浮かべた高杉と、うつむいて、きまり悪そうに口をぎゅっと結んだ葵だった。

「俺も負けちったよ。それはね、呪いの博打さ。負けたら死ぬんだ。」

にこにこ笑いながら言う神威を、銀時は睨みつける。

「おー怖い。でも、いい目をしてるよ。それは、俺が求めてるものだよ。……ていうかお侍さん、気付かない？この女がだれなのか。」
言われて、銀時は廃人と化している女を見つめた。確かに誰かに似ているような気がする。だが、いまいち思い出せない。

答えない銀時に、神威はぼそりと告げた。

「春雨第四師団団長の華陀だよ。……元、が付くかもしれないけどね。お兄さんの町が奪えなくて、元老たち——俺たちの上司から制裁が下ったんだ。」

そう言えば——。確かに、どことなく似ている。しかし、やせ細り、何も映っていないその瞳には、かぶき町四天王の一人、孔雀姫華陀と呼ばれていた時の美しさも、強さも、したたかさもなかった。

——これが、春雨に逆らった者の末路……。

銀時は、背筋が凍りついたのを感じた。

高杉は一步前に出ると、銀時と視線が合うようにしやがみこみこんだ。それから、目を大きく見開き、不気味な冷たい笑みをさらに大きくすると、囁くような、しかし、殺気と喜びが絡み合うような、何とも不思議な声で銀時に言った。

「テメエは、明日、処刑される。やつと俺が待ち望んだ日が来た——。銀時、オメエはそこにいる女に首を斬られるのさ。……なア、葵。」

振られて、葵の身体がぶるつと震えた。それを見て、高杉は言う。
「怖気づいたか？……だが、裏切ればこの女のようになるぜ。」

立ち上がりながら、嘲笑するように言う高杉に、葵は首をぶんぶん振ったが、何も言えなかった。

「……ねエ、二人きりにさせてあげようよ。喋りたいこともいっぱいあるだろうしさ。」

それを聞いて、高杉と阿伏兎は一步引き、神威と共に姿を消した。足音が、だんだんと遠ざかって行く。

「……葵。」

銀時が、静かに口を開いた。

「今更言っても、負け犬の遠吠えに聞こえるかも知れねエけどよお、俺ア、お前のことが好きだったぜ。……自分で自分の道を切り開ける女だと思ってた。」

葵は、拳を握りしめ、俯いた。

「今ならまだ開けるだろ。まだ遅くない。……俺ア殺されてもいい。だから、お前はお前の道を貫けや。高杉たちなんかと手を組まなくたって、いいんだぜ。」

その言葉を聞いて、葵は、ぽつりと言った。

「……命乞いのつもりですか。」

「いや。言っただろ。俺ア殺されてもいいって。チャイナやメガネが、俺が死んだときいたらたとえそこが、奈落の底だとしても、俺を地獄から引き上げてくれるだろうからよ。……ただ、お前には自分の道を貫いてほしいだけさ。」

微笑むと、銀時はふさがれている両手で何とか身を起こし、葵の瞳を見つめて言った。

「それに、先のことなんて考えてられねエよ。俺ア今考えるだけで、今背負ってるモンを背負うだけで精いっぱいなんだ。もしそんな大層な頭を持っていらア、俺は今頃億万長者だぜ。」

葵は、未だ顔を俯かせたままだ。

「……もしもオメエの道の中に、坂田銀時を殺すっていうモンがあるなら、その道を貫け。無様に敵さまの手にかかっても、俺には何のかかわりもねエ。俺アな、ただ、最後までキレイに生きてエんだよ。自分の魂に、ウソだきやあ吐きたくねエ。」

その言葉を聞いて、葵は悲しく笑った。

「その武士道、あたしもできるものなら見習いたいです。自分だけを想い、平然と慕ってくれた人を殺し、人の道を外れるなんて……。」

「平然に？」

銀時が悪戯っぽく笑った。

「オメエのどこが平然だ。さっきまでガタガタ震えてたじゃねエか。お前、お化け屋敷にいったらぜってえ漏らすタイプだろ。」

「お、乙女になんてこと言うんですか！それに、あたしはお化け屋敷なんて怖くないですし！」

葵は顔をあげ、口調が一変した。

「あれー？本当に？」

微笑みを浮かべながらちやかす銀時に、葵は口をへの字に曲げた。

「あたしはトツ……。あ、あの人は、違っんです。」

トツシー、と言いかけて、葵は思いとどまった。

『トツシーなんて馴れ馴れしく呼ぶんじゃねエ。』

頭の中で、土方の言葉がうずまいた。

——あら。やっちまった。

銀時は、葵が再び視線を地面に落としたのを見て、心の中で自分を叱った。それから、ふざけた口調で、

「え？何？てことは、マヨ方、もしかしてスタンドダメだったりして？」

再び顔に影を落とした葵に尋ねた。

「スタンド？……幽霊のことですか？」

「あ、まあ。」

「何でスタンドなんですか？」

「いや、それはアレだよお前……。」

銀時がひきつった顔をした。

「す、スタンドってスタンドっぽいじゃん？だから。」

「答えになってません。どこら辺がスタンドなんですか？」

問い質す葵に、銀時は言葉をにこした。

「ほら、アレだ……。アレ。ソレ。」

「わかりません。もしかして、銀時の旦那も幽霊ダメなんですか？」

銀時は必死で頭を振る。

「ば、バカ言ってんじゃねエよ。俺がスタンドダメエ？ちゃんちゃらおかしいぜ。」

「でも、その割には怖がつてるじゃありませんか。」

微笑みながら不審な顔をする葵に、銀時は言い返す。

「こ、これはだね、葵君。スタンドたちに……アレ。敬意を払って
る訳よ。」

葵の笑みが、さらに深くなった。

「あたしやっぱり銀時の旦那が好きです。……なんか、面白い。」

そう言った葵を見て、銀時はにこりと笑った。

「そう言ってくれると嬉しいぜ。」

第十二訓 人を元気づけようとするときは、細心の注意を払え（後書き）

第十三訓 不審に思った時は、自分が納得するまで問いただそう

神樂は、前々から聞いておいた桂のアジトへ向かいながら考えていた。

——神威のことアル……。船に乗っているはず。

別に、神威の居所を、桂が知っているはずなどなかった。それはわかっていたが、新八を納得させるためにそう言うしかなかった。

細い、暗い路地。誰もいない。神樂は、足を一步踏み入れ、桂の姿がありそうな小屋を探す。そして、とある看板の目の前で足を止める。

「桂小太郎の攘夷会！これに入れば、キミも晴れて攘夷志士に！？」
——誰が入るか。

ぼそりと心の中でツツコミを入れる神樂。今までの決意やら思いやらが、このアホらしい看板の言葉で、一瞬にして消え去った。
だが、気を取り直すと、神樂は再び真剣な顔に戻り、看板の掲げられている小屋の中へ入った。

「……珍しいな、リーダーから出向いてくるなんて。」

桂が、くるりと振り向き、入ってきた神樂の顔を見つめた。

「ヅラ。小さいのでいいから、私に船を一隻貸してくれアル。」

その言葉を聞いた桂が、片眉をあげた。

「単数形だな、リーダー。銀時たちは？」

一瞬、神樂は本当のことを話そうとした。だけど、やっぱり駄目だった。もう一人の自分が、それを必至で抑え込んだ。

——仲間をまた一人殺させるつもりアルか。

ぎゅっと口を結んでいた神樂は、桂を見て言った。

「それはヅラの聞き間違えアル。私は、『私たち』って言ったネ。」

「ヅラじゃない、桂だ。さっき『ヅラ』って呼ばれた時に言わなかったからって、今回も言わぬとは限らんぞ。」

しかし、神樂は桂の言葉に耳も貸さず、同じ言葉——「私」を「私

たち」と入れ替えた言葉を、桂に繰り返した。

「私たちに、船を一隻貸してくれアル。」

何か怪しい雰囲気を感じ取った桂は、一瞬迷ったが、リーダーの頼みだから、と、やがて了承した。

「い、今更何であたしがそんなことを！」

目を大きく見開き、高杉の言ったことに驚きを隠せなかった葵は、思い切りそう叫んだ。高杉はそんな葵の姿を見て、冷たく笑った。

「銀時の野郎に唆されたか？だが忘れるんじゃないやねエぞ。テメエが生きていく道はただ一つ。俺たちの命令に従う、忠実な犬になること。それに、後先考えずに今従わねエと、死ぬぜ。」

語尾に殺気のこもった高杉の言葉を聞いて、葵は俯いた。

「お前だつてわかつているはずだ。俺たちに関わりを持った限り、二度と普通の人間としては生きられねエと。そして、俺も理解している。」

高杉は、葵を見つめると、言った。

「テメエが自分がかわいくて仕方がねエってことがな。……テメエだけじゃねエ。どんな人間だつてそうだろ。俺も、銀時も、ヅラも、あのバカ強えーガキも、心の中では、自分が一番だと思つてんだよ。」

それから、少しだけ口調を柔らかくすると、葵の心を揺さぶるように、甘い声で言った。

「なア、葵。お前もわかつているんだろ？だつたら、俺の言うことだけに従え。銀時の言葉に耳を貸すな。……そうすれば、お前は生きていられる。死ななくていい。楽にできる。」

葵の心が揺れた。

「やれ。……真選組を潰してこい。」

「あーりゃりゃ。いいの？高杉。」

葵が姿を消した後、代わりに現れたように、タイミングよく神威が

入ってきた。

「これじゃあ何にも面白くないと思うんだけどな。敵になるどころか、あのコ、君に飼いならされてるじゃないか。」

高杉は冷笑した。

「飼いならせたんならそれでいいさ。アイツも俺の手駒になれる腕の女だ。」

「ヒドイな、高杉。君っていつもそういう意地悪なこと言ってるの？女の子に避けられちゃうよ。」

微笑みながらそう言う神威に、高杉は言い返した。

「笑いながら恐ろしいセリフを口にできるお前の方が避けられてるんじゃないのか。」

神威は、そう言われて、笑みを絶やさず、高杉から視線を外し、前方を見た。

「……そうかもね。」

「誰か！誰かアア！」

神楽が猿轡をはめ忘れた新八は、一心不乱に叫び続けていた。銀時のデスクの下で、彼は叫ぶことしかできなかった。

——神楽ちゃん、一人であのお兄さんのところへ乗り込むつもりだ……！

今までに感じたことのない恐怖を、新八は感じていた。

——神楽ちゃんが、死んでしまう！

「早くウ！誰か来てエエエ！」

と、その時、ガラリと扉が開く音がした。それから、複数人の声が聞こえる。

「何だよ、変な声がする奇妙な家って、野郎の家じゃねエか。」

「探せば、もしかしたら葵も出てくるかもしれないやゼイ。」

「……だから葵は武州に自分で帰ったつったろ。」

「どうせお前が行かせたんだろ土方。死ねよ土方。久し振りのドS再開だったんぞ土方。」

「うるせエよ！叩つ切るぞ！」

そんな怒声が後ろで聞こえている中、地味な男が銀時のデスクの下を覗き込んだ。――監察の山崎退である。

「……副長、沖田隊長、もめている暇なんてありませんよ。新八くんが拘束されています。」

その言葉で、土方と沖田はメンチの切り合いをいったん中止し、山崎が見ているデスクの下に顔を出した。

「……なんですかイ、こりゃあ。」

沖田が、間の抜けたような声で言うと、山崎は「さあ。」と肩をすくめた。

すると、その瞬間、万事屋のドアが開かれ、複数人の隊員が息を切らせながら部屋に入ってきた。

「……ふ、副長！隊長！大変です！と、屯所に戻って下さい！」

そう言った隊員たちは皆、顔や身体が傷だらけで、血まみれだった。「どうした？」

タバコを吹かした悠長な土方の問いに、隊員たちは震えながら答えた。

「あ、葵さんが……。」

「葵がどうしたんでイ。早く言え。」

沖田にせかされて、口をもだしていた隊員たちは口を開いた。

「葵さんが、隊員たちを全員斬ったんです。……俺たちだけでは全く歯が立ちません。沖田さんたちに来てもらわないと！」

それを聞いた土方たちの瞳孔が、大きく開いた。

「葵が……。」

言われたとおり、足を一步屯所に踏み入れた土方、沖田、山崎は、唖然とした。どこもかしこも、血飛沫で汚され、隊員たちが倒れている。

「こ、れは……。」

ぼろりと、土方の口からタバコが落ちる。

土方を先頭に、沖田、山崎、それから状態を伝えにきた隊員たちが、屯所の回廊を全速力で疾走し、近藤の部屋へ辿り着いた。

——そこには、倒れた複数の真選組隊員と、近藤の姿があり、その横では、額と背中を斬られた近藤が、顔を血だらけにして、瞼を閉ざしながら倒れていた。そしてその隣には――。

「あ、おい……。」

土方と沖田の言葉が重なった。

「お前、何してんでイ……。」

到着した土方たちに背を向けていた葵が、ちらりと後ろを見やった。その目にはとてつもない殺気を孕んでいた。窓から差し込むわずかな光を受けて、その瞳は怪しく光る。

「葵……。テメエ！」

土方は刀を抜くと、そのまま葵に襲いかかった。葵は刀を、片手で止めた。受け止めた左手から、血がぼたぼたと滴り落ちる。

「その隊服を着て、局長の近藤さんを斬っていいと思ってるのか！近藤さんだけじゃねエ！お前のその剣で斬られたヤツら全員、俺たち真選組の一員なんだぞ！」

「……ん。」

葵は俯いた。

「……ん。」

土方には、葵の、最後の「ん」という短い言葉しか聞き取れなかった。その瞬間、葵はぱつと顔を上げ、兄の顔をキッと睨み、もう片方の手に握っていた刀で、土方の腹を斬った。

「グ……。」

土方の脇腹から夥しい量の鮮血が吹き出し、葵はもろに返り血を浴びたが、全く表情を変えなかった。その目には、何も見えていないように見えた。

ズシャッ。

一瞬にして、土方のみならず、沖田、山崎、そしてその他の隊員たちが倒れこんだ。

第十三訓 不審に思った時は、自分が納得するまで問いただそう（後書き）

新連載、「銀魂―遠い記憶―」がスタートしました。

と、言っても、この物語の伏線のようなものです。（神楽と神威の）

この物語は、まだ小さかった頃の神楽が、神威や母と暮らしていた時の物語です。

両作とも、評価や感想を送ってくれると、嬉しいです^^。

第十四訓 迷うときはとことん迷え

「か、神楽さん！前方に大きな船が！」

桂の部下の一人に呼ばれて、神楽は前を見上げた。桂に借りた小さな船には、神楽と桂の部下二人だけが乗船している。

前に見える巨大な戦艦を見て、神楽は息を呑んだ。春雨の旗が掲げられ、信じられなくらい大きいその船に、神楽は目を丸くすることしかできなかった。

——あれが……。あれが春雨の船……。

しばらく茫然としていたが、やがて、神楽は、船を操作する桂の部下に指示した。

「気付かれないように、出来るだけあの船に近づけるヨロシ。……

私がああ船に乗り込んだら、ツラの元へ戻るネ。……でも、私が一人で乗り込んだなんてこと、絶対に言うナ。」

「え……。神楽さん？」

船員二人は一瞬迷ったが、やがて命令に従った。

「……はい。」

「土方さん。」

「ああ？」

「葵……。何であんなことしたんでしょう。」

「知らねエよ。俺に聞くな。」

「でも……。」

「聞くなつつてんだろ。たまにぐらい、人の言うこと聞け。」

大江戸病院の個室のベッドに横たわる四人。土方、沖田、近藤、山崎であった。

「俺ア理解できやせんぜ。……他人からの視点ではありやすが、ア
ンタと葵の間には、確かに絆があったはずだ。何でこんなことに
……。」

沖田の言葉に、土方は舌打ちすると、くるりと身体を方向転換させ、沖田の顔が見えないように寝返りを打った。

「頼むから静かにしてくれ。」

「……副長。」

今度、土方に言葉をかけたのは、うつすら目を開けた山崎だった。

「うるせエつつてんのが聞こえねエのかデメエら！」

苛立った声を土方が上げた途端、あたりがしんと静まり返った。

「……トシ。落ち着け。幸い、お前の妹は、俺たち真選組の隊員を、誰一人殺しちゃいない。全員、生きている。葵くんが改心してくれば、葵くんはいつでも真選組に戻ることは出来る。」

沈黙を破った近藤の言葉を聞いて、土方は厳しい声で言った。

「近藤さん。アンタ、局中法度を忘れちゃいねエだろうな。」

三人は、無言になる。

「伊東もこれで肅正された。葵は、伊東のように真選組を我が物にしようとは思ってはいねエ。だが、アイツはそれ以上に罪を犯した。……伊東は、せめて、真選組という組織は残そうとしていたが、葵の野郎は、残すどころか潰そうとしたんだ。生かしちゃおけねエ。」
そう言われて、沖田も、近藤も、山崎も、それ以上何かを返すことはできなかった。

「真選組、潰したんだって？」

少しきつい口調で、銀時が目の前にいる葵に言った。

「……俺ア、今日、お前の手によつて殺される。別にいいんだぜ。

それは俺が決めたことでもあるんだし。だけどよオ、兄貴たちや仲間にもで手を出すのは、如何なものかと思っぜ。」

葵は、銀時に背を向け、歩き始めた。

「あたしが飛んだ大バカもんで薄情もんで、死んでも誰も嘆かない存在だってことは、痛いほどわかってますよ、銀時の旦那。」

手を振ると、葵を横目でちらりと見やり、最後に言った。

「これは、あたしが決めた道です。あたしはもう、迷っていない。」

……ありがとう、銀時の旦那。」

銀時は、一瞬だけ見えた葵の瞳を見て、少しだけ目を大きくした。葵の言うとおり、その目には、もう迷いの色は見えなかった。

第十四訓 迷うときはとことん迷え（後書き）

どんどん話が脱線していきます。

お願いだから葵、これ以上無駄な行動するのやめてエエ！（勝手な叫び）

次話からは、過去編に突入すると思います。（たぶん）

第十五訓 夏にはスイカ（前書き）

過去編突入です。

と言っても、二、三訓で終わると思いますが（^^;）

第十五訓 夏にはスイカ

「……どうしよう。」

久しぶりに家に帰ってきた父が発した第一声は、それだった。玄関で靴を抜いた父は、魂の抜けた表情で、ふらりと座敷に入る。

「父上!」「父さん!」

兄妹の声が重なる。父は何も見えていない目で子供たちを見つめ、今度は視線を床の間へ視線を移し、腰にさしていた刀を、刀台に戻した。

「え、ちよつと、父上……。」

まだ幼さが垣間見える土方は、父を見つめた。

「……何をなさっているんですか。」

父は、寝る時や入浴する時以外、刀を離したりしない。

「……俺、今から散歩にしに行ってくるわ……。」

生気のない声でそう言うと、父は部屋を出て行く。

「あ、ちよ、父上!」

土方はあわてて父を追ったが、既に、父の姿は消えていた。

父は、それから一週間帰ってこなかった。

——忍藩、勘定組頭、土方疾風は、我が藩の公金を横領した罪にて、切腹。

そう書いてある紙とともに帰ってきた父の遺体は、子供たちに、歸りのあいさつをすることはなかった。

——二年後——

「あっちゃーん!いる?」

十歳ぐらいの少年が、塀をよじ登り、夏場の土方邸に顔を出した。

「おーい！あっちゃ……。」

しかし、栗毛の少年の言葉がそこで止まった。少年は、誰かに襟首を掴まれていた。

「先輩。ここで何をしているんすか。」

鋭い双眸。後ろで束ねた黒髪。クールな顔——土方十四郎、その人である。

「お、俺はあっちゃんと遊びに来ただけだ。放せ！」

だが、土方は少年を放さず、じっと睨みつける。さすがの少年も、土方のきつい視線に首をすくませる。

「もしも葵と遊びたいというのなら、せめて玄関から入ってきてください。それにあいにく、葵は今いません。街に下しました。」

「何でだよ！？どうせまたお前があっちゃんに言いつけて、俺と離すように仕向けたんだろ！」

ものすごい剣幕でそう言い立てる少年に、土方は眉をしかめる。

「違います。必要なものを買いだしに出かけさせただけです。」

「自分で行けよ！」

何を言っても言い返す少年に嫌気がさしてきた土方は、一旦自宅の中に入り、玄関へ足を向け、ぽいと、まるで投げ捨てるかのように自分の家から少年を追い出した。

「な、何するんだよ！」

土方は少年を見降ろしながら言う。

「先輩が放してとおっしゃったので、放しました。」

「放せとは言ったけど、せめて家の中に入れさせるよ、あっちゃんが帰ってくるまで！」

けれど、土方は少年の言葉に耳を貸さず、ぴしゃりと扉を閉めた。

「お、おい！土方！開けろ！」

当然のことだが、土方は戸を開けない。肩をがっくりと下ろし、少年はしばらくすねた顔をして、土方の家を睨みつけていたが、やがて帰路を辿った。

「すいませーん！こんばんはー！」

二人の人影が、花火の打ちあがる空を背に、花火の光で輝く沖田邸の扉をたたいた。

しばらくすると、栗毛の女性と、さきほどの少年が出てきた。少年は、二人のうち一人——ロングストレートの少女を見ると、顔をぱつと明るくさせたが、その少女の後ろの男——土方の存在に気付いた瞬間、土方をギロリと睨みつけた。

「こらこら、そーちゃん。そうやって十四郎さんを睨まないの。」
後ろにいる女に言われて、そーちゃんと呼ばれた少年——沖田総悟はむっつりとした顔になる。

「どうしたの？そーちゃん。」

沖田は、少女の言葉に、しばらく無言だったが、やがて少女の手を握って沖田邸の廊下を走り抜け、縁側まで駆けた。

残された二人——土方と、沖田の姉、ミツバの視線がぶつかった。

土方だけ、ぷいと顔を逸らす。なぜだか、顔が赤い。

「……十四郎さん。中に入りませんか。」

ミツバに言われて、土方はぶっきらぼうに頷く。そんな土方を見てくすりと笑ったミツバは、土方の手を取って、沖田と同じように廊下を駆け抜けると、沖田たちから少し離れたところの縁側に座った。土方は、未だミツバが握っている手を見て、赤面する。ミツバは、

土方の顔を覗き込み、尋ねた。

「どうかされましたか？」

視線を逸らすと、土方はぼそりと呟いた。

「……手。」

「え？」

聞き返したミツバに、土方はもう一度呟いた。

「手。」

はつと気付いたようにミツバは土方の手を離し、頬を赤らめた。

「ご、御免なさい。……そーちゃんたち見てたら思わず……。」

土方はおどおどしながら答える。

「いや、気にするな。」

しばらく、沈黙が降臨する。隣にいる沖田と、土方の連れ、葵がべらべら喋っている声と、花火が打ちあがる盛大な音さえも、土方とミツバが作り出す空気の中には入れない。

「あ、あの……。」

土方とミツバの言葉が重なる。二人は顔を見合わせ、また違う方向を向く。

「十四郎さん……。」ミツバが始めた。「えっと、暑くありませんか。」

その問いに、土方は返す。

「あ、ああ。」

ミツバの顔が、ぱつと輝いた。そして、ちょっと待っていて下さい、と言いうと、一旦家の中に姿を消した。

「いつも姉上はアイツのことしか考えていないんだ。」

不満そうな沖田の言葉に、葵は困った顔をする。

「アイツって、兄ちゃん？」

沖田は頷く。

「みんな俺にかまってくれないし、いつもアイツのことばかり喋るんだ。近藤さんも、アイツが道場に入ってから、俺のことを気にかけてくれない。」

むすつとした沖田に、葵は言った。

「そんなことないよ。それはそーちゃんの勘違いさ。よく見れば、みんなそーちゃんのこを見てる。少なくとも、あたしはずっとそーちゃんと一緒にいる。」

その言葉を聞いた沖田の目に、涙が浮かぶ。

「あ、あっちゃん……。」

そう言ってから、沖田は尋ねる。

「あ、あっちゃんって、本当にあのマヨラーの妹なの？ 違う両親持つてるんじゃないの？」

その問いに、葵は苦笑する。

「同じ両親持つてるよ。……父さんは、もう死んだけど。」
「え？」

沖田の顔に、驚きの色が浮かんだ。

「父さんはね、藩の中では重要な役職に就いていたんだけど、父さんの上司が失敗をして、その失敗を父さんがやった、っていうことにしたんだ。……藩を財政に危機にまで陥れる失敗だったから、父さんは役職を追われ、挙句の果てに切腹を幕府に命じられて死んだ。」

沖田は、葵に、何と声をかければいいのかわからなかった、とりあえず頭に浮かんだ言葉を口に出す。

「ご、ごめん……。」

「いや、いいのいいの。」葵は苦笑をさらに深くさせた。「話し始めたの、どちらかっていうとあたしからだし。そーちゃんのせいじゃないよ。」

すると、その時、後ろからミツバが現れ、大きなスイカの皿を手にして戻ってきた。

「はい、葵ちゃん、そーちゃん。」

そして、一瞬戸惑ったが、土方にもスイカを渡す。

「……これ、良かったら。」

土方は差し出されるスイカをじっと見つめ、やがて「ありがとう」と呟くような小さな声で礼を言くと、スイカを受け取った。ミツバは、受け取ってもらえて、ほっと安堵の息を漏らす。

ドドォーン！

花火の打ちあがる大きな音が聞こえた。満天の星空に咲いた錦冠が、四人の顔を照らし出した。

その少し後、近藤、土方、沖田をはじめ、仲間たちは上京し、葵は、ミツバのように、一人っきりで暮らすようになった。近藤が来てもいいと言ったが、土方が断固として承諾しなかったのだ。

「……はあ。」

土方邸に、床に寝そべった葵の大きなため息の音が響く。外に出ようと思ったが、もう夜だったし、新月だから、あたりが全く見えな
いだろう。それに、近頃は辻斬りが出るというし……。

しかし、動くことが好きな葵は、立ちあがり、護身用に稽古に使う竹刀を手にとつて、家を出た。真剣で襲ってくる辻斬りと面と向かつて戦うときには役には立たないだろうが、ないよりはマシだろう。そうして、葵は、ぼおっとしながら村をぶらりぶらりと、目的もなく歩いた。だが、その時、後ろから背筋が凍るような殺気を感じ、本能的に竹刀を振った。

「……。」

それが幸いして、葵は無傷だった。が、竹刀は真つ二つに切断され、使いものにはもうならない。目の前にいるのは、笠を深くかぶった、小柄な男だった。辻斬りだと葵は判断する。

本来ならば剣を取つて戦うところだが、そんなものどこにもない。なので、葵は全力で疾走する。辻義理も、しつこく葵を追いかけてまわし、とうとう葵に追い付いた。葵は行き止まりの道を来てしまつたのだ。

辻斬りは、剣を上段に構えると、葵に向つて走り出した。

葵は床に膝をつき、目をつぶり、観念した。

だが、いつまで経つても痛みは感じられない。

まさか、もう死んだ？

いや、違つた。そつと瞼を開けた葵の前に立っていたのは、紫の髪をした男だった。その隣に、辻斬りがのびている。

「大丈夫か、アンタ。」

緑色の両目が、らんらんと輝いている。

「……あ、はい……。」

そうか、と男は頷き、立ち去ろうとした。葵は、急いで立ち上がり、声をかけた。

「窮地を救っていただき、ありがとうございます。……あなたは……」

？」

男は立ち止まって、フツと微笑んだ。

「江戸に向ってる、ただの通りすがりだよ。」

——これが、高杉晋助だった。

十年が過ぎると、高杉は、過激派の中で最も危険な男として幕府に認識されるようになっていた。

そして、武州に残ってた葵に、高杉から、一通の手紙が届く。

——お前の力を貸してくれ。真選組に忍び込み、俺たちにその情報をくれないか。

兄が上京してから、兄のことをあまりよく思っていなかった葵は、快くそれを承諾した。

たかが、ちよつとした情報だろう。

しかし、それがすべての始まりだった。

第十五訓 夏にはスイカ（後書き）

土方さんのお父さんは、土方隼人↓土方疾風

藩名は、武州の忍藩（おしはん。現在の埼玉あたり）から取りました。っていかそのままですけど。

高杉は、攘夷戦争の少し前に上京しようとし、ちょうど忍藩に立ち寄っただけです。

感想を送ってくださったりすると嬉しいです^^。

第十六訓 兄妹

「……銀時、出る。」

銀時が入っていた牢獄の扉が、高杉の手によって開かれた。銀時はしばらく、じっと地面を見つめていたが、やがて、高杉の指示通りに従った。昨日のうちに足の枷を外されたので、歩けると言えば歩けるが、いまいち、ふらふらして、足取りがおぼつかない。

無言のまま、銀時は暗く、汚い回廊を歩く。廊下の奥には、大きな扉があった。高杉は、大きな鍵らしきものを懷から取り出し、扉を開ける。

と、その瞬間、銀時の目に、眩しい光が飛び込んできて、銀時は、思わず瞼を閉じてしまった。しばらくしてから、目が光に慣れ始めると、目を開ける。そこには、大きな板のようなものが、地面に立ってあった。板、というより、壁を人間の大きさに近いに切り取ったもの、というべきだろうか。それには、手足と胴体を固定するための鎖がついており、その隣には、歯切れのよさそうな刀を握った、葵が立っていた。

「お待さん。」

葵の前に座っている神威が、にこにここと笑みを浮かべながら手を振った。

「……。」

銀時は何も言わない。

すると、その時。

「だ、団長オ！」

阿伏兔が飛び込んできた。

「だ、団長。来てくれ！今、入口の方が大変なことになっているんだ！」

神威はふくれっ面になり、阿伏兔に、口をとがらせながら言う。

「えー。今からお楽しみなんだよ。俺がずっと待ち望んでいたお楽

しみなんだよ。」

その言葉に、阿伏兎は鋭い声で返す。

「団長！アンタの仕事は、あの銀髪の侍を殺すことじゃないだろ！いいから、来てくれ！アンタの妹が入口で大暴れしてるんだ！」

神威は、少しだけポーカーフェイスを崩し、目を大きくした。

「何で、アイツがここにいるの？俺、付いて来るなって、念を押したはずなんだけだな。」

「んなことあどうでもいいんだよ！すつとこどつこい、たまには俺の言うことも聞いてくれよ！」

不満声を洩らす阿伏兎に、神威は言う。

「でも、何でわざわざ俺が行かなきゃならないの？阿伏兎たちで十分でしょ。」

「十分じゃないから団長さまのところへ行つたのよお！」

神威はため息をつくと、立ち上がった。

「はいはい。行くよ。」

それから、銀時を振り向くと、ウィンクした。

「お待さん、ちょっとだけの間だから、待っててね。」

神威と阿伏兎が部屋から消え去ると、高杉が銀時を見ながら言った。

「命を永らえたな、銀時。」

言われて、銀時は苦笑する。

「どうせ殺されるんだ。短くても長くても同じことだ。」

「珍しいな、お前が諦めてるなんて。」高杉は不敵に笑う。「殺しがいなくなるじゃねーか。」

銀時は高杉を見て、片眉を上げる。

「別に、お前が俺に手を下すわけじゃーねエだろ。」

「そうだな。だが、長い間、俺の邪魔をしてきたお前が、今まで信じてきた者に殺されるのを見るのも、またおもしれーじゃねエか。」

その言葉に、銀時は眉をしかめる。

「お前、S？」

高杉は、銀時をギロリと睨みつけながら返す。

「ノーコメントだ。」

「ほわちゃあああ！」

神楽は突進しながら進む。相手が誰であろうと、ばっさばっさと倒していく。

——銀ちゃんを助けるのは、私。もう、誰も傷つけない。もう、何も失わない。私が銀ちゃんを助けないと、いけないアル。

広い回廊の奥に、大きな扉が見えた。神楽は、そこに銀時がいるだろうと確信した。だが。

「あれ。何でお前がここにいるのかな、神楽。」

どこかで聞いたことのあるセリフ。神楽の動きが止まった。

「念を押したはずだよ。ここに来るな、って。」

兄の言葉に、神楽ははつきりとした口調で返した。

「私は銀ちゃんを取り戻しに来たアル。そこをどくヨロシ。」

「どかないよ。」

神威はにこにことはほ笑みながら神楽に言う。

「俺はね、またお前のせいでお楽しみ取られちゃったんだ。悪いけど、神楽。」

微笑みながら、神威は続ける。

「お前には、ここで死んでもらうよ。」

いつから私たち兄妹は、遠く、かけ離れた存在になったのだろう。

マミーが倒れた時？

兄ちゃんが、パピーを殺そうとした時？

それとも、兄ちゃんが、あの家を離れた時？

……どれもいい。大切なのは、今だ。昔の兄ちゃんを取り戻して、昔のように、家族と一緒に暮らすんだ。

私を取り戻すのは、銀ちゃんだけじゃない。遠い昔に兄ちゃんが忘れた、昔の、優しい頃の兄ちゃん。

お願いだから、戻ってきて。私は、あの頃に戻りたいの。

第十七訓 家族は、やっぱり何よりも大切なモノ

「……兄ちゃん。」

幼い少女が、雨が降る中、兄と思しき青年を見上げた。

「なあに？」

「私、友達いないアル。誰も、私に近づいてくれないネ。」

少女は俯いた。

「私、もういやアル。一人ぼっちなんで、嫌アル。」

しばらく、青年は黙っていた。だが、やがて雨空を見つめながら、ぼつりと口を開いた。

「神楽。よく聞いて。」

「？」

少女は、顔を上げ、地面から、兄へと視線を移しかえる。

「友達がいなくなつて、別にいいじゃないか。俺たちが、いつもお前の味方なんだから。お前には、俺たち家族がいる。母さんも、父さんも。だから、心配しないで。」

兄のその言葉に、少女は無言だったが、少しの後、兄の足にしがみつき、

「うん。」

こくりと、素直に頷いた。

「待つて！兄ちゃん！」

階段の上で叫ぶ妹。その前には、傘をさし、妹に背を向ける兄。

「待つて……。マミーが……。マミーが死んじゃうアル。」

兄は、妹を見ずに返す。

「それが？」

妹は、兄の言葉に衝撃を受けた。兄が、こんなに素気なく返すなんて、ありえない。いつも家族思いで、優しかった兄が……。

「ば、パピーも帰ってこないアル。兄ちゃんがないと、マミーが

死んじゃうヨ。」

「……なら、勝手に死ねばいい。俺は知らない。」

兄が歩き出す。それを見て、妹は急いで、大きな声で叫ぶ。

「兄ちゃん！私も行くヨ！私も行かせて！」

小さなため息をついた兄は、傘ごしに、階段の上の少女を見上げた。

「……嫌だ。ついてくるな。俺は、強者だけを求める。弱いお前なんか、興味はない。」

妹は、微笑みながら、凄まじい殺気を放つ兄に、肩をびくりと震わせた。

「俺に付いていきたいなら、俺より強くなってから来てよ。今のお前なんか、そこら辺にいるチンピラどもの足もとにも及ばないもん。」

「ザアアッ……。」

雨が強くなってきた。

兄は、それ以来、妹を振り返ることはなかった。

第十八訓 クイズ番組の問題って、簡単だったり難しかったり、均等じゃないと

「……。」

無言で、兄妹は傘を構える。足を前方に出し、少し前かがみ気味に、腰を低く。

バツ。

二人が動いた。

「ほわちゃあああ！」

右開脚、左拳、頭突き、回し蹴り、突き。しかし、どれも軽く交わされる。

「バカだなあ。」

後ろに飛び下がった神威は、傘を構え、神楽の肩を撃ち抜いた。

「う……。」

ばさりと前に倒れこんだ神楽に、神威がゆっくりとした足取りで近づく。

「どんなに力のこもった攻撃でも、当たらなきゃ意味がないんだよ。殺し合いの基本だろ？」

笑顔のまま、神威は地に伏せた神楽の腹に、足を乗せた。

「あ、あああああ！」

身を起こすタイミングを逃した神楽は、神威の全体重とその負荷に耐えられず、叫び声をあげる。

「……阿伏兔。お前、吉原の時に、コレごときに負けたの？」

後ろを振り返った神威に、阿伏兔は面倒臭そうに答える。

「いんにゃ。俺はそのコに負けたんじゃない。正確に言うと、もう一人のその子、ってところかな？」

「ふうん？」

神威は面白くなさそうに言う。そして、ぐりぐりと足で神楽を踏みつける。

「阿伏兔の言うこと、難しくてよくわかんないや。……で？どうや

つたらもう一人のコイツに会えるの？」

阿伏兎は、あたりを見回す。

「お連れさんが来てないから、会えないと思うがな。」

「お連れさん？」

興味深そうに神威が尋ねる。

「ああ。気の弱そうなメガネ少年だよ。ヤツが死にそうになった瞬間、理性がはじけ飛んで、パン、さ。」

阿伏兎がそこまで言うのと、神威は神楽から離れた。神楽は、ふらふらと立ち上がる。

「起きて大丈夫？」

神威が問うと、神楽はキツと兄を睨みつけた。

「……私は……。私は、銀ちゃんと兄ちゃんを取り返しに来たアル。お前なんかに、負けない。今のお前なんかに、絶対に負けない。」

「兄ちゃんって、誰のこと？」

遠慮なく、神威が微笑みながら聞く。

「当ててみるヨロシ！」

復活した神楽は、宙に飛び、傘を神威の方向へ向ける。

ドドドドドド！

銃弾が放たれ、凄まじい音が響く。だが、一発も神威には当たっていない。……それどころか、神威の姿は消えていた。

「そうだなあ。」

いつの間にか、神威は神楽の後ろに回っていた。

「いないんじゃないの？」

スゴッ。

嫌な音とともに、神楽は腹を思い切り蹴り飛ばされ、壁へ激突する。神楽は、しばらくしてから、蹴られたところを触ってみた。……肋骨が折れている。

「……正解、かな？」

神威は、答えられない神楽に歩み寄り、躊躇なく拳の雨を浴びせる。
「う……。」

痛すぎて、悲鳴なんか上げるどころではない。動けない。痛い。苦しい。

「諦めちゃダメだよ。……ほら、理性のタガを外してごらん。そうすれば、もしかしたら、昔の俺に会える……かもよ？」

ウソだ。絶対に、ウソだ。

心の中ではわかっていた。だけど、昔の兄に会えるのなら……。ついつい、そう言う考えへ頭が言ってしまう。

ダメ。自分の精神を保って。銀ちゃんや新八みたいに、強くなりたいんでしょ？

慌てて、もう一人の自分が、神威の言葉に惑わされた自分を取り返そうとする。

ほら、がんばって……。

その瞬間、神楽の足が動いた。思いつきり神威を吹っ飛ばす。

「……あり？」

天井に、ものすごい衝撃でぶつかった神威は、少しだけ驚いた顔を作る。

「なあんだ。理性が飛ばなくても、できるじゃん。」

そして、地面にすたつと舞い降りると、構える。

「……おいで。」

神威は手をちよいちよいと動かし、自分をきつと睨む神楽を、戦闘へ仰いだ。

第十九訓　だいたい兄妹喧嘩は兄ちゃんの方が強い。バカ力持ってるからねッ。

「うッ、ぐっ、ふぬをおッ!!」

神楽の手足が動く。その度、神威は攻撃を軽く交わす。

神楽の攻撃を見きった神威は、神楽が自分に突っ込んできたと同時に、神楽を軽く突いた。

「ぐあッ。」

壁に叩きつけられる神楽。しかし、すぐに身を飛び跳ねながら起こし、構えた。

「そうそう。その調子。」

微笑みながら、神威は嬉しそうに微笑む。

地面を蹴りあげて宙へ跳ねた神楽は、右左、右左、と、神威に回し蹴りを食らわせる。が、神威はすつと地面に伏せ、神楽が地面に着地した瞬間、その隙を狙って、神楽の脳天を、中指で強く突いた。

一瞬、神楽の目の前に、星が散る。だが、我を取り戻した神楽が見たのは、星ではなく、神威の微笑だった。

「え……。」

神楽がぼつりと呟いた時、神威が神楽の鳩尾を殴り、さつと後ろへ回ったかと思うと、神楽の両肩の関節を、いきなり外した。その刹那、神楽は大きな叫び声をあげて、仰け反った。

「阿伏兔。縄ちよーだい。」

後ろを振り返った神威は、阿伏兔が、どこから取り出した縄を受け取り、動けない神楽を拘束した。

「ダメだね、神楽。」

縄で縛った神楽を引きずりながら、神威は、大きな扉へと直進する。「ちよつとした殺り合ってないのにさ。……俺はそう思っただけだね、一応は俺の妹だろ。しっかりしてよ。」

神楽は呻きながら、神威にされるがままになっている。
ガァン!

神威は、扉を開いた。その刹那、光が、心に深い溝を作った兄妹を包んだ。

「ごめんねー。斬る相手、一人増えちゃった。」

妹を引きずった兄が、葵に向って突き進む。

「チャイナ……。」

真つ青になった神楽の顔を見て、葵はそれを言っただけ、無言になった。

「じゃ、頼んだよ。」

神楽を、神威はぽいと葵の前に、捨てるように投げた。

「神楽……！」

銀時は、高杉の手を振り払い、倒れた神楽に駆け寄った。高杉は、冷めた目で、嘲笑のような笑みを浮かべながら、そんな銀時を見つめる。

「おい、神楽！しつかりしろ！」

神楽は、うつすらと目を開け、銀時の赤い瞳を見た。

「ぎ、銀ちゃん……。ホントに、銀ちゃん……？」

その呟きに、銀時は大きく頷くと、神楽の肩を見た。肩が、妙な形になっている。

「お前……。どうしたんだ……。」

それから、神威をキッと睨みつけると、銀時はバツと立ち上がった。

「……おい、お前。」

神威は微笑む。

「なあに、お侍さん。」

「てめえ……。神楽に何した。」

銀時の問いに、神威は、微笑を口元に笑みを浮かべながら答える。

「何もしてないよ？……。ただ、ソイツの肩の関節を外したんだ。」

その言葉を聞いて、銀時の瞳に、殺気と、怒りの炎が宿る。

「……テメエの妹じゃねエのか。」

「彼女はそう思ってるようだけど、俺は全く関係ないよ。」

「血肉を分けた、妹なんじゃねエのか。」

「同じ言葉を繰り返すようだけど、彼女だけがそう思ってるだけなんだよ。」

銀時は、その瞬間、目を見開き、神威に突進した。だが、銀時の着物の襟首をつかむ者がいた。

「銀時の旦那、やめな。……殺されるよ。」

葵だった。銀時は、感情のこもっていないそんな言葉を聞いて、抗おうとしたが、その刹那、葵の瞳孔が、兄の土方同様、見開かれた。

「……。」

言葉こそ発さなかったが、その黒い瞳には、有無を言わせぬ迫力があつた。しかし、そこには殺気はこもておらず、「お願いだから、あたしの言うことを聞いて。」というような、願いがこもった目だった。銀時は、それに従う。

「……銀時。何か、最後に言い残すことはあるか。」

冷笑しながら、高杉が、銀時の腕を掴んで、手足を、処刑台の鎖につないだ。葵も、神楽の縄を解き、気絶しかかった神楽を鎖につなぐ。

「……葵。」

神楽が、ぽつりと呟いた。

「……銀ちゃんを、助けて。」

葵は答えない。

「おい、ガキ。」

高杉が、それを聞いて、冷たい緑色の瞳で神楽を見つめた。

「それが、お前の最後の言葉か。もう少しマシな言葉はどうだ？」

神楽は、その言葉に、高杉に、刺すような視線を向ける。

「銀時。お前はないのか？」

自分へ視線を移した高杉が、不敵に笑ったのを見て、銀時は、言葉を発する代わりに、齒切りをする。

「……葵。やれ。」

その言葉で、葵は持っていた刀を構えた。高杉は、銀時と神楽を見

下すように嘲笑い、
「じゃあな、銀時。」
最後に言った。

第二十訓 だいたいすることはみんな同じ

手足の自由を奪われた銀時と神楽は、自分の今の状況を打破するための手段を、必死で考えていた。とは言え、銀時はもともと頭を使うことが苦手なので、考えるも考えられず、神楽も同じく、頭ではなく身体を使う方なので、この危機的状況を打破するための策が頭の中に浮かばない。

目の前にいる葵が刀を構える。

……もうダメだ……。

二人は最期の時を感じた。そして、それぞれ、銀時はパフエとジャンプを、神楽は酢昆布を頭の中に思い浮かべ、瞼を閉じる。

葵の刀が銀色の光を放ちながら、二人に振り下ろされた。同時に、銀時と神楽の自由を束縛していた鎖が切れ、二人は地面に激突する。高杉は銀時を見て、もともと口元に浮かべていた笑みを深くさせ、不気味な笑い声を上げた。

「白夜叉の終わりだ……。ククツ。」

だが、その刹那。

「……誰の終わりだって？ バカ杉。」

気だるい、やる気のなさそうな声。銀髪。

冷笑を凍りつかせた高杉の瞳に映っていたのは、倒れて、死んだはずの、銀時の憎たらしい笑い顔だった。鋭い痛みを脇腹あたりに感じる。

「……おいおい……。」

脇腹に視線を移す。葵の手に握られていたはずの刀が刺さっていた。だが、高杉は微笑を絶やさない。

「まあ、結局、地球人は同じをことするんだね。」

神威の突然の発言に、銀時と高杉は首を傾げる。

「そこにいる女のコも、君と同じことをしたじゃないか。」

気絶して、瞼を固く閉じた神楽を起こした葵に、神威がにっこりと

笑みを浮かべた。

「……でも、そんな気まぐれがいつも幸運へと人を導くものじゃない。」

葵が、その言葉の隠された意味を探そうと眉をしかめた瞬間、神威の蹴りが炸裂し、葵は神楽ともども壁に衝突した。葵は、神楽を庇って、自ら壁にぶつかり、大量の血を口から吹き出す。何とか衝撃を抑えられた神楽は、気を失ったまま、地面に伏せる。

「ねエ、高杉。お祭りタイム？」

微笑みながら、神威は後ろを振り返る。

「……ああ。好きなだけ……。」

高杉は口が裂けるように笑うと、銀時の刀の刃をガシリとつかみ、吐き出すように言った。

「暴れる！」

その時、高杉は自ら脇腹から刀を抜き出すと、血みどろの右手で鞘におさめていた刀を手を取った。

「……銀時。お前との決着をつけたかったぜ。」

その言葉に、銀時も生意気そうな笑いを浮かべて返す。

「ああ？ そりゃこっちの台詞だよ、バアカ。っていつか今日、ジャンプの発売日だから、この船から出来るだけ早く抜け出したいんだよね。お前みたいな片眼ヤローと戦闘ごっこすんのはジャンプ読んだ後にしたいんだよ。……何で？ だってそりゃ……。」

聞かれてもいないのに、銀時は答えた。

「……何かバトルシーン読んできると、自分も戦いたくなるからだよ。」

「

高杉は、その言葉を聞いて、不気味な笑い声を立てる。

「そのバカさ加減、いつまで経っても直らねエようだな。」

隙だらけに構えた高杉は、言った。

「その腐った頭、俺がテメエを殺して、直してやろうか？」

銀時は、ほほ笑んだ。

「とんだお節介焼きだな。」

「これでよかったって思ってる？」

神威が、ぼそりと葵に尋ねた。

「ああ？」

血を口元から垂らしながら、葵は神威に返す。

「高杉、君の恩人なんでしょ？裏切って良かったの？恩に報わなきゃダメなんじゃない？……今なら、まだ遅くないよ。俺が仲介してあげようか？」

それを聞いた葵は、ハハツ、と元氣なく笑った。

「アンタがそこまで気遣ってくれるとは、嬉しいよ。でも、裏切って良かった。あたしは、あたしなりのやり方で恩を返したと思ってる。」

「？」

よくわからない、とでも言うように、神威は笑みを消し、かわいらしく首を傾げた。

「天人にはわからないかな。道を誤った人を、もう一度道に戻そうとしてるんだよ、あたしは。……高杉は、あたしが死にそうだった時に助けてくれた。あたしは、高杉の魂が死にそうになった時を助けようとしてんのさ。」

神威は、それを聞いて微笑んだ。

「侍は面白いよ、ホントに。でも、今の君を見る限り、戦う力は残っていないようだね。これじゃ、楽しみにもならないや。だから……」

……」

殺氣が宿る、神威の瞳。

「死んでもらうよ。」

第二十一訓 次回予告とかに期待しちゃダメ

「高杉の言うことって、いまいち信憑性に欠けるなア。」

微笑みながら、神威が言った。

「腕前のいい敵さんが、たった一発で倒れちゃうなんてサ。……つていうか、高杉が言ってた作戦って、たかがこれのこと？ 飽きれちゃうなあ。」

壁にのめりこんだまま動かない葵に近づいた神威が、強烈な突きを葵の鳩尾に放った——だが、神威の指が葵に触れる前に、神威は吹っ飛んだ。

「あれれ？」

可愛く、青い目を丸くさせる神威。地面から立ち上がると、自分を吹っ飛ばした人物——神楽へ目を向ける。

「……倒れてたんじゃなかったの？」

肩で息をしている神楽は、その言葉に、口から血をこぼしながら返した。

「この女は、私の……獲物アル。コイツの息の根を止めるのは、私……ネ。」

「ふうん。でも、その子、俺の獲物でもあるんだよねエ。」にこにこしながら、神威が口を開いた。「……久しぶりに、兄妹喧嘩でもする？ 確か、何年か前に、あの人が作った焼肉を取り合った以来だね。」

あの人——神楽と神威の母のことである。

「……そうアルな。」

以外にも、兄は昔のことを覚えていてくれた。かすかな希望が、神楽の心に芽生える。今なら、もしかしたから兄を取り戻せるかもしれない。

「じゃあ、喧嘩開始♪」

二人は、さっと腰を低く構えた。

「……昔から松陽先生は面倒見が良かった。」

唐突に、高杉が始めた。俯き加減に、自分に語りかける高杉に、銀時はわずかながら違和感を覚えた。

「だが、いきなり銀髪と赤い瞳を持つ、まさしく鬼の容姿をしたお前を、自分の私塾にいれるとはな。俺も正直驚いたよ。」

銀時は、その言葉に眉をしかめた。

「一度、脱藩し、藩に逆らった身でありながら、長州に戻り、俺たちの世話を焼いた。そして、叔父から譲り受けた松下村塾を再び設立し、俺たちに、大志を抱けと……。自分の魂が命ずるままに、己の道を貫けと教えて下さった。」

一瞬、高杉の瞳に、暗い影が宿った。

「だが、いきなり火事だあ……。何が何なんだか分らなかったぜ……。俺も、お前も、ヅラも、先生の仇を討とうやらなんやら企てて、挙句の果てには攘夷という志を胸に抱き、攘夷戦争に参加した……。俺やヅラは、未だ松陽先生の仇討ちをしようなんぞ、大法螺吹いてんのさ。……だがお前はどうか？ 師への恩を忘れ、平凡な日常に溶け込んでる。それどころか、先生の敵でもある將軍と戯れてるじゃねーか。俺は、お前よりはマシな人間だと思ってるぜ。実現するかどうかもわからねー大法螺吹いてはいるが、てめーみたいに、師への恩を忘れることはねー。」

銀時は、びくつと肩を震わせた。

「……てめーも、自分がやったことの愚かさぐらい、理解してるだろ？……俺はただお前を殺してエだけだ。自分の志も、師も、何も護り抜けねエてめえを殺してエだけ。」

刀を銀時に向けた高杉は、ククツと笑った。

「……終いにしよーや。俺とてめえの因縁は、これで決着が着く。」

「……団長、アンタ、いい加減にした方がいいぜ。」阿伏兔が、隣から口を挟んできた。「アンタ、さっき、少しとはいえ、やられた

だろ。」

「だから？」

阿伏兔も見ず、神威は前方を向きながら返す。

「だから、俺は、アンタの身を案じて……。」

「そりゃあ感謝しなきゃいけないな。」阿伏兔の言葉を切って、神威は言った。「でも、心配しないでいいよ。俺はただ、アイツの理性のタガが外れて、本気になるところをみたいだけだから。それに、俺は、あのお待さんと殺り合うまでは、死ぬ気はないしね。」

そして、くるりと阿伏兔を振り向き、微笑みながら続ける。

「……それと、二度と俺の戦いの邪魔しないで。ほら、さっきのシーンでさ、『じゃあ、喧嘩開始』って言っちゃったじゃん。読者の人たち全員さ、このカットから俺と神楽の戦いをはじめるって思っちゃうし……。読者の期待を裏切っちゃダメでしょ？」

ニヤリと笑った神威を見て、阿伏兔は諦める。

……もう何を言っても無駄だ。っていうか、設定グラつかせるような発言は、止めてくれねエかな？

口に出そうと思ったが、言った瞬間、殺されるだろう。——長年の付き合いだから、それくらい良くわかっていた。

第二十一訓 次回予告とかに期待しちゃダメ（後書き）

新：なんか僕、忘れられてませんか？神楽ちゃんにデスクの下に押し込まれて、真選組の人たちが来て以来、全く顔出してないんですけど。

土：俺もだぞ。近藤さんや総悟や山崎も、全員病室でおねむだぜ。

沖：あっちゃんと作者には悪いですが、一言言わせてもらいやすぜ。「話脱線するの&無駄な話入れるのやめろ。」「はつきり言って、見苦しいですぜ。あの阿伏兎とか言うヤツが、第七訓で言っていた「あの機械」とか、作者の忘却の彼方ですし。

山崎：ホントですね。「あの機械」と、神威とか言う人の、本当の仕事の目的とか、全然覚えてないみたいですよ。どうせ、「すいません。忘れてました。まあでも、第二章作ればいいことだし、いいんじゃない？」で誤魔化されるんですよ。代替、そうやって冬瀬は学校でも乗り切ってますからね。

新：あの、それで乗り切れるんですか。

真選組一同：……さあ。

第二十二訓 カッコつけてても、本当は全然カッコつけられてないことがある

「うおらああ!!」

きちんと急所へ狙いが定まっている神楽の攻撃を見て、神威は目を丸くする。だが、神威に攻撃は、未だ当たらない。

「もう少し、攻撃と攻撃を繰り返すあいだの間を、短くすれば当たると思うんだけどなあ。」

人ごとのように神威が言う。神威の言うことを聞くのには、少し気が引けたが、もしかしたら、本当に当たるかも知れない、という希望を持って、神楽は言われたとおりに動く。

ドゴツ。

あたった。神威の首元に、神楽の攻撃が。

「いで。」

神威は後ろへひらりと飛び下がり、当たった首元をさする。しばらく神威は神楽のことをじっと見つめていたが、やがて口から血を吐き出した。

「お、おい、団長! しっかりしてくれよオ!」

阿伏兔が神威に駆け寄りうとしたが、一歩踏み出したところで、ぴたりと止まった。……神威は幸せそうに笑っていた。……まるで、小さな子供が、新しい玩具を手にしたように。

「あはは、あははは……。」

生気のない声で笑い出すと、神威は口から再び、夥しい量の血を吹く。

「だん……。」

そこまで言った時、阿伏兔は凄まじい痛みを額に感じた。

「阿伏兔……。俺の戦いの邪魔したら、殺しちゃうぞ。」

阿伏兔は、一歩引きさがる。額から、盛り上がった血液が滴れ落ち、阿伏兔の目に入った。

——どうやら、理性のタガが外れたのは、お前さんの方だったよう

だな、団長……。

神威はにやりと笑った。口元の笑みが、口が裂けるかのように大きくなり、目は、まるで餌を探し求める獣のように見開かれる。神威の殺気は、煙の如く、自身の身体から立ち上がった。

「おいで……。神楽……。おいで……。」

ガキン！

銀時と高杉の刀が触れ、金属音特有の乾いた音がした。高杉の刃は残光を帯びて光り、弧を描いて銀時に向って振り下ろされた。危機一髪のところ、銀時はその一撃を避け、今度は自分の番だとも言うように、ぶんと勢いよく刀を振る。

「……銀時。」

高杉が、銀時の攻撃を避けながら口を開いた。

「松陽先生を、覚えているか。」

銀時は、機に乗じて刀を振りまわすだけで、高杉の問いには答えない。だが、それでも、高杉は続ける。

「己は大義のためにある、私のためではない。……叔父の玉木殿にそう教えられ、それを惜しまず実行した人だ。あれ以上の人物は、この世には存在しねエ。」

銀時は、表情を変えずに、討ちこんでくる。

「……お前は、松陽先生を捨てたも同然だ。人を助ける職業に就くのは、別に悪いことじゃねエ。だがよお、その前に、やれることってというのが、あるんじゃないか。」

無言の銀時。能面のように顔を変えず、ひたすらに攻撃するのみ。答えない銀時にしびれを切らしたのか、高杉は目をカッと見開くと、銀時の隙だらけだった腹を、ぐさりと突き刺した。

「ゲ……。ゲホッ、ゲホッ。」

血を噴き出した銀時を見て、高杉は笑みを消し、眉をしかめた。

「白夜叉ともあろう者が……。こんな無様な格好さらけ出してくれるたあな……。」

見下すように、高杉は銀時に向って吠えた。

「それでも……。それでも、テメエは松陽先生の……。あの松陽先生の教え子か！自分の師への恩も忘れ、その仇敵に奉公するなんざ、俺ア認めねエし、軽蔑する！」

高杉の緑色の瞳から、透明の涙があふれ出した。

「銀時！テメエも松陽先生の弟子なら、少しは動いたらどうだ！あの松陽先生の弟子ならば……。」

が、その刹那、銀時の刀が高杉の肩を貫いた。銀時は俯いたまま、口を開いた。

「……悪いな、高杉。俺ア、気楽に生きてんだよ。そらあ、先生が喜ぶってんなら、滅私奉公でも何でもして、再び攘夷とか言うくだらない活動をしてやるよ。」

銀時は、顔をバツと上げると、赤い瞳で、高杉を睨んだ。

「だがな、テメエのやってることは、先生の望んでいることじゃねエいったい何時まで経ったらわかるってんだ。……先生も、草場の影で、泣いてるぜ。」

肩を刺された高杉は、銀時を見て嘲笑った。

「草場の影で泣いてる？テメエらしくねエ表現の仕方だな。」

銀時は微笑む。

「俺らしくない？んー、そうだな。そうかもしれねー。久し振りに、ちよつとはいい言葉使おうと思ったのさ。」

「いい言葉ねエ。……そうか？」

高杉は片眉を上げた。

「肩貫かれてんのに笑ってられるたあ、見上げたもんだぜ。」

銀時のそんな言葉に、高杉は返す。

「テメエこそ、腹刺されてんのに反撃するとはねエ……。バツ。」

銀時は、刀を抜いた。そして、二人とも戦闘態勢に再び入る。しかし、その刹那――。

ドオオオン！

大きな衝突音が、船内に大きく響いた。

第二十三訓 大切な記憶はちゃんと残っている

「ハッ！」

ドン！

神威の一撃だけで、壁が崩れ落ちそうになる。壁にヒビが割れ、さすがの神楽と言えども、避けるので、精一杯だった。

「ほらほら、遊ぼうよ。神楽。」

飛び蹴りが炸裂し、神楽は吹き飛ばされる。身体をゆらゆら揺らしながら、神威はのっそりのっそりと神楽に近づく。

「ほうら！」

バゴツ。

神威の拳が地面に激突した瞬間、床に穴が開く。神楽は、それを見て、額に冷汗を掻く。

後ろでそれを見守っていた阿伏兎は、自分の団長の豹変ぶりに、驚愕した。

……まさか、あそこまでとはな……。

神威が攻撃する。神楽が避ける。神威が攻撃する。神楽が避ける。これの繰り返しだった。いつこうに、神楽が攻撃できる機会はやってこない。——いや、何度かあったが、懐に潜り込んだ瞬間、殺されそうでも足が動かなかった。

「か、むい……。」

兄の顔が尋常でないほどに変わっていて、神楽は驚くことしかできなかった。

「フッ！」

ドッ！

神楽の脇腹に、神威の渾身の一撃があたった。神楽は、血を吐き出す。

「もう終わりなの？俺を、もう少しくらい楽しませてよ。」
バン！

神威の回し蹴りを、またもや食らう神楽。今回は、顔に直撃した。一瞬、首が折れるかと思ったくらいに衝撃を受けた。

ニヤリと不気味な笑みを浮かべた神威は、神楽に近づくと、最後の一撃をくらわせようとした。だが、その直前に、神楽が発した言葉が、神威を我に返らせた。

「……兄ちゃん。」

ドク……。

心臓が、鼓動を打つ。

「嫌だヨ、兄ちゃん……。」

ドク……。

「……お願いだから、戻ってきてヨ、兄ちゃん……。」
バツ。

神威は神楽から離れ、地面にひれ伏した。痛い。頭が、割れるように痛い。

思わず、神楽は神威に近寄ろうとするが、

「近寄るな！」

神威の制止で、神楽はぴたりと止まる。

「兄、ちゃん……？」

久しぶりに、兄のことを、そう呼んでみたかった。

「兄ちゃん……。私のことわかる？神楽だヨ。覚えてるアルか……？」

ためらいながらも、神楽は神威に尋ねてみた。神威は顔をさつと上げると、神楽の顔をさつと見つめた。——いつもと、何かが違った。神威の身体には、未だ家族という「もの」が、残っているかのようにだった。

「か……ぐら……。」

そう神威が呟いた瞬間、神楽は、バツと兄に抱きついた。

「兄ちゃん……！」

驚く神威。目を大きく見開き、妹にされるがままになっていた。だが、しばらくしてから、そっと神楽を抱きよせてみた。

……久しぶりの感触。温かい。……これが、家族というもののなのだろうか。これが、自分が遠い昔に捨て、くだらないものと見下していたもののなのだろうか。

「神楽……。」

今度は、ギュッと、さつきよりも強く、神楽を抱きしめてみた。神楽も、同じようにして、神威を包みこんでいる腕に、力を入れる。

「兄ちゃん……。グスッ……。」

うわーん、と、神楽が大泣きし始めた。神威は、昔の兄に戻ったように、神楽を抱っこしながら立ち上がると、神楽の頭をよしよしと撫でた。

「……ほらほら、泣かないの。」

優しい兄の言葉に、妹は思わず、もっと涙を出そうとしたが、慌ててそれを止めた。

「いい子だから。……ね。」

しばらくの間、神威はそうやって妹をなだめていたが、やがて眼を伏せ、心を決めると、神威は神楽を下ろし、背を向けた。

「……兄ちゃん！？待って！」

神楽が、神威を追いかけた。だが、神威がピタリと足を止めると、神楽も止まった。

「……俺は、春雨の第七師団団長。いつまでも、お前とは一緒にいられない。」

先ほどとは一変、冷たい言葉に、神楽は思わず、後ろへ一歩下がった。

「お前には、新しい家族が出来ただろ？俺には、お前たちの中に入り込むことなんかできない。それに、闇は俺の性によく似合う。お前のように、日の光がお似合いのヤツとは、そうそう長くはいれない。」

最後に振り向くと、神威は、「本当の笑み」を浮かべて、言った。

「……今度会うときは、俺も、お前みたいになれるよう——日の光が似合う人間になってから、そっちへ行くよ。ただ、それまでは、

一緒にはいられない。闇と光は、相容れない仲なんだから。だから、待ってて。いつか、また一緒に暮らせるようになるまで、待ってて。

「
神楽は、何も言わなかった。でも、しばらくしてから、顔満面に笑みを浮かべると、「うん！」と、大きく頷いた。
神威は、再び神楽から離れて行った。

——バイバイ、兄ちゃん。

もう、二度とこんな兄とは会えないかもしれない。また、春雨の中へ戻って行けば、あの兄とは会えないかもしれない。
でも、それでもいい。本当なら、一生再び対面することのできなかった、あの頃の兄に、もう一度だけ、会えたのだから。

神楽は、泣きながらも、ずっと笑みを浮かべていた。そして、兄の姿が、阿伏兎とともに消えるまで、ずっと見送っていた。

ドオオオン！

その時、大きな衝突音がした。

第二十三訓 大切な記憶はちゃんと残っている（後書き）

神威：本当にこれでよかったのかな、俺と神楽の戦いの終盤。

阿伏兔：……さあ。まあ、作者もどう終わらせようか迷っていたらしいし、これでいいでしょうぜ。

神威：そっか。……ぶっ殺そうかな、作者。

神楽：神威イイ！おまえの相手は私アル！！

神威：何？またやる？……今度は手加減しないから。

数分後。

神威：……はい、終了。

神楽：……チツ。

第二十四訓 心の中で呟けば、カッコイイとでも思った？

「銀時イ！貴様、俺を差し置いて高杉と殺り合うつもりだったかアアア！」

衝突音の直後、一番最初に銀時の視界に現れた人物は、桂だった。

「ヅラ……！お前どうしてここに……。」

「ヅラじゃない、桂だアアア！」

銀時にアッパーカットを食らわせると、桂は高杉の前に立ちほだかる。

「……よお、元気にしてたか、ヅラ。」

嘲笑するように言う高杉に、桂はお決まりのセリフで返す。

「ヅラじゃない、桂だ。」

それを聞いた銀時は、ムスツとした顔で、桂に文句を垂れる。

「お前さア、何で俺ン時にはアッパーカットしたのに、高杉ン時はやんないの？差別だよ、ヅラくん。差別はいけないよ。ロクな大人にならないよ。あ、もうロクな大人じゃないか。あゝらら、可哀そうに。ロクな大人じゃないから攘夷浪士なんかになっちゃったんだろうね。」

「貴様のようなグータラに言われたくない。」

冷たい声で返された銀時は、言うことがなくなつて黙り込む。

「オメエらは変わつてねエな……。」

高杉はそう切り出し、刀を鞘に収め、二人に背を向けた。

「俺アもう帰るぜ。テメエらとは付き合つてらんねエ。……特に銀時。」

後ろを振り向くと、高杉は鋭い目で銀時を睨んだ。

「……テメエみたいに、師への恩を忘れて、必要のないモン背に背負うヤツなんかは見てられねエ。」

高杉は歩きだした。

「……あばよ。」

――… ああ、行っちゃまう。

背を向ける「仲間」を見て、銀時は心の中で呟いた。

――… もうダメだ。俺も、ツラも、きつと、もう、アイツの中に入れねエ。

高杉は、キセルを吹かす。

――俺は、アイツのキセルの煙みたいに、誰かが吹けば現れ、好きな時に消える。そういう人間なんだ。

「フウッ……。」

――だけどアイツは違う。自分で吹こうとしゃがる。……面倒臭がりの俺には無理だな。

薄笑いした銀時は、高杉に、心の中で、そつと返した。

――… あばよ、高杉。

第二十四訓 心の中で呟けば、カッコイイとでも思った？（後書き）

桂：銀時。今回、俺は別に、何というか、ちょっとしたゲストキャラクター的存在ではなかったか？ほとんど出てない。それに、高杉とも、少ししか言葉を交わしておらんぞ。

銀：べつにいいだろ。出るだけ。それによお、無理言っちゃいかんぜ。だって「銀魂」の主人公俺だからね！おまえじゃないからねっ！

桂：そうか。だがせめて言わせてくれ。あらすじのところに、「そこに乱入するは狂乱の貴公子」と書いてあるぞ。それも一番最初だぞ。高杉やあの神威とかいう青二才の前だぞ。なのに何なんだこの扱いは！訴えますよ！？

銀：……誰に言ってるの？

桂：作者にだ。

銀：あー、そう。……もういいわ、帰ってくれ。（そして二度と帰って来るな）

桂：何か、幻聴のようなものが聞こえたが。

銀：ん？聞き違いだろ。（チツ。目ざとい野郎だな。）

桂：また聞こえたような。

銀：ダァーッ！いいから帰れや！そして二度と帰ってくんない！

桂：言ったな！今言ったな！今回は聞いたぞ！聞き逃さなかったぞ！

二人：ギャーギャーギャー！！！！

数分後。

土方：かあつらあー！！！！！！

桂：チツ。真選組か。では銀時、さあらあばあー！

銀：……二度と帰ってこないでくれ。

第二十五訓 隊服は隊の魂

ゴオオオオオオオオオ!!!

船が遠ざかる音が聞こえる。

「……どうやら、行ってしまったようだな。」

桂の発言に、銀時は憂鬱そうに頷く。

「……ああ。」

雲ひとつない空に、高杉たちが乗る、春雨の、非常用の船が浮かぶ。

「松陽先生……。」

俯き加減に、久しぶりに呟いてみた名前。懐かしいけど、どこか、叱られそうで怖い響き。

「何か言ったか？」

銀時の言葉に、桂は首を傾げたが、銀時は首を振った。

「何にも。……ただ……。」

顔を上げた銀時は、江戸の青空に向って口を開いた。

「昔のことを思い出してただけさ。」

「……ゴメン。チャイナ。」

震える手で身体を支えながら、葵が立ちあがった。

既に、神威は、阿伏兎とともに消えてしまっていて、神楽は、葵に背を向けたまま、兄が消えた闇を見つめていた。

「……気にするナ。別にお前のためにやったわけじゃないネ。」

涙をぬぐった神楽は、少しムツとした顔を作って、葵を振り返った。そうでもしないと、自分が泣いていたことがバレてしまう。

葵は、神楽の顔を見て、少し顔を曇らせたが、やがていつもどおり、「サデイストの表情」に戻ると、神楽を見下して笑った。

「何？ブラコンに戻った？」

その言葉を聞いた神楽は、顔を真っ赤にさせて、バツと葵に襲いかかった。

「今なんつったコラアア！何言ったかわかってるんだろつなワレエエー！」

しかし、その刹那、神楽の身体が宙に浮いた。

「おい。あっちゃんに何してやがんでイ。」

そう言ったのは、真選組一番隊隊長沖田総悟だ。

「そ、そーちゃん……！？」

沖田の顔を見た瞬間、葵は腰を抜き、再び倒れそうになったが、地面に激突する寸前に、沖田がその腕をつかんだ。

「チャイナ。コイツは俺たち真選組のモンだぜ。勝手に暴行すると逮捕すんぞ。ちよつと署までご同行願おうかい。」

神楽に向つて、沖田はニヤリと笑った。葵は後ずさりして、神楽の後ろへ隠れる。

「……何だよ。コイツお前の仲間だ口。サド選組だ口。」

「おい。サド選組つて何だい。」

何気にキレル沖田。そして、優しい顔になると、葵に手を差し伸べた。

「……あっちゃん。俺、怒ってないぜ。近藤さんも、ザキも、真選組のヤツら全員、あっちゃんに戻って気欲しいって思ってたんだ。」

言われたが、葵はその手を握る気にはなれない。

「ほら。俺の手エ握つて、真選組に戻ろうぜ。みんな、あっちゃんの帰りを待つて……。」

「あの人は。」

沖田が言い終わる前に、葵が言葉を切った。

「……土方さんなら……。その……。」

言葉を濁す沖田に、葵は苦笑する。

「いいの。わかってる。……でも、あの人が許してくれないのなら、あたしは戻る気はないの。それに、そーちゃんだって見たでしょ。

あたしは、隊員たちを、全員斬った。……そーちゃんだって被害者じゃん。」

その言葉に、沖田は笑いながら返した。

「バカ言ってんじゃないぜ。あっちゃんは、全員手加減して斬ったんだろイ。まさか、あっちゃんが、手加減しないで全員にトドメささない訳ねえし。あの後、高杉を信用させて、一人で鬼兵隊を殲滅させるつもりだったんだろイ。」

無言になる葵。

「テメエの腹ぐらい読めてるぜ。……確かに、俺ア土方さんには脳はねエって言われてはいるが、人の気持ち読み取る心なら持ち合わせてんでイ。特に、仲間のな。」

しばらくしてから、神楽の後ろから、泣き声が聞こえてきた。沖田は神楽の後ろに隠れている葵に近づいた。

「……それでも、真選組を抜けてエンなら、今着てる服脱ぎな。」
今着ている服——真選組服だ。

「どうだい？脱ぐ気、あるのかイ？」

「……い。」

「？」

ブンブんと、葵は頭を振った。

「ないよ。そーちゃん。……あたし、真選組帰りたい。……帰りたいよ。」

フツと笑うと、沖田は葵の頭に手を置いて、よしよしと撫でた。

「これだから困るんでイ、土方家の人間は。人には、自分の心のうちを、簡単に見せてくれねエ。そのくせ、人にはさんざん迷惑かけるし。……やっぱ、あっちゃんはあるの土方の野郎の妹だな。」

だが、その瞬間、後ろに、スツと誰かが立った気配がした。

「ソイツが、誰の妹だった？」

第二十五訓 隊服は隊の魂（後書き）

なんかものすごい寝坊しました。久しぶりです。

夏休みは寝坊もできるしなんでもできるからいいものですが、宿題というものがあつて嫌だなあ。

でもこれからがんばります。

第二十六訓 話はわかりやすく説明しよう

「土方さん……。」

沖田が振り返った先には、冷めた顔をした土方。二人の間で、火花が散る。

「……葵を、許してやって下せエ。葵は、真選組を思っ……。鬼兵隊を、俺たちに迷惑かけないように、潰そうとしたんでイ。」

「だからって、真選組の隊員を斬っていい訳じゃねエだろ。」

その言葉を、沖田は返せない。しばらく、沈黙が降臨する。

「腹斬れ。葵。」

「えッ!?!」

土方の言葉に、葵と沖田は勿論、神楽まで驚いた。

「マヨラー! ソレどういうことアルか!?! お前ら仲間なんでシヨ!?! 家族なんでシヨ!?!」

「家族?」

冷笑を浮かべた土方は、葵を見降ろし、軽蔑の目で見つめた。

「残念だがな、俺ア随分前にコイツを勘当したんだ。ちゃんと書類も幕府に提出した。ソイツは、事実上俺の妹でも、土方家の人間でもねエ。……ただそこらを歩きまわってる浪人と、価値観は変わらねエ人間なんだよ。」

「ガアアン……!」

沖田が刀を抜き、土方に襲いかかった。間一髪のところ、土方も鞘から刀を出して、応戦する。

「土方さん……。俺アアンタのこと見てると、死ぬほど胸糞悪くなるんでさア。」

血走った眼で、沖田は土方を睨んだ。

「アンタ、女に恨みでも持ってるんですかイ? それとも、俺に持つてんのかな。……俺が好きなヤツにばかり手エ出しゃがって、その後に、ぱつと捨てちまう。」

土方は、そう言われても、顔一つ動かさない。

「姉上も葵もそうだ。……姉上はお前に誑かされてあの後、武州でどれだけ苦勞したとか……。その後は、自分の妹にまで迷惑かけやがって……。！お前……。それでも男かよ。侍かよ。……妹の兄かよ！」

それを聞いた土方は、沖田の刀を押し返した。

「言っただろ。俺は誰の兄でもねエ。……だが、せめて兄として最後に言ってやらあ。……腹斬れ、葵。」

「だから……。！」

沖田は刀を振り上げた。

「アンタの『ソレ』が気に食わねエんだアア！」

沖田が、土方の脇腹を斬った——と思った瞬間、土方が峰打ちで沖田を倒した。

バサツと沖田は地面にひれ伏す。

「……総悟。お前、女のことになると、前が見えてねエようだな。もう少ししゃんとしろ。」

パチン、と、土方は刀を鞘におさめ、沖田を見下した。沖田は、そんな土方を鋭い目で睨み、何かを言おうとしたが、その前に気を失った。

「……トッシー。」

葵が、ふいに口を開いた。この名前では呼んではいけないことは十分承知していたけれど、使ってみたかった。

「トッシーが言うなら、あたし、腹斬ってもいいよ。」

ウィンクする葵。土方は、この少女が、鼻っから切腹する気がないと悟る。

「それと、腹斬る前に言っておくね。あたし、死ぬ気ないから。」

「……は？」

土方は、矛盾している葵の発言に、眉をしかめる。

「だあかあ、あたし死ぬ気ないって言ってるんじゃない！」

そこで、神楽が口を挟む。

「お前言ってることメチャクチャアル。切腹すんに死ぬ気ないってどういうことアルか。早く腹斬って死ねヨ。」

「おい。自分の腹斬る前にお前の腹斬ってやるうか。」
思わず刀を手に取り、殺気の宿る葵。

「……おい。きちんと説明してもらおうか。」

葵は、土方に言われて、につこりと微笑み、うん、と頷いた。

「だからね、あたしは、『トツシーの妹じゃない葵』を斬るわけでも、『トツシーの妹の葵』を、殺す気はない、ってこと。」

「じゃあ、簡潔に言うと、だ。」

土方は煙草を吹かしながら、葵を睨みつける。

「……お前は、俺の妹に戻りてえ、ってことが。」

「うん。」

はつきりとした声で、葵は答えた。土方と葵の間で、奇妙な雰囲気が出る。睨みあってるのか、互いの心を探っているのか、よくわからない。

「そつだ。言い忘れた。」

葵は、唐突に口を開くと、バツと頭を下げた。

「……あのさ、トツシーたちが上京する前。マヨネーズ取ってゴメン。」

「……は？」

今度マヌケな声を出したのは、神楽の後ろにいた銀時だった。

「悪戯して、トツシーが上京中に食べようと思っていた高級マヨネーズあたしが盗んだの。……で、トツシーとケンカになって、それ以来あたしたち気まずくて、顔合わせられなくなっさ……。」

その場にいる全員、無言になる。

「え？え、え、え、え、え？……じゃあ、今まで君たちが仲悪かったのって、別に、葵が幕府を恨んでることでも、お父さんの件とかそういうのじゃなくて……。」

銀時の言葉が止まり、神楽が続きを引き受ける。

「……たかがマヨネーズのことアルか？」

「たかがマヨネーズじゃねエー!!!」

土方が神楽たちに向って叫んだ。

「マヨネーズっていうのはな、森羅万象何にでも……。」

「はいはいはい。」

言い訳するな、みたいな感じに銀時が土方の言葉を切り、兄妹を見た。

「じゃあ、長年のケンカ終了?」

兄妹は、黙りこむ。土方は、しばらくすると、溜息をつきながら、葵の方向を見ずに、「すまねエ。」と謝った。

「俺も、たかがマヨネーズのことでカツカしてて悪かったよ。……真選組に戻ってこい。」

顔を勢いよく上げた葵の顔が、だんだんと輝く。そして、絶好調に達すると、土方に飛びついた。

「トツシー!!」

「お、おい……。放せよ。万事屋も見てるんだぞ。」

土方の顔が、少し紅潮する。

その時、後ろから、複数人の男の笑い声が聞こえはじめた。

「副長つてばムキになってさ……。」

「ホントは嬉しいくせにね。覚えてる? 何年か前か忘れたけどさ、上京してしばらくした後で、『葵に謝れば良かった』って嘆いていたくせに。」

「意外に土方さんも、隊長みたいにシスコンだったりして。」

後ろを振り返ると、そこには、真選組隊員たちが集まっていた。中には、近藤や山崎もいた。

「葵くん。戻ってこい。」

近藤が笑顔で言った言葉に、山崎も大きく首肯する。

「戻って気ください、葵さん。俺たち、葵さんがいないと、副長に扱かれて死んじゃいます。やっぱり、『鬼の副長』がいるなら、『救いの副長』がいなきゃね。」

しばらく、土方に抱きついていた葵は、いきなり現れ、それも自分

が斬った隊員たちを目にして、動きを止めていた。

だが、やがて目に大粒の涙を浮かべると、頭を下げた。

「あり……がとう、ございます。」

隊員たちは、そう礼を述べた葵に、微笑みかけた。それを見た近藤が、豪快に笑い、葵、土方、そして、復活した沖田とともに隊員を率いて、大きな声で言った。

「それじゃあ真選組に帰るとする……って、カアツラアア……！！！！！！！！！！」

銀時は、近藤が発したさげびを聞いて、後を振りむく。

「えゝ、どうも。宇宙キャプテンカツーラです。」

「……。」

銀時と神楽は無言になる。

——まだ逃げてなかったの？バカか、コイツ？バカ？

「追えエエエ！真選組の名にかけて、ヤツをつかまえろオオ！」

「はい！！！！！！！！」

隊員全員がかりで、逃げの小太郎を捕まえようと奮闘する真選組。

もちろん、その中には、土方兄妹の姿もあった。

葵の姿は、捨てられた妹でも、仲間を裏切った隊員のものでもなかった。

——再び兄と仲間を取り戻した、妹の姿だった。

第二十六訓 話はわかりやすく説明しよう（後書き）

第一章終了!!

ふう。何とか終わりました。

気づいたら、読了時間100分越え!!驚きです。

これからも、「土方葵の真選組日誌」、よろしくお願いします!!

にうにうの、エペローグっていつんだっけ？ 其の一（前書き）

お暇な方用です。

説明するタイミングがなかったので、こんな感じになっちゃいました。

じつじつの、エビローグっていうんだっけ？ 其の一

「十五日間お疲れ！！第一章終了記念パーティー」

ドンドンパフパフ

銀（銀時）：はい、第一章終了！お疲れ！

一同：お疲れー！

カチン！

新（新八）：みんな、ビールでも飲んでるんですか？

銀：いやー、一応飲み会だからさ。あ、ぱっつあんも飲む？

新：いえ、結構です……。それに僕、未成年ですし……。

神（神楽）：遠慮するなヨパチ。それだったらビールじゃなくてジュースかなんか飲めばいいネ！

新：あ、そうだね……。ところでコレ、何ですか？

銀：これって？

新：いや、この……。なんというか……。

銀：ん？あ、このコーナー？題名は、「十五日間お疲れ！！第一章終了記念パーティー」ってことになってるけど。

新：スイマセン。僕、そのタイトル名変えたいです。「新八の文句垂れコーナー」にしてください。

神：はあ！？何言ってるアルか新八。別に文句なんかないでシヨ。

新：いや、ありまくりですよ！そりゃあ銀さんは高杉さんと戦うし、神楽ちゃんも、少しとはいえお兄さんと仲直りしたし、土方さんと葵さんも復縁したし、沖田さんも、何かカッコ良かったじゃないですか。でも僕の扱い、覚えてます？神楽ちゃんに銀さんのデスクの下に押し込まれた後、どうなったのかもわからないんですよ？

銀：あー、そーいやそうだったな。んじゃ、ちよっくら呼んでくるから、待ってるよ。

新・神：……誰を？

銀：ハイ、呼んできました。この小説を書いた暇人・冬瀬志保。

冬（冬瀬）：あ、スイマセン。何か来ちゃって。

銀：いやいや構いませんよ。いやね、それでね、この駄メガネが何か文句あるって言うから、デスクの下に押し込まれた後、どうなったのか教えてくれます？

冬：あー、アレですか。あのまま一生過ごして、最後は餓死して死にましたね。

神：そうアルか。御墓に、ちゃんと犬のウンコ供えておこ。

銀：俺は、そうだな、この家の生ゴミでも供えるか。

新：待てエエエ！死んだってどういうことですか！それに銀さんたちも悪ノリしないで！！冬瀬さん、マジメに答えてください！！

冬：いや、マジメに答えてますけど。

新：違うウウ！絶対に認めない！もしそれが事実だったとしても、僕は断固として認めませんからね！

冬：ハイハイ、ホントのこと話せばいいんですよ。わかりましたよ、話しますよ。実はですね、新八、あの時、一人で神楽の縄を解きまして、真選組のところに行っただですよ。で、ちょうどその時、真選組は、高杉と春雨の船が現れた、ってんで、大騒ぎしてたんですね。で、その騒動に銀さんと神楽が巻き込まれていることを知った真選組は、新八とともに、高杉の船に乗り込むんですが、高杉と神威は非常用の船で逃亡し、葵は残されたわけです。

新：……あの、それでも僕、どこにも出てませんでしたよ。

冬：イヤ、だって、目立ってないじゃん。書く意味ないじゃん。

新：ありますよ！だって読者の方々、僕がどうなったのかわからないじゃないですか！それに、真選組の人たちや、桂さんがいきなり現れたじゃないですか、高杉さんの船に！！アレ、どう説明するんですか？

冬：あー、アレですね。えーと……。あ、いた。土方さーん！桂さ

ーん！

土（土方）：……何の用だ。

桂：どうもー、宇宙キャプテンカツーラです。

冬：あー、すいませんね。高杉さんの乗り込んだところ、この駄メガネにわかるように説明していただけませんかね？

新：いや、駄メガネって……。

土：別にいいけど。っていうか、簡単なことだぞ。山崎が、高杉たちが江戸の港に現れた、っていうのを聞きつけて、向かったただけだ。桂：俺の場合、リーダーと共に行かせたハズの船員たちが、本当のことを話してくれて、それでリーダーたちが危機に遭ってると思い、乗り込んだ。

新：じゃあ、つまり、真選組と桂さんは、別行動だった、って訳です。すね。

土・桂：そうだ。

土：……アレ？お前、桂？

桂：な、お前は、真選組副長、土方十四郎！

土：かあつらあ！

一同：……。

神：行っちゃったアルな。

「うううの、エペローサっていつんだっけ？ 其のー（後書き）

次回は、「NG集」です！

にうにうの、エペローヤっていつんだっけ？ 其の二（前書き）

またこれです。

ごめんなさい^^^；

じつじつの、エピソードっていうんだっけ？ 其の二

銀：はい、次のコーナー！！「未公開NG集！！」

新：あ、コレなら面白そうですね。

神：そうアルな。

銀：じゃあ、最初はコレ！

ババン！

銀：「山崎の情報に、真選組出撃！土方、葵の真実に驚愕！？」です。

只今の真選組は、今、慌てふためいていた。観察、山崎退の情報――攘夷浪士、高杉晋介が、江戸の港に姿を現したのだ。

副長、土方十四郎は、局長の近藤勲が病院にいる間、隊員たち全員の指揮を執っていた。やがて、一番隊から十番隊、観察以外の真選組隊員が江戸港に向い、土方はほっと肩を撫で下ろす。

――さて、俺も行くか。

そんなことを思いながら、部屋に置いてあった刀を手取る。その時、山崎が、ひょっこり姿を現し、うつむきながら、土方を呼んだ。

「……副長。」

土方は、山崎に視線を移さずに、背を向けたまま、「何だ」と返した。

「葵さんのことです。……あの人、本当は俺たちのこと……。」

「わかってる。」

「副長！」山崎は、土方の言葉を聞いて、ぱつと顔を上げた。「知ってたなら、どうして……。」

「俺アあいつが嫌いなだけだよ。だが、俺があいつのこと嫌いなのは、別にアイツが高杉や春雨の味方だからじゃない。」

山崎は、肩を降ろした。もう、何を言っても無駄かもしれない……。そんなことを思いながら。

きらめく刃を見ようと刀を鞘からゆつくりと抜こうとした土方は、
ぼそりと山崎に言った。

「……山崎。葵が、俺たち真選組に迷惑をかけずにきへ……。」
ドオオオオオン！！

しかし、土方が言い終わる前に、大きな爆発音がして、土方の頭は、
爆発したようなパンチパーマになる。ぷすぷすと煙を髪から出しな
がら、土方は、無言のまま、目をぱちくりさせた。

無論、監督で、セットのところで、組み立て椅子に座りながら指揮
を執る私、冬瀬志保も、である。この爆発は、台本にはないハズだ。
「……何？」

「あー、すいやせん。NGですね。」

振り返った土方は、後ろでニヤニヤしている沖田を見て、「お前か
！」と目をカツと見開いた。

『お、沖田さん？』（冬瀬）

「刀を鞘から抜いた瞬間、爆発するようにしかけてたんでさア。」

「『おーい！何してくれちゃってんの！？演技メチャクチャじゃん
！！』」と、土方と私はユニゾンで沖田にツッコむ。

「いやあ、どうしても土方さんの演技を木端微塵にしたかったんで
イ。でも、予想通りでした。じゃ、土方さん、また頑張つて下せエ。
つて言つても、また俺が妨害しやすがね。」

そんなことを言いながら、沖田は姿を消した。

銀：えーと？これは何ですか？

土：読んだらわかるだろ。沖田の妨害で俺の演技が邪魔されたんだ
よ。

新：……それは、災難ですね。

銀：で？総一郎君は何でこんなことしたの？

沖（沖田）：そりゃあもちろん、土方さんが嫌いだからでさア。旦那
も、俺の立場だったらやってるでしょ？

銀：もちろんだ。（即答）

新：もちろんって！ちょ、銀さん、不謹慎でしょ！！

神：別にいいアル。真選組なんてクソだもん。

沖：チャイナ。いい加減にしねエとぶった斬るぞ。

神：フン。やってみれるもんならやってみるネ。お前なんか一瞬でお陀仏ヨ。

沖：んだと！

神・沖：オオラアアア！！！！

銀：はい、次。うーんと？これは注意書きが必要かもしれませんね。監督！出番！

冬：あ、はい。えーと、注意書きというか、何というか……。ま、単刀直入に言います。高杉&神威のNGなんですけど……。あの、もしかしたら、ですけど、二人の印象がわかるかもしれません……。それでもよろしかったら、どうぞ……。

銀：ハイ、じゃ、次。「第七訓 物覚えが悪いとテストで悪い点数を取る」からです。

「ねエ、高杉。」

名を呼ばれて、キセルの片目の男——高杉は、チャイナ服の青年、神威を振り向いた。

「あの女の子、別に強そうじゃなかったよ。腕前のいい敵さんって、彼女のことだろ。」

高杉は、常時浮かべている不気味な薄笑いを冷笑に帰ると、尋ねた。

「銀時……。アイツが、一見強そうに見えるか？」

「いや。でも、本気を出せば、鳳仙にも勝てる強者だよ。」

その返答を聞いて、高杉はキセルを吹かす。

「あの女も同じさ。ギリギリの時じゃなきゃあ、本気は出さねエんだ。……もうすぐでアイツも本気を出してくるだろうよ。アイツを本気にさせる方法を、俺はदैいてる……。」

その瞬間、神威が吹き出す。

「た、高杉……。噛んだ……。い、今噛んだ……。」

『珍しいな、高杉さんが噛むなんて。』

言いながら、私も含み笑いする。後ろで、出番を待っていた阿伏兎でさえも。

ジャキン！

が、その刹那、私は背後に凄まじい殺気と、喉元に鋭い痛みを感じ、笑うのをぷつりと止めた。

「……。」

無言だったが、わかる。高杉が、私の背後に回り、首に剣を当てているのだ。

「……ごめんなさい。」

私が謝ると、高杉は口を閉ざしたまま刀を鞘に収めた。

……死ぬところだった……。

威（神威）：これは面白かったね。（笑いながら）

高（高杉）：……。

威：俺、吹きそうになったよ。何度も言うかもしれないけどさ、高杉が噛むの珍しいよね。

高：……。

威：いやあ、アレは全国放送で流したかったよ。あ、知ってる？ 央国星のハタ皇子か何かが、高杉の吹き替えしたんだって。アレ、傑作だったよ。

高：……。

威：あ、今度貸そっか？ 俺、「新訳紅桜篇」の完全生産限定版持ってるから。

高：……。

威：おーい。聞いてる??

高：……。

威：ダメだ、こりゃ。冬瀬さん！ お願い！ シーン切り替えて！
冬：りょーかい！！

銀：はい、これはどういう状況ですか？

冬：土方さんと同じこと言いますけど、読んだらわかるでしょう、銀さん。高杉さんが珍しく舌嚙んで台詞間違えたんです。それで私が笑ったら、高杉さんに殺されかけた、って話です。

銀：別にいらなくね？そんな話。

冬：……まあ。

銀：もういいや。次。「第五訓 道で怪しい奴に声かけられたら即逃げる」から。

「ねエ、阿伏兔。」

宇宙の彼方、暗い暗い戦艦の中で、二人の人物がひっそりとたたずんでいた。一人は、橙色の髪の毛を後ろで三つ編みにした、まだ年若い青年。もう一人は、中年半ばまで行っていそうな男。どちらもチャイナ服を身につけており、その手には番傘が握られている。

「俺たち、今どこに向ってるの？」

尋ねられた中年の男——阿伏兔は、呆れた顔で答えた。

「ずっとここっこい。団長さまは、自分の目的地もわからずに船に乗るとはねエ。団長、俺たちが向かっている先は、地球だ。」

青年は、につこりと微笑んだ。というよりも、すでに口元に浮かべていた笑みを、さらに大きくした。

「へエ。じゃあ、あの銀髪のお兄さんにも会えるって言う訳か。」

「同時に、アンタの妹さんにもな。」

阿伏兔が言うと、青年は阿伏兔には顔も向けず、前を向いたまま、「阿伏兔。」と呟いた。その声は穏やかだったが、その穏やかさの奥に、深い、暗い、恐ろしい殺気がこもっていた。それを聞いて、阿伏兔は無言になる。

「その話はしない約束だろ？……それに、何度も言うようだけど、俺は弱い奴には興味がある。……じゃねエや、ない。」

『ハ—イ、カット。』

私は立ち上がり、神威を見ながら片眉を上げる。

「どうしたのさ。高杉さんの次はあなた？」

「俺の次がお前とはな。それも舌嚙むんじゃない、お前の名セリフを言ってもいいモンだろ。それを間違うとはな……。」

冷笑しながら、高杉が言った瞬間。

ドオオン！

私は壁に激突した。

「……何か言った？」

神威が微笑みながら尋ねる。

『……いいえ、ないです。』

高：今回はお前がミスったな。

威：いやあ、お互い様、ってことでさ。過ぎたことは水に流そうよ。じゃないと……殺しちゃうぞ。」

高：フン。

銀：これは……。災難というか……。何でいつもお前なの？何でいつもお前が痛い目に遭うの？何か打ち合わせでもしたの？

冬：いえ。私が一番収録スタジオの中で弱いんで、標的になるんです。

神：やっぱお前弱いんだナ。

銀：っていうかコレ、なくてもいいんじゃない？何度も言うけど、いらないんじゃない？

冬：……はあ。

神：自覚してんならこれ出すなヨ。それに、読者の方々も思ってるヨ。コイツの話面白くないって。

冬：……そう、かな……いや、そうかも……。

新：あ、否定しないんだ。

神：それに、こういうコーナーみたいのに首つつこむ作者って、いいヤツいないアル。だから、そういう点考えると、ゴリラも悪くな

いやツネ。出ないもん。ま、もっと巨乳に書いてほしいアルけど。

冬：……スイマセン。（グスッ。）

銀：ハイ、作者が泣きだしたので、第一章のエピローグはここで終了します。

新：早っ！短かつ！そしてシメてない！！

こつこつの、エペローグっていうんだっけ？ 其の二（後書き）

本当に申し訳ありません。

グダグダなうえ、こんなつまらないもの書いてしまって。

と、言う訳で、次回からは、たぶん第二章……だと思います。

第一訓 中二のノリに気をつける

「はいはいはい！！！！」

バン！バン！バン！

真選組の、各隊の寢床の襖が、乱暴に開かれた。隊員たちは、思わず飛び起き、何が起きたのか、事態を把握しようとする。だが、襖に視線を移しても、何もわからない。襖が開かれて、朝の暖かい日光が、隊室に差し込んでいるだけだった。

次に、粗暴に起こされた隊員たちが聞いたのは、「あの隊員」の大声だった。

「はい！朝飯のじかん！！！！」

その言葉に、隊員たちは寝巻きから隊服に着替え、食堂へ急ぐ。一番隊から十番隊、観察、局長、副長の面々がそろいに揃い、席に着いたところで、何枚もの大きな皿を、お盆に乗せた「あの隊員」が入ってきた。そして、隊員たちそれぞれの前に、一枚ずつ皿を置くと、副長、土方十四郎の隣に立った。

「あー、もう全員知ってると思うが、自己紹介でもしろ。」

土方に指示されて、「あの隊員」は頷き、大きな声で始めた。

「改めまして！真選組副長補佐として新任しました、土方十四郎の妹、土方葵ですっ！！」

土方葵。先日の大騒ぎから、新しく真選組に入隊した、唯一の女隊士だ。先日の大騒ぎ——前篇の、高杉と春雨の騒ぎである。

「これから、兄が暴走した時に止める役を担いますので、よろしくお願いします！」

その瞬間、頭をぺこりと下げた葵を、兄である土方がべしっと叩く。

「だあれが暴走するだ？」

葵はえへと笑うと、「トツシー」と淡々と答える。

「誰がトツシーだボケー！！」

キレる土方を見て、サディスト・沖田&葵は、二人でニヤリと笑う。

「サド選組！その笑い止めろ！！」

「すいやせん。土方さん。いやあ、しかし、妹に虐げられる兄ってのは、やっぱり見甲斐がありやすねエ。特にそれが土方だと。」

沖田がニタニタ笑いながら言ったその台詞に、土方の堪忍袋の緒は、持たない。

「消えてくれ！幸せそうに笑ったまま、あの世に消えてくれ！」

「ヒドイな、妹に向って。」

片眉を上げた葵。それを見て、土方は返す。

「ヒドイのはお前だろ、兄に向って！」

その言葉を聞いた葵が、少しだけ目を大きくした。「兄」という言葉に、昔から敏感だったし、つい最近土方と仲なおりしたばかりだったから、「兄妹」と認められることが、ひどくうれしかった。

「……あ、うん。」

サデイスト笑いではなく、照れ笑いを浮かべると、葵はちよつと赤面した。それを見て、土方と沖田は、互いに顔を合わせたが、視線がぶつかった瞬間、プイと顔をそらした。ふいに、その時、後ろから山崎の声がした。

「副長ー！あの、万事屋の旦那が、葵さんの就任祝いに来てくれましたけど！通しますかア！？」

……そう言えば山崎、どこにいたの？

という疑問が、隊士たちの頭に浮かぶ。無論、隊員たちが山崎の存在に気がつかなかった理由は、彼の唯一の取り得（地味）のせいである。

「チツ。面倒くせえの来やがった。」

嫌そうに土方は言うが、ニコニコと目の前で笑っている妹の顔を見ていると、通すしかないか、と思いなおす。なぜなら葵は、実力行使に出る可能性が高いからだ。最悪の場合、沖田と共謀でもして、バズーカで真選組屯所内を木端微塵にしないと限らない。

「山崎！通せ！」

土方の声に、山崎は「はい！」と答え、しばらくしてから、三人

の人々と共に、食堂へ入ってきた。

「よう！葵！」

そう言ったのは銀髪の天然パーマ侍——坂田銀時である。なぜだかわからないが、やたらと葵のことが気に入っている様子で、土方からはよく思われていない。

銀時は、片手を上げながら、葵に近づいてきた。その時、土方が銀時の前に現れ、「はい、そこまで。」と道を塞いだ。銀時は、片眉をあげ、少し憎たらしい笑みを口に浮かべながら、土方に文句を垂らした。

「多串くん。そこどいてくれないかなあ？俺は純粹に、葵のお祝いに来ただけでなんですけど。」

「ああそうか。なら俺も、純粹に葵をお前みたいなダメ人間にしたいだけだ。」

二人の間で、火花が散る。

「多串くん。君って意外に過保護？シスコン？そんなに葵が好きですか？なら体育館の裏で告って振られるコノヤロー。」

「ああ？そう言うお前こそ下駄箱にラブレターでも入れて結局気付かれずに失恋でもしやがれ。」

「そうやって人間、中二のノリで生きるとダメなんだよ多串くん。体育館の裏で告ったあとに振られる人の気持ち考えたことある？」

「言つの諦めてたけどやっぱ言うわ。多串くんじゃねエ、土方だ。」

二人の「中二のケンカ」を見限って、葵が、「はいはい。」と言いながら仲裁する。

「ケンカなら外でしてください。銀時の旦那、トッシー。」

注意されて、二人は仕方なく口を閉ざす。その時、後ろで出番を待機していたメガネ少年、駄メガネこと志村新八が、おずおずと前へ進み、葵に小さな包みを渡した。

「……あの、これ、新任祝いのプレゼントなんですけど……。」

葵は、新八から受け取った包みを大事そうに腕に抱え、礼を言った。
「ありがとう、駄メガネくん。」

「あの、僕たち一応お祝い言ってるんですけど。駄メガネはないでしょ。」と新八。

「いやー、でもね、やっぱり駄メガネは駄メガネじゃん。ちゃんと礼儀わきまえなきゃいけないじゃん。」

「どこが礼儀わきまえてんの！？完全に礼儀無視してるでしょ！」
新八のシャウトを聞いて、赤いチャイナ服の少女、神楽がうんうんと頷く。

「そうアル。人のこと駄メガネ扱いするのは最低アル。新八は駄メガネだけだな。」

「あ、結局そっち？」

新八は、味方だと信用していた人間が、自分を「駄メガネ」扱いしたので、深い絶望感に包まれる。

「つてなわけで、ソレ、一人っきりの時に開けるよ。」

銀時に言われて、葵は「あ、はい。」と頷く。

「でも、スミマセン。わざわざ来てもらったのに、トッシーが……。」

「いいよ、多串だから。」

その言葉に、葵は、納得したように、ぽんと手のひらを叩く。

「あ、そうですよね。多串ですもんね。」

「おいおい、お前もソイツのノリに乗せられるな……。」

土方は血管を顔に浮かびあがらせながら妹を注意する。

「アハハ、ゴメン。」

と生半可に謝りながら、葵は銀時に口を開く。

「そう言えば銀時の旦那……。」

「局長オオ！副長オオ！」

が、葵の言葉が終わる前に、再び山崎の声。

「局長オオ！大変です！早く！早く！こっち来て下さい！」

局長、近藤は、「仕方ない奴だな。今週号のジャンプでも見つけたのか？」と銀時のような発言をしながら、屯所の玄関に向かう。

「あ、でね。銀時の旦那……。」

「トシイ！大変だ！早く！早く！こつち来い！」
またかよ！

葵の頭に、だんだんと血が上りはじめた。

近藤の叫びに、兄は席を退き、玄関へ足を向ける。

「それで、銀時の旦那……。」

「葵！こつち……。」

しかし、土方が言い終わる前に、前の件の恨みを晴らそうとでもしているのか、葵は屯所の廊下を駆け抜け、玄関にいる妨害三人組を蹴り飛ばす。

「何でよ！何で三人とも妨害するわけ！？トツシーまで！！」

「いや、葵さん……。」

山崎が、おどおどしながら口を開いた。

「まだ聞いてないでしょ、松平のとつちあんが言ったこと。」

「は？とつちあん？」

倒れている三人組の向こうには、サングラスをかけた「チヨイ悪オヤジ」の雰囲気醸し出した男が立っていた。

「……とつちあん、どうしたんですか、わざわざ真選組まで。」

サングラスの男、警視庁長官、松平片栗虎は、言わば葵の人生の師とでも言うような人物である。葵は、そんな人生の師が、わざわざ真選組まで足を運んだことに、少しかり違和感を覚えた。まあ、何か自分たちがしでかして、松平が殴りこみに行くことはあるが。

「……よお、葵。」

低い声で、松平は手を振りながら言った。

「今日、大事な話があつてなア。ちよつといいか？」

その言葉に、葵は不穏な響きを感じた。

「……はい。」

この後、松平が言うことを、今の葵が知る由もなかった。

第一訓 中二のノリに気をつける（後書き）

週間アクセス見て驚きました。

こんなに見てくれていた人がいたとは……（号泣）

これからも、よろしくお願いします!!

第二訓 流れに疎いと痛い目に遭う

「真選組……。解、散……。」

真選組局長、近藤勲、副長、土方十四郎、副長補佐、土方葵は、警察庁長官、松平片栗粉の言葉に、息を呑んだ。

「とつつあん、それ、どういうことですか。」

葵は、身を乗り出しながら、落ち着いた、しかし、凄みのある声で松平を問いただそうとした。だが、松平もだてに警察庁長官をしているわけではない。葵の剣幕ときには、負けなかった。

「いや、おじさんのいうことちゃんと聞いてくれよ、葵ちゃん。真選組は、三日後に解散。以後、隊員とは会ってはならない。」

「でも、何で真選組が……。！幕府には、何もしていないぞ！」

近藤がいうことは最もだった。数回はあるかもしれないが、幕府が地に落ちるほど、逆らった覚えはない。逆に、逮捕はできなかったが、昔よりも、幕府の敵、桂や高杉ら攘夷浪士との接触も増え、逮捕する機会は以前より、各段多くなっているはずだ。つまり、幕府にとっては、真選組は、なんら問題のない存在だと考えるのが普通だ。

「幕府の裏には何がいる、近藤？」

尋ねられて、近藤はしばらく考えていたが、やがて、小さく呟いた。

「……。天導衆……。」

「はい、正解。」

松平の声に、葵は眉をしかめる。

「天導衆と言えば、將軍を傀儡にし、幕府を操っている天人集団……。でも、何故奴らが？あたしたちが、何かしたのでしょうか。」
しかし、松平が葵の問いに答える前に、土方が、大きな吐息をついた。

「煉獄関の件だろ。……。アレはこっちも少し出しゃばってたからな。……。とつつあん。次回は気をつけるとか言っておけねエのか。」

「言っておけるもんならお前が言ってみやがれ。『嵐にし。がれ』かコノヤロー。」松平が、土方の言葉を一蹴する。「それに言ったら、こっちの首が飛ぶこと間違いナシだ。こっちは娘がデキ婚まで行きそうなの。おじさん大変なの。そういう父親の心情も察しやがれ。『嵐にし。がれ』かコノヤロー。」

「悪いがとつつあん、二回はさすがにキツイわ。」と土方がツツコむ。

「うるせエんだよ。こちとら娘の趣味に付き合うのが大変なんだよ。」再び松平。「風だか嵐だか大雨だか知らねエがよオ、」

「嵐な。」

「そういう芸能人に疎いんだよ、おじさんは。ジョニーズ事務所だかデニーズ事務所だかデイズニーズ事務所だか知らねエが、」

「ジャ。ーズな。」

「ああいうチャラチャラした感じの芸能人はおじさん知らないの。娘と久しぶりに喋ろうと思って必死で話題の韓流ドラマ『夏のソナタ』を研究したってのに、いつの間にか時代は松田聖子ちゃんよオ。」

「悪いけどとつつあん、松田聖子は『夏のソナタ』よりも前だ。」

「おじさんは違う世界の扉を開きたいよ。流行りやら芸能人やらテレビやらがすべてのこの時代に、おじさんは死にそうだよ。波に飲み込まれるよ。」

「もういいよ、勝手に飲み込まれてよ。百リットルくらい飲み込んで口閉ざしてくれ。」

「もうおじさんの頭の中は、聖子ちゃんカットのおばさんたちでいっぱいだよ。……ってなんでこんな話させるんだ。」

「最初に喋りはじめたのはとつつあんだ。」

土方は、松平の暴走がいったん止まったので、安堵してたばこを吹かす。

「落ち着いたけど、なんかマジメな話する雰囲気じゃねエな。」

そしてため息をつく、松平を鋭い双眸で見つめた。

「まあ、このことは一応隊員たちには伝えておく。だが、とつつあん。これだけは言っておくぜ。」

松平は、そう口を開いた土方に視線を移す。

「……俺たちは真選組を潰すつもりはねエ。アンタもそのつもりでいてくれ。……それと。」

立ちあがった土方は、退室の間に、足を止め、最後に言った。

「頼むから流行りにもう少し敏感になってくれ。」

「じじじじじ冗談じゃないですよ、副長！」

山崎が上げた大きな叫び声に、松平の言葉を伝えにきた真選組幹部三人組は、一歩後ろに引きさがる。

「それに、副長！せっかく高杉や春雨の件が終わって、葵さんを組に迎えられたのに！副長だって……。」

「ああ、俺だって不本意だ。」

山崎や、その他の隊員たちは、顔を見合わせる。

「……局長、副長、葵さん。何とか、ならないんですか。」

顔を俯かせると、山崎は呟いた。

「こう言つと、何か胡散臭そうに聞こえるかもしれませんが、あえて言います。……俺たちは、真選組が好きです。言葉では表せないほど。俺たちは真選組で一つの家族なんです。それが離れるなんてそれも、もう二度と会っちゃならないっていうのは、筋が通っていません。」

「そうですね、土方さん。」

沖田が一步、前に出た。

「俺たちは幕府を守ってきた。そりゃあ何度かはしでかしたこともありやしたが、失敗の数よりも成功の数の方がはるかに勝っている。ソイツを踏まえて考えるのなら、解散なんてのは道理になっていやせんぜ。本当に、もし本当に解散したとしても、会っちゃねエってのはおかしいとしかいいようがありません。」

土方は、口から煙を噴き出すと、消えゆく煙を見つめながら、答え

た。

「幕府は、俺たちに再び真選組を立ち上げてほしくねえんだ。真選組復興という、志を同じくする者たちが集まれば、幕府にとっては、不都合きわまりないからな。」

その言葉に、納得したのか、していたのか、隊員たちは無言になる。

「クソッ……。」

誰かが呟いた。全員、当たり前だが、同じ心境だった。

これから、真選組はどうなるのか。本当に潰されるのか。……いや、俺たちが、絶対にそんなことさせない。

ふつつつと闘志が湧いてくる隊士たち。

驚きと悲しみと苛立ちが募り、心の中がムズムズする。

怒りをどこへぶつければいいのか、誰もわからない。問うても、誰も答えない。

深い絶望に陥った隊員たちは、心の中で、悔し涙を流した。

第二訓 流れに疎いと痛い目に遭う（後書き）

第二章入ったので、第一章読み返していたら、誤字と脱字がメチャクチャありまして、ちよつとビツクリしました。
よく今まで苦情が来なかったものです……。

第三訓 夜中は家の中においても注意

「銀さん。聞きましたか、真選組の噂。」

掃除機の耳障りな音が響く万事屋。

唐突に、さきほどまで必死で床をキレイにした新八が、掃除機を止め、口を開いた。

「噂？」

ジャンプを読んでいた銀時は、顔をあげ、気だるそうな生気のない目で新八を見つめた。

「はい。真選組、潰れるらしいんです。……チンピラ警察がいなくなるって、街の人が浮かれてましたよ。」

「……そうか。」

短い答えを發した銀時は、ジャンプに再び目を戻す。

「ちょ、銀さん？真選組には、近藤さんや土方さん、沖田さんがいるんですよ？それに、葵さんも。」

「……そうだな。」

興味なさそうに銀時は答える。

「別にゴリラやマヨラーやその妹がいなくなつて、構わないネ。」

神樂が、長椅子に寝転び、『女性エトワール』と読みながら口を開いた。「逆に、サド野郎がいなくて清々するアル。」

全く気にしていない様子の二人に、新八は肩を落とす。彼も、実を言つと、別に真選組を助けたいという思いは、さしてなかった。ただ、「ご愁傷さま。」というような、労わる気持ちだけが心の中にあつた。それに、自分たちが動いたって、真選組のお取りつぶしはなくなるわけではない。しかし、全く興味がないわけではなかったし、できれば、取り潰しは取りやめにしてほしい。

「……銀さん、僕たちに、できることあるんじゃないでしょうか。」
ジャンプから目を離さずに、銀時はぼそりと言った。

「俺たちが動いて何になるよ？取り潰しになるってことは、幕府が

らの命令だろ。俺たちの出番じゃねエ。……それにな、新八。」
銀時はページをめくる。

「真選組は、俺たちが動いたら、逆に動けなくなる性格だ。それに、もしも俺たちがあいつら救ったって、あいつらは嬉しくねエだろうよ。動くのは、あいつら自身だ。」

言われて、新八は、黙った。

確かに、僕らにはなんの力もないし、動けば迷惑になる。

溜息をつく、新八は掃除を再開した。

「……神威兄い。お前、あの女子に興味を持つちゅうか。」

真昼の真選組の塀に座る二つの影。一人は、橙色の髪 of 青年。もう一人は、耳にイヤホン^{さんばく}をねじ込み、灰色の目をした、土佐弁の少年。「斬暴。俺はたぶん、お前がいたい意味とは違う意味で興味を持つてると思う。」

橙色の髪 of 青年、神威の言葉に、斬暴と呼ばれた少年はケラケラ笑う。

「何じゃ。お前、あの女子に好意もってるんじやろ。見てればわかるき。」

「冗談やめないと殺しちゃうぞ。」

「殺せるもんなら殺してみいや。受けて立つき。」

斬暴は立ち上がり、戦闘態勢に入った。神威はため息をつく、襲ってこない。「つまらん」と言いながら、斬暴は再び塀の上に腰を下ろす。

「わしゃ遊びたいんじや。兄以外にわしと対等に遊べる者はおらんちや。頼むき、遊ぎくれ。」

神威は微笑みながら、言った。

「じゃあ、俺がさつきからじつと見つめてる、女の子と殺ればいいよ。そうすれば、俺の手間も省ける。」

その言葉に、斬暴ははっと思いついたような顔をしたが、すぐに尋ねる。

「そついや、お前、わしに付いてこいつてゆうたばあで、目的ゆうちよらん。何のためにわしやあここに来たんじゃ。」

それを聞いて、神威は微笑みを、冷笑に変えた。

「春雨や鬼兵隊と関わった人間は、二度と普通の人間には戻れない。関われば働かされ、逃げだそうとすれば、殺される。……あの女の子は、俺たちの輪から逃げ出した裏切り者だから、殺さなきゃいけないんだ。」

「つまり……暗殺せえゆうことか。」

少し神妙な顔になる斬暴。神威は再び微笑すると、斬暴の頭に手を置いた。

「お前は俺の弟子だ。頼りにしてるよ。」

「頼りにしてる」の一言で、斬暴は顔をぱつと輝かせ、「うん」と大きく頷いた。その顔は、「天衣無縫の阿修羅」と呼ばれる少年のものではなく、優しい兄に褒められた、やんちゃな弟のものだった。

「……トッシー。」

月はもう高く昇り、地上を神々しい光で照らす。

「……明後日までに、もし、とつつあんが幕府を止められなかったら、どうする？」

妹に尋ねられた土方はしばらく答えなかったが、宙を睨みながら「しらねエ。」とぼそりと呟いた。

「隊員とは二度と会っちゃいけないんですよ。トッシーとは？」

土方は、返さない。——返せなかった。しかし、妹は兄の心情を察したのか、それ以上その件については口を出さず、続けた。

「そーちゃんとも近藤さんとも、ジミーとも会えなくなるのかな。」

土方は無言だったが、やがて視線を葵に移した。そして、目にした光景に、少し驚く。

「……葵。」

小さな声で言った土方に、葵ははっと兄の方に視線を移し、顔を真っ赤にする。

「やだなあ、バカ兄貴。妹の泣き顔見るなんて最低だよ。」

「葵、お前……。」

「やめてってば。」

少しテレ笑いをしながら、葵は必死でごまかし、少し後に寝がえりをうつて、兄から顔を見られないようにした。

「……。」

再び口を閉ざした土方も、葵に背を向け、瞼を閉じた。

「なるばあねエ……。」

斬暴が、一人で呟いた。

「土方葵、十五歳。特別警察真選組の『救いの副長』か。……面白そうじゃ。」

無防備に開いている門から、斬暴は堂々と真選組敷地内に足を入れる。実は、幕府の命令で、隊員は、今現在の屯所の中には、通常の隊員数の五分の一程度しか常駐していない。

「不用心じゃのう。」

そんなことも知らない斬暴は、近くに誰かいたら気がつくような大声で発言する。一応あたりを見回すが、この分なら見つからないだろう。

口元に小さな笑みを浮かべた斬暴は、真選組の廊下を、まるで自分の家のように、あっぴらげに歩く。

そして、とある部屋の前で足を止めた。襖は開けっ放しで、その向こうに、二人の人影が見えた。その内一人は少女だったが、女とは思えないほどの寝ぐせの悪さで、もう一方の男は完全に踏みつぶされている。

「あ……っ……。」

男は、呻き声を上げ、眉間にしわを寄せている。

それを見て、斬暴は、ククツと口の中で含み笑う。

（何ちゅう女子じゃ。……けど、おしとやかえ女にはいいヤツなんかおらんきのう。こりゃ楽しみじゃ。）

そう心の中でぶつぶつ言いながら、どこから取り出した拳銃で、少女の頭に狙いを定める。

（さあ、起きてくれるかえ？）

斬暴の細い指が引き金を引こうとした瞬間、斬暴は、すさまじい殺気を、二つ、感じた。一方は自分の前。もう一つは後ろ。

「……真選組に何の用だい？事件ですか、事故ですか？それとも……」

江戸っ子口調の、まだ、完全に大人のものとは言えない声。

「……夜這いですかイ？」

そのままの体勢で、斬暴は後ろの人物を探る。心臓の脈拍音が聞こえる位置から考えると、身長はだいたい百七十センチ前後。プラマイ二センチ。手にはバズーカ何所持しているようだ。

前に視線を移す。さっきまで少女の下敷きになっていた男が、自分の喉元に、ぴたりと剣を当てている。その手が全く震えていないところから見ると、幾度も修羅場を経験しているらしい。

「……いやじゃのう。」

刃を喉につきたてられているのに、斬暴は何もないように、気楽に語る。

「わしゃただ仕事しに來ただけじゃ。それに、夜這いするほど激情型がやない。」

そう言った瞬間、斬暴は消えた。

残された二人は、ほっと安堵のため息を漏らした。

第三訓 夜中は家の中にも注意（後書き）

土佐弁がいまいちわかりません^^；

間違っていたらすみません。

あと、第零訓のところに、土方葵と、第三訓のところに銀さんの挿
絵みたいなものをいれてみました。でも、葵のイメージが崩れるか
もしれません。それに、シャープンで描いた奴だし、汚いし、三分
以内で仕上げたものなので、お見苦しい点もあるかもしれませんが
…… よろしく願いします^^；

パトリオット

> i 2 8 2 2 4 — 3 6 4 5 <

第四訓 普段仲の悪い二人がニコニコして仲良いのも気味が悪いけど、いつもに

「……なんだっतんですかイ、ありゃ。」

翌日の朝。食堂で、珍しく土方の隣に座っていた沖田が、土方に囁いた。

「……大方、鬼兵隊や春雨の連中だろ。犯罪組織だから当たり前のことだが、秘密主義なんだ、ヤツらは。」

「それで、抜けだした葵を始末しようとした……。そういうことですかイ。」

土方は、頷く。

「ああ。葵には言っなよ。余計な心配ごとを、アイツにはかけたくねエ。……お前も、昨日のことは忘れる。俺が処理する。」

朝餉を食べ終えた土方は、立ち上がって沖田に言った。しかし、沖田は気に食わなさそうな目で、土方を見つめた。

「処理する、ってアンタ単独で何ができるっていうんですかイ。すべてマヨネーズを朝飯にぶちまく如く、簡単にカタつけられるのも思ってるんですかイ。」

土方は、皮肉を言われて、血管を浮かせながら返す。

「言っておくが朝飯にマヨネーズかけるのは意外に難しい仕事なんだぞ。」

「じゃあ、今回の件も、それくらい難しいもんだと思って下せエ。現状の真選組は、あっちゃんを護れるほど強くねエんでさア。アンタも、わかってるでしょ？今、真選組の隊員数は激減している。」

「じゃあ、総悟。お前にも心してほしいことが二つある。」

土方の言葉で、沖田は口を閉ざす。

「一つは、真選組が葵守護専属部隊じゃねエ、ってことだ。真選組は、江戸の治安も護るためにある。それと、もう一つ。」

一瞬、二人の間で、気まずい空気が流れる。

「……これ以上葵に関わってくれるな。葵は俺が護る。」

土方の鋭い双眸に、光が宿った。

「……俺の、唯一の家族だから。俺の、唯一の妹だから、俺が護る。」

土方の、今までにないくらいの真剣そうな表情を見て、沖田は少し眉をしかめたが、やがて、口を開いた。

「じゃあ、俺も言っときおきやすが、葵は俺にとっちゃ仲間だ。真選組の、大切な仲間。だから、俺も護りやす。」

沖田のはつきりとした口調に、土方はため息をつく。

「俺が、遠まわしに他人を巻き込みたくねエって言ったのに気がつかねエのか。妹がやらかしたバカは、兄である俺が責任取って收拾するってんだよ。テメエには関係ねえんだ。」

タバコを吹かしながら、土方は退席した。

沖田は、しばらく肩を落としていたが、食堂を去ろうとしている男の後ろ姿を睨みながら、席を立った。

「今なんつった、とつつあん。」

真選組の奥部屋。上座にいるのはサングラスをかけた警察庁長官、松平片栗粉。下座に控えているのは、真選組局長近藤勲、副長土方十四郎、副長補佐、土方葵であった。

土方は、松平の言葉を聞いた瞬間、顔を陰しくし、低い声音で問うた。松平は、溜息をつくと、先ほど言った言葉を繰り返した。

「真選組解散にあたり、局長近藤勲に切腹を命ずる。……幕命だ。」

天導衆の奴らが、これを提示した。

葵は、その言葉に、眉をしかめた。

「そんなのおかしいです。ただでさえ仲間と会えなくなるのに、何故近藤さんまで……。」

「それほど、天導衆は真選組を恐れている。ところ構わず刀を振りかざすお前らに。」

珍しく、松平の声には、緊張の響きが混じっていた。

「冗談じゃない。いくらアンタでも、そこまでは……。なあ、近藤

さん。」

土方が、近藤に振ったが、近藤は神妙な顔つきをして、土方兄妹が松平に抗議するのを聞いていただけだった。

「……近藤さん、何とか言ってください。あなたが腹を斬るなんて道理に反しています。」

葵が言ったが、近藤は、閉口したままだ。しばらく、沈黙が降臨する。

「とつつあん。」やっと、近藤が口を開いた。「幕府に、こういう条件を提示してくれないか。俺が腹斬る代わりに、真選組を残してくれ、と。」

「近藤さん！」

兄妹は思わず立ち上がり、松平の方をじっと見つめている近藤を、大きくした目で見た。

「何を言ってるんだ、近藤さん！」

「あなたは、あたしたち隊の魂です！あなたがいなくなったら、真選組はないのに等しいんですよ！？」

しかし、近藤はいつも浮かべている、少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、「なあに、心配するな。」と、陽気に言った。

「隊の魂は、お前らの魂だ。俺じゃない。」

「何を馬鹿なことを……。」

だが、松平は頷くと、近藤の申し出を承諾した。

「幕府おかみが引き受けるとは限らねエが、提示を出すだけ出してみる。」

近藤はうなずいた。

「……近藤さん……。」

土方と葵は、互いに顔を見合わせ、心配そうに眉をしかめた。

「……。」

報告を聞いた真選組隊員は、驚きのあまり、声も出せなかった。少しの間、全員が閉口したままで、いつもはないはずの静けさが、真選組屯所に舞い降りる。

「……は？」

最初に言葉を発したのは、観察の山崎退である。

「なんですか、それ。」

言葉から察して、山崎は、あまりの事態に、頭が混乱したようである。いまいち今の状況がわかっていないようだ。

「え？……ウソでしょ。え、え、えエエエ！？」

「……。」

ハードすぎるリアクションかもしれないが、真選組局長、近藤勲の切腹命令なんて、隊にとっては、自分たちの命を取られるよりも恐ろしかった。

「……土方さん。何で、やめてくれ、って言わなかったんですかい。」

「……」
そう言った沖田に、土方は煙草を吹かしながら眉をしかめた。

「何度も言った。だが、近藤さんが……。」

「ご自分で、自分が腹を切る代わりに、真選組を残してくれ、って……。」

兄の言葉を継いだ葵は、そう言った。そこで、隊員の一人が、ふと呟く。

「……肝心の局長が、いないんですが。」

それを聞いた土方は、「近藤さんなら部屋にいる。」と答え、続けた。

「……みんな、心配するな。俺が何とかする。」

「……そんなに責任背負って、大丈夫なんですかイ。葵のことだつて、あるんですぜイ。」

その発言に、土方が鋭い双眸を沖田に向ける。

「総悟。」

「……。」

沖田は、睨まれて、さっと視線をそらした。

「トッシー……？」葵が、兄の顔を覗き込んだ。「あたしのことで……何？」

土方は、気まずそうな顔になると、言葉を濁した。

「いや……。何でもない。」

不審な顔をするも、葵は「あ、そう。」とさりげなく流した。土方は、そんな妹を見て、ほっと肩を撫で下ろすが、再び沖田を睨んだ。その瞬間、いつの間にか自分に目を向けていた沖田と、視線がバチツとぶつかった。二人とも、その刹那、眉をしかめ、顔をそむける。そんな、普段も仲の悪い二人が、いつもに増して険悪な雰囲気漂わせているのに、一人だけ気がついた葵は、首をかしげた。

第四訓 普段仲の悪い二人がニコニコして仲良いのも気味が悪いけど、いつもに

感想とか送ってくれると嬉しいですよ^^

第五訓 形見は大事に保管すべし

「……どうして言わないんですかイ。」

自室で、刀を研いでいた土方は、後ろから聞こえた声に、手を止めた。

「……確かに、あっちゃんにあのことを話せば、心配するかもしれないやせんが、話した方が……。」

「黙って仕事行つて来い。」

土方は、後ろの沖田の言葉を切つて、口を開いた。

「葵のことは俺に任せる。他人のお前を巻き込むことじゃねエ。……」

……それより、近藤さんの切腹の件を何とかすることに尽力しろ。解散は明後日に迫っている。さっき隊員に話した時の同様を見ただろ。」

それを聞いて、沖田は眉をしかめる。

——俺だつて、会っちゃんの仲間だぜ……。

「わかりやした。……じゃあ、俺は行つてきやす。」

沖田は、そう言いながら、部屋を立ち去る。土方は、そんな沖田の足音が遠ざかつて行くのに、じつと耳を澄ましていた。

——そうやって、いつも俺をあっちゃんから遠ざけようとする……。

沖田は、ぎゅっと拳を握りしめながら、真選組屯所の廊下を歩いていた。

——土方の野郎……。あいつはいつもそうやって……。

唇をかみしめる。

——姉上も……。そうやってあいつに……。

ガラリと襖を開けると、沖田は自分の部屋に入り、引出しから、小さな簪^{かんざし}を取り出した。

『そーちゃん。』

心地の良い、聞く者を幸せにするような、美しい声。

——姉上……。

簪を手にとった沖田は、心の中で、懐かしい人の名を呼んだ。

「……近藤さん。考えを、改めては頂けないのでしょうか。」
自分に背を向けている近藤に、葵は静かに言った。

「隊員たちも、皆、近藤さんの切腹を望んでいません。あなたのいない真選組は、真選組なんかじゃない。あたしたちが残っても、あなたがいなければ、何の意味もない。」

近藤は半分だけ振り向くと、微笑みながら横目で葵を見つめた。

「俺がいなくても、ここはやっていける。そうなるように、俺が育てた。」

葵は、何と云えばよいのかわからなくなり、もだした。

「いいか、葵くん。俺がいなくなっても、この隊は滅びない。俺はいつまでもお前たちと一緒に在り続ける。……俺の魂は、ここに在るから。」

顔を曇らせた葵は、うつむき、それ以上、何かを言うことはなかった。

「あゝあ。お楽しみがなくなってしまうた。……何なんじゃアイツら。わしの楽しみとつていいのは兄貴だけじゃ。」

神威は、斬暴の文句に、微笑みながら口を開いた。

「まあまあ、そう言わないでよ。俺だって、何度お楽しみを取られたことか。」

その言葉を聞いた斬暴はチツと舌打ちをする。

「兄貴は聞き分けがよすぎるんじゃない。」

「別に、そうでもないと思うけどなあ。」神威は言う。「俺がキレたら、たぶんだれにも止められないんじゃないかな。阿伏兔がそう言ってた。」

斬暴は、神威の補佐の名を聞いて、おつという顔をした。

「おお、あのオヤジか。何じゃ、元気しとんのか。」

「まあね。……お前の父親代りだったんでしょ？」

神威の問いに、斬暴は頷いた。

「まあもう。……何と言うか、世話焼きな男じゃったき。わしゃあ
アイツがおらんかったら、道を誤っていたかもしれん。」

「人を殺そうとする時点ですでに誤ってるけどね。」と神威がツツ
コむ。

懐かしそうな表情をした斬暴は、フツとほほ笑んだ。

「元気にしとるかいのう……。親父。」

第五訓 形見は大事に保管すべし（後書き）

短いですが^^;

第六訓 甘い言葉に惑わされるな

「団長。頼むから止めてくれよ。斬暴には人殺しはさせたくねえんだよ。俺はあくまで、護身用に戦いを教えただけであって……。」
そう訴える阿伏兔に、神威は笑いながら口を開いた。

「残念だけど、斬暴は今夜動く。でも、大丈夫だよ。斬暴は、人は殺さない。やったところで、どうせ最後のところで躊躇うだろうし、最後にあの女の子に手を下すのは高杉自身だから。」

「あの地球人か。」阿伏兔が言った。「あの男が何でわざわざ？」
その問いに、神威は淡々と答える。

「何だかんだ言っても、根に持つタイプだから、高杉。自分を裏切った人間を自分の手で殺したいんでしょ。俺も同じだから、よくわかるよ。」

大きくため息をついた阿伏兔は、神威を困った目で見つめた。

「斬暴を使うのはよしとして、団長、俺たちの目的を忘れるなよ。」

「目的？ああ、元老のジジイ共が言ってた、あれ？そっぴや、あの機械、整備できたの？」

阿伏兔は片眉を上げると、首をひねる。

「さあ、どうだろうな。あんなにデカイからくり、簡単には整備できないんじゃないのか。それに、天導衆の奴らも、うすうす感づき始めている。作戦を実行すること自体、難しい。」

そうか、と呟くと、神威は心の中で弟弟子を呼んだ。

——……斬暴、後は頼んだよ。

真選組解散まで、あと二日。明後日になれば、隊員たちはそれぞれの顔を見ることもなく、この屯所を出て行く。
動くとするば、今日か明日しかない。だが、もう遅い。時は来ている。

障子を通って部屋に入ってくる月光が、暗い顔の葵を照らし出す。

兄である土方とは毎日同室で一緒に寝ているが、土方は今、一番隊と共に、とある宿屋へ向かっていて、同じ部屋にいない。どうやらそこで、高杉らしき人間をみたという情報が入ったらしいのだ。局長である近藤は、数日後に迫る切腹の件で、幕府から屯所を出るなという命令——早く言えば、謹慎せよとの命令が下されているので、その場へ赴くことはできなかったが、副長である土方と、一番隊隊長沖田総悟が事件現場へ向かった。本来ならば葵も行くところだったが、土方がそれを止めた。「顔色が悪いからねている。」と、全く説明もせず、葵の「行きたい」という言葉をも無視して。

葵は、どうしても兄と沖田に付いていきたかった。なぜなら、葵は、仕事という仕事をしたことがなく、つい最近来たばかりだったからだ。それに、真選組解散はもうすぐに迫り、一生仕事などできないから、今回が、最初で最後の仕事になりうる可能性もあった。

沖田は最後まで土方に反対して、土方と大喧嘩になったが、葵が一步下がったことによつて、それも収まった。

「……。」

宙を睨みながら、葵はいろいろと考え込む。もう、会えない兄のこと。沖田のこと。隊員たちのこと。そして——本当に、二度と会えなくなる局長、近藤のこと。

葵の目から、涙がこぼれおち、頬を伝つて、枕を濡らした。が、その瞬間。

「何じゃ。お前、泣いちゅうかえ？」

それを聞いて、葵はばつと立ち上がり、後ろに立っている男——いや、自分と同じ背の高さだから少年だろう——を振り返った。月光で顔はよく見えないが、イヤホンを耳にしているのだけは伺える。唯一、不思議な灰色の瞳が闇の中で、不気味に光っていた。

「誰。」

兄譲りの鋭い声で問いながら、葵は目にたまっていた涙をぬぐい、少年を睨んだ。

「おー、おー、怖いなあ。さっきまでほろほろ泣いotta女子が、

いきなり立ち上がって鋭い両目で、夜中に現れた男を睨むとはこのう。

ふと、横を向いた少年の顔が、月の光で照らされた。その顔は、神々しい月光のおかげか、それとも、もともとなのか、神秘さを秘めていた。

「お前、しょうえい（面白い）なあ。気に入った。……どうじゃ、わしと来んか。」

葵は、少年の言葉に耳を貸さず、床の間の刀台に置いていた刀を取った。ずっしりとした重みが、手にかかる。そして、無言のまま、大きく深呼吸し、刀を、ゆっくりと鞘から取りだして、構えた。キラリと、白銀の刃が月光で反射する。

「どうじゃ、わしと来んか。」

少年が繰り返す。葵は、全く反応せず、答えない。

「……なんじゃ、つまらんのう。わしが何か変なこと考えてるのも思うちゅうがかえ？ わしやそんな男じゃないき。ただ、純粹に来てほしいがや。……高杉のところへ。」

その言葉に、葵は少年の存在を確信する。——高杉や神威の手下だ。「わしの言つとおりにしちよつたら、命は取らん。どうじゃ、お前にもお得な話やお？」

だが、葵はそんなすかすかの嘘は効かない。間合いを詰めるにつれ、葵は刀の柄を握る手に、力を入れる。手で汗がびしょびしょだ。そのせいで、戦闘中に刀が手から滑るんじゃないか、ただでさえ重いのだから、というよからぬ心配事が頭の中に浮かぶ。

「……しまいに聞く。どうじゃ、わしと来んか。」

「断る。」

はつきりとした声で、葵は答えた。それを聞いて、少年は微笑んだ。「やつとお楽しみじゃ。」

「土方さん、引き返したほうがいいんじゃないですかイ？ もし、葵が今襲われていたら……。」

沖田が発したその言葉に、土方は眉をしかめる。

「その話はしない約束だろ。それに、屯所には二番隊と山崎ら監察が残っている。物音がしたらすぐに葵の部屋に直行しろって命令しておいたから、心配するな。」

そんな悠長な、と沖田は文句を言いたくなる。

「……アンタ、妹のことが心配じゃないんですかい？」

土方は、そう言った沖田を、瞳孔の開いた目で睨みつける。

「心配だから残してきたんだよ。ここで斬り合いして致命傷負って死んだらどうするんだ。二日続けて暗殺者が標的を狙うとは考えずらい。……葵のことは頭から追い出して、今からのことを考える。」

甘い覚悟で現場に入ったら、死ぬぞ。」

「んなことわかってまさア。」

鋭い双眸の上司を見て、そう言った後、沖田は閉口し、何も言うことはなかった。

第七訓 囷だけに目をとられるな

月の光が、殺気立つ雰囲気の二人を照らし出す。その内の一人、葵は、刀を構えながら間合いを詰める。相手である少年、斬暴は、拳銃を構え、それを微笑みながら見つめる。その微笑は、兄弟子である神威譲りだった。

バンバン！

銃発音が屯所内に轟く。葵は、斬暴が引き金を引いた瞬間、地面を蹴りあげ、宙に飛び、刀を振り上げた。その瞬間、刀が届く範囲に入っていないのにも関わらず、斬暴の二丁拳銃の等身が真つ二つに割れた。

「……ほう。」

葵は、軽やかに、地面に再び舞い降りると、腰を低くする。斬暴は、一瞬戸惑っていたようだが、使いものにならなくなった銃をばいと後ろに放り投げると、再び腰から新しい銃を手握った。

葵の足が動いた。斬暴は、葵が足を下ろす場所に、正確に銃弾を撃ち込むが、その度に葵は器用に右左に避ける。そして、いつの間にか、斬暴の懷に潜り込んだ葵は、斬暴の腹に真剣を突き立てようとしたが、

「……。」

自分の方に鋭い痛みを感じて、一步後ろへ引き下がった。

「残念じゃのう。わしゃ拳銃専門ではないき。苦内も使うとる。」

確かに、痛みを感じた脇腹には、月光で黒光りする、先端が異様に尖った苦内が刺さっていた。葵が、迷いなく苦内を腹から引き抜くと、血がそこから吹き出したが、当の本人は全く気にしていない様子で、再び刀の切っ先を斬暴に向けた。

「諦めが悪いのウ。先に相手に傷を負わせた者が勝つ。」

斬暴は拳銃を構え、その細い指が動いた。

葵は、飛び跳ねて、弾を防いだはずだった。だが、いつのまに葵の

両足は撃ち抜かれ、葵は地面に伏した。

「……これで終わりだ。」

狙いを正確に定めた斬暴は、ニヤリと笑った。
ドン！！

「葵さん！」

観察、山崎や、その他隊員は、葵の寝室から銃発音がしたのを聞いて、飛び起き、現場へ直行した。だが、時は既に遅し。寝室には血飛沫が飛び散り、あたりに弾痕が残っている。

「……副長と沖田隊長に殺される……。」

顔の青ざめた山崎たちは、頭を抱えた。

「御用改めである！神妙にお縄につけエエエ！」

土方の叫びを合図に、一番隊隊員たちは、とある宿屋の一室の襖を蹴破った。土方は、窓際に、三味線を片手に、薄笑いを浮かべている片目の男を見つけて、ニヤリと笑った。

「……高杉。これでテメエも年貢の納め時だぜ。」

が、そう土方が口を開いた瞬間、高杉は笑みをさらに深くさせ、クツと不気味な笑い声を立てた。

「……年貢の納め時？そりゃアンタのことじゃねエのか。『兄上』の年貢の納め時だ。妹の世話もほったらかしてこんなところに来るとはねエ。……いいのかい。アンタの妹、もう、捕らわれたんじゃねエのか。」

それを聞いて、土方と沖田は、目を大きく見開いた。嫌な予感がする。

「……どういうことだ。」

「言葉通りの意味だ。テメーの妹は、すでに俺たちが捕らえた。」
嘲笑するように、高杉は笑う。「……俺たちはただの囃。アンタらをここに来させ、葵を一人にさせるのが俺の目的だったんだよ。」
予感があたった。土方の全身が、震え始める。

「高杉……！」

「オイオイ。お門違いだぜ。腹を立てるなら、テメー自身に怒りを向けな。妹を護れなかったのはテメーだ。……俺アこれで失礼するぜ。」

そう言い残して、高杉は、窓を飛び越えた。

「なっ……！」

真選組隊員たちは、急いで窓から身を乗り出し、高杉を目で追おうとしたが、既に、鬼は闇に帰った後だった。

「土方さん。やっぱり、俺たちは残るべきだったんでさア。なのに、俺たちはここへ来て……。」

沖田は、それ以上は何も言わなかったが、土方の心には、既に大きな後悔が巣食っていた。妹を心配するあまり、妹を危険にさらしてしまった。

「……副長！隊長！戻ってきてください！葵さんが……。」

その瞬間、バツと襖を開ける者がいた。観察の山崎である。

土方と沖田の二人は、その報告を耳にして、大急ぎで屯所へ戻って行った。

「コイツァ……。」

上下逆さまになった卓。飛び散る血。散乱する紙。あれた室内。悲惨な有様を見た土方たちは、無意識のうち、息を呑み、一步下がった。

「……俺ア言っただけですぜイ、土方さん。残った方がいいって。

……アンタは誰の言うことも聞かねエ。自分が正しいっていうその自尊心が、そうさせちまったんでさア。」

そして、目を大きく見張った土方に、最後に言った。

「この部屋から見て、最悪の場合、葵は……。」

「黙れ。」

ぴしゃりと、土方が言った。

「……総悟。お前は他人の兄妹関係に手エ出すな。」

文句を言いたい、そんな雰囲気じゃない。そう思った沖田は、口を閉ざした。

「山崎。鬼兵隊と春雨の情報を集めろ。葵の情報があれば、すぐに伝える。」

「あ、はい！」

山崎は大きく頷き、去って行った。

第八訓 人には可能なことと不可能なことがある

翌日。真選組解散まで、あと一日。つまり、明日の朝には、真選組隊員たちは、それぞれの故郷に帰るのである。

「……幕府——いや、天導衆は、近藤の申し出を承諾した。近藤は腹を切る。が、その代わりに、真選組は残る。」

真選組のさる部屋。上座に座る警視庁長官、松平片栗粉の言葉に、下座にいる真選組局長、近藤勲は顔をぱつと輝かせたが、当然の如く、その後ろで控えている土方と、行方不明の葵の代わりに座っている沖田は、苦い顔をした。

「……近藤さん。アンタ、本当に切腹するつもりか。」

ぼそりと、土方が、銜えタバコをしながら近藤に尋ねた。近藤は、明るい顔で振り向くと、首肯した。

「ああ。真選組が残るというならば、俺は腹を切ろうが打ち首にされようが構わない。」

「……女は。」

これは、土方の最後の切り札だった。「女」とは、万事屋の志村新八の姉、志村妙のことである。近藤は、警察であるのにも関わらず、一度惚れた妙をストーカーのように追いかけまわし、その度にボコボコにされて帰ってくるのだ。そこまでするほど好意を持っている妙のことを口に出せば、何とか近藤を思い留まらせることができるかもしれない。土方は、そう思ったのだった。

「……お妙さんには申し訳ないが、俺は真選組存続を願う。それが、局長としての——お前たちの『頭』としての役目だと思っている。それに、今日のうちにお妙さんのところへ、最後のあいさつをしに行こうと考えていたところだ。」

「……近藤さん……。」

土方と沖田は、きまり悪そうにうつむく。

だが、近藤は気にもしない様子で、二人に沖田に申し出た。

「どうだ、お前たちも。俺と一緒に来ないか？」

尋ねられて、土方と沖田は、何と答えればよいのかわからない。実のことを言つと、葵を探しに行く予定だったのだ。だが、近藤とは今日で今生の別れになるかもしれない……。葵か、近藤か。二人の頭の中で、もう一人の自分との葛藤が繰り広げられる。

「そっぴや、葵くんが行方不明だったらしいな。」ふと、近藤が口を開いた。「俺に遠慮せず、探しに行つて来い。俺も、お妙さんの家に寄つたあと、お前たちの後を追う。」

俺に遠慮せずに行つて来い。近藤にそう言われて、気が楽と言えば、楽だった。……自分たちとしては。だが、近藤には悪いと思つた。今日が、人生の最後の日かもしれない。なのに、自分たち部下の私事に巻き込んでしまい、愛しい人との時間を短くしようとしている自分たちが、とても恥ずかしく、愚かに見えた。

「……近藤さん。」沖田が口を開いた。「俺たちのことは、心配しないで下せエ。俺たちは、自分たちで葵を見つけまア。アンタは女のところでも行つて、ゆつくりして下せエ。」

それを聞いた近藤は、「しかし……。」と言おうとしたが、土方に言葉を切られた。

「いいから、ゆつくりして行けよ、近藤さん。俺が葵を見つけに行く。……だが、今日の午後三時から宴会だ。それには、遅れるなよ。」

土方のその言葉に、しばらく近藤は返さなかったが、やがて、大きく頷いた。

「そっぴや、近藤……。」突如、松平が始めた。「今日の夜、幕府の役人が、お前を江戸城へ『呼ぶ』。夜の十時くらいだ。」

そして、ぼそりと呟いた。

「抵抗はするなよ。最悪の場合、その場で殺されることもありうる。」

近藤は、松平を見つめて、返した。

「……わかつた、とつつあん。」

「高杉イ。」

キセルを吹かした高杉の前に、葵を担いだ斬暴が現れた。

「ほれ。」

斬暴は、高杉の前に、葵を地面に横たわらせた。

「……おいおい。血だらけじゃねエか。」

その言葉通り、前に横たわっている葵には、複数の傷跡があり、幾つかは重傷だったので、致命傷になる可能性もあった。すぐに手当をすべき状態だ。

「何じゃ、文句でもあるんかえ？」斬暴は大きなため息をつく。「兄貴には、ソイツを殺してこいつで言われたんじゃ。けんどのお、その女、殺すには惜しい腕を持つとる。だから、お前の『武器』として使った方がええって思うて、わざわざ生け捕りにしたんじゃ。」

「生け捕りとは言わねエ状態だと思うがな。」

高すぎに、斬暴は、首を振りながら、溜息をつく。

「この女を無傷で仕留めるんは無理じゃき。そうするには強すぎる。無傷なんら、兄貴でも無理じゃ。」

背を向けた斬暴は、高杉に手を振った。

「とにかく、その女、殺さん方がとくじゃ。」

高杉は、その言葉に冷笑する。

「俺ア鼻っからこの女殺す気はねエぜ。」

「……は？」

斬暴の手と足が、ぴたりと動きを止める。そして、からくりのようにぎこちない動きで高杉を振り向く。

「兄貴は、わたしにはその女を殺せゆったんじゃが。」

それを聞いて、高杉は苦笑する。

「どうやら、あの春雨の坊主、俺の言うことをちゃんと聞いてなかったようだな。俺ア、この女を連れてこいと言っただけだ。……それとも、わざとか。」

そこまで言ってから、高杉は、後ろを見やる。

「出てこい。人の話を盗み聞きするなんて、^{しつけ}躰なつてねえぜ。」

高杉がそう言うと、柱の後ろから、微笑んだ神威が現れる。

「盗み聞きなんかじゃないよ。失礼だな。」

ククツと高杉は含み笑いした。

「そうか。……だが、俺は確かに『生け捕りにしろ』と言ったはずだ。」

「それは高杉の意見であって、俺の考えではないね。俺は、アンタの命令に従う忠犬なんかじゃない。」

はつきりと答える神威を、高杉はギロリと睨む。

「俺たち鬼兵隊の力になりうるものを抹殺し、鬼兵隊を潰すつもりだな、テメエら。」

神威は、笑いながら頷く。

「正解。一応、元老のクソジジイの命令だから、背く訳にはいかないんだ。でも、俺は高杉の味方だよ。ただし、君の味方でも、鬼兵隊の味方ではない。その他の地球人には興味がないんだ。」

それを聞いた高杉は、冷笑を口元から消し、最後に言った。

「……これ以上下手なマネをすれば、テメエらとの盟約は切る。この女は、俺たちのものだ。コイツには、二度と手エ出さな。」

高杉は、葵を肩に担ぐと、部屋を去って行った。それを笑顔で見送りながら、神威はぼそりと呟いた。

「やっぱり面白いな、地球人って。」

第九訓 たまに、蚊を殺すのに罪悪感を感じる人がいる

「せ、切腹ウ!？」

新八の声が、真昼の万事屋に響いた。その日には、珍しく妙と、近藤が万事屋を訪れていた。

「ああ。真選組のために、俺はそれを選んだ。……今夜、江戸城へ赴く。翌日には……。」

さすがの銀時や神楽も、それを聞いて茫然とした顔をしている。妙は、少しだけ残念そうな顔をして、口を開いた。

「まあ、それは残念だわ。でも、私はそのおかげでフリーになれるのね。嬉しいわ。」

「あ、姉上! 不謹慎ですよ!」

新八はツツコんだが、近藤はアツハツハと、笑い飛ばす。

「お妙さんに喜んでもらえるのなら、これ以上名誉な死はありません!」

そんな近藤を見て、神楽と銀時は、眉をしかめる。

「ゴリラ……。」

「心配いりません、お妙さん! 俺は死んでも、ずっとお妙さんといます!」

「あら、じゃあ結局ストーカーするのね。」

今度は、心の底から残念そうに言う。

「おい。ゴリラ。」銀時が、ぼそりと呟いた。「マヨラー達はどうするんだ。」

尋ねられた近藤は、少し顔に影を落とし、小さな声で答えた。

「一応、後はトシに任せるつもりだ。副長には、恐らく、総悟だろうな。葵くんには、一番隊隊長に……。」

「んなこた聞いてねーよ。」片眉をあげる銀時。「お前がいなくなつて、真選組、やっていけないのか聞いてんだ。」

近藤は、その問いを聞いて、少しだけ目を大きくした。彼自身、そ

れは、問題点だったのだろう。だが、しばらくすると、いつもおりの笑顔に戻った。

「やっていける。葵くんにも同じことを尋ねられた。だから、俺は……。」
『俺が、自立できるように育てた。』って言ってやった。」「
そう言ってから、近藤は、はっとした表情をして、銀時に視線を戻した。

「そうだ。よく思い出せば、お前と葵くんは、知り合いだったよな。」

「ああ。」

銀時が頷くと、近藤は、急にマジメな顔になって、銀時に尋ねた。

「葵くんが行方不明何だが……何か知らないか。」

「はあ？」と銀時。「俺が知ってるはずねエだろ。ってか知ってたらこつちが会わしてくれだよ。お前のとこのマヨラーが邪魔すんだよね、毎回。」

その言葉に、珍しく、近藤は、銀時相手に、「すまん。」と頭を下げ、苦笑する。

「トシのことは許してやってくれ。久し振りに『会った』妹が心配でしかたがないんだ。」

「あの……。」「ふいに、妙が口を開いた。「すみません。葵って、どなたのことかしら？」

その問いを聞いた近藤が、張り切って説明しようとしたが、その前に神楽が近藤を踏みつぶし、代わりに答えた。

「葵ってのは、真選組のマヨラーの妹アル。すつごくムカつく奴ネ。涼しい顔して、腹黒いところがあるからな。」

「……それ、神楽ちゃんでしょ。」

独り言のように口を開いた新八が、バシッと神楽に頬を叩かれた。

「ちよつ、何やってんの神楽ちゃん！」

「蚊。」

そう言いながら、神楽は、ふてぶてしい目で、黒い点が見える手を新八に見せた。

「いや、明らかにわざとだった。」

バシッ。

今度は妙。

「あ、姉上まで何ですか！」

「蠅。」

妙も、姉からの襲撃に驚いた弟に、神楽同様、掌を見せる。

「二人とも、ホントそういうの……。」

バシッ。

「……ジャンプ。」

発言から察せるように、銀時である。その手のひらには、「こちら新宿区歌舞伎町公園前派出所」、略して「こちかぶ」が表紙のジャンプが、見事に描かれている。

「いい加減しろよおめーら！」頭を抱えながらの新八のシャウト。

「つていうか最後の一人に至っては、どんだけ上手く模写してんだよ！それ以前にいつそんなの描いたんだよ！」

「細かいことは気にするな、ぱつつあん。」

頭をボリボリとかきながら銀時は新八を生氣のない目で見つめる。

さすがの新八も、三人の攻撃に怒るなど言われて怒らないほど忍耐力のある人間じゃない。

「ちょ、アンタね……。」

再び新八が文句を垂らそうとしたその時、近藤が立ちあがった。新八は、自分の言葉が切られて不機嫌そうな顔をしたが、その前に、近藤が銀時たちに向けて口を開いた。

「すまん。もう二時半だ。屯所に戻らないと、宴会に遅れて、トシたちに叱られる。」

銀時は、それを聞いて、隅にあつたジャンプに手を伸ばしながら首肯した。

「おうよ。……最後の酒、旨く飲めよ。」

近藤は、いつもの、少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、大きく頷いた。
「ああ。」

——アタシハ、ダレ？

少女は、自問した。

——ココハ、ドコ？

暗い闇の中に、虚しくこだまだけが響いた。

「晋助さま！あの娘、起きたようッス！」

桃色のミニスカの着物を着た女の声に、戦艦の窓際に立っていた男は、後ろを振り向き、にやりと笑った。

「お前はあのクソガキ呼んで来い。」

指示されて、桃色の着物の女は、嬉しそうに「了解ッス！」とだけ答えると、スキップしながら部屋を出て行った。

男——高杉晋助は、つながっている部屋に足を運び、部屋に入った瞬間、満足そうに微笑む。

そこは、何とも不思議な部屋だった。七本の？燭が、円状に部屋中に置いてあり、その中心に、大人三人は寝られそうな大きな寝台があった。その上で、ぼおとした、何も見えていないような目で宙を見つめている黒髪の少女が横たわっている。瞳孔が開き気味なその黒い瞳に、どうしても目が行く。だが、高杉の存在に気が付いた瞬間、バツと身を起こし、腰に手を当てた。——が、あるはずのものがない。

——いや、待て。

少女は、思いとどまる。

——自分はなんでこんな格好をしている。

彼女の格好——それは、黒い厚革のコート。金色のふちどりが施されている。

——腰にいつもはあるはずのものって、何だ？

頭が、混乱した。

「……誰だ、お前。」

少女は、後ろへ後ずさった。いつもはあるはずの腰のもの——それ

が何かはわからないが――がなくて、妙に不安が大きい。

「あたしは誰だ。ここはどこだ。なぜ、あたしはここにいる！」

それを聞いた高杉は、片眉を上げた。

「おいおい……。記憶を失くしちゃったのか。」

だが、そう呟いてから、ククツと、奇妙な笑い声を立てた。

「こりゃ面白そうな祭りが始まるな。……お前が欲しがっていたもん、コレだろ。」

高杉は、少女に向って、刀を放り投げた。少女は、受け取った刀を手にし、そのずっしりとした重みに、懐かしさを感じた。

――そう、これだ。自分の求めていたもの。

だが、安心したのもつかの間、再び新たな疑問が頭に浮かび、不安に駆られる。

――……自分は女なのに、何でこんな物騒なものを腰に挿していた？ いや、自分は女なのか？

「……おい。」少女は、高杉に向って、こわごわとした、しかし、それでいながら、強気の声を発した。「お前、あたしのこと、知ってるのか。」

それを聞いて、高杉は、嘲笑いともいえるような笑みを口元に浮かべる。

「ああ。」

その言葉に、少女は大きく反応した。

「な、なら、あたしの名前も、存在も、何でここにいいのかも、知ってるんだな！？」

高杉は、頷きも否定もしない。ただ、冷たく笑いながら、少女を見つめるだけ。

「……知ってるんだな。」

少女は、高杉の目を見て、確信する。

「……ククツ。」

高杉は、再び独特の笑い声を立てると、少女に背を向けた。

「来い。お前が何者か、なぜここににいるか、俺がすべてを教えてや

る。……ただし。」

少女を横目で見やると、高杉はさらに笑みを深くさせた。

「俺の命令に従い、忠実に動くのであれば、な。」

言われて、少女は何と答えようか迷った。だが、自分が何者か、その記憶を再び手に入れるため、高杉の後を——闇夜に住まう鬼のあとを、付いて行った。

第九訓 たまに、蚊を殺すのに罪悪感を感じる人がいる（後書き）

勝手に葵が記憶なくしてしまいました^^；

これからの行き先が心配です^^；

評価や感想を送って下さったりすると嬉しいです^^

第十訓 勝手に記憶を捏造するバカが、この世には存在する

その数時間前。近藤が、志村邸へと急ぎ、妙が家にいないと知って、ちようど万事屋へと向かっていた頃、土方と沖田は、真選組屯所を出ていた。

時刻は、午前十時。時は、一刻を争う。既に、葵の探索に、二番隊の半数の人数と、監察の山崎を放っていた。それに、公務の仕事で忙しかった二人が、参加したのである。

二人は、山崎から、春雨の情報を得ていた。江戸上空に、未確認飛行物体が飛んでいるというのである。

「……江戸上空か。港で、適当な船を見つけて、乗り込むか。」
土方の言葉に、沖田は眉をしかめた。

「アンタバカですかイ？ 船に乗ってどうやって他の船に乗り込むんでイ。」

それを聞いて、土方はフンと鼻を鳴らした。

「バカとは何だ。それに、俺にだって考えはある。」

「……土方さん、アンタの考えに乗ると、いつも痛い目に遭う。」
沖田が、ぽつりと言った。

「アンタは人の意見を聞かない。どうせ自分以外の考えなんて、使えないと思っているんでしょう。葵の件だってそうでしょ。……ちよ、土方さん。」

俯いていた沖田が顔を上げた時、既に、土方は江戸港へと向かっていた。

「……アンタ、やっぱりバカですぜイ。何がいい考えだ。船をぶつけてそこに二人で乗り込むなんて、無茶にもほどがありやすぜ。」
江戸港。沖田と土方は、どの船を選ぼうか、迷っていたところだった。

「うるせエ。他にあんのか、いい方法が。」

「……土方さん。」いきなり、沖田が口を開いた。「俺たち二人が行ったところで、何も変わらねエ。アンタの考えには乗れねエ。」土方は、沖田を、鋭い双眸で睨みつけた。

「……ふざけるな。俺たち二人でも、できることがある。一分一秒の遅れをも取ることは、絶対に許されない。……わかってんのか。」

「わかってまさア。」沖田は、即答する。「でもね、土方さん。相手は春雨と鬼兵隊。二人で行ったら、二人とも死ぬことも大いにありうる。いや、絶対に生きて帰ることなんて不可能ですぜ。そして、もし最後に無事助けられた葵が、俺たち二人の骸を見て、喜ぶと思いやすか。」

「じゃあ俺も聞け。」煙草を吹かしながら、土方は言った。「もし俺たちが今行かなかったことで、アイツが死んだら？俺たちは生き残っていて良かったのか。」

尋ねられた沖田は、何と答えればよいのか分からず、視線を地面に移し、無言だった。だが、しばらくしてから、口を開いた。

「姉上も……そうやって、アンタに突き放されたんですか。」

その問いに、土方は、眉をしかめた。

「何でそこでアイツが出てくるんだ。」

「アンタはいつも人を見下す。人の言うことを聞かない。自分の考えのみが正しいと考えて、無理やりにもそれを実行させようとする。……ここは、俺の考えを、少しでも聞いて下せエ。一度、宴会に戻って、作戦を練り、最後に全員で奇襲を……。」

「おい。」土方が、沖田の言葉を切った。「近藤さんはどうする。」

その奇襲に、近藤さんを入れるつもりか。……俺は、さっさと葵取り戻して、宴会に戻ろうつつてんだ。近藤さんと一緒にいられるのは、これで最後なんだぞ。……葵にとっても。」

沖田は、その言葉に閉口したが、やがて、ぼそりと言った。

「……アンタ、葵より近藤さんですかイ。」

「そう言うお前は、近藤さんより葵か。」

二人とも、答えられずに無言のままだ。

ふと、その時、土方が足を一步踏み出し、一隻の船に向って歩を進め始めた。だが、その瞬間、沖田がその腕を掴み、土方を止めた。土方は、足を止め、沖田に、射るような瞳を向けた。それでも、沖田は引き下らない。

「……一生の頼みです、土方さん。宴会に戻って下せエ。」

土方は、答えず、沖田を睨み続ける。

それに対して、沖田も負けずに、土方をじっと見つめながら、繰り返した。

「戻って、下せエ。」

「へエ。記憶、失くしたんだ。」

戦艦の、とある部屋の中。二人の男が椅子に腰かけ、同じく、目の前に座っている、一人の少女に向かい合っていた。

「で？高杉。君は、何をするの？」

高杉と呼ばれた男は、隣の青年——神威に声をかけられ、冷笑する。「考えればわかるだろ。」

「うん。」神威は、首を傾げ、しばらくしてから、いつもどおりの可愛い笑みを浮かべ、きっぱりと言った。「わかんないや。」果たして、本当にわからないかと思っているのかわからないこの青年、不思議だ。

「……お前は、何を聞きたい。聞いたことに、答えられるだけ答えるぜ。」

その言葉に、目の前の少女は、少し物憂げな顔をして、ぽつりと呟いた。

「名……。名前。」

高杉は、すぐに答える。

「土方葵。」

どこことなく、懐かしい名だ。少女は、記憶を戻そうと、問いかけを続ける。

「歳。」

「……さあ。それは知らねエ。だが、見たところ十四、五歳。」
「何でここにいるの。」

高杉は、神威と視線を交わす。神威は、高杉の意図を読み取り、瞬時に、言葉にした。

「君は、俺の部下だった。俺は、春雨第七師団団長の神威。」

少女は、首をひねる。

「はる、さめ……。か、むい……。」

「春雨——宇宙海賊団、春雨。思い出せない？」

神威に優しい声で尋ねられて、少女は頷く。

「なら、少しずつでいいから、思い出して行くといい。俺が助けてあげる。」

敵対心の感じられない、やわらかい声。思わず、少女は神威の目を見つめてしまい、慌てて視線を逸らす。

——何か、歯車がかみ合わない。最初のところでは、ちゃんと動いていたのに。春雨って……。何だ。

ちょっとした不信感が、少女の心に募る。

——何言ってるんだ。この人たちは、あたしの記憶を取り戻そうとしてくれている。協力してくれている人なんだ。……片目の男はわからないけど……。もう一人の人は……。

「ね。」

笑いかけてくる神威に、少女は首肯する。

——やっぱり、悪い人なんかじゃない。

思い直した少女は、自分の名——土方葵という名を、複数回、口の中で繰り返した。これだけは、自分の身体に、心に、ずっと染み透る、唯一の、自分の存在のあかしだった。

——土方……葵。

第十訓 勝手に記憶を捏造するバカが、この世には存在する（後書き）

銀：俺がほとんど出てねエ。

神：私もヨ。

新：仕方ないですよ。タイトル見たでしよ。「土方葵の真選組日誌」なんです。「坂田葵の万事屋日誌」じゃないんです。

銀：いや、絶対に「坂田葵の万事屋日誌」を待ち望んでいる読者がいる。

神：「坂田葵の万事屋日誌」は頂けないアル。でも、「神楽ちゃん万事屋日誌」とかだったら行けるネ。

新：「坂田葵の万事屋日誌」も「神楽ちゃんの万事屋日誌」も、どちらも読もうなんて思ってる読者いねーよ。

銀：うるせーな。いいんだよ、それで。

神：そうヨ。それが一番ネ。

新：……知らね。

第十一訓 待ち合わせには遅れるな

「遅いですねエ、副長と沖田隊長。」

ふと、山崎が呟いた。その言葉に、他の隊員たちも、宴会場を見渡す。上座には、近藤がいるが、その横には、いつもはあるはずの土方と、その後ろで、バズーカを構えたり、何かしらの悪戯をしようとしている沖田の姿がない。

「……遅いな、トシと総悟。宴会に遅れるなって言ったのはあっちなのに。」

そう、ふざけながら不満声を洩らす近藤に、山崎は苦笑する。

「いずれ、来るでしょう。」

その時、ガヤガヤと、縁側の廊下が騒がしくなった。

「ほら来た。」

襖が、ガラリと開かれ、土方と沖田が現れた。

「遅れて……すまない。」

二人とも、いつもはないはずの真剣な表情をしていた。隊員たちは、それを見て、少しだけ顔を曇らす。土方と沖田の悩みの理由はわかっていて。——葵のことである。

「トシ！総悟！遅いぞ！」

しかし、近藤の陽気な声に、気まずい雰囲気が和み、全員に笑顔が戻った。——が、土方と沖田だけは、無理に作り笑いをしているようにも見える。

「さ、副長、隊長！」山崎が、二人に無理やり肴を持たせ、酒を注いだ。「今日は無礼講！ってなわけで土方、今日は飲みましょー！」

「誰が土方だ。」

土方は山崎を睨む。

「あ、いや、すいません、副長……。」

アハハ、と山崎は笑い飛ばしながらも、頭を掻く。

「そう言えば。」

ふと、その時、近藤が始めた。

「葵くんは、見つかったか。」

沖田たちは、それを聞いて、顔をうつむかせる。土方が、沖田の方をちらりと見やり、目で合図をした。「全員で奇襲を仕掛けることを切りだせ。」そう言っているのだ。

しかし、いまいちタイミングがつかめない沖田は、珍しく不安げな顔になっている。それに、今からいなくなる近藤に、心配をかけるようなことも、したくなかった。今更ながら、情に駆られて、「宴会に戻るう」と言った自分が悔やまれる。

「……どうした、総悟。」

近藤が、沖田に声をかけた。覚悟をきめて、沖田は顔を上げると、大きな声で言った。

「俺たち、葵を助けるために、春雨の連中らに奇襲をしかけようと思ってるんでさア。」

「奇襲？」

聞いていない話だけに、隊員たちの間で、ざわめきが起きる。

「近藤さん。」沖田は、近藤に頭を下げ、続けた。「アンタには、これ以上迷惑をかけたくなかった。これ以上、俺たちのために、いろいろなことをしてくれたアンタに、心配ごとを、かけたくなかった。でも……。」

沖田は、それ以上言うことはなかった。隣にいた土方は、沖田をじっと見つめる。前髪の陰に隠れて、表情がうかがえなかったが、土方だけには、今、沖田がどんな顔をしているか、わかっていた。

「近藤さん。」

土方が、ぼそりと口を開き、低頭した。

「……俺からも、頼む。奇襲を……。隊員たちとの奇襲を、許してくれ。」

沖田は、その言葉を聞いて、土方の顔を、驚いた表情で見つめた。「今まで、俺たち兄妹のことで、たくさんの——数えきれないほどの迷惑をかけた。俺も、総悟と同じだ。アンタには、面倒をかけた

くない。おめエらにもだ。」

少し動揺している隊員たちに向って、土方は言った。しかし、近藤は無言のままだった。

「隊員たちは、来たくなければ、来なくてもいい。でも……せめて俺と総悟だけでも……。行かせてくれ。」

その言葉に、近藤は、やつとものを言った。

「……なんで、俺に言う。」

土方たちは、戸惑う。さして、理由などなかったのだ。

「それは……。」

口ごもる沖田と土方を見て、近藤は、問い続ける。

「お前たち二人だけの考えだったら、勝手に二人で行っても良かったんだ。俺に言わずとも、な。ましてや、俺は、翌日からはお前たちと、決別する人間だ。なのに、何で俺に報告した。」

しばらく、沈黙が続いた。が、沖田が、その静けさを破った。

「それは……。アンタが、俺たちの『局長』だからでさア。」

今度は、迷いがなかった。沖田の言葉は、はつきりとしていて、しつかり近藤の胸に響いた。

「アンタが……。俺たちの局長で、頭だからでさア。そりゃあ、勝手に動くこともできまア。だが……。局長のアンタの許しを貰わずして、身勝手に行動するのは、部下のすることじゃねエ。」

沖田は、一旦言葉を止め、再び大きく息をし、話し続けた。

「……俺たちは、今までいろんなやんちゃしてきた。今まで、アンタを悩ませてきた。でも……。もし、アンタが俺たちを部下だと思ってくれなくても……。俺たちが、勝手にアンタの部下だと……。アンタを上司だと思ってるんでさア。」

「だから……。」土方が、頭を下げたまま引き継いだ。「……だから、俺たちはアンタに報告した。それだけだ。」

今回は、本当に、大きな沈黙が降臨し、その間、土方と沖田の二人は、心臓がドクドクと脈打っているのを感じていた。隊員たちは、何も言わない。近藤も、無口なままだ。

——ダメ、か……。

土方が、心の中でそう呟いた時だ。

「俺たちも、行こう。」

近藤が、きっぱりと言った。土方と沖田は、バツと顔をあげて、近藤の顔をじつと見た。

「……いいか、お前たち。」

尋ねられた隊員たちは、笑顔で、「ハイ！」と頷く。

「近藤さん……。」

「まだ時間はある。さっさと仕事を終わらせて、葵ちゃんと飲もう。」
いつもの、茶目っ気溢れた笑みを口に浮かべて、土方と沖田を見つめた。

「……いつもより遣り甲斐のある仕事だと、その後の酒は旨い。万事屋が、そう言っていた。」

近藤は、笑いながら、土方たちに言った。

「……行くぞ、トシ、総悟。」

二人を聞いた二人は、悪戯っぽい顔をして、大きく首肯した。

だが、その時、屯所の玄関先で、大きな爆発音がした。

第十一訓 待ち合わせには遅れるな（後書き）

銀：なんでだあああ！何で俺が出ねエんだあああ！

神：なんでアルかあああ！何で私が出ないアルかアア！！

新：前回の後書きでも書きましたけどね、主人公は僕らじゃないんですよ。

銀：銀魂の主人公は俺だ。

神：私は、史上初ジャンプでゲロを吐いたヒロインとして君臨する女王アル。

新：……あんまいいことじゃないよ、それ。

第十二訓 お腹が減っている方が頭がよく働くってホント？

「……何かのサプライズですか？」

絶対違うと思いながらも、山崎は言ったが、そういう雰囲気ではない。隊員たちの面持ちに、緊張が走る。

土方を先頭に、隊員たちは、玄関へと向かった。

屯所の廊下で、隊員たちは茫然とした。屯所の玄関が爆破され、紺色の外套を被った男たちが、灰になった真選組の入口を占拠していた。

「……天導衆。」

ふと、沖田が呟いた。土方は、沖田の顔を見、再び男たちに視線を戻した。確かに、地球人とは違う、危ない雰囲気纏っている。

「どういうことだ。」

土方の表情に、不安が顔を出した。

円状に置かれている、高い円柱。その上に、顔を風除け布で覆った、背の高い、不気味な男たちが立っていた。

「……バカな奴らだ、真選組。我らが、近藤の命の代わりに隊を残すとも思っていたのか。」

男たちのうち一人が、そう口を開いた。

「もともと地球人というのはバカな連中。そ奴らを、わざわざバカ呼ばわりせんでもよい。」

全員、同じ背格好で、誰がだれなのか、さっぱりわからない。

「奇襲は、成功したのか。」

その質問に、一人が答えた。

「まだ報せは来っていない。が、報告を聞くまでもない。愚かしい猿どもが、我らの兵隊にかなうはずがない。……しかし、奇襲を仕掛けるというのは、卑怯なのではないのか。真選組を残すと安心させ、

結果的に、局長だけではなく、隊員全員を処刑するとは。」

「卑怯？よく言うわ。」最初に口を開いた男が言った。「これは、我らの力を、幕府の腰ぬけどもに見せつけるため。『ぬしらの忠犬は、我らの手にかかれれば、たやすく滅んでしまふ』とな。」

「それにおぬし、卑怯と言えば、春雨の連中ではないか。」

その言葉に、その場の雰囲気、少しばかり変わった。

「……あのことが。まさか、我々が奴らの手駒に使われるとはな。男たちは、不気味に笑う。」

「地球とは、全く猿どもには勿体なき星だな。我ら天導衆のみならず、宇宙一の犯罪シンジケートまでが手を出そうとしている星を、つい数十年前までは、猿どもがはびこり、自由を謳歌していたとは、信じ難いものだ。」

「しかし……。どうやって、奴らからこの星を……。」

暗闇の中に、最後に響いたのは、一人の男の疑問だった。

「団長オ。これどういうことだよ。すつとことつこい。」

「文句でもあるの？阿伏兔。……それより、本人の前で言うのは止めてくれないかな。」

江戸上空の、春雨の戦艦。大きな部屋に、十人分の椅子が置いてあるテーブル。そのうえには、豪華な食事が並び、神威、阿伏兔、高杉、そして、記憶を失くした葵が座っていた。

葵は、目の前に置かれていた皿に手を付けずに、じつと見つめているだけ。それを見かねて、神威が口を食べ物でいっぱいしながら尋ねた。

「食べないなら、俺食べていい？」

「……どうぞ、団長。」

しおらしく葵が頷いた瞬間、神威の手が動き、口へ食べ物運ぶ。その様を見た葵は、少しばかり目を見開いた。

「ああ、気にするな。」阿伏兔が言う。「団長は常人よりちと胃がデカイんだ。」

「……はい、高杉さまが聞きました。」少し笑みを含みながら、葵は返す。「でも、ここまでとは、思っていなかったの……。」それを聞いた阿伏兎は、大きな吐息をつき、神威を困った目で見つめた。

「だとよ、団長。いつか、その大食いがあだになって、激太りするぞ。」

「それはアイツだけで十分だよ。」

神威の即答に、阿伏兎は片眉を上げる。

「アイツ？」

尋ねられた刹那、神威の笑みがひきつった。

「……何でもない。」

再び、神威は笑顔に戻り、無言のまま口の中に入れた食べ物咀嚼し始める。阿伏兎は、ちょっと疑問に思ったが、やがて、思い出した。神威があんな顔をするのは一人しかいない。——ただ一人の肉親の——。

「ところでさ、高杉。君も食べないの？」

高杉は、食い付かんばかりに自分の皿をじっと見る神威を目にして、冷笑する。

「食べてエなら勝手に食べる。」

答えを聞いた瞬間、神威は皿に手を伸ばす。

「……食べる俺が言うのもなんだけどさ、君たち、何か食べた方がいいと思うよ。腹が減っては戦は出来ぬ、って言うしね。」

「そりやお前が戦いたいだけだろ。」と高杉が口を開く。

「お言葉を返すようで、恐縮ですが、団長。」葵も苦笑する。「腹が減っては、確かに戦うことは無理かもしれませんが、頭を使うときは、少しくらいお腹が減っている方がいいんですよ。」

その言葉に、神威は眉を上げる。

「ヘエ、初耳だなあ。お腹減ってたら、普通、何か食べたくなって、頭を使うどころじゃなくなると思うけどな。」

「……確かに、それも言えていますね。」

葵は苦笑しながら首肯する。

高杉は、そんな葵と神威を見ながら、ニヤリと笑った。

——もうすぐ、真選組はくさいのいぬどもがやってくる時間だな……。

第十二訓 お腹が減っている方が頭がよく働くってホント？（後書き）

感想とかを送って下さると嬉しいです^^

第十三訓 絶対に勝てない奴と戦うときは、卑怯だとか臆病だとか言われても、

「全員刀を取れ！」

土方の命令に、隊員たちはそれぞれの刀を鞘から抜き出し、構えた。しかし、それを見ても、相手方は全く怖気づかない。

「一番隊、構え！」

沖田の声で、一番隊隊員たちは、いつの間にか所持していたバズーカを構えた。――さすが、沖田の率いる部隊だ。

「発射！」

ドオオオオン！

大きな爆発音。風があたりを包み、埃が舞う。だが、視界を遮っていた煙が消えた瞬間、近藤たちの目に映ったのは、無傷の男たちの姿だった。

「マジかよ……。」

思わず、沖田は一步後ろへ下がる。

「怯むな！前へすすめ！」

土方の命令で、一番隊隊員たちは再び刀を手に取り、男たちに襲いかかった。

「あの、副長……。」

隣にいた山崎が、土方に声をかけた。土方は不機嫌そうな顔をして、「何だ。」と返す。

「あの男たち……。辰羅族です。」

辰羅族――夜兎や茶吉尼に並ぶ戦闘種族。土方は、背中に悪寒を覚えた。今の真選組が、そんな強敵に立ち向かえるはずがない。

土方の予想通り、辰羅たちは、独特の戦い方――すなわち、一人が犠牲になっても、確実に敵を殺すという戦法で、隊員たちを追いかんでいる。すでに、こちらは半数以上はやられているというのに、辰羅の数は一行に減らない。

「おい。山崎。お前も戦え。」

「は、はい！」

山崎は言われたとおり、土方とともに刀を握った。

夥しい量の鮮血が屯所中に溢れ、無残にも、隊員たちの死体が廊下に転がっている。もはや戦場と化したこの真選組で、息をつくことは不可能だろう。しかも、真選組が面している通りは、恐ろしくて誰も通らないから、援軍も来ない。

土方は、小さく舌打ちをする。そして、目の前にいた辰羅の腹を斬り裂いた。だが、その瞬間――。

「何……。」

切られて動けないはずの辰羅が、自分の腹に食い込んだ土方の刃を、出血するのにもかかわらず、手で握りしめ、土方の動きを封じた。

――ウソだろ！

嫌な予感がした。

バシッ。

気づいた時は、もう遅かった。土方は背中をバツサリ斬られ、地面に倒れこんだ。

意識が、遠のく。

――葵……。

最後に浮かんだのは、愛しい妹の笑顔。

――悪いな、助けに行けなくなっちまった……。

そして、フツと、気障きざいな笑みを浮かべる。

「土方さん！」

ふいに、沖田の声が聞こえた。

――後は、頼んだ……。総悟……。

「銀さん。本当に……。本当に、僕たちは、何もできないのですよ。うか。」

新八の声に、銀時は苛立ちながら、読んでいたジャンプから顔を上げる。

「何だよ。そんなに気になるのか。」

「そんなに気になるかコラア！」

神楽も、悪ふざけしながら銀時の言葉に乗る。

「何ですか？お前真選組の仲間だったか？あ、そうか。お前、昔のキャラ設定だと、永倉新八だったな。真選組隊員だったな。」

「お前は永倉新八イイ！」

「うるさいよ！」少しキレ気味になった新八。「っていうかそういうアンタなんか土方さんだっただろ！神楽ちゃんに至っては大嫌いな沖田さんだったろ！それも何でお通ちゃんの姿ア！？」

「お前の方がうるせえよーグルト！と神楽。」

「黙ってるメガネクロマンサー！」と銀時。

もう何を言っても無駄かもしれないという考えに、自分の思考を移転した新八は、大きな吐息をつき、今度は、落ち着いた声で二人に言った。

「……銀さん、神楽ちゃん。今回の件は、ただの真選組解散じゃないんです。近藤さんが、死ぬかもしれないですよ。」

「っていうかもう死ぬって決まってるアル。」

ソファアの上で胡坐を掻いている神楽がぼそりという。

「それなら、余計心配しなきゃいけないでしょ。」新八は、眉をかめる。「それに、葵さんも行方不明だって言うし、何かあります。解散の件と葵さんの件は関わりがないかもしれないですけど、やっぱり、何かあるんですよ。」

銀時は、ウマの合う少女の名を口に出され、眉間にしわを寄せた。

「葵さんなんか、前、高杉たちと付き合っていたらしいじゃないですか。もし、高杉さんが、葵さんの失踪の鍵を握っていたら？もし、高杉さんたちが、葵さんを殺す目的で葵さんを誘拐したのだとしたら？」

銀時の顔がさらに険しくなり、銀時は、瞼を閉じた。

「……銀さん。」新八が、銀時の顔をじっと見つめながら口を開いた。「いいんですか、このまま真選組が潰れて。……いいんですか、このまま近藤さんが死んでしまつて。」

そして、最後に言った。

「……いいんですか、このまま葵さんが、高杉さんに殺されてしま
って。」

第十三訓 絶対に勝てない奴と戦うときは、卑怯だとか臆病だとか言われても、

最後の新八が言っていた、「いいんですか、このまま」で。「って
いうのは、結構前のアニメでやってたパトリオット工場見学の時に、
マセガキどもにしてやられた大人たちに新八が、「いいんですか、
このまま大人たちが子供たちに負けっぱなしで終わって」「いいん
ですか、このまま社会見学が終わって……。」というところが印象
的だったので、なんか使っちゃいました。
銀：悪いけど、そんな話どうでもいいから。
冬：……はい。以後気をつけます。

第十四訓 病院って鼻をつくような気持ち悪い臭いがする

「土方さん！」

沖田は、辰羅を斬り倒しながら、土方に駆け寄った。

「土方さん！」

だが、いくら呼ばうと、いくらゆり起そうと、土方の瞼は動かない。一瞬、恐ろしい想像が頭に浮かんだ。もし、今、土方が死ねば――。俺……何考えてるんだ。

沖田は、正常な精神を取り戻すと、土方を再びゆり起した。

「ひじか……。」

「沖田隊長！」

山崎が、土方を呼ぶ沖田の言葉を切った。

「局長がいません！」

「！？」

沖田は、立ち上がると、あたりを見渡した。そして、破壊された門のところで、辰羅族のうち一人が、腹から出血している近藤を抱え、立ち去ろうとするのが見えた。

「近藤さん！」

焦った沖田は、土方を残し、後を追おうとしたが、その瞬間、肩に鋭い痛みを感じ、地面に伏した。

「隊長オオ！」

山崎の声が、遠くで聞こえた。すぐ横で倒れている土方の顔さえもぼやけ、次第に、肩の痛みが薄れて行くような感覚を覚えた。地面に、血だまりが出来る。

――あれ……。これ、俺の血……？

疑問に思いながら、沖田は意識を失った。

「晋助さま！」

部下の声が聞こえて、高杉は、共にいる神威と葵と振り返った。

「晋助さま、吉報ツス！真選組全滅したらしくて、どうやら、天導衆の奴らが、自らしんせ……。」
ガシャッ。

高杉は、自分の部下——来島また子の喉元に、剣を当てた。来島は、恐ろしい形相をした高杉に、恐怖し、身体を震わせる。

「……今言った組織の名を、二度と口にするんじゃないねエ。」

その言葉に、来島はがくがくと頷く。高杉は刀を鞘に収めた。

「高杉さま。」葵が口開いた。「何ですか、真選組って。」

ただ、疑問に思ったことを口に出してみただけだった。何か、懐かしい。記憶を取り戻す鍵のような名前。だから、何のことが知りたかった。しかし、高杉が、来島に向けた以上の殺気こもった目を葵に移し、鋭い声で「気にするな。」と言った時は、思わず背中に悪寒が走った。声音と言葉の内容が食い違っている。

「……はい。」

首肯するしかない葵は、俯いた。

数時間後——。

「近藤さん！」

ガバッ。

土方は、己の叫び声を聞いて、目を覚ました。そして、ハッとすると、今、近藤はどこにいるのだろう。無事なのだろうか。

「……総悟……。」

ふいに、隣のベッドに横たわっている沖田の寝顔が、土方の視界に飛び込んできた。妹と、局長の名前を交互に呼び、苦しそうにもがいている。そんな姿を見た土方は、無言になり、俯いた。

そつえば、ここはどこだ？

素朴な疑問が浮かんで、自分のベッドの隣を見てみた。真夜中の上、部屋には明かりがともっておらず、暗かったので何も見えなかったが、臭いで分かった。正直、いい匂いとは言えないような、消毒液のような臭い。——病院特有の臭い。

そう、ここは病院なのだ。

背中に痛みを感じながらも、土方はベッドから下り、横に在った机に乗っていた隊服にそでを通した。

最初は、葵を助けに行こうと思っていた。だが、近藤の方が、致死率が高い――。それを考えれば、しなければならぬことは、ただ一つ。近藤を助けに行くこと。

隊服と共に置かれていた刀を取り、腰に挿す。

さっきまでどこかに忘れていた緊張感が、帯刀したことによって、再び土方の身体に戻る。

土方は、一歩足を踏み出し、病室から出た。だが、その時――。

「土方さん。」

自分と呼ぶ、気だるい声が聞こえて、その足が止まった。

「終わったな。近藤よ。」

近藤は、上を向いた。自分を取り囲むかのように、円状に建っている、低い塔。そのうえに乗っていた男たちのうち一人が、その中央にいる近藤に語りかけた。

「夜明けには、そなたは腹を斬らなければならぬ。ちなみに、今は真夜中だ。」

その言葉に、近藤は唇をかみしめた。

自分が、余計なことをしてしまったかも知れない、と思った。もし、あの時真選組を残さず、自分が切腹する道を選んでいれば、二度と仲間を会うことはなくなるかもしれないが、こうやって奇襲を囁けられることもなかっただろう。深い絶望感に包まれた。

「……最後の夜、思うように過ごすがいい。ただし、牢獄の中で、だがな。」

男たちは、ククク、と奇妙な笑い声を上げる。

いつの間にか、近藤は両腕を天人につかまれていた。

――悪いな、トシ。総悟。

『弟』たちに、謝った。謝っても、許されることではないことは、

十重承知していた。
だが、それがせめてものの償いだった。

第十五訓 何かを成し遂げようとする人間は、目的以外何も見えていない

「土方……さん。」

もう一度名を呼ばれて、土方は沖田を振り返らず、告げた。

「テメエはそこで寝てろ。……重傷なんだろ。」

沖田の肩の部分は、刃物で斬られたうえ、骨折をした。左腕だっただけ幸いだったが。

吐息をついた土方は、再び足を進めようとする。

「土方、さん。」

しかし、またもや呼ばれる。無視しようとしたが、力のない沖田の声を、す知らぬ顔で過ぎ去るなんて、無理だった。

「……葵の所へ、行つて下せエ。俺が、他の隊員たちをまとめて近藤さんを助けに行きやす。それは、隊員ならば、誰だって出来ることですぜイ。でも……。」

沖田は、じつと土方を見つめた。

「でも、葵を助けられるのは、土方さん……。アンタだけでさア。」

「総悟……。」

土方は、思わず沖田を振り向いた。沖田は、目を閉じたまま続ける。

「……俺アアンタが嫌いだ。」

いきなりの「嫌い発言」に、土方の血管がピクリと言った。

「でも、姉上が惚れたのはアンタだ。葵が好きな兄貴は、アンタだ。それは、変えようとも変えられない事実。」

土方は、その言葉に、眉をひそめた。

「俺は、いつもアンタの背中を追つてた。アンタみたいになれば、姉上や葵にも、認められると思つてた。視界の隅ぐらいには、置いてもらえんと思つてた。でも……。そんなことはなかった。」

沖田の声が、震えた。

「……いつまで経つても、二人がみているのは……。アンタだった。」

それから、少しの間。

「……だから俺は、アンタを憎んだ。何でお前が。何で、お前んかが。そう……。俺ア、さして努力しなかった自分ではなく、アンタを憎んでいた。……いつも、アンタに悪いと思いながらも、アンタをいとわしく思うことをやめることはできなかった。俺は、そこまで汚エ人間だった。」

沖田は、目を開き、土方に、浅黄色の瞳を移した。

「……アンタは、行きたいところに——葵のところに、行つて下せエ。……これで、アンタが俺のことを許してくれるとは思っちゃいねエ。でも……。俺にできることは、これくらいなんでさア。だから……。俺の代わりに、葵を、連れて帰ってきて下せエ。」

土方は、沖田の言葉が終わるまで、終始無言だった。何か、深く考えているようだった。だが、しばらくすると、くるりと沖田に背を向け、ぽつりと言った。

「近藤さんは、オメエに任せる。」

「ねエ、不思議に思っただけだし、何で葵は記憶を失くしたの？」
尋ねられた高杉は、冷笑しながら返事する。

「……おそらくだが、あの斬暴とかいう小僧と戦った時に、マズイところでも打ったんだろ。……そういや、小僧はどうした？」

「舞台裏でスタンバってるんじゃないかなあ。あの子のお兄さんがお迎えに来るまで、待つてるんじゃない？ 何か、お兄さんと戦いたい、って言つてたから。」

神威の言葉に、高杉は、「ほお。」と呟いた。

土方が部屋を去った後、沖田は病院の患者服のまま、他の隊員たちにいる病室へと急いだ。そして、一番隊と二番隊の隊士たちを一部屋に集めた。

「テメエらに頼みがある。」

隊士たちを目の前にして、沖田が最初に言った言葉は、これだった。

「俺と一緒に、近藤さんを取り返しに行こう。」

ざわざわ、と、隊員たちの間でざわめきが始まる。

「隊長、お言葉ですが……。局長はもう、捕まっていますぜ。」

「だから、取り返しに行こうつつつてんだ。」

沖田の言葉に、隊員たちは互いに顔を合わせる。

「土方さんは、葵を探しに行った。だから、俺たちは……近藤さんの元へ行こう。」

再び、ざわめき。

「……俺たちが、今まで世話になったのは誰だ。路頭に迷っていた俺たちを助けてくれのは誰だ。俺たちを護ってくれた人は誰だ。……

俺たちが護るべき人は、誰だ。」

沖田は、隊員たちの顔を見ながら、続ける。

「近藤さんには、これ以上はないというほどのことを尽くしてもらってきた。なのに、俺たちは、何も返せずに、俺たちの命と引き換えに、近藤さんを天導衆の奴らに差し出したも同然。」

隊士たちは、俯いた。

「いいのか、これで。……このまま、近藤さんが死んで。」

「ハア、ハア、ハア……。」

土方は、病院を出て、江戸港を目指す。

——葵……。無事でいてくれ……！

手足を動かすたびに、痛みが背中を襲う。だが、それにも怯まず、土方は走る。

昔、妹と交わした言葉が、脳裏によみがえった。

『俺が消えたらどうする？』

『ん？兄ちゃんが消えたら？そうだな……。あたしも消えるよ。兄ちゃんがいてこそ、あたしがあるんだもん。』

——葵……！

途中、道のど真ん中に置いてあったごみ箱に躓いたり、人とぶつかったりしたが、土方はそんなことは気にせず、突き進む。

——葵！

土方の頭にあったのは、ただ一人の妹のことだけだった。

第十五訓 何かを成し遂げようとする人間は、目的以外何も見えていない（後書

頭が壊れそうな冬瀬志保 其の一

新：いや、何なんですかこのタイトル。

冬：私は思いました。二つ同時の連載なんて、私には無理だった、
って……。

新：いきなりどうしたんですか。

冬：二つの物語が頭の中で合体してる……。

神：そうアルナ。コイツ、マヨ方が葵助けようとして春雨戦艦に乗り込もうとしてるのに、かぶき町に向っているって書こうとしたアル。後で修正したけど。

新：どういうこと？

銀：だあかあら、もう一つの連載だと、俺たちが今敵の陣地に攻め込もうとしてるわけなのよ。で、その敵の陣地がかぶき町の一角にあつて、土方と俺たちが被っちゃたってわけ。

新：……大丈夫ですか、冬瀬さん。連載続けられますか？

冬：どつちかの連載やめちゃおうかな。どうせ誰も読んでないもん！私みたいな暇ダメ人間ではなく、ちゃんとした作家さんがいるじゃないか、「にじファン」には！もうみなさま尊敬してるよ！ホントに！何でかけるんですか？何でこんなにストーリー構成うまいんですか？このまま私が好きな作家さんの名前全部出そうか？

新：最後の関係ありません。

冬：あーもういいいよ！ホントにどつちか連載止めようかな。

新：少しくらいは読んでくださっている方がいるんじゃないですか。自分のペースで書いていきましょ。ね。

冬：もう私には自信がないんだよ！あー早くもう一つの連載終わらないかな。こっちはどちらかってと話し書き易いんだよね。バンバンアイデア来るって言うか？本音で言つとノリで書いてるって

言うか？

神：ダメだ。コイツ壊れてるヨ。いつもは暇なダメ人間でも、少しは直向きさとマジメさがあつたネ。

銀：頭が爆発しかかっているな。恐らく、バイオハザードをやっている時の状態だ。

新：スイマセン、たとえばイマイチわかりません。っていうか作者、一度もバイハザードやったことありません。

銀：ま、そんなこまけーことは気にしない方がいいよ？ぱつつぁん。ガチガチの頭でいくとね、ホント、失敗すつから。

新：いや、そう言うアンタはフワフワすぎてボニョボニョと化してます。まだガチガチの方がいいです。

神：ちなみに私の頭は酢昆布くらいの固さネ。

新：いやわかんねーよ。……っていうか作者黙っちゃいましたよ。

冬：結論『多分（いや、ホントに多分）冬瀬志保という人間は、どちらかの連載をやめることにはないと思います。それは冬瀬本人がやらないかもしれない（いや、ホントにかもしれない）と言っていたからです。読者の皆様方の笑顔が見たいのだろうと、あたしは思いました。』
土方葵『

土：作文んんん！？

第十六訓 授業では、誰かが拳手しないと、自分も拳手するのが恥ずかしい

「隊長。俺は行きます。」

そう言つて、沖田の隣に立ったのは、監察の山崎だった。隊員たちは、再び互いの顔を見、どうしようか迷っていたが、そうこうしているうちに、再び声が上がった。

「俺も行く。……地味なザキだけ目立つのは許さねエぞ。」

その言葉を聞いて、他の隊員たちも、拳手した。

「私も、隊長と共に参ります！」

「僕もです！」

次第に、沖田を支持する声が上がってくる。それを見て、沖田は微笑んだ。

「待つて下さい。やっぱ俺つて……地味なんですか。」

一人、落胆する山崎退であつた。

ピシャーン！

雷が、近くに落ちる音がした。土方は、雨が降るにもかかわらず、江戸の港の船を見つけては、船頭に、春雨の船に近づけるよう説得したが、いつも帰ってくる返事は、「ノー。」の一点張り。無論、春雨の船に突つ込むことが恐ろしかったのもあつたが、この土砂降りでは、船は出せないのだそうだ。

「ぶえつくしよい！」

コートを着ているとは言え、雨の中で長時間いるのは辛い。しかし、葵が死ぬかもしれない。そんな想像が頭に浮かぶたび、身体が動く。

「ヘーイ、そのマヨラー……じゃねえや、お兄さん。」

一人の男が、声をかけてきた。

——誰だよ、こんな時に……。

「俺は今忙しいんだ。」

キツイ声音で、振り返らずに言い返す。

「おいおい、ヒデーな。」男は眉を上げる。「船を探してるんだろ？」

土方は、その言葉に、振り向いた。

「お兄さん、何だい。夜這いアルか？こんな時間に。」

赤い水夫の服を着た少女が口を開いた。船に乗っている水夫たちは、全員深く帽子をかぶっていて、あまり顔が見えない。

土方は、少女の言葉を聞いて、「なんか、どつかで聞いた口調だな」と思うが、別に関係ないと思いなおし、口調に関しては無視する。「夜這いな訳ねエだろ。……人探した。」

「そうですか。大変ですね。」

メガネをかけた少年が、宙に浮く船の操作をしながら、土方に声をかける。

「……ご家族が何かですか？」

問われて、土方は、前方に見えてきた春雨の船を見つめながら、呟いた。

「……まあな。」

——真選組……。何なんだろう。

高杉には、冗談でも聞けない。だから、神威や阿伏兔に尋ねてみたが、誰も答えてくれない。「知らない。」の一言だけが、返ってくる。しかし、葵にとっては、昔から所属していたという春雨よりも、真選組という名前——あくまで名前だけだが——の方がしっくりくる。

「……考え事？」

目の前にいる高杉の隣に座っていた神威に尋ねられて、葵は首を振る。

「いえ、何でもありません。」

そう言ってから、微笑む。

「そう。何かあったら、俺に言ってね。」

優しい人だなあ、と思った葵。しかし、神威がたたえている笑みの奥に、深い闇が潜んでいることなど、葵は知る由もない。

——真選組……。

その時。

「御用改めである！真選組だアア！」

一人の男の声が聞こえた。たった一人の声。それでも、何十人分の大声を出している。

それを聞いて、葵は目を大きく見開いた。真選組。その名前が出ていたから。いや、それよりも——男の声に、聞き覚えがあった。

バツと振り返る高杉、神威、葵。

「葵！」

男は、喜びの交った声で叫んだが、葵の隣にいる高杉を見て、目を見張った。

「葵……。何やってんだ……。」

——待つて。言われてもわからないよ。

言い知れぬ不安が、葵を包みこんだ。相手の男は、自分のことを知っているようだ。昔、知り合いだったのだろうか。

葵は、男をじつと見つめる。V字の前がみ。瞳孔が開き気味の双眸。金のふちどりがしてある、黒のコートとズボン。

思い出せそうで、思い出せない。ああ、誰なんだ、この人は。

「こっち来い、葵！」

男は、自分に向って走り出した。それに連れられ、葵も足を踏み出そうとする。だが、その前に、高杉が葵と男の間に立ちはだかった。

「お前の主人は誰だ？」

高杉は、鋭い声で葵を問い質す。葵は、うつむきながら、悲しそうに答えた。

「高杉……さま。」

それを聞いて、男は目を大きく見開いた。

「何を……。」

「残念だが、コイツは記憶を失くしてるぜ。」

男は、さらに目を見張った。

「アンタのことも覚えてねえ。……自分の存在さえも。」

その言葉に、男は刀を構えた。

「……葵の記憶をすり替えたんだな。」

答えない代わりに、高杉は冷笑した。

「高杉……！」

しかし、その瞬間――。

バキューン！ドドドド！

銃発音が、部屋に響いた。

第十六訓 授業では、誰かが挙手しないと、自分も挙手するのが恥ずかしい（後

前回のあとがき長くてすみませんでしたー；
なんか本文ぐらい長かったですね。

銀：はいはい、もうあとがき終了！

冬：あ、了解。

第十七訓 上司がダメなら部下がしっかりしていないといけない

——警察庁——

「……隊長、本当に良かったんですか。長官に、何の言伝もなしに戦艦を運び出して。」

船を操作しながら、隊員が沖田に尋ねる。

「そんなもん、土方のせいにするやいいだろうが。」

悪びれることなく返事をする上司に、隊員たちは「え……。」「という顔をした。

「そんなことより、モタモタしねーで、さっさと船に突っ込めイ。

……天導衆の船は江戸湾にいるんだぜ。どれだけ騒ぎ起こそうが、海の中に落としまえば、どれだけでも証拠隠滅は出来る。」

また突拍子もないことを言う沖田。部下たちは、呆れるほかない。

「早くしろイ。」

だが、せかされては、部下たちも船を動かすしかなくなり、結局、数分後、江戸幕府の戦艦二隻は、無言で真選組隊員によって運び出され、警察庁を発った。

「あん時の兄ちゃんじゃないかえ。会いたかったぜよ。」

そう微笑みながら言うのは、灰色の目を持った、茶髪の少年。歳は、葵とさして変わらないくらいに見える。——斬暴だ。

「悪いのう、兄ちゃん。おんしにやあ死んでもらなきゃならん。」

言われて、男はしばらくキツイ顔をしていたが、やがて口に薄笑いを浮かべた。

「テメエもどうやら、相当悪運がつえーらしいな。」男は言った。

「俺が死ぬ？んなもん、お前を先に斬るまでだ。」

——見たことがある。喋ったことがある。これは、勘違いなんかじゃない。絶対に、この人を、あたしは知っていた。

男の顔を見ながら、葵は心の中でそう思う。

——誰……だっけ。思い出せそうなのに、思い出せない……。それから、じつと男の瞳を見つめる。その瞬間、ハツとした。

——土方、十四郎……。

名前だけ、まるでテレパシーを使ったかのように伝わってきた。
が、待て。

——土方って、あたしと同じ名字なんじゃ……？偶然？それとも……。

「行くぜよ。兄ちゃん。」

斬暴の、拳銃を握った手が動いた刹那、銃発音と共に、正確に男——土方を狙っている弾が発射される。土方は、それらを何とか避けたが、飛び道具と接近戦の道具では、とうていフェアの戦いなど望むことはできないだろう。

——セコい手を使いやがって……。

しかし、負けることもできない。葵がかかっている勝負なのだ。この少年を倒さねば、葵は戻ってこない。記憶を失っていたとしても、葵は葵だ。

舌打ちした土方は、刀を構え、大きく深呼吸した。

今まで、何千何万という死闘を、戦場とくぐり抜けてきた自分が、心が乱れている自分と入れ替わった。

——今なら、行ける！

バツと地面をけり上げると、土方は刀を振り上げ、斬暴に向って勢いよく襲いかかった。だが、軽い身のこなしでそれをかわすと、斬暴は再び銃を土方に向けた。

——なっ……。

ドオオオン！

土方の肩から、鮮血が吹いた。

第十八訓 お二ユーは比較的大事にする。当たり前か。（前書き）

遅くなつてすみません。いつもなら十時台に投稿するのですが、今日は話がいづつかなくてちよつとスランプ気味でした。

……この頃忙しいからかなあ……（吐息）

第十八訓 おニユーは比較的大事にする。当たり前か。

ドオオオオオン！

ちょうど、斬暴の銃口が火を噴いたその瞬間、天導衆の船が浮かんでいる船に、幕府の戦艦が突っ込んだ。天導衆の船中は、啞然としてうろたえる。

「……あれは……。幕府の戦艦！」

「なぜ今頃將軍が！」

「いや、そんなはずがない！今は見せ掛けだけのお飾りものである幕府共が、我らには向うわけが……。」

円柱の上に立っていた男たちは、動揺し、あたりは騒然とする。

「御用改めである！真選組だアアア！」

大声の主である若い男に続き、黒服の男たちが、円柱の立つ広い部屋に雪崩れ込む如く入ってきた。暗闇だった部屋に、男たちの持ってきた大型のスポットライトの光が差し、円柱に乗っている者は、眩しさで、手を目にやる。

「おいテメエら。」一番若そうな男——先ほど声の主、沖田総悟が、バズーカを肩に搭載しながら、男たちに、殺気立った声で口を開いた。「近藤さんはどこでイ。……答えなかったら、一人ずつお陀仏だぜ。」

「……。」

浅黄色の、射るような目がこちらを見つめる。天導衆の一人が、下にいる沖田に言った。

「……何故ぬしらが」

ドオオオオオン！

男の言葉を切る、大きな爆発音。

沖田のバズーカが出火した刹那、円状に並べられた円柱の一つが、跡形もなく破壊された。

「俺ア今頭に血が上ってんでイ。俺の質問に答えやがれ……！」

威圧感を放つ沖田の声に、天導衆は一步後ろへ下がる。

「……答える。近藤さんは、どこだ。」
ガチャッ。

沖田の細い指が、バズーカの引き金に触れた。男たちは息を呑み、数分の間、何も言わなかったが、ついに緊張に押されたのか、答えた。

「甲板の……地下。」

答えを聞いた瞬間、沖田はバズーカを肩に乗せたまま、後ろにいた観察山崎に、目合図した。山崎は小さく頷き、仲間の黒服の男たちと共に部屋から出て行く。沖田もそれに続こうとしたが、その前に、天導衆の男に止められた。

「……ここへ来たのは、幕府の命令か。」

沖田は、振り返らずに返す。

「ちげー。」

「ならば……將軍か。」

「將軍も幕府も同じことおかみでイ。」

男は、沖田になお尋ねる。

「……では、誰から命じられた。」

しばらく、沈黙が降臨する。真選組隊員はすでに広間から出て行き、天導衆と沖田だけになった。

「……誰からでもねーよ。」

ぼそりと、沖田が呟いた。

「俺たちの大將は、近藤勲ただ一人。幕府でも將軍でもねエ。もし、ソイツがとらわれたら、隊員全員で助けに行くってのが筋なんでイ。」

「……だが、しいてアンタの質問に答えるなら……。」
最後に、言った。

「俺たちの魂がそう命じた。」

「ぐはっ！」

土方が、地面に激突する。それと同時に、あたりに土方の血が飛び散り、斬暴が、地面に倒れこんだ土方の頭に、拳銃を押しあてて、馬乗りになった。

「……せ。」

ぼそりと、土方が言った。言葉が途切れて、聞こえなかった斬暴の頭に、ハテナマークが浮かぶ。

「……返せ。」

何のことだ、と斬暴は思う。そして、高杉と神威を見上げた。しかし、二人とも、冷笑と微笑をそれぞれ口元に浮かべ、じつと斬暴を見つめているだけで、答えない。

「葵を、返せ！」

ガキン！

土方の刀が、斬暴の銃を二つに割った。斬暴は、呆気に取られた顔になる。

「……おいおい、これおニューなんやけど……。」

だが、すぐに、どこから取り出した拳銃を手に握る。

「おんしゃあ、やっぱりそこにいるお嬢さんいとの兄貴じゃのう。拳銃真つ二つに割られるのは、おんしで二回目ぜよ。」

何を言っているのかさっぱりいの土方だったが、構わず刀の切っ先を斬暴に向ける。撃たれた右肩に鋭い痛みが走るが、そんなことは、気にしない。

微笑む斬暴。

「おんし、気に入った。」

地面を軽く一蹴りすると、斬暴は銃口を土方に向け、連弾で打ち始めた。初め、斬暴は、必ず土方にあたると高を括っていた。だが――

「……これ如きで、俺に弾が当たると思ってたのか、テメエ。」

土方の、瞳孔が開き君の瞳が、ギラリと光った。

「真選組ナメンじゃねーぞ。」

第十八訓 お二ユーは比較的大事にする。当たり前か。（後書き）

感想とか送って下さるとうれしいです^^

第十九訓 女の心開くにはバズーカ必須。……なんのバズーカだよ。

「局長オオオオ！」

山崎の、少しばかり涙ぐんだ声を聞いて、沖田はほっと安堵の息を漏らす。どうやら、近藤は見つかつたらしい。

沖田は、看板の地下牢獄の中に入り、近藤の姿を見て、肩を撫で下ろす。

「総悟……。無茶なマネはするなつて言つたはずだろ……。」「少し不満顔だつたが、近藤は笑つていた。沖田も小さな笑みを返すと、近藤に言つた。

「じゃあ、近藤さん。今から力ギ開けるんで、離れていて下せエ。」所持していたバズーカを地下牢の鍵穴に当てると、沖田は引き金を引こうとしたが、間一髪のところでは近藤やほかの隊員に止められる。「総悟オオ！俺を殺す気か！たかが力ギを開けるのにバズーカ所持するつもりか！牢の力ギどころか俺の力ギまで吹っ飛ぶよ！」

「女の固く閉ざされた心の力ギを開けるには、バズーカが必要なんですア。」

「一体なんのバズーカだよ！女に向つて大砲打つの！？」

「いや、そういう意味じゃなくて……。」「

近藤と沖田の意味不明のやり取りに、山崎は終止符を打とうとする。「隊長！そんなことしなくても、俺……。」「山崎は、腰から拳銃を取り出した。「ほら、コレ持ってますから。」「

「いいや。絶対にバズーカで開けなきゃいけねエ。もしこの力ギが防弾力ギだつたらどうするんでイ？」

「隊長、防弾力ギって何ですか。」「

「防弾力ギは文字通り防弾力ギだよ。……アレ。そう、アレ。」「

「隊長、アレじゃわかりません。」「

「……。」「

問い質されて無言になる沖田。そんな部下を見て、近藤は安心する。

もしもバズーカをこんな小さな牢の中で打たれたら……。
ガチャッ。

何かをセツトするような妙な音がして、近藤は「え？」と額に冷汗を掻く。

ドオオオオオン！

「……。」

斬暴の連弾を刀ではじいた土方を見て、葵はほっと胸をなでおろす。そして、少し不思議に思う。

——何で、こんなにあの人のことが心配なんだろう。

昔、知り合いだったかもしれないから？

自分を助けに来てくれたから？

それとも……。斬暴が言っていた……。「兄貴」かもしれないから？
バキューン！

しかし、葵の思考は、斬暴の銃口が火を噴いた音で、停止された。再び、土方に弾が当たるのではないかという不安が襲ってくる。

知らず知らず、葵の足は動いていた。土方の方向へ。

「どこ行く気だ。」

だが、鋭い声がして、葵は止まった。背中に、悪寒を感じる。微動だにすれば、その瞬間、後ろにいる人物——高杉の刃に身体を貫かれるのは、火を見るよりも明らかなことだ。

「……大人しく俺の後ろにいろ。」

囁くような高杉の声には、深く、恐ろしい殺気がこもっていた。

高杉は、動かない葵の着物の襟首を掴んだ。その急な動きに、思わず葵は目を瞑り、身体を固くする。高杉が、葵を後ろに抛り、地面に身体が激突した刹那、葵は鈍い痛みを背中に感じた。

ドドドドド！

再び銃発音が聞こえ、葵は痛みを忘れて土方に目を向ける。刀を振り回し、汗だくになりながらも必死で戦って、自分を取り戻そうとしている男を見て、葵は、ふと呟いた。

「……トッシー……。」

無意識のうちに呟いた言葉。それを聞いて、自分でも驚く。

——トッシー……？

何かを、掴んだ気がした。

葵が、記憶を失った。

それを聞いて、ふと、不安に思う。

真選組のことも、覚えていないのだろうか。

近藤さんや、総悟のことも、覚えていないのだろうか。

何より……俺のことを、覚えていないのだろうか。

——いや、覚えていなくてもいい。俺と、一緒にいてくれれば、それでいい。

だが……。自分に自信がなかった。

記憶を失った葵に、どう接すればいい？ただでさえ——今でなお、

自分は、まだ葵に慣れていないというのに。

嫌いな訳じゃない。ずっと傍にいてほしい。自分の唯一の肉親であり、自分の理解者であるから。そして、大切な妹だから。

でも、記憶がない葵は、俺のことを、どう見るのだろうか。俺のことを、兄として認識してくれるのだろうか。——ただの、怖い、物騒な野郎にしか見えないのだろうか。

葵……。

お前は俺のこと……覚えているか。

第二十訓 いざという時に助けてくれた人が本当の友達

再び斬暴の連弾が止まったかと思うと、いつの間にか斬暴は自分の足もとに屈み、土方の足を掬っていた。

「！」

ドサッ。

土方は地面に尻もちし、大きなスキができた。

銃発音が耳に聞こえた思った瞬間、足に鋭い痛みが感じられた。斬暴に両足を撃たれ、出血している。これでは、動くのはとうてい不可能だ。

「……ここまでわしを手古摺らせたのはおんしが初めてぜよ。楽しませてくれて、ありがとう。」

ニヤリと笑った斬暴は、拳銃を構えた。

「さようなら、兄ちゃん。」

ドン！

発砲音がして、土方は目を瞑った。

——もう終わりだ……。

そう思つて、覚悟した。

が、何秒たつても、痛みはない。

死んでもいない。

まさか……まだ、生きてる？

「はいはい、そこまでだよ、土佐弁の少年くん？」

聞いたことのある、憎たらしい、人を小馬鹿にしたような声。目を開けて、前を見ると……。

「どうも、万事屋銀ちゃんです。そのマヨネーズと妹さん回収しに参りましたぁ。」

白い着物と、黒いブーツ。「洞爺湖」の木刀。そして……。銀髪の天然パーマに、死んだ魚のような目。

土方は、驚いて目を見開く。

「万事屋……。」

「ニヒッ。」

癪に障るような笑みを浮かべて、そこに坂田銀時は立っていた。木刀を手に、そこに立っていた。

「今回は借りだぜ。絶対^{ぜってー}に返してもらうからな。」

土方は、銀時を見上げた。

「私たちも忘れるナヨ。」

「僕たちも一応、来たんで。」

銀時の後ろから現れた赤服の少女と、メガネの着物姿の少年。少女——神楽が持っている傘の銃口から、まだ煙が出ている。隣を見ると、斬暴が胸を撃ち抜かれ、倒れていた。そう、先ほどの銃声は、神楽のものだった。

「お前ら……。何で……。」

メガネの少年——新八は、一歩前に出ると、メガネをくいっと上げた。

「僕ら、今まで付き合ってきた人を見捨てるほど、薄情ないんでね。」

「
チャイナ服の少女、神楽も、高杉の後ろにいる葵を見つめて、刺々しい口調で言う。」

「あの女は私のものアル！その片目ヤローには渡せないネ！」

そう口を開いてから、高杉の背中で動かない葵をビシッと指差した。

「お前、早くこっち来るアル！そこで何やってるアルか？金縛りアルか？」

土方は、俯くと、ぼそりと呟いた。

「記憶が……。ない、らしいんだ……。」

「は？」「え？」

万事屋三人組は、あんぐり口を開く。

「……何で？」

銀時の言葉に、土方は目を伏せる。

「わかんねー。」

「……………」

全員が無言になった。その時。

一陣の風が吹いたと思った刹那、銀時、神楽、新八の身体が宙に浮き、壁に叩きつけられた。

「ガハッ！」

三人とも、血を吐いた。それに続き、呼吸ができなくなる。

「神楽——。今回は、邪魔しないでよね。」

神楽と新八の喉を、神威がしめ上げている。

「兄……ちゃん。」

苦しそうに呟いた神楽に、神威は笑いながら返す。

「その呼び方止めてよ。悪いけど、俺はやっぱり闇の中が一番みた
いだ。お前は光の中にいればいい。どうせ、道を既に違っているか
ら、俺とお前は永遠にわかり合うこともないし、その必要もない。」
そして、さらに喉を締め付ける。

「……………もしそんなに俺に近づきたいなら、もっと強くなってから来
てよ。」

神威は、ニツコリ笑いながら、神楽と新八の頭をがしりと掴み、違
う壁の方向へ抛った。

ドオオン！

「……………じゃあね。」

その横で、銀時の腹に刀をさしていたのは、高杉だった。

「銀時。……………またお前か。」

「だから……………どうだっただよ。」

銀時は、苦しそうに、しかし笑いながら、高杉に返す。

「……………心配するな。あの女は殺さねーよ。」

高杉の刀を掴んで、銀時は言った。

「そうか。でも、返せ。」

それを聞いて、高杉はさらに銀時の身体に刃を深く食い込ませる。
「……………返せ。」

苦し紛れにそう言う銀時の顔から、すでに笑みは消えていた。

「……かえ、せ……。」

そう呟いてから、銀時は気を失った。

——何で……。あたしのために……。

万事屋たちの登場に驚いた葵は、目を大きく見開いていた。

だが、目に映るのは、助けに来てくれた三人のブザマな姿。

銀時は刀に貫かれ、神楽と新八は、神威に投げられた衝撃で気絶し、頭から出血している。

——何で、あたしなんかのために……。

葵の目に、涙が盛り上がった。

それは悲しみでも、憐れみでも、後悔の涙でもなかった。素直に、記憶を失い、誰が助けに来てくれたのかはわからなかったけど、それでも、自分のために来てくれた人がいたことに、喜んで涙したのだった。

だが、三人とも、負傷し、土方も両足が不自由だ。

——ご、めん……。

自責の念が、葵を取り巻いた。

だが、その刹那、倒れていたはずの斬暴が立ちあがり、拳銃を構えた。土方は、逃げようとするが、両足を撃ち抜かれたため、それもままならない。

「……これで、しまいじゃ……。」「

胸から出血し、肩で必死で息をしながらも、斬暴は引き金に指をあてた。

葵は、それを見て、目を大きくした。

——やられる！

ドオン！

砲声が聞こえて、土方は、今度こそ、と覚悟し、瞼を閉じた。しかし、またもや痛みも、苦痛も、死んだ感覚もなかった。

ゆっくり目を開けると――。

そこには、原と肩を撃ち抜かれた葵が、自分を庇っていた。土方は、茫然とする。

――葵……？

ドサッ。

斬暴が地面に倒れたのと同時に、葵も土方に崩れ落ちる。土方は、茫然とした。

「あ……おい。」

土方は、葵を抱き起し、名を呼んだ。

「葵……。葵！」

必死で、兄は妹を気づかせようとする。

「お……起きろ、葵！」

懐かしい人に呼び起こされた気がして、葵はうつすらと目を開けた。そして、すぐ近くにあった土方の顔を見ると、小さく微笑んだ。

――良かった……。

「……………トッシー……………」

第二十一訓 試験は終了まで諦めるな

「葵！」

土方は葵の身体を何度も揺らし、呼び起こそうとしたが、葵の目は開かない。

「……葵。」

だんだん、葵の肩を握る手から、力が抜けてきた。葵は、まだ脈はあったが、このままでは……。

立ちあがった土方は、刀を鞘から抜き出し、中段に構えた。両足から多量の鮮血が吹き出しているが、不思議と痛みは感じなかった。

「高杉イ！」

銀時を刀で貫いたまま動かない高杉目がけて、土方は突進する。が、高杉は銀時から刀を抜き、土方に対抗した。ギシギシと、刀同士が鳴る。

「……何故、俺の方へ来た？葵を傷つけられたのがそんなに嫌だったか？」

ククツと笑うと、高杉は囁くような小声で土方に言った。だが、その声は、頭の中に直接語りかけられるように響きわたる。

「恨むなら足が使えなかったテメー自身を恨め。……俺にその怒りの矛先を向けるってのは、筋が通ってねーぜ。」

「……。」

高杉が、土方から離れた。その瞬間、高杉の右足が動き、土方の顎を直撃した。土方は、倒れる。

「……ッ。」

再び立ち上がろうとするが、またもや両足の自由が利かなくなり、地面に伏した。

「鬼の副長、土方十四郎——。」高杉が、土方の後ろに回り、刀を持った両手を振り上げた。「ここがテメーの首切り台だ。^{ギロチン}」

高杉の口元に、笑みが浮かんだその瞬間——。

ドオオオオオン！

「……今、なんつつた。」

パラパラと、天井の欠片が落ちてくる。埃が舞い、あたりを煙が覆う。

「そこは土方さんソイツの首切り台ギロチンじゃねえ。……テメーらの墓場だ。」

聞きなれた声。いつも、自分をバカにして、隙あらば殺そうとしている野郎。

「本音言うと、そこにいる男が死のうが死にまいが関係ねエ。」

一陣の風が吹き荒み、埃と煙が一斉に消えた。

「……だがなア、そこにいる女——おれたちのなかま土方葵を悲しませるようなマネしやがったら、ただじゃすまねーぜ。」

見えたのは……。

「まったく土方さん。アンタ、たかが両足撃ち抜かれたときで倒れるタマですかイ？」

栗毛。浅黄色の双眸。そして、人を蔑むような笑み。

「アンタがそこで倒れてどうするんでイ。俺たちやあ、アンタから課せられた任務を完遂しやしたぜ。」

沖田、総悟。

「ほら、近藤さん。何とか言ってやって下せエ。俺の言葉なんか気にもかけねえんでさア。」

その後ろから現れたのは……。

「トシ！立ち上げれ！俺たちも援護するぞ！」

近藤勲。

そして、真選組の一番隊と二番隊隊員。……いや、全隊の隊員たちが、集まっていた。

「副長オオ！」山崎が叫んだ。「まだ飲み会途中だったでしょオオ！さつさと終わらせてくださいイイ！葵さんつれて帰って、もう一回やり直しましょオオ！」

つかの間、土方は言葉を失った。高杉も、そして、部屋の隅で微笑んでいた神威も、いきなりの真選組の登場に、驚きを隠せなかった。

「……お前ら。」

だが、次第に土方の顔に、いつもの、余裕の薄笑いが浮かんだ。

「おい、山崎。」

呼ばれて、山崎は、「はい！」と敬礼する。

「テメーいつから俺に命令出来るような地位までのし上がった？ 宴会の時も俺のことを呼び捨てにしていたなア。」

土方は、腰ポケットに入っていた、潰れたタバコの箱を取り出し、一本口にぐわえた。

「あ、いや……。」「山崎は、青ざめる。」「あ、あれは、あの時のノリで……。」「

「ノリってなんだ、ノリって。」「

村麻紗で身体の均衡を保ちながら、土方は立ち上がり、高杉に再び刀を向けた。

「……山崎。後で俺の部屋に來い。」

後ろから、ヒイイッ、という、山崎の小さな悲鳴が聞こえたが、土方は気にしない。

「……さて、お次はテメーだ。高杉。」

高杉は、冷笑する。

「そいつは結構。だが、俺は未だやることが残ってるんでねえ。……

……この世界をぶっ壊さなきゃならねーんだよ……。！」「

両者の刀が動いた。白銀の残光を帯びた土方の刀が振り下ろされるたび、高杉は黒光りする刀でそれ避け、反撃する。が、その瞬間、高杉の足が土方の足を掬った。土方は、それに気付くのが一瞬遅く倒れる。

ジャキッ。

「……どうやら、ここはテメーの首切り台ギロチンだったようだな。」

土方の喉元から、紅色の血液が流れ落ち、地面に零れた。しかし、その顔にはまだ笑いが残っていた。

「……まだ終わらねーよ。」

ガシリと高杉の刀を片手でつかみ、自分の喉元から離すと、土方は

身を起こした。

「まだまだよ。まだ終わらねー。」

さらに笑みを深くさせると、土方は後ろにいる真選組に向かって片手を上げた。その刹那――。

ガチャツ。

ドオオオオオン！

何かを構える音に続いた、大きな爆発音。

後ろで、真選組隊員がバズー力を構えていた。

「終わったのはテメーの方だよ、高杉。」

そう土方が言くと、高杉の舌打ちの声が聞こえた。

だが、視界を遮っていた煙が吹き飛んだ時には、すでに高杉の姿はなかった。急いで、真選組隊員たちは外の甲板へ出てみる。その時、

高杉は小型のヘリに入って行ったところだった。

沖田が、砲撃を打つ。

だが、遅かった。

高杉の乗ったヘリは、空高く消えていた。

第二十一訓 試験は終了まで諦めるな（後書き）

この頃、「その時」「その刹那」「その瞬間」を多用しているような気がします。ホント、もっと語彙が欲しいと切に願う冬瀬でありました。

第二十二訓 親が七時に起こしてって言ったのに八時になっても起きないときは

ふと、葵は目を覚ました。

見たことのある天井が、最初に目に入った。壁には、「土道に背くまじきこと。これを犯した者切腹」と、しっかりとした、美しい文字で書かれている掛け軸。

身を起こす——と言っても、半身布団に入れたままだったが——と、肩と腹に鋭い痛みを感じた。

「いつて……。」

少しの間うずくまっていたが、葵はほどなくして起き上がった。そして、自分の横に、三つの寢床が敷かれ、銀髪の侍やらメガネやらチャイナ娘やらが寝ているのを見つける。少し驚いたが、小さな笑みを口に浮かべて、部屋を後にした。

襖を開けて、中庭に向かい合っている回廊に出ようとして、葵は隣にあった人影に気づく。

「……トッシー……。」

隣にあった、というよりは、寝ていた、という方が正確だ。壁にもたれかかったまま、寝巻きの土方がこんこんと深い眠りにについていた。

葵は、しばらく微笑んでそれをじっと見つめていたが、やがて微笑み、寝着物のまま、廊下を歩き始めた。

——……ありがとね、助けに来てくれて。

近藤は、フライパンを叩くような音で目覚めた。

「……何の音だ？」

一人部屋なので、誰かに訊こうとも出来ないもので、何が起きたのか、全く分からない。

そばに在った真選組隊服に袖を通すと、近藤は、音のする食堂へ向かった。

その頃。

「んだようるせーな。」

沖田は、目玉が描かれている、人を馬鹿にしたアイマスクを外し、目をこすった。何やら食堂の方からうるさい音が聞こえてくる。

「……おい。起きろ。」

隣で寝ていた隊員の身体をゆり起すが、全く反応しないので、その隣の隊員を起こす——いや、蹴ったり殴ったりしていたが、それでも起きない。沖田は、隊士たちがいくらゆり起そうが暴行しようが目を覚まさないだろうと悟り、諦める。——諦めたが、隊服を身につけると、武器庫からバズー力を取り出し、起きなかった隊士たちに向けて発射した。

「うぎゃあああ！」

その朝、真選組屯所、一番隊寝室から、数人の男の絶叫が響いた。

ガンガンガン！

「……。」

無言のまま、土方は目を覚ました。さすがに、早朝は冷え込む。夜のうちに毛布持ってくれば良かったな、と思いながら、土方は立ち上がり、音のする方へ——食堂へ向かった。

——高杉も春雨もしくじっちまったな……。

高杉と共に、神威や斬暴も姿を消した。その後、土方たちは葵や万事屋を屯所へ運びこみ、最低限の手当をした。……いや、葵には隊員たち全員で治療をし、万事屋は土方の命令で、本当に「最低限の手当」しかしていない。

少し重い空気が土方を包む。しかし、食堂に着いた瞬間、それも吹っ飛んだ。

「はあい、朝飯タイム！全員席につきなさい！」

台に立って、フライパンをガンガン鳴らす少女——葵の周りで、隊員たちがわいわい騒いでいる。

葵は、土方を見つけると、ちょっとビックリしていたようだが、すぐに土方にウィンクした。

「トッシーもね。」

土方は、その名で呼ばれて、少し目を大きくした。

「葵……。」

「ほらあ、早くしないとあたし食べるよ？そーちゃんとトッシーの一日の三食食べ尽すよ？最後餓死するのはトッシーだよ？」

「いや、一日くらいじゃ餓死しねー。」

ニコニコ笑いながら言う葵に、一応ツッコむ土方。

「土方さん。」

隊服の沖田が、葵と共にバズーカを構えた。

「妹の頼み断る奴ア俺が静粛しやすぜ。そこに座れイ。」

沖田に指示させるのはしゃくだったが、バズーカを発射されるよりは……。ということで、席に着く。

ドオオオン！

が、土方の思惑は外れ、バズーカは土方目がけて火を噴く。

「……。」

アフロになった土方の髪から、プスプス煙が上がる。

「って結局発射するのかアアア！」

土方は頭を抱える。

「どうするんだよ！この髪！俺この髪どうすりゃいいの！？どこの美容院行きゃいいんだよ！これなら万事屋の天然パーマの方がマシだアアア！」

「あ、そう？じゃあ俺のこの天パやるよ。良かったな、アフロ＋天パは無敵だぜ。よし。俺も今日からストレートヘアだ。」

後ろから声がして、土方は顔を引きつらせながら声の方向へ振り向く。

「いやあ、葵さんの料理はおいしいですね。」

「うん。これだけなら認めてやってもいいアル。何かセットで酢昆布ついてきたし。」

最初の声の主が、少女——神楽、そしてメガネ——新八と片手を上げた。

「チーッス、多串。あ、お前も食べる？」

そう言いながら、小豆がかかっているどんぶりを土方に向って差し出す。

「要らねエわアア！」

土方は、声の主——銀時のどんぶりを手刀でたたき割る。

「何でメエらがメシ食ってんだアア！確かに床は貸してやったが、メシまで食わせる気はねエエエ！」

「いやいやいや。」

チツチツと神楽は指を交差させる。なぜだか、ギリシア人的な服を着ていた。

「Στην αρχα? α Ελλ? δα, αυτ? που

? ταν κ? ποτε διασκεδ? σειω? επισκ

? πεε? να αγαπ? με την αρχ? ? τι」

「何言ってるかわかんねーよ——！」

土方、銀時、新八がユニゾンでツッコむ。

「（訳）古代ギリシアでは、いったん客としてもてなした者は大切にするのが原則だったんだよコンチキショ——。」

「いや、（訳）って言わなくてもいいよね！？コンチキショーまでは言っていないよね！？」

新八がシャウトした後、土方は吐息をつく。

「……ったく。わーったよ。うるせーな。」

そして、煙草を吹かした。

「メシは食わせてやるが、今日中にここ出て行けよ。」

「はい——！」

ガツガツとどんぶりに顔を突っ込みながら、万事屋三人組は返事をする。

こりゃ、帰る気なさそうだな……。

肩を落としながら、葵が自分の前に置いたマヨ井を口に運ぶ。

うん。ウマイ。やっぱり、マヨの味を知っている奴の土方スペシャルは美味だ。

そう思った時、隊員たちに食事を配り終えた葵が、土方の隣に座った。葵は、自分もマヨ丼を舌に乗せ、「おいしー。」と自画自賛した。

「あっちゃん。ソイツは土方さん作の犬の餌だぜ。食べねー方が得だ。いつか土方さんのようになっちまう。」

「妹だから俺に似るのは当然だ。」

口いっぱいにマヨネーズと白米をほおばり、土方は沖田を睨む。

しばらく、無言の間が続く。みな、もくもくと朝餉を食べている。

「……記憶、戻ったんだな。」

土方がぼそりとそう言つと、葵は頷いた。

「うん。」

そして、照れ笑いする。

「あと……助けに来てくれて……。ありがとね。」

土方は、それを聞いた瞬間、咀嚼するのを一瞬止めたが、しばらくしてから再開した。

「……ああ。」

ぶつきらばうに答えていたが、それでもその顔は、真赤に染まっていた。

「あれ、土方さん。アンタ照れてんですかい。」

沖田がからかうと、土方は赤面したまま、

「うるせー！」

と叫ぶ。

「トツシー、かわいいー。」

葵が、ニヤニヤしながら沖田と共に土方を揶揄しに掛れば、隊員全員の間で「かわいいー。」との声上がるのにそう時間はかからない。

次第に、土方も無口になって行くが、それとは真逆に顔からどんどん湯気が立ち上る。

「……あらら。かわいそうに、鬼の副長ともあろう君が完全にナメられてるな。」

土方は、銀時にも弄ばれる。

「……うるせー……。」

照れる土方。それを軽くあしらう沖田と万事屋三人組、真選組隊員全員。

——やっぱり、これが真選組だなあ。

騒々しい真選組を見ながら、そう感じた葵は、クスッと微笑した。

——ありがと、トッシー、みんな……。

その日の真選組の朝は、今までにないほど賑やかだった。

第二十二訓 親が七時に起こしてって言ったのに八時になっても起きないときは

なんとか第二章終了オオオオ！

読んで下さった方々、本当にありがとうございます！

と、いうわけで次回からは舞台裏の話です。NG集はないと思いますが、裏話的な感じで紹介して参りたいと思います。

葵：読んで下さった皆さん、ありがとね。

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の一

またつまらないものも書いてしまいました。作者の頭が新しい章のネタを想い付いて、大雑把なプロットを構成するまで、待っていて下さい^^;

今回は、前回のような「裏話」ではなく、撮影が終わった真選組陣と、万事屋陣の「撮影後の話」です。

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の一

——かぶき町のとある通り——

「いや〜。やっと第二章終了しましたね。」

山崎の声に、近藤が頷いた。

「今回も大変だったな。俺が切腹するかもしれないわ、葵くんが記憶なくすわ……。」

「まあでも結局はハッピーエンドだったから、良かったんじゃないですかイ。」

隣から首をつっこむ沖田に、土方が反論する。

「バカか。お前最終話の俺を見たか。全員になめられっぱなしだったじゃねーか。」

「いいんだよ、それで。それがトッシーだもん。」

葵の発言に、土方は血管を浮かばせる。

「それがトッシーってなんだ。」

「ま、まあまあ副長。」怒りに身を任せようとする土方を、山崎が寸止めする。「今日は宴会なんですから、怒らずに楽しく、ね。」

「チッ。」

土方はタバコを吹かしながら舌打ちする。

「しかし、アレだな。」近藤がふと呟いた。「松平のつつあんが宴会用のお金を出してくれるとは、ありがたい話だな。好きなもの食べ放題だぞ。」

「いくら出費したってかまやしませんからね。」

沖田も、嬉しそうに言う。

その時、山崎が足を止めた。それにつられ、他の四人も歩くのを止める。

「……どうした、山崎。」

山崎は困惑した表情を浮かべる。

「……ここですよ、宴会場。」

言われてみて、目の前の建物へ目を向ける。

「そうだった。」

完全に宴会場を忘れていた上司たちに、山崎は脱力した。

「えーと、じゃあ松馬鹿牛のステーキ四人分お願いしまーす。」

葵の注文に、山崎がツツコむ。

「俺もいます。五人です。五人分です。」

「……だそうです。」

ウェイトレスの女は、「は、はあ……。」「という顔をしながら、注文をメモして、去って行った。

「じゃあ私歌いまーす！」

いきなりそう言いだした葵は、そばから「カラオケセット」なるものを取り出し、勝手に歌い出す。

「お前の母ちゃん何人だああああ！」

沖田は、そんな葵を見て、肩を落とす。

「どういうことでイ、ありや。あのメガネと同じヘタレた歌じゃないですかイ。」

「誰がメガネですか。それよりお通ちゃんの曲はすべて神曲です、バカにしたら怒りますよ。」

後ろから声が聞こえるが、沖田は葵を視界に入れたまま、声の主を見ずに返す。

「何が神曲だ。それなら沖島三悟おきしまさとし作曲の『フェスティバル』の方がいい。演歌だけど。」

「いや沖島三悟って誰ですか。っていうか『フェスティバル』って何ですか。演歌じゃないでしょ。」

「いやいや、沖島三……ってお前か、メガネ。」

やっと振り返った沖田に、声の主——新八は大きな吐息をつく。その後ろには、銀時、妙、そして、熱唱している葵を鋭い目で見つめている神楽が仁王立ちしていた。

「……何でお前らがここにいの？」

銀時と土方が、同時に口を開いた。

「俺たちは第二章終了で宴会してんだよ。」

再び、同じタイミングで答える。

と、その時。

「松馬鹿牛のステーキです。」

着物姿のウェイトレスが、お盆に乗せた、ステーキを盛りつけた五つの皿をテーブルの上に置く。

——さ、ささささ最悪のタイミングで来たアアア！

土方は、頭の中でシャウトした。

——ヤバい！これはヤバい！

そして、銀時に視線を移す。思っていたとおり、銀時は閉口するの
も忘れ、口から涎がだらだらと地面に零れおちている。——銀時だ
けではない。先ほどまで沖田と口論していた新八も、葵を睨みつけ
ていた神楽も、目を大きく見開いている。

——万事屋^{ヤツ}、いくらクランクアップしたばかりとはいえ、脇キヤラ
……。

真選組の頭脳、土方十四郎は頭をフル回転させ、今の状況を確認す
る。

——おそらく、奴らはギャラが少なかったのだろう。……それに対
し、俺たちは主役ポジション。それも、今日は松平のつつあんの
金出来ているから、とんでもない豪華料理を注文できる。……これ
は、万事屋に食われる可能性が……。

「あつれー、土方くん。」

銀時が、ニマリと笑った。

「いいもの食ってんだなあ。俺たちも食いたいなあ、なんて。」

——ほら来たアアア！

それを聞いた土方の叫びが、こだまする。

座布団の上で座っている土方を上から見下げていた銀時が、涎を垂
らしながらステーキに視界を移す。

——食いたい食いたい食いたい！！！！

土方と同じく、銀時あめも叫く。

——何なんだよコイツら！俺ら差し引いてこんなにウマそうなモン食ってるの！？それが銀魂の主人公である俺に対しての態度！？

土方と銀時の間で、バチバチツと火花が散る。

——コイツらには、スこれテーキは渡せねエ！！！！

——宴会。その恐ろしさを知らなかったのはあたしたちのほうだった。
た。

その時、あたしたちは紛れもなく、戦場にいた。

8月17日。

今日も真選組はムサく、万事屋は金欠。

五つのステーキの皿をかけ、立ち上がったステーキのバカな勇者たち。

しかし、彼らの行く先——香ばしいジューシーなステーキは、あまりにも遠く見えた。

はたして彼ら、ステーキのバカな勇者達はどうなってしまうのか。

その続きは次回。

アレ？コレどっからかパクってね？

取り合えず、あたしは歌っていた歌が終わりそうなのを思い出し、
「バラ。スドール」をかける。

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の一

最後は完全に第百三十八訓「ロフトにいけば大体何でもある」を引用しました。

それにしても、もう50部まで来ちゃってるんですね。……ちよつと感動です。

感想お待ちしてまゝです^^

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の二

「松馬鹿牛のステーキです。」

ウェイトレスが持ってきた皿に、万事屋のみならず、真選組まで涎を垂らす。

「あつれー、土方くん。いいもの食ってんだなあ。俺たちも食いたいなあ、なんて。」

土方は、それを聞いた、頭の中で一声叫んだ。

——ほら来たアアア！

真選組と万事屋の間が白熱した。

——コイツらには、ステーキは渡せねエ！！！！

前回までのあらすじ

牛として生まれながら、馬としても鹿としても育てられた極上（？）の肉、松馬鹿牛（何だよソレ）。

警察庁長官、松平片栗粉から持たされた莫大なボーナス。

「好きなだけ食べてこいや。」

これを実行するために、真選組の勇者達（バカな勇者A）は宴会場へ直行する。

集まった勇者達は既に手負い（頭に）であった。

おまけに真選組のほかにも万事屋（バカな勇者B）など続々とアホ共が集まり……。はたしてステーキの勇者達は松馬鹿牛のピーを護ることができるのか。（牛のピーって何だよ！！）

そして地球の命運はどうでもいい。

今、勇者達の肉争奪戦が、始まるうとしている……。

——ふ、副長オオオ！どうするんですかアアア！

山崎が、目で土方にそう語る。

——どうするんですかアアア！ステーキが！俺たちのステーキがアアア！

——お、落ち着け。

土方は、近藤と沖田と表情だけで話し合っている。

——いいか、万事屋たちの狙いは、俺たちから冷静さを欠けさせることだ。絶対に平常心を失うな、そして、俺の指示に従え。

今回ばかりは、沖田もステーキがかかっていることで、真選組の頭脳に従い、首肯する。

——いいか、みんな。絶対に奴らの言葉に惑わされるな。特に万事屋は口先から生まれたような男。耳を貸しちゃいけねエ。

土方は、そう言った——というより、「顔で言った」後、「バラ。スドル」を熱唱している葵を見て、舌打ちをした。

——せめてアイツもいてくれりゃ……。

そう、実際、葵も「第二の真選組の頭脳」として、重宝される存在だった。

——いいか、テメーら。

銀時が、神楽、新八、妙に向って目で合図する。

——相手は真選組だからってナメちゃいけねー。中には真選組の頭脳もいる。なまじ今回に至っては、ステーキ全皿、真選組の前にある。……わかったな。

神楽たちは、コクリと頷く。

——まずはオメーからだ。

銀時が声をかけたのは、妙である。

——いいか、いっぺんに盗ろうとするんじゃない。一つ一つ、確実に盗っていくんだ。……近藤だ。ゴリラを垂らしこんで、ステーキ盗ってこい。

——わかったわ。

妙は、銀時の目を見つめ承諾すると、近藤に顔を向け、いつもよりもかわいらしい笑みを口元に浮かべ、言った。

「ねえ、近藤さん。そのステーキ一口食べたいんだけど、ちょっとお皿貸してくれないかしら？貸すだけでいいんですけど。……ダメ？」

近藤は、妙の方から声を掛けられ（それも上目づかいで）、思わず自分の皿を手を取ったが、間一髪のところまで土方に止められる。

「近藤さん！言ったばかりだろ！冷静になれ！女の言葉に惑わされるな！万事屋の差し金だ！我慢しろ！」

「けどトオシイイ！お妙さんがアアア！お妙さんがアアア！俺に、俺に自分から喋りかけてくれてるウウウ！」

「近藤さん。冷静に考えてみなせエ。今度は、沖田が会話に口を挟む。」

「あの腹黒女が……今まで近藤さんをゴリラ、チンピラ警察二十四時と言わしめていた女が、いきなり「ダメ？」なんて言うと思いやすかい？それだったら銀魂の新作映画が作られる方が確率が高いですぞ。」

「総悟の言うとおりだ。……近藤さん、その手を放せ。」

放せと言われたうえ、握力がハンパない土方の手に握られている近藤の腕が、ギシギシ言っている。

「わかったわかった。放すからお前も放せ。」

土方は、近藤の手腕を自由にする。それと同時に、近藤も皿から手を放す。

それを見た万事屋と妙は、舌打ちをした。

「ダメだ。奴らもそこまで甘くはないようだな。……じゃ新八、次はオメーだ。」

「ええ！？僕ですか？」

新八が驚いた表情をする。

「……つたりまえだろ。お前の個性は三つ。——地味とメガネとツツコミだ。残念ながらメガネとツツコミなんて肉争奪戦には使えねエ。……最後の砦、地味を使え。その地味さで、誰にも気づかれないように肉を取ってこいイイ！」

新八は、しばらく考えていたようだったが、

——やってみます。

——うっし。

銀時は親指を立てた。

立ちあがった新八は、手洗いにいき、数分後の後に、戻ってきた。
その際、山崎の席に近づき、山崎の前に置いてあったステーキの皿を盗った。

それを目の当たりにした銀時は、目を輝かせた。

——よくやった！ぱつつあん！今日からお前もステーキキ王だ！

——いやいやステーキ王ってなんですか。海賊王じゃなくてステーキ王なんですか。

ツッコむ新八だったが、その顔は嬉しそうだ。

一方、その頃真選組では——。

——おい、ザキ。

土方に、鋭い声を掛けられ、山崎は肩を震わせた。

——な、なんでしよう、副長……。

——お前のステーキ皿……。ないぞ。

言われて、山崎は自分の皿が置いてあったところに目を移したが、確かに消えていた。

——どーすんだよトシイ！ザキイ！総悟オオ！一個盗られたよ！一個盗られたよ！

近藤が頭を抱え、シャウトする、それを、土方が止めた。

——落ち着け。すべての言動が、俺たちから冷静を欠けさせるようになってんだ。まだ四つ残っている。これは死守しろ。

土方の言葉に、真選組隊員は頷いた。

その時の葵……。

「お前のばあちゃんお前のバツシユ履いてたアアアア！」

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の二

次の章のネタが思い付かないです……。

もうしばらく、こちらで我慢してください^^；

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の三

——じゃあ、次はオメーだな。神楽。

銀時に促されて、神楽はこくりと頷く。

——了解した。それでは、ミッションスタート任務開始。

そんなノリで、グラサンかけた神楽は、沖田の目の前に置いてある皿に手を伸ばす。

——ちよ、ちよつと銀さんんん！別に神楽ちゃん地味でもないのにそのまま手のばしてますよ！このままだと100%の確率で気付かれますよ！

新八のシャウトと同時に、沖田が神楽の手をバシッと掴む。

「チャイナ。それが誰のかわかって盗ろうとしたのか。」

低い声音に、神楽はフツと薄笑いする。

「わかってるアルぜ。お前のだ口。」

「残念。」沖田はニヤリと笑うと、神楽の手を離れた。「土方さんのだから別に盗っていいぜ。あ、こつちダメだから。これ俺と葵のだから。」

——仲間割れしてるウウウ！

「……ちよ、おい、総悟……。」

土方が、目を瞬きする。

「え？何？え？あれ？アレ俺のじゃない？ねえ、俺のじゃない？」

「そうですか。」

沖田は、悪びれもなく頷く。その瞬間、土方は白目になり、沖田の襟首をがしりとつかむと、沖田を吹っ飛ばした。

「テメエ何してんだアアア！仲間割れなんぞしてる場合じゃねえんだよ！」

「いてて……。」

頭をぶつけた沖田は、土方に向って反論する。

「なんてことしやがんでイ、土方さん。土方さんはどうせマヨネー

ズで極上のステーキを犬の餌に変えちまうでしょ。それならチャイナに渡したほうがもったいなくねエ。な、チャイナ。」
珍しく、沖田と神楽は同意見のようで、神楽は土方に向ってつばを吐く。

「ケツ。飯を粗末にする奴なんかに、ステーキ渡せるわけないネ。」
「いやいや、何でヒロインが吐くんですか。」

新八は、思わぬ展開で思わず虚をつかれたが、すぐに拳を握り締める。

——仲間割れはあちらの問題。逆に、僕らにとっては絶好のチャンス。……次は、銀さんの番ですね。

銀時は、ああ、とも言うように目で頷き、バツと皿に手を出し、こちら側へ持つていこうとした。

——悪いな、葵……。ステーキは俺がいた……。
が、何者かがその皿を引き戻した。

——なに！？
引き止めていたのは、額に冷汗をかきながらも、口に笑みを浮かべている沖田だった。

——旦那……。悪いがこれは葵のものだ。……土方さんが死守するつもりがねエんなら俺がするまでだ。

眉をしかめた銀時は、舌打ちする。

——チツ……。総一郎……。

——旦那、総悟でさア。

呆れたように指摘する沖田。

しばらく二人は皿を引っ張り合いながら、いがみあっていたが、銀時が折れた。二人とも、ゼーゼーハハー肩で息をしていた。

——しょうがねえ、総一郎……。

——旦那、総悟でさア。

しかし、銀時は気にしない。

——こっちはステーキを二皿手に入れた……。テメエの方が人数多いから、俺ら二皿とテメエら三皿でちょうどいいじゃねエか。……

…コイツは諦めてやる。

それを聞いた沖田は、ニヤリと笑う。

— お心遣い、痛み入りやすぜ、旦那。……だが旦那……。アンタの皿は二皿じゃねエ、一皿だ。

— ……え？

銀時は、自分のテーブルを見る。……一皿、足りない。

— 新八くん……。

そうやって、キャラに合わない冷笑を浮かべたのは、観察、山崎退。

— 地味キャラは君だけじゃない……。俺、山崎もだ！

— や、山崎だとオオオ！（だとオオ……！とオオ……！）

万事屋たちは、目を大きく見開き、山崎を睨みつけた。希望を失った銀時は、仲間たちを振り返った。

— クソツ！こうなったらがむしゃらでいい！頭脳戦なんてどうでもいいから、力づくで奪え！

その声に、妙、神楽、新八たちが動いた。それを見て、真選組も応戦する。

が、その数秒後。

ブシュツ。

嫌な音がして、全員に悪寒が走る。

「何やってるのさ、みんな。マヨネーズかければいいじゃん。」

土方葵だった。その手には、五つのキ。ーピーマヨネーズが。

— な、何だとオオ！（だとオオ……！とオオ……！）

ステーキ皿には、マヨネーズがとぐる状に巻かれていた。

「食べないなら、あたし食べるよ？」

— こんなの、食べれる訳にないだろオオオ！

「えー食べないのぉ？……トッシーは食べるよね。」

葵は、兄に向って目を向ける。土方は、当たり前のように頷き、葵の隣に座った。

「……ホントに食べないの？」

土方兄妹の問いに、真選組も、万事屋も、同じ答えを返した。

「ふん、いじわる。」

いやいや、これはエピソードじゃなくて、作者の暴走って言うんだよ 其の三、
くだらないのが終了しました。

さて、第三章の話なのですが、真選組の日常を描こうと思います。
結構短いし、シリアスでもなく退屈なギャグ篇と思いますが、よろ
しくお願い致します。

今まで、第三章では「あの機械」やら神威が本当に地球へ来た理由
やらの話をする予定でしたが、延期します^^;。第四章か第五章
か第六章か第百章になるかもしれませんが……その時もよろしくで
す。

一応、第四章のあらすじは決まりました。楽しみにしてくださいませ
い^^

長々としたあとがき、失礼いたしました^^;

ちよっとおそなくなったけど第二十二訓 上司は怒らせないように(前書き)

短いですけど^^^;

ちよつとおそなくなつたけど第二十三訓 上司は怒らせないように

「バツキヤロオオ！」

朝の七時。特別警察真選組の屯所に、男の大声が聞こえる。

「テメエら何してくれてんだコノヤロオオオ！！天導衆に逆らったのかアア！」

獅子の咆哮のような蛮声を張り上げたのは、警察庁長官、松平片栗虎である。

「おかげで俺はクビ寸前だアア！近藤^{ゴリラ}、切腹しろオオ！」

松平の前で端然と座す三人の人影。真選組局長・近藤勲、副長・土方十四郎、副長補佐・土方葵の三人だ。土方葵は、名字から察せるように、土方十四郎の血縁者——妹である。

「と、とつつあん。」

土方が、松平を抑えようと立ち上がるが、再び「バツキヤロオオ！」との叫びがあがるので、仕方なく畳の上に座りなおした。しかし、今度は葵が松平をなだめにかかる。

「とつつあん、やつと近藤さんが切腹からまぬがれたのに、また切腹だなんて……。どうしたって言うんですか。」

「葵ちゃんには知らねーかもしれねーが、近藤とサド坊主が天導衆に乗り込んでバズーカぶっ放したんだよオオ！どうしてくれんだテメエら！おかげで栗子の海外留学が延期イイ！まあおじさんは嬉しいけど！娘と一緒にいられるから嬉しいけど！」

「嬉しいならいいだろ。」と隣から土方が冷たくツツコむ。

松平は、わざとらしく大きな吐息をつくと、上座から立ち上がった。「天導衆は、どうやらテメエらの恐ろしさ（バカらしさ）を思い知ったらしい。そう簡単には潰そうなんて考えるとは思えねーが、出来るだけ天導衆の奴らを刺激するような行動はやめてくれ。」

「いや、恐ろしさのふりがながバカらしさになってんだだけ。」

土方の言葉を見殺した松平は、襖を開けると、「そじゃ。」と去つ

て行った。

残された三人は、正座したまま、同時に口を開いた。
「……いったい何だったんだ。」

ちょっとおそくなったけど第二十二訓 上司は怒らせないように(後書き)

次回から第三章です。すみません。
今日中に投稿するかも？です。

第一訓 日誌と日記の違いって何ですか？（前書き）

はい、たぶんこのひじせんの全章を通して、一番つまらない章のはじまりはじまり〜。

（作者がつまらないと言って一週間足らずで終わることもあり得ます）

第一訓 日誌と日記の違いって何ですか？

第三章プロローグ（読み飛ばしても可）

さて、突然ではあるが、まず最初に、一、二章を書いて作者が思った、気付いたことの一つを上げる。

「……ひじせん（土方葵の真選組日誌）の『日誌』って何？日誌じゃないじゃん、コレ。日記じゃないじゃん、コレ。タイトル詐欺じゃん、コレ。」

日誌、日記というものは、日常の一つ一つを書き記すことだと作者は認識している。（頭は良くないので日誌の意味を間違っているかもしれない。）

これを踏まえ、作者は考えた。

「よし。じゃあ第三章は日常篇で行こう。真選組の日常を描こう。」と、言う訳で……。

第三章、「番外編って言うのと読む気がなくなるから日常篇ってことで。……あんま変わらないか篇」、開幕。

真選組の一日を始めるのは、あたし、土方葵だ。

朝の五時半。

あたしは起きて、一日の仕事で疲れきっている隊員たちを起こさないよう、抜き足差し足で台所に向う。朝餉のレシピは多数あるが、今日は普通の質素なご飯だ：味噌汁、玄米、焼き魚、目玉焼き、はちみつパン、冷製パスタ。途中から洋風になっているのには口を出さないように。

隊員全員分を作るには、一時間はかかる。それでも、他の人よりは速い方だ。

作り終えた後は、出来るだけ大きな音を立てて隊員たちを起こし、食堂へ全員を集め、朝ごはん。時間は六時。ちなみにトッシーと自

分の皿にはマヨネーズをかけるから、誰も間違えることはない。
七時。

この時間になると、局長、副長、副長補佐、各隊隊長を集め、会議をする。

ついでながら、この会議中に携帯が鳴ると局中法度を犯したことになる、即切腹だ。

会議によってその日のスケジュールは変わったりするが、何もなければトレーニング。……態度の悪い隊員にとっては、その一日が生涯のトラウマとなる。（トッシーに叱られて半殺しにされる。）

時間を大幅に飛ばして夜の九時。

再び局長、副長、副長補佐、各隊隊長で会議。一日の報告をする。

十時半になれば、就寝。

……何もない日はこんな感じだ。

が、しかしだ。こんな日常の日常と言ってもいい日常を書くのもつまらないので、任務がある日なんかを紹介していこう。

「山崎イイ！土道不覚悟で切腹だアアア！」

「うぎゃああ！」

兄の部屋から見知った叫び声が聞こえて、葵は思わず廊下を歩いていた足を止める。

「ちょ、副長オオ！前回いじられてたからって俺に八つ当たりしないでくださいイイ！」

「誰が八つ当たりだアアア！」

このままでは本当に悲鳴の主——監察、山崎退の命が危ないと察した葵は、部屋の襖を開けた。中には、刀を構えた土方と、土下座をしている山崎がいた。無論、予想範囲の光景。

「……はいはい、トッシーそこまでです。」

突然の妹の登場に、ぎよっとする土方を見て、葵は山崎の髪を引きずりながら退室する。

「お邪魔しました副長さん。……あんまり隊員扱かないでください

ね。」

そう言ってから、葵は廊下を、山崎を引きずりながら歩く。

「……申し訳ないです、葵さん。」

頭を下げる山崎に、葵は笑顔で返す。

「礼を言われるほどでもないよ、ジミー。」

「いや、ジミーはやめてください。それ俺が地味だからでしょ。俺が地味だからいじめてるんですよ。あと、髪の毛引つ張らないでください。痛いです。」

「要求が多い男は女に嫌われるよ？ジミー。」

ダメだ、と山崎は観念する。この人は救いの副長と言えど、あの沖田隊長と考えることがピタリと一致するような危険人物……。副長から助けてくれたことだけでも、感謝せねば。

「ところで葵さん。何であの廊下通ってたんですか？……奥には、局長の自室じゃないですよ。」

その指摘に、葵は、「ああ。」と言いながら、山崎に説明した。

「何か桂の目撃情報があったとか言ってたんだけど……。めんどくさいからやんなくていいよね。」

「めんどくさいってなんですか！」山崎はシャウトする。「俺たちの仕事ですよ、攘夷浪士を捕まえるのは！桂小太郎は中でも親玉中の親玉！逮捕ですよ、逮捕！」

「ジミーのこと逮捕してやろうか？美しい副長さまを説教したことによって公務執行妨害。」

「何の公務執行妨害ですか！」

山崎は、髪の毛を葵の手から取り戻すと、立ち上がり、葵を真正面から見据えた。自分より五センチほど葵のほうが背が低いので、ちよつと見下ろす感じになる。

「いいですか、副長！俺たちの仕事は攘夷浪士の検挙！とにかく、攘夷浪士はすぐ逮捕なんですよ！面倒臭いなんて言つてられないんです！」

ドオオオオン！

癢に障ったのか、葵は説教が開始してから十五秒後、いつの間にか隣に立っていた沖田と共にバズーカを山崎の頭向って発射した。

「態度やまわねの悪い隊員にとっては、その一日が生涯のトラウマとなる」とは、こういうことだ。

しかし、山崎の場合はこういうことが毎日続く……。

「もう耐えられないんですけどオオオオ！」

その日の朝の真選組屯所の穏やかな空気に、断末魔やまろの悲鳴が溶けた。

第二訓 人は、会いたい時に会えなくて会いたくない時に会う

「えー、みんなもう葵くんから聞いたと思うが、桂のもく……。」「近藤の言葉が止まる。大志全員を集めての会議。桂の目撃情報に関してだ。だが、誰も（沖田と葵こみ）近藤の発言に耳を貸さない。昨日のドラマ見た？とか、今週のジャンプ読んだ？とか、全く関係のない趣旨の話をしている。

頭を抱えた近藤は、大きな吐息をついた。

「ダメだ。誰も聞いてねーよ。……トシ、頼んだ。」

「了解。」

バズーカを肩に担いだ土方は、座敷に向って一発。
ドオオオオン！

「えー、みんなもう葵くんから聞いたと思うが、桂の目撃情報があった。それも、今晚、かぶき町の宿屋で密会が行われるようだ。それについて作戦会議をしようと思う。」

と、近藤がそこまで言った時、二人の人影が拳手した。

「ん？どうした、総悟、葵くん。」

「作戦なんて嫌です。めんどくさいです。」

平然と言つてのける葵たちに、土方は襲いかかるが、軽々とかかわされる。

「おい、テメーら。」土方の声は怒りで震えている。「後で便所こい。それと、さつき『今週のジャンプ読んだ？』って発言した山崎もだ。」

山崎はヒィッと声を上げるが、それは彼の自業自得である。

「山崎。局中法度第十二条を言え！」

命令されて、山崎は、恐怖のあまり、「はい！」と立ち上がると、緊張のためか、大声で言った。

「『マガジン以外のマンガ、局内で読むことなかれ』です！」

「で？」土方の眉が、ぴくぴく動く。「お前はその第十二条を知っているながらマガジンではなくジャンプ読んだと。マガジンではなく鋼の錬金術師とSOUL EATERが読みたいあまりにガンガンを読んだと。」

「副長、ガンガンは読んでません。」

「マガジンのFAIRY TAILではなく、名探偵コナンと境界のリンネを読みたいがためにサンデーを読んだと。」

「副長、サンデーも読んでません。しかも、何でマガジンの枠がFAIRY TAILに限定されてるんですか。そんなにFAIRY TAILが好きなんですか。」

「FAIRY TAILもう一回バカにしてみる。切腹どころじゃねーぞ。拷問になるぞ。」

「副長、途中から脅迫になってます。葵さん、助けて下さい。」

が、葵は山崎をにつこり笑いながら見つめると、ウフツと笑った。

「さっきあたしに説教してくれたよね？それのお返しだよ。……トッシー、しごいてやってくださいな。」

妹の頼みに、土方は悪魔の如く、口が裂けるかのような笑みを浮かべ、拳の関節を鳴らした。

「任せる葵。……テメーがコイツに説教されたってことは俺自身もコイツに説教されたってことだ。」

山崎は、土方の驚くべき変貌に、地面に伏す。

「すみませんでしたアア！副長オオ！葵さアアアん！」
ガシッ。

土方は、山崎の襟首をつかむと、煙草を口に銜えたまま続けた。

「俺たち土方家の人間をテメー如きが説教するなんざ……。」「
ブン！」

山崎は、縁側の方へ抛りこまれる。

「百年はえーわボケエエ！」

後ろで、葵と総悟がパチパチと拍手する。それに連れられてか、他の隊士たちも手を叩く。それを見て、土方は一人でほくそえんだ。

まあなんやかんやで夜の七時半。桂一派の攘夷浪士たちが集まったといわれる宿屋。結構大きな宿で、門まで構えられている。

その門前に、複数のパトカーが止まっていた。

「俺の合図で突撃だ。」

土方の声に、パトカーに乗っていた一番隊と二番隊が頷く。その瞬間、土方が声を張り上げた。

「しん……。」

「あれ？何でお前らがここにいんの？」

だが、土方が口を開きかけた時、聞きなれた声が入った。土方は、振り向きたくないのに、振り向かない。

「旦那じゃありやせんかイ。」

沖田の声に、土方は声の主に確信を得る。

「万事屋……。」

土方の肩がぶるぶると震えたと思った瞬間、銀時の襟首がつかまれた。

「んでテメエがここにいるんだ！」

銀時は、土方の手を汚いものにも触られたように払うと、ケツとそつぽを向きながら、手に持っていたビニール袋を葵たちに見せる。

「神楽たちに頼まれたあんまんと肉まんを買いに、コンビニ寄っただけだよ。」

それを見た土方は、頭を抱えた。

——最悪のタイミングウウ！

第二訓 人は、会いたい時に会えなくて会いたくない時に会う（後書き）

昨日投稿できなくてすみません^^;

「銀魂祭り2011（仮）」に行ってきた。すっごく面白かったです♪

詳しくは活動報告に記載しています。お暇な方はぜひ読んでみてください^^

第三訓 作者は身勝手なものだ

「と……とにかく帰れ。今は仕事なんだ。」

シッシツと手を振る土方に、銀時は片眉を上げる。

「仕事って何だよ。またアレか？一般市民に暴行加えるアレか？」

「どんなアレだよ。」と、即座に土方は銀時の襟首をしめつける。

「こ、コレだよ。コレが一般市民に暴行加えるアレだよ。」

銀時の苦し紛れの発言に、それまで無言だった近藤が、土方を抑えにかかる。

「ト、トシ。頼むからこれ以上真選組の評判を落とさないでくれ。

ね、あの、マヨネーズ奢るから。」

「悪いが近藤さん、今はマヨネーズよりこの野郎だ。……葵、お前手エ貸せ。」

兄に声をかけられて、葵は「えー」と口をとがらせる。

「あたし銀時の旦那好きだもん。無理無理。一人で頑張つて。」

そう言う葵に、土方は一瞬負の感情を覚えたが、隣にいた沖田の一言で、それがさらに増した。

「頑張つて下せエ、土方さん。そして一生そうやって旦那に絡まって戻って来るな。あ、心配しないで下せエ。アンタがいない間に、俺がアンタの副長の座を奪つといてやりやすから。」

土方はその言葉で怒りをあらわにしようと思ったが、その前に、沖田が付け加えた。

「そうだ。何なら、葵も俺が嫁にもらっておきやしようか？そしてら土方さん、アンタ真選組に頼れる野郎がいなくなるね。かわいそうに。」

「んだとコラアアア！」

銀時をほっぱり出して、土方は刀をぬきだし、沖田に襲いかかる。それを見た隊員たちは、コソコソと呟いた。

「出たよ。土方さんのシスコン。」

「沖田隊長もマジで言ってるのかな。」

「どうだろうな。まあ、でも結構仲いいし……。アリかもな。」

「ウソだろ!?あの『救いの副長』がドS隊長の嫁に行くのかよ。」

「いや、その『救いの副長』もドSだしな。」

しかし、そんな言葉は土方には聞こえない。土方に攻撃された沖田は、いつの間にかバズーカを肩に搭載していた。
と、その時。

「すみません、局長、副長、隊長。」山崎の声が隣からして、隊士全員が振り返る。「……桂たち、この騒ぎに気づいてもう逃げたよ
うなんですけど。」

その発言に、全員が閉口した。

「……。」

とまあこういう感じで、いつも桂や高杉を逃してばかりの真選組の一日は終わる。だいたいこの失敗が、不運によって齎される。剣術に関しては、決して腕が悪いわけではないし、ほとんどの隊士が無能とはいえ、トツシーやあたしがいるので、まあ頭はあるといえはある。……なのに、失敗が多い。何度も言うようだが、これはすべて不運によつてだ。今回は銀時の旦那の乱入。その前はチャイナ娘。その前はメガネ。その前は宇宙キャプテンカッーラとかいうよくわからない奴。え?宇宙キャプテンカッーラは桂?あーそうだったんだ。うん、了解。次回から気をつけます。

という訳で、第三章終了。

は?何?短すぎる?たつた三訓しかない?まあ、それはアレですね。作者のネタが尽きたから、という感じです。でも次回からはご心配なく。ちゃんとした長編です。小説執筆歴何年かで初めて、作者がプロットを作りました。ホント、褒めてやってください。

では、次回のあらすじを……。

しないほうがいい?楽しみがなくなる?確かに。では、しない方が

いいですね。

まあ、でも軽く。

次回長編は、何と葵がアレになっちゃう!?

まあね、内容は皆無見当がつかないとは思いますが、読んでみればわかりますから!。

そんじゃーさいならー!

第三訓 作者は身勝手なものだ（後書き）

ホントにごめんなさい。一週間も長続きしませんでした。

たった四日です。たった三訓です。本当に、すみませんとしか言い
ようが……。

では、次回からはちゃんとしていると思うので、よろしく願
いします。><

第一訓 融通が利かない人は考え方に柔軟性がない

「トッシー……。どうしよう。前回の仕事で刀にヒビが入った。」

妹の葵が発した言葉を聞いて、真選組副長、土方十四郎は、作業場から、葵がいる廊下の方へ出た。そして、葵の持っていた刀を手にとると、鞘から抜き出し、吐息をついた。ヒビが、刀身の半分まで入っている。このままでは、ボツキリ行ってしまうても無理はない。「こりゃヒデエな。」

率直な感想だった。

「……直るかどうかわからねエが、俺の馴染みの刀鍛冶屋がある。そこにジーさんに頼んでみる。」

葵は、土方の言葉を聞いて、「ありがとう。トッシー。」と残すと、屯所を去って行った。

「オイオイ。お前さんもやつちまったのかい。」

江戸のとある鍛冶屋。その主人が語りかける相手は、刀を鍛える場所には似つかわしくない、まだ十代半ばの少女だ。

主の手には、大きなヒビが入った、一口の刀。

「まあ、今回はお前さんの初仕事だったらしいから、張り切るのもわかるが、興奮し過ぎて刀ぼつきり行くのはいくらなんでもやりすぎだろう。」

「アハハ、すみません。今度からは気をつけます。」

素直な少女の返答に、鍛冶屋の主人はうむと頷く。

「どうやらお前さん、兄ちゃんよりは頑固じゃないらしい。」
その言葉に、少女は苦笑した。

「すみません、融通の利かない兄でして……。でも……。」

少女は、文を切ると、困ったように頭を掻いた。

「参ったな……。このままじゃ屯所の仕事ができないや……。」

主人は、呆れて苦笑いした。

「刀を振りまわすことにこんなに執念を燃やす女は初めて見たわ。……嬢ちゃん。今回は、天からいただいた休暇だとも思って、休みをもらったらどうじゃ。」

それから、悪戯っぽそうに笑う。

「それに、噂じゃあ、真選組鬼の副長も、妹には弱いらしいじゃねエか。……ずっと剣を振りまわしていても、婚期が遅くなっちゃうだけだ。休みたくないってんなら、花嫁修業でもどうだ。」

それを聞いた少女は微笑むが、首を振った。

「ダメです。みんな、あたしを必要としてるんですから。」

そして、ちよつと照れ笑いした。

「それになにより……。自分がみんなといたいから。あたしは、誰に嫁ぐ気もないし、男の方もあたしなんか嫁がれたくないでしょう？ こんなお転婆。」

そこまで言った少女の視界に、ふと、壁に飾られている刀が飛び込んできた。漆を施された鞘が、鍛冶屋のわずかな光を受け、黒光りする。

「……いい刀ですね。」

少女は、刀を手に取り、じつとそれを観察して、主人を振り返った。
「おじさん。あたしのが直るまで、これを使わせてください。」

「そいつぁダメだ。」

珍しく、鍛冶屋の主は、少女の申し出を断った。

「やっぱり兄ちゃんの妹だな。妙なモンに目えつけやがる。そいつは、ちよつといわくつきの刀でな。」

「何ですか？ 音楽聞けたりコロコロになったりするんですか？」

昔、兄から聞いた、同じ組織に所属する人々が持っていたという刀を思い出してそう言うと、主人は首を振りながら、腕を組んだ。

「恐ろしく斬れることには違いねエ。だが……。」

文末を切ると、主は、鋭い目を少女に向けた。

「呪われとる。」

その言葉に、少女は悪寒を覚えた。

「の、呪い？冗談よしてください。」

鍛冶屋の主人は、大きなため息をついた。

「全く、反応が兄ちゃんとおっくりだな、嬢ちゃん。……その刀は、並の使い手じゃ、逆にソイツに魂を食われちゃうじゃろつて。お前さんじゃつかえこなせまい。」

そこまで言ってから、主は肩を落とした。

「……少し、昔話に付き合ってもらえるか。その妖刀にまつわる悲しき輪廻の物語を。」

しかし、少女は聞かなかった。聞けなかった。

——なぜなら、少女はそういう類の話が、大の苦手だったからである。

第一訓 融通が利かない人は考え方に柔軟性がない（後書き）

話の流れでわかると思いますが……。今回は19巻と28巻のミックスです。あ、でも、真選組動乱編じゃないですからね。……20巻買っていないんで、動乱編の最後の部分、結末を知らないんです。
^^;(泣)

第二訓 会議中とか授業中には携帯の電源を切ること

「えー、それでは、今週のスケジュールを各隊ごとに発表する。きちんとメモしておくこと。」

副長、土方十四郎の声に、隊士たちは一言一句漏らさぬように、耳を傾ける。一言でも聞き逃せば、切腹ものだ。

「それでは一番隊。まず、今朝の……。」

ピロピロリン、ジミージミー、

携帯の着信音が、土方の言葉を遮った。一瞬、隊士たちの間で、無言の間が出来る。しかし、その数秒後、全員の額に冷汗が浮かんだ。「バカ！山崎！おま、ちょっ、ホント何やってんの？早く切れ！早く！」

隣にいた隊員に急かされて、会議中に鳴った携帯の持ち主、監察の山崎退は、ポケットから取り出した携帯の電源を切った。

「はい、山崎くん。そこでなにやってるのかな？会議ナメてんのかコラア。」

威圧的な上司の声に、山崎は必死で弁解しようと努める。

「ち、違うんです。あの、俺の彼女がいま危篤で……。」

「俺をだまそうとは度胸が据わってるじゃねーか。」土方の目がキラリと光る。「だがつくんならもつとマシなウソつけ。お前みたいな地味な奴に彼女いるわけねーだろーが。」

「副長オ……。」

彼の悲しそうな一言の弦きが、土方にウソがバレたからなのか、それとも、土方の「地味」と「彼女いない」の発言に傷ついたものなのか、それは神と山崎のみぞ知るところである。

「山崎イ。」

土方の声がして、山崎は肩を縮こませた。

「土道不覚悟で切腹だアアア！」

「ヒイイッ！」

悲鳴を上げた山崎に、隣の隊員が耳打ちした。

「葵さんだ！葵さんの所へ行け！副長も葵さんには頭が上がらねエ！今なら部屋にいるはずだ！」

その言葉に勢いよく立ちあがった山崎を、土方は刀を手にしながら追いかけた。

「待てエエエ！山崎イイイ！」

部屋を出て行った土方を見て、沖田はボソリと呟いた。

「何かと忙しいお人だ。」

「葵さんんん！助けて下さいイイイ！マヨネーズ小豆丼あとで奢りますからアアア！」

葵の自室をバンッと勢いよく開けた山崎は、部屋の中で静かに机と向かい合っていた葵に飛びついた。

「……どうした、山崎。」

葵は、山崎を見ずに返した。

珍しく名前で呼ぶんですね、と喜ぶたいところだったが、今はそれどころじゃない。

「副長が、副長がアアア！」

「何だ、お前なにかしたのか。」

問われて、山崎はきまり悪そうに頷いた。

「あの……。会議中に携帯が鳴ってしまつて……。」

「ほう、そりゃ切腹もんだな……。覚悟はできたか。」

予想していなかった言葉に、思わず山崎は拍子抜けして、「は？」と気の抜けた声を発した。

「覚悟はできたかつつてんのが聞こえないのか、山崎。武士の最後は潔くあるもんだ。諦めて腹斬れ。」

「え、ええええ！？」

と、その時、土方が部屋に入ってきた。その顔には、冷笑が浮かんでいる。

「葵イ。ソイツ渡せ。今日という今日は山崎を斬る。」

兄の姿を見て、葵は頭を下げた。

「はい、兄上。」

それを聞いた土方も、「はあ？」と声を上げる。昔、「兄ちゃん」とは呼ばれていたが、「兄上」なんて呼ばれたことはない。まして、今なんか「トツシー」なんて呼び方されているのだ。

葵は、山崎をドンつと土方に向って突きだすと、土方も、山崎も、あんぐり口を開けた。

「あ、そうだ。」思いだしたように、唐突に葵は切りだした。「そういや今日、トモエ5000のフィギュア発売日だったな。ヤベ、アニメ。トイかないと。」

そう言つて、そそくさと葵は部屋を去つて行つた。

残された山崎と土方は、

「……ええええええええ！？」

驚きのあまり、叫ぶことしかできなかった。

第二訓 会議中とか授業中には携帯の電源を切ること（後書き）

感想お待ちしています♪

第三訓 受験勉強って大変だよな

「で？んでデメエらがここにいんの？」

真昼間の万事屋に、二人の人影。応客室にいるのは、頭を掻きながら、微笑とも苦笑とも取れるような笑みを浮かべた山崎と、足と腕を組み、まるで万事屋が我が家かのように寛ぐ葵だ。

「いや、葵くんはいいんだよ。でもなんでジミーがここにいんの？迷惑。ハッキリ言って迷惑。」

デスクで鼻をほじりながら言う銀時に、山崎は苦笑した。

「そう言わんで下さい、旦那。急に副長の性格が変わって……。ほら、前にも、土方さんふくちやうが、妖刀に吞まれて、ヘタレオタクになったことがあるじゃないですか。だから、たぶんこっちの副長も、吞まれたと思うんです。」

その言葉に、銀時は初めて興味を閉めたようにジャンプから顔をあげ、山崎に視線を移した。

「……副長そいつって……葵か。」

「ソイツとは何だガラクタ。」葵が、兄そっくりの、瞳孔が開き気味の瞳で銀時を睨みつけた。「貴様らのような放蕩した下等な連中にソイツと呼ばれたくない。」

「すいません。この人ホントに葵ですか？」銀時は衝撃を受けたような目で葵をしんしんと見つめる。「放蕩した下等な連中って今まで呼ばれたことないんですけど。これほど中傷的な言葉を受けたことないんですけど。軽く戦意喪失するんですけど。」

そんな葵と銀時のやり取りを聞いていた新八も、同情するように苦笑した。

「……大変そうですね。土方さんから隊員の皆さんを護ってくれる唯一の頼れる存在が、こんなになっちゃって。」

山崎は、はあっと大きな吐息をついた。

「ホントだよ。俺たちこれからどうすればいいんだ。……葵さんっ

て呼んだら怒るから、もう一人の副長と被るのに副長って呼ばなきゃいけないし、もともと葵さん^{ふくちゆう}ブラコンなのにそれが増して兄に信じられない忠義尽くすおかげで、局中法度が四十六条から九十九条まで大幅多くなるし、沖田隊長とはいがみ合って、止めるのに一日かかるし……。真選組始まって以来、こんなに精神的苦痛を感じたのは、これが初めてですよ。」

銀時は、それを聞いて片眉を上げる。

「それで？俺のところは何しに来たの？その新しい玩具で、どれだけ人が傷つくのか試しにここまで来たの？」

「冗談じゃないですよ。」山崎は首を振る。「副長^{うそ}はおもちゃじゃなくて殺人兵器です。それに、試すも何も、すべて結果は真選組に来たらわかりますよ。沖田隊長まで寝込んでますからね、副長のドSっぷりに。」

「黙れ地味ん党。」

葵に頭を叩かれて、山崎はそこをさすりながら、銀時を見上げた。

「今のは冗談です。それより、前に副長が妖刀に吞まれた時、副長が寄った刀鍛冶屋があるでしょ？できれば、そこを紹介してもらいたいんですけど、いいツスカ。」

刀鍛冶屋という言葉聞いて、銀時は知り合いの女を思い出す。今は、一人で店を営んでいるはずだ。

「鉄子のところアルか。」

ソファで胡坐を掻いていた神楽が口を開いた。

「あ、それなら僕が案内しますよ。」

新八の申し出を聞いて、山崎は微笑んだ。

「ありがとう、新八くん。」

所変わって刀鍛冶屋。

新八のみが案内することになっていたが、いつの間にか万事屋三人＋真選組二人という豪華な面子（いや、そうでもないか）が勢ぞろいしてしまった。

一斉に押しつけられて、今では鍛冶屋の主人となった鉄子も、最初は驚いた顔をしていたが、葵が背負っている刀を見て、表情を一変させた。

「その漆の鞘……。すみません、見せてください。」

頼まれて、葵は鉄子に刀を見せた。

「これは……。」「しばらく観察してから、徹子は真剣な表情になる。
いすみのかみかねしゃだ

「間違いない。和泉守兼紗駄だ。」

「和泉守兼紗駄？」

全員の頭に、ハテナマークが浮かぶ。

「妖刀・村麻紗と同期に作られたとされる、幻の刀。作ったのは、室町時代の美濃国みのくにの刀匠、和泉守兼紗駄。その斬れ味もさることながら、村麻紗同様、人の魂を食らう妖刀としても知られている。」

「なるほど。」性格が変わった葵にしては、珍しく頷く。「中からとてつもなく、トワイライトさながらのイケメン吸血鬼が出てくるって奴か。」

「違います。」と新八が冷静に突っ込む。

「でも、鉄子さん。」鉄子に顔を向けると、新八は尋ねた。「妖刀って……いったいどんな妖刀だっているんですか。まさか、またアレじゃないですね。ヘタレたオタクとかじゃないですね。」

鉄子は頷く。

「受験に落ちた学生が切腹した時に使った刀だ。」

「どんな妖刀オオオオ！？土方さんと変わらないじゃないですか！っていうかどれだけ受験に思いつめてたんだよ、その学生！」

新八のシャウトに、鉄子は続ける。

「言い伝えによると、受験勉強に嫌気がさし、アニメや漫画に逃避行した秀才が、結局はそれらにおぼれすぎて受験に失敗したそうだ。」

「もはや言い伝えじゃねーよ！」銀時もつつこむ。「つーか結局はオタクじゃん！ヘタレてないオタクじゃん！」

「和泉守兼紗駄を腰に帯びた者は、」鉄子は再び言葉を継いだ。「

その受験に失敗した学生の怨念に取りつかれ、アニメ及び二次元メディアに対する興味が増幅される。もともとは秀才で親孝行な学生だったので、頭脳明晰、肉親に対しての忠誠心も半端なものではないが、その分、比例的にアニメなどにどっぷりつかってしまう。」

そして、葵に視線を移すと、最後に言った。
「すなわち、ヘタレでないオタクになる。」

第三訓 受験勉強って大変だよね（後書き）

和泉守兼紗駄は、土方歳三の愛刀・和泉守る兼定から取りました。
「燃えよ剣」に出てくる奴ですね^^

第四訓 議題は大事。……なんか、語呂いいね。

「和泉守兼紗駄は、有名なため、偽の代物も多く存在する。だが、もしこれが本物だったなら……。」

鉄子は、じつと葵を見つめた。

「もう、本来のその子は戻ってこないかもしれない。」

一瞬、全員が無言になる。

「冗談じゃないですよオオオ！」最初に沈黙を破ったのは山崎だった。「真選組で、こんな恐ろしい副長に毎日コキ使われるんですかア！？それも兄の方の副長もいるし、ダブル鬼副長ですよ！どうしてくれるんですかアアア！？」

「俺も冗談じゃねーよオオ！」続いての叫びは銀時。「これ以上俺の心を傷つけるような言葉はやめてエエエ！それに、俺もうコイツに借金でなくなるじゃん！家賃やバイ時に何回か貸してくれてたのに、あてがなくなるよオオオ！」

「アンタ葵さんに借金してたのかよオオ！」と新八もシャウト。「アンタ最低の大人だよ！見損なつたよ！十五歳の女の子に金借りるか！？家賃の六万も借りるか！？」

「だってしょうがねーじゃん！金ないんだもん！下の階のババアと猫耳年増女にコキつかわれるよりはマシだろ！？」

ギヤーギヤー論争する万事屋。

葵は、「くだらん。」と残し、山崎に背を向けた。

「あ、ちょ、副長！？」

片手を上げると、葵は口を開いた。

「今、アニメイトで銀魂フェアしてるんだ。１０００お買い上げごとに丸型ポスター付いてくるらしい。私はその丸型ポスターを制覇したいから、そこ行ってくる。」

去って行った葵を見て、山崎は大きな吐息をつく。
すると、ふと、神楽が尋ねてみた。

「アイツを元に戻す方法ってあるアルか？」

鉄子は、うーん、と考えていたが、やがて思いついたように顔を上げた。

「方法、というより……。この子のお兄さんに聞いたらどうかな。

昔、ヘタレたオタクになっちゃった、この子のお兄さんに。元に戻ったのなら、方法を知っているかもしれない。」

その言葉を聞いて、銀時と新八、それから、山崎は、合点したような顔になった。

「えー、それでは会議を始めろ！」

山崎の声に、隊員たちが頷いた。山崎の目の前には、土方家の人間以外の全隊士。

「議題は、『葵副長をどうしたら以前の葵さんに戻すか』。何か、意見のある者！」

「ヘイ！」

最初に手を上げたのは、沖田だ。

「以前、土方さんが妖刀にとりつかれた時、オタクの霸王になるとか言ってたろイ。オタクの霸王にすんのはどうでイ。」

うん、と全員が頷くが、そこで問題が出てくる。

「でも……霸王つったって、どうやって霸王にするんだよ？」近藤が疑問を漏らす。彼も、山崎たちほどではないが、そこそのダメージを受けている。「そもそも、トシは、葵くんを元に戻したくないらしいじゃん。従順な可愛い妹が出来てさ。俺たちには地獄のどん底以外何者でもないけど。いや、別にね、トシが葵くんを元に戻したくないからとかそういう理由じゃなくてね、OFCの決定戦とか今応募とかないしさ、霸王にする道がないじゃん。」

「それに、」と沖田も付け加える。「もし下手なマネをして、葵閣下バレちゃったら、どうすんでイ。局中法度第八十二条、『副長補佐・土方葵を、元に戻そうと実行した者、それを思案した者、もしくは、それらの者の所在をしつていながら、副長・土方十四郎に

報告しなかった者、これらを罰する』に背いたとして、ここにいる全員お陀仏ですぜ。」

その言葉に、全員が小さな悲鳴を上げる。想像しただけで恐ろしい。と、その時、バタバタと足音がした。

「沖田隊長！吉報です！コレ、見てください！」

部屋に入ってきたのは、隊士の一人、神山だった。

神山から一枚の紙を受け取ると、沖田はそれを音読した。

「寺門通、第二のOFC決定戦……。参加費無料。」

全隊員の目が、キラリと光った。

「これだアアア！」

第五訓 たまにはオジサンも役に立つ

「オイ。何やってんだテメーら。」

隊員たちが叫んだ直後、土方兄妹が部屋に現れ、あたりは騒然とした。

土方と葵の瞳孔開き気味の瞳が、らんらんと光りながら、こちらを見つめている。

「総悟。今持つてる紙を渡せ。」

いつもの沖田ならば、土方をバカにしながら逃げたりするが、近頃は土方だけではなく、あの恐ろしい葵まで土方の味方に付いてしまっている。なにせ、現在の葵は、隊員を斬ることさえ躊躇しない鬼なのだ。今までの被害者は、土方兄妹を覗いた全真選組隊員。そう簡単には逆らえない。

「……これですか。」

沖田は、そろそろと土方に手を伸ばし、紙を渡した。

隊士たちは、身を固くし、目を瞑って覚悟する。

しかし、いつまで経っても兄妹の怒声は聞こえてこない。

全員、ゆっくりと瞼を開き、土方たちを見上げた。

「……くだらねエ。」

土方はそう言い捨てると、葵と共に廊下を去って行った。

その瞬間、糸を張ったような緊張がほぐれ、みな、ほっと肩を落とした。

「隊長。」山崎が、沖田に声をかけた。「さっきの紙、何だったんです?」

沖田はしばらく何を言っているのかわからなかったようだが、少しの後、ポケットから一枚のチラシを取り出した。

「松平のとつとつあんが置き忘れてたもんだ。何枚あったから、その内の一枚を土方に渡したんでイ。」

山崎たちは、全員沖田が手に持っている紙に注目した。「スナック

すまいる割引券」と書いてある。

確かに、くだらない。

だが、とにかくにも、隊員たちの命は助かった。

しかし、安堵の息を皆がついたが、土方兄妹が仕切る真選組を、やすやすと生きることがままならない……。

「死ねエエエ！山崎イイイ！」

その日の午後、真選組屯所に、土方葵の咆哮が轟いた。

「ギヤアアア！」

本能的に、山崎の足は葵の自室の方へと向かうが、無論そこには今までの葵はいない。それどころか、今は、その葵が、刀を振り上げて自分を追いかけてくるのだ。

「沖田隊長オオオ！助けて下さいイイイ！」

なんて、通りすがりの沖田に助けを乞うが、書くまでもなく、沖田は山崎に助け舟などやらない。やれば、今度は自分が殺される。

「……すまねエ、山崎。」と、柄に合わなく、山崎に謝る沖田。

「謝るなら助けて下さいイイイ！」

そう叫びながら、山崎は屯所を全力疾走し、万事屋の方向へ向かうとしたが、屯所の玄関のところで捕まった。

「……局中法度第八十一条『マヨネーズを揶揄すべからず』を五千回書いて提出しろ。わかったか。」

山崎は、刀を片手にした葵に、隊服の襟首を握られ、首根っこを掴まれた猫のように大人しくなった。

「次に逃げ出したら、今度こそ斬るからな。」

その恐ろしい、低い声音に、山崎はがくがく頷いた。

第六訓 人は皆、例外なく運命に扱かれる

山崎退の扱かれ日誌

扱かれ生活三日目

先日、一番隊の神山が手に入れた情報で、何とか葵さんを元に戻すための最低限の「材料」は用意できた。

だが、開催日を見ると、今日からあと一週間あるらしい。それまで、俺たちは、土方兄妹に扱き使われるということだ。

それに、俺たちは、二人の副長に、葵さんを元に戻すためにOFC決定戦をしたのだと思われないように、細心の注意を払わなければならぬ。ちよつとでも気付かれれば切腹間違いなし。最悪だ。

扱かれ生活四日目

今日は、一番隊の沖田隊長までが、葵さんに扱かれたらしい。ドSのあの隊長を壊すことも可能な葵さんの能力に脱帽——ではなく、恐怖した。

聞いたところによると、沖田隊長が昼寝をしていたところを兄妹に見つかり、そのまま縄で縛られて納戸へ押し込められ、三食抜きにされたようだ。

ドSは、どうやらあたりが弱いらしい。

加えて、俺もひどい目に遭わされた。

局中法度第五十七条「朝・昼・晩の食事には、すべてマヨネーズをかけて食すべし」に背いたからだ。

これを聞いてわかると思うが、俺たちは、しごかれ生活の五日間、毎日土方スペシャル（犬の餌とも言つ）を食べさせられた。

扱かれ生活五日目

今日の被害者は局長だ。思わず口が滑り、土方スペシャルを犬の餌と呼んでしまったのだ。これは、局中法度第六十四条「聖なる土方スペシャルを犬の餌と揶揄せし者、これを罰す」に反したとされる。局長だったからこそ、葵さんの辛口で四分の三殺して済んだものの、もしも俺や沖田隊長だったら、即切腹間違いなしだったろう。一方、OFC決定戦のための作戦はちやくちやくと進んでいる。それと、なんと、土方さんはOFC決定戦の日、屯所を留守にするらしい。

これはラッキーだ。

だが、今日も俺はエライ目にあわされ、死のふちまで立っていた。局中第七十九条「会議中に一言でも口を開いたもの、これを罰す」に背いたからだ。

もう疲れた。

もう嫌だ。

扱かれ生活よりあんぱん生活の方が何倍もマシだ。

扱かれ生活六日目

同志は全員ダブル鬼副長に扱き使われ、戦意を喪失。

あのバカで無邪気と言えるかどうか知らない局長や沖田隊長さえ、隅から隅まで全隊員死亡寸前。

誰かアアア！

誰か、このエンドレス扱きから俺たちを解放してくれエエエ！

俺たちは今まで頑張つて將軍に仕えてきたんだ。必ず救いはあるはずだ！

……いや、そんなことは絶対にないと思いながら、扱かれ生活からの解放を、わずかな希望の光に願ひ、俺は今日も……。

天空に向つてそんな願いをスパークキング！

扱かれ生活七日目

天空の城ラ。ユタに向つてスパークキング！

扱かれ生活八日目

金曜ロードショーで天空の城ラ。ユタを放映しているテレビに向けてスパークキング！

扱かれ生活九日目

金曜ロードショーを夜更かしして見た&ダブル副長に扱き使われ、疲れてイライラしていた局長と沖田隊長に向ってスパークキング！

……スパークキングした直後、俺は気を失った。

扱かれ生活十日目

土方コノヤローは予定通り朝早くに屯所を出て行った。

その直後、俺たちはあっちゃん（現葵閣下）の元へ急ぎ、「寺門通OFC決定戦」のチラシを見せた。しかし、女のアイドルに興味はないのか、ノリ気ではなかったが、俺たちが、「オタクの霸王になれる」と説得すると、勇んで決定戦の会場まで向かった。

なんとか、作戦はファイナルステージへとたどり着いたようだ。

……え？俺が誰かだって？山崎じゃない？山崎は気絶したはず？

確かに、俺は山崎じゃない。ソーゴ・ドS・オキタ？世だ。

第七訓 ネクロマンサーって……何？

「ここか。……スゴイ熱気だな。」

通選組の服を身にまとった葵、沖田、近藤は、目の前に広がる光景に、息を呑んだ。

ここは、寺門通 第二のOFC決定戦が行われる会場、北。丸公園。その中の、玉葱が乗っている、あの建物の中だ。

ステージ上には、髪を結った一人の少女。寺門通。

そして、その前には、メガネをかけたたり、「LOVEお通」等と書かれた鉢巻きを額にあてたりした者——一言で言つと、「オタクたち」が群れをなしていた。

「……コイツら、こんなことして恥ずかしくないのか。」

葵はボソリとそう呟くが、その隣で近藤は「お前もな。」と心の中でひそかに思う。

「……葵閣下、あちらに参りましょう。」

沖田は、不似合いな敬語を使いながら、葵を人気のない、しかし、寺門が見える位置へと先導する。

と、その時、寺門の声が、会場へ響いた。

「みんなー！お通のこと好きイ？」

「大好きイイイイ！」

「大大好きイ？」

「大大大好きイイー！」

「大大大大好き？」

「大大大大好きイイイイ！」

ステージにいる少女の声に、客席に座っている——ではなく立っている男たちが大声で答える。

「ハイ、では始めました！寺門通 第二のOFC決定選んんんんん！」

少女——寺門通の隣に立っている司会者が叫ぶと同時に、観客席から「ワァァァ！」という声上がる。

「えー、どうですかね、コレ。約一万人の、お通ちゃんのファンがね、集まってくれました。どうですか？今の心境は？」

司会に会話を振られ、寺門はニコニコ笑いながら、

「わぁー、スゴイ〜！」

と返す。

「では、この大会のルール説明をしようと思います。いいですか？お通ちゃん。」

「わぁー、スゴイ〜！」

同じ返答をされ、司会者はおおいに脱力したようだったが、やがて気を取り直して、客席の方へ顔を向けた。

「それでは、大会のルール説明です。一言一句、漏らさないようにお願いします。」

その言葉に、観客席は一気にしんと静まり返る。

「前大会は、優勝チーム、寺門通親衛隊が公式ファンクラブを辞したといことで、なんと会員はたったの一名！通選組のトッシー氏でした！今回は、列記としたOFCを決めるということで開催されました！」

そこで、司会はいったん言葉を切り、再び続けた。

「今大会は、一チーム三人で、残り約三千のチームと戦ってもらいます。知力、体力、あらゆる力を駆使し、お通ちゃんへの愛を叫びましょう！いいですかァァ!?」

「おおおおお！」

客席から大きな叫びが上がったところで、司会者は頷き、言葉を継いだ。

「まず予選です！そしてなんと、予選から生き残れるチームは、何とたった三チーム！前大会の二倍以上の参加者数に加え、生き残れるチームがたった三つということです。前回の何倍もきつい大会になると思いますが、それでもお通ちゃんへの愛を見せつけたい

という方は、がんばりましょう！」

「……お、おー！」

司会者が発表した、とんでもなくハードな予選を耳にして、オタクたちの声は小さくなっていた。

「それでは予選の説明です。まずは体力と、戦闘力！お通ちゃんを、敵から守るためには、それ相応の戦闘力が必要となりますね！皆さんには、今、この私が持っているこれ……。」

と言いながら、司会者は手に握っていた竹刀を見せた。

「この竹刀を使い、戦ってもらいます。会場はここ、北。丸公園です！この公園内で、全員で戦ってもらいます。自分のチームメイト以外、全員が敵！すなわち、バトルロイヤルの状態です！自分が倒れるまでが、勝負となります！」

それを聞いて、客席からざわめきが起きる。

「竹刀は、この建物から出ると同時に、皆さまに渡されます。因みに、相手を倒すには、どんな手を使ってもらっても構いません。主は竹刀ですが、別に落としたり穴を掘ってもらったりしてもかまいません。また、前回と同じく、一人でも棄権者が出た時点で、チームは失格、予選敗退となりますので、ご注意ください！」

そう司会者が口を開くと、今度は寺門が前へ出た。

「じゃあ、みんなー！開始は一時間の十三時からだから、それまで作戦を練ったり、隠れたりしてネクロマンサー！」

寺門の声に、「ネクロマンサー！」という返答が上がる。

「それでは、寺門通 第二のOFC決定戦、スタートランスフォーマーダークムーーン！」

第八訓　一チームにツツコミは一人以上必要

北。丸公園の街路樹の陰。

通選組の、山崎曰く「恥ずかしいチーム衣装」を身につけた三人の人影が、道を急ぎ足で歩いているオタクたちの様子を見ながら、ボソボソと何やら言い合っていた。

「チャンバラなら余裕ですぜ。あんな家にこもりっきりの二ートの予備軍たちに、俺たちが負けるわけありません。……俺が絶対に、葵閣下をオタクの霸王にしてみさア。」

「そうだとも、葵さま。この通選組を必ず第二のOFCにしてみせます。」

沖田と近藤の声に、葵は、うむと頷いた。

「頼りにしている。」

本当のことを言うと、沖田たちは、この大会に命をかけていた。もしこのまま葵が「葵閣下」として真選組に君臨すれば、土方兄妹の手によって、全真選組隊員が死ぬこととなる。それだけは、忍びない。

時刻は、十二時五十五分。開戦五分前だ。

「にしても、あんまりシマリませんね、このメンバー。」ふいに、沖田が口を開いた。チームメイトは、葵、沖田、近藤の三人。「やはり、ツツコミの土方さんと山崎がいないと、ボケ飽和状態になっちまいやす。……近藤さん、ツツコミは頼みましたぜ。」

「何で俺!？」

そう叫んだ近藤に、沖田は親指を突き出した。

「ナイスツツコミ、近藤さん!」

「意味分からねーよ!」

またもや近藤がツツコむと、葵がしつと唇に指を当て、静かにするよう促した。二人は、大人しくそれに従い、葵の視線の先を見つめた。

あの玉葱の建物の方向から、煙が立ち上っている。

「開戦の狼煙……。試合は、始まったようですね。」

葵は首肯すると、口を開いた。

「作戦など毛頭ない。こんなオタクたちに、我々が負けるわけなどないからな。いいか、手当たり次第、斬れ。」

「いや、斬りませんから。殺しませんから。倒すだけですから。」

まるで実戦のような言葉遣いの葵に、近藤は悪寒を覚えた。今の葵なら、いや、以前の葵でも、間違えて本物の刀を取り出して、オタクたちを斬ることがあるかもしれない。

「……行くぞ。」

葵の合図で、近藤と沖田は立ち上がり、道に出た。

いきなり飛び出て来た三人に、道を歩いていたオタクたちが慌てて振り返り、震える手で竹刀を構えた。

「う、うおおお！」

掛声と共にオタクたちは一斉に襲いかかってきたが、軽く沖田に捌かれる。

オタクたちは、一度倒れると、起き上がることはなかった。

「さすがだな。」

小さく呟いた葵に、沖田はバツと頭を下げ、「もったいないお言葉です。」なんて不釣り合いな言葉を口から発する。

——それほど、葵は恐ろしいのである。

「それでは、北。丸をブラブラ歩きましょう。そうすれば、嫌でもオタクたちに会うことになりますよ。」

近藤の申し出で、三人は歩きだした。

通選組は、それから三十分間、道をうろつき、出会ったオタクたちを瞬殺した。なんと、この通選組たった一チームで、九十パーセント以上のチームが壊滅、もしくは気絶などして棄権、予選敗退したが、試合中の葵たちはそんなことは知らない。

だが、そんな通選組メンバーは、試合開始から三十分経過した後、

とんでもない人物たちと遭遇した。

「マジかよ。何コレ。何でこんなにオタクたちの屍が転がってるわけ？」

銀髪の侍の声に、ぼんぼり頭の少女が返す。

「もう三十分も経ってるアル。戦って気絶したんでシヨ。」

「でも、それにしても人数が多すぎる気もするけど。」メガネの少年が口を開いた。「それと銀さん、神楽ちゃん、今日だけはちゃんとしてくださいね。これは僕の最後のチャンスなんです。これを逃したら、二度とお通ちゃんのOFCになれないんですから。」

侍——坂田銀時は、ハイハイと受け流したが、すぐに真剣な顔つきになると、メガネの少年たち——新八と神楽に念を押した。

「何度も言うけど、賞金は万事屋の家賃用だからな。葵に金が借りなくて、先月の分、滞納してるんだよ。」

「わかってるアル。」今日は、珍しく神楽も頷いた。「でも、あまつたら酢昆布買ってヨ。」

「いや、ダメだから。」銀時は、断固として神楽の言葉を吞まない。

「金は、俺のパチンコ玉として消えるから。いいか。」

「よくないですよ！」今度は、新八だ。「いいですか、賞金は全て家賃用です！あまつたら、来月用に取っておくんです！」

「じゃあ、再来月分があまつたら？」

銀時の問いに、新八はブンブンと頭を振る。

「あまらねーよ！アンタらそんなに金欲しいの！？貯金する気ゼロじゃないっすか！」

そうやって、万事屋三人組はギャーギャー喧嘩していたが、「貴様ら、ここで何をしている。」

という声で、動きを止め、顔を引きつらせた。それから、髪を掴みあっている手を離すと、声の方へ目を向ける。

「……ええーつと？何ですか？何でこの人たちがいるんですか？」

銀時の視界には、三人の人影。黒髪の少女、土方葵。浅黄色の瞳の

沖田総悟に、彫りが深い男、近藤勲。

先頭にいた葵が、銀時たちの身にまよっている半被を見て、片眉を上げた。

「何だ。貴様らもこの大会に出場していたのか。」

そして、メガネの少年に視線を移すと、合点したように頷いた。

「なるほどな。その地味メガネツッコミストの誘いで出場したわけか。……まあ、おおかたジャンプバカとチャイナ娘は賞金目当てで参加したんだろうが。」

それを聞いて、どこかのジャンプバカとチャイナ娘は、心のうちを読まれて苦い顔をした。

——う、ウソだろオオオ！

視点は、万事屋から真選組に移る。

葵は、万事屋一行を目にして、さして驚きはしなかったが、銀時らと会うことは、沖田と近藤にとっては、とんでもない悪夢だった。もしも、ここであちら側——万事屋たちにOFCになられたら、葵は元に戻るどころか逆ギレでもして、より一層扱きが厳しくなってしまう。

——何でコイツらがいんだよ。何でこういうタイミングが悪い時にコイツらと遭遇するんだよ！

血の毛が引いたような顔で万事屋を見つめる近藤と沖田に、葵は首をかしげた。

第八訓　一チームにツツコミは一人以上必要（後書き）

予選は、フツーです。なにも面白くないです^^；

万事屋が試合に出ていることを知ってもらいたかったので、こんな感じになってしまいました。が、決勝戦はまだマシなのではないかと。（と言っても、作者のギャグは全くつまらないのですが。）（涙）

第九訓 ピカ。ユウの10万ボルトって、受けたら死ぬの？

「えー、何とですね、ほとんどの出場者が通選組によって壊滅させられました。それも全チーム病院行き！残るはたったの二チーム！通選組と、寺門通親衛隊イイ！」

再び、場所は玉葱の建物へ戻る。

司会者の発表で、会場にざわめきが走った。

近藤は、それを聞いて「総悟に任せなきゃ良かった……。」「と心の中で呟く。

「これはスゴいです！通選組と寺門通親衛隊は、前大会で決勝戦までたどりついたチーム！今回もまた、壮絶なチームバトが繰り広げられるでしょう！」

そこまで言って、司会者は横に立っている銀時たちと葵たちを振り返った。

「では、まずここまで辿り着いた感想を聞きたいと思います！最初は、寺門通親衛隊長、志村氏から！」

尋ねられて、新八はコホンと一つ咳払いをし、大きく息を吸うと、始めた。

「まず、予選を勝ち抜いたことに関しては、とても……。」

「すいません、賞金ってどれくらいですか。」

しかし、新八の言葉を遮り、神楽が口を挟んだ。すると、隣から、銀時も乱入する。

「すいません、賞金って家賃何力月分ありますか。」

「いや、アンタらの家賃の値段知りません。」司会者は首を振った。「ってというか金目当てですか、アンタら。」

一息ついて、司会者は気を取り戻すと、通選組の方へマイクを向けた。

「えー、では、通選組の土方氏は。」

葵は、うむと頷くと、はつきりとした声で答えた。

「通選組がOFCになるのを邪魔する奴らは、全員ぶつ殺す。」

「いや、すみません。感想って言ったんですけど。殺人宣言しろなんて……。」

ガチャッ。

だが、司会者が言い終わる前に、葵は刀を抜き出し、司会者の喉元に刃を当てていた。司会者は、ビクツと肩を震わせる。ちなみに、刀は、背中に差している和泉守兼紗駄ではない。呪いが掛かっているのだ、抜けないのだ。

「……私の発言に異議を唱える者は兄上と局長以外全員斬る。気をつける。」

ガクガク司会者が頷くと、葵は刀を元に戻した。

誰もが、それを見てほっとする。

「え、えー、それでは気を取り直して、決勝戦を開始します！前回と種目は違いますが、ルールは同じです。三階の決勝戦で、勝利が多い方が勝ちです。一回戦は、コレ！常識クイズ！」

それに、全員が眉を上げた。「なぜ常識クイズ？」というような質問が、頭に回っている。

「まあ、オタクの中には常識はずれの人が多いですからね、ええ、お通ちゃんの公式のファンクラブになるのなら、常識はもちろん必要なわけです。」

あまりしつくりこないが、まあ、いいだろう、という感じで、銀時たちは受け流した。

「はい、では皆さんには、ここにある椅子に座ってもらいます。」

通選組隊員と、寺門通親衛隊隊員の目の前におかれているのは、人数分ある、巨大な椅子だった。なぜか、鎖で手足を縛り、椅子から立ち上がることができないようになっていた。

司会者の言葉で、全員は気を引きながらも、腰かけた。それを見て、司会者は首肯する。

「ルールは簡単！常識クイズに答えて行けばいいだけです。ですが、

一問間違えるたびに、椅子から10万ボルトの電流が流れます。」
「いや待てエエエ！」椅子に座ってしまった新八が叫んだ。「10万ボルトって即死亡じゃねエか！一問間違えて死亡じゃねエか！ピカ。ユウじゃねーんだよ！」
司会者は、そのシャウトをして、「大丈夫です。」と言葉を継いだ。
「リモコン操作を行うのは、お通ちゃんです。お通ちゃんの許容範囲のミスならば、電撃は静電気ほどですので、ご安心ください。ただし、正解でも言い方が気に食わなかったりすると、10万ではなく、100ボルトの電流が流れます。」

「余計こえーわ！」

しかし、新八の叫びも虚しく、決勝戦第一回は、火蓋を切った。

第九訓 ピカ。ユウの10万ボルトって、受けたら死ぬの？（後書き）

タイトルの質問を調べてみたのですが、いまいち死んじゃうのかわからないのかわかりません。

まあ、マジメにどちらかが知りたいって思うのもバカですけど。（

↑ ^^ ; ）

第十訓 最低限の常識は身につけておくように

「では、まず第一問！」

銀時と葵たちの前にあるモニターに映った問題は、

「国語 この漢字の読みを答えなさい。 常識」

それを見た近藤が肘掛の脇に置いてあるボタンを押すのに続き、銀時たちも急いでブッシュしたが、一足遅かった。

「通選組、近藤氏！」

司会者に呼ばれて、近藤は答えた。

「じょうしき です！」

しかし、答えた直後、ブツブーという効果音が上がった。

——え！？

その場にいた全員が、「じょうしき」だと思っていたので、思わず目を見張り、電流のリモコンを持っていた寺門に視線を移す。

寺門は、にこりと笑うと、口を開いた。

「正解は、常し君に届けでした。」

——お通語忘れてたアアア！ってか前回もそうだったアアア！

「あ、もしくは、」と寺門は付け加える。「じょうしきデスペランカーか、つねしきでも可です。」

——つねしきじゃねーよ！じょうしきだよ！

「えー、では、近藤氏にペナルティです！お通ちゃん、どうぞ！」

寺門が、司会者の言葉でリモコンを押した瞬間、近藤は「ギヤアアアア！」と大きな悲鳴を上げ、撃沈。

それを見て、全員が無言になる。

「第二問！」

葵たちは、慌ててモニターに顔を向けた。

「魔法使い の読みをこたえなさい。」

これならいける、と、銀時が答えた。

「まほうつかい ですノート！」

ブッブー！

え、と再び目を見張る全員。

「正解はハリーポッターでした。もしくはロン・ウィズリーでもヴォルデモートでも可。ハーマイオニー・グレンジャーは魔女なので、該当しま戦国BASARA―The Last Party。」

――映画そっちの話かよオオオ！

銀時たちの身体は怒りでブルブル震える。

――冬瀬エエエ！ふざけるなアアア！お前がハリーポッターが好き
なだけだろ！俺たちに迷惑かけるなアアア！

「はい、では電流を流してください！」

その声に、銀時の叫びが重なった。

「では、第三問！」

すでに、みな生気が消えている。答える気力がない。

「数学 お通ちゃんとそのファンが、道端でばったり会いました。

三人のファンは、お通ちゃんにファンレターを送りました。二人のファンは、プレゼントを。さて、ファンレターの数は？」

初め、新八は、三人のファンから手紙を渡されたのだから、三通
思っていたが、ここはひねくり出された問題が出されている。容易
に手を出せば、電流で即死亡間違いなしだ。

しかし――。

ピンポン！

葵が肘掛のボタンを押した。

「はい、通選組の土方氏！」

「九通ですカイツリー。」

――えええええ！？

平然と答えた葵に、銀時たちはガツクリと肩を落とすが、寺門通は
につこり笑うと、「正解です。」と口を開いた。

「三人のファンが送ったファンレターの数は、確かに三通ですが、
それは自筆の手紙です。私が尋ねたのは、電子メールのファンレタ
ーです。その日、私は九通の電子メールファンレターをもらいまし

た。」

——知らねエエエ！ってか何で葵^{あい}わかるんだよオオオ！
が、そんな叫びは寺門たちには届かない。

「えー、まあ常識クイズは終わりです。」

その発表に、全員ががっくり肩を落とした。

——たった三問なんん！？

「まあね、これにはちよつと理由がありましてね、えー、作者はギヤグを書くのに疲れているようなので、書くのは無理らしいですねウン、読み返してもね、笑えないという最悪のパターンです。」

——冬瀬^{アイツ}の野郎の仕業かアアア！

コホン、と咳払いをすると、司会者は言葉を継いだ。

「今回は、決勝戦の続き、ファンレター対決です！」

「ここは次回予告の場じゃねエエエ！」

第十訓 最低限の常識は身につけておくように（後書き）

誰か……。ギャグのセンスをください……。

第十一訓 ファンレターもラブレターも同じこと

第一回戦は、通選組の勝利で終了した。

100万ボルトの電撃を受けた、通選組の近藤と、寺門通の銀時は、病院へ即刻運ばれた。

残るのは、親衛隊の新八と神楽、それから通選組の葵と沖田だけだ。なんだか、イマイチしまらないメンバーだななんて思う方は、すぐにその思いを取り払うように。

「では、第二回戦に移りましょう！第二回戦は、ファンレター対決です！」

司会者は、壁に設置してあるモニターへ視線を移した。なにやら、ルール説明が書いてある。

「ファンレター対決ですが、内容がラブレターでも可能です。ルールは簡単！ファンレターで、お通ちゃんのハートをつかんだチームが勝ちです！一人が手紙を書き、もう一人はお通ちゃんへ手紙を渡します！無論、ロマンチックな感じで手紙を渡してもいいですし、ベタに体育館の裏での告白でも構いません。それでは本線、開始です！」

司会者が言い終わると同時に、沖田が葵に耳打ちした。

「閣下、俺が手紙を渡すんで、閣下は手紙を書いて、それを渡す設定を考えてくたせえ。閣下の方が、断然女の気持ちがあわかってまさア。」

今、通選組と寺門通親衛隊の前には、レターセットとやらがテーブルの上に置かれている。

それを聞いた葵は、そうだな、と頷くと、レターセットを手にとった。

一方の寺門通親衛隊は、手紙を書くのも、渡すのも新八であった。新八が思うに、神楽では飛んでもない内容や渡し方をするだろう。それだけは避けたかった。

しかし、代わりに、神楽には手紙を渡す設定を考えてもらっていた。最初は、手紙を書きたいとこねていたが、設定を考えて、と頼むと、「しょうがないアルな。」と不満気に漏らしていたが、まんざらでもない様子だった。

さて、その十五分後、手紙渡しタイムがやってきた。

第十一訓 ファンレターもラブレターも同じこと（後書き）

初めて携帯で投稿してみました。

携帯で投稿するのになれてなかった（というよりも、携帯で小説をかくのに慣れていなかった）ので、ちょっと短いですが（＾|＾；）

ご感想下さると嬉しいです（＝＾エ＾＝）

第十二訓 あ。しにしゃがれコノヤロー

「それでは、手紙渡しタイムです！手紙を渡す方は、前に出てきてください。」

司会者の言葉に、沖田と新八が足を踏み出した。沖田が行く間際、葵はぼそりとその耳に囁いた。

「……失敗したら即首が落ちることになるから気をつけるよ、総悟。」

それを聞いてた瞬間、沖田の着ていた通選組隊服は冷汗でびっしょりぬれる。

「ま、まかしてくだせエ、葵閣下。」

本人は自信満々を装う気だったのだが、その声は震え、怯えがかいわ見えていた。

その一方、寺門通親衛隊では、新八が神楽に念を押していた。

「頼むから、神楽ちゃん、今回だけはマジメにやってね。前回みたいに、ガンダーラ・ブホテルなんて設定にしないでよ。」

フンと鼻を鳴らした神楽は、新八に言い返す。

「ガンダーラ・ブホテルは銀ちゃんが作った設定アル。私じゃないネ。それに、正式名称は『ガンダーラ・ブホテル』じゃないアル。」

『ガンダーラ ブホテル』アル。」

その異議に、新八は「どっちでもいいわ！」とツツコミ、一息つくのと、少しばかり真剣な顔に戻った。

「とにかく、ベタでもいいから、僕がやれそうなのにしてね。いきなりハードル高くして、前回の土方さんみたいにバーなんかにしないでよ。僕には無理だから。」

「お前、やっぱり自分にはあのレベルは無理だって理解していたアルか。やっぱ地味アルからな、お前。」

「いや、何気に刺さること言わないで。」

まあ、そんなこんなで、通選組の手紙渡しタイムが始まった。

ここからはバーチャルでお読みください

舞台は東京、空舞伎町。^{からいぶきちょう} 山に囲まれたこの街には、とある高校生の存在で、必然と死神の通りが多い。

その高校生——ひょんなことから死神代行となった、人一倍靈感が強い少年、沖崎一悟には、想いを寄せている少女がいた。己に、死神の力を与えた少女、寺木ルキ通である。

「つてちよつと待てエエ！」

いいところで、新八のツツコミが入った。文章は、^{えいぞう}バーチャルから現実に戻る。

「何ですか、空舞伎町つて！死神代行つてあの漫画の設定丸パクリじゃないですか！いつか『正解』とか言うつもり！？つてか寺木ルキ通つて語呂悪すぎでしょーが！せめて朽木ル。アカ寺門通のどちらかに……。」

バシユツ。

——え？

宙が裂けるような音がして、思わず身をねじったのが正解だった。新八は、一瞬の出来事に瞬きをしたが、隣にある壁に目を向けると、背中に悪寒が走った。一本の短刀が、壁にぐさりと突き刺さっていたのである。

「……私の発言中には口をはさまないようにすること。わかったか、志村新八。」

鋭い声が飛んできて、新八は、「は、はい……。」と肩を縮こまらせた。

声の方向には、書くまでもないが、葵の姿が。

「まあ、ギャグが成立するのもツツコミの不可欠な存在があるからだから、お前のそのツツコミも認めてやる。が、私がトレーラーしている間は、せめて手を挙げて、私の許可を受けてからのツツコミ

だ。」

再び、大人しく頷く新八。

それを見て、満足そうに微笑んだ葵は、ストーリーを再開した。

ここからはバーチャルでお読みください

——とある日、沖崎は寺木を体育館の裏に呼び出した。

いきなりどうしたのだろう、何か悩み事でもあるのだろうか、と不安に思う反面、まさかの告白？という、淡い期待を渦巻いての、不思議な心持で、寺木は体育館へと急いだ。

放課後、バスケット部の部員がもついなくなつた時間帯の体育館は、妙な雰囲気包まれている。

寺木を待つていた沖崎は、緊張の汗でびっしょりになっていた手に握っている手紙を見つめた。

このまま渡してしまつていいのだろうか。

今までの関係が、最も良い関係だつたのではないか。

この恋文のせいで、今まで気付いてきた絆が、虚しく音をたてて崩れるのではないか……。

深く考え込んでいたが、静かな足音が聞こえ始めて、沖崎はその思いを振り払い、自分を勇気づける。

大丈夫だ、今の俺なら……。

「ごめんね、ちよつと遅れてきちゃつた。」

決まり悪そうに謝る寺木に、沖崎は首を振った。

「心配するな。俺も、今来たところだ。」

そうやって、ベタな会話を済ませたところで、寺木が微笑みながら本題に入ってきた。

「それで……。今日はどうしたの？」

尋ねられて、沖崎はゴクリとつばを飲み込み、頭を下げると、背中に隠していた手紙を手渡した。

「あの、これ……！よ、読んでくれ！」

一瞬、寺木は呆気にと取られていたが、しばらく時間が経って冷静に状況を判断すると、赤面し始めた。だが、ちよつと震える手で手紙を受け取ると、手紙の封を切った。

沖崎は、寺木が手紙の文字に目を走らせている間、ずっと、心臓が脈打つ音に耳を澄ませていた。たったの数分が、まるで何十分かのように感じられた。

と、その時――。

「沖崎君。」

寺木の声がして、沖崎はぱつと顔を上げた。だが、沖崎は、あらぬはずの寺木の表情を見て、目を見張った。――寺木は、泣いていた。「沖崎くんなんて、大嫌い！」
そう言い残すと、寺木は去って行った。

――寺木へ

この前の、死神コンサート、満席だったんだってね。おめでとう。

小さい時から頑張つて、音痴だったのも克服して、必死に練習した成果なんだろう。

昔からずっと、そんな君の姿を見ていた。ずっと、一生懸命に走る君の姿を見ていた。

たまには石につまずいて転んだりしていたけれど、たまには向かい風に吹かれて進めなかったりし

たけれど、それでも負けずに、挫けずに走って行く君の姿が、俺は大好きだった。

今度、俺とどこかに遊びに行かないか？

返事を待ってます。

沖崎一悟

バーチャルからリアルへと戻る。

「……すみません、葵さん。ツツコンでいいですか。」

許可を求めてきた新八に、葵はうなずいた。

「最初の死神設定はどうしたんですか。」

「面倒臭くなってきたので捨てた。学園ラブコメの方が、死神よりもウケるだろう、こういう恋文の場合は。」

そういう葵に、新八はがつくり肩を落とすが、一番疑問に思っていたことを思い出して、寺門と司会者の方へ視線を移した。

「それより、お通ちゃんは何で最後に『沖崎くんなんて大嫌い!』

とか言って去っていたんですか？別に、嫌なことは書いてないと思うけど……。」

ムツとした顔を作っている寺門は、「新二君……。手紙の下を見て。

」と言い、口を閉ざした。

新八は、言われたとおり、手紙を手にとって、最後の一文に目を通した。

P S . オタクの霸王にはなりたいけど、やっぱり女アイドル（寺門通）は無理だわ。せめてあ。しにしやがれコノヤロー。

「……。」

それを読んだ瞬間、全員が無言になった。

第十三訓 知らないところで本音が出ていたりする

「何スカこれエエエ!? え、ちよつ、これエエエ!?」

新八の叫びが、会場にこだまする。ちなみに沖田も手紙の内容に文句を言いたかったが、葵の恐ろしさを知っているので、あえて自分を死なせるような行為はしない。

「葵さん、アンタやる気あるんですか!? 最後のあ。しにしやがれコノヤローって何なんですか!？」

その問いに、葵は人指し指と中指を立てて、ピースをしながら、無表情に答えた。

「卍解。」

「なあにが卍解イイイ!? 折りたい! その人指し指と中指をボキリと折りたい!」

「そんなに折りたいなら折ってやろう。」

不穏な響きの言葉を聞いて、思わず新八は身を固くしたが、それよりも一瞬早く、新八の人差し指と中指が、嫌な音を立てて折れた。

「痛エエエエ!」

「自業自得だ。私の指を折ろうなど百年早いわ、ツツコミしか能がない駄メガネクロマンサー。」

「そこお通語要らないイイイ!」

しかし、そんな新八のシャウトも虚しく、葵は寺門と沖田に顔を向けた。

「それで、手紙なんだが、まだ話は終わっていない。この続きがあるんだースベードー。」

え? と全員が首を傾げる。

これで、終わりじゃなかったのか。

「では、再開。」

葵の声で、文章はバーチャルへ。

——手紙を読み返していなかった俺がバカだった。
沖崎は、寺木が置いて行った手紙を握り締めながら、後悔していた。
最後のPSなんて、書いた覚えが全くない。

……が、誰が書いたのかは、予想がついていた。

志村、新八。

妙にツツコミが多くてシスコンで、ツツコミしか能がない、地味で駄目なメガネ略して駄メガネなのに、銀魂の原作だとなぜだか準主人公というありえない位置に存在する、本当にウザい奴。

そして、何より、寺木に好意を抱いている。

手紙を握り潰すと、沖崎は、志村新八がいるであろう教室へと直行した。

「……ウソよ……。」

教室の廊下にいた沖崎は、思いもよらない声で、教室の扉を開けようとした手を止めた。

「そんな……。沖崎くんが書いてないの？あの手紙！」

「そう。書いたのは僕だ。……書いた、というより、僕はPSを書きくわえたんだけどね。」

扉の隙間から、教室の中をのぞくと、寺木と志村が、何やら言い合っていた。

「私……。沖崎くんに謝りに行かないと！」

こちらに向ってくる寺木に気付いて、慌てて沖崎は廊下から走り去ろうとしたが、その前に、志村が寺木の腕を掴み、寺木を止めた。

「無駄だよ。沖崎さんは、ルキ通ちゃんに嫌われたと思って、精神的な苦痛を受けてる。ルキ通ちゃんが何と言おうと、彼は元には戻らない。」

寺木は、それを聞いた瞬間、魂が抜けたような表情になり、がつくりと肩を落とした。しかし、しばらくすると、鋭い目で志村を睨み、はつきりとした声で言った。

「……私……。私も沖崎くんが好きだもの！沖崎くんが元に戻ろう

が戻るまいが、私は彼の隣にいる！」

そう言い残して、寺木は志村の手を振りきった。

それを聞いた瞬間、沖崎の心に、何かが響いた。身体中が熱くなり、いつの間にか、教室の扉を開けて、志村の前に立ちはだかっていた。

「……沖崎さん……。」

思わぬ人の登場により、志村は一步後ずさる。

「俺も寺木が好きだ！人と人との間柄を、卑怯な手で壊そうとしている奴なんかに、寺木はやれねエ！」

教室の窓から差し込む夕日に、沖崎の亜麻色の髪が反射する。

「沖崎くん……。」

沖崎は、寺木をかばうように、志村と寺木の間にはだかり、志村をギリギリと射るような目で見つめた。

「さっさとここから出て行け。……俺たちの目の前に、二度と姿を現すな。」

拳を握りしめ、歯切りをした志村は、それを聞いて、何も言わずに踵を返し、教室を後にした。

少しの間、沈黙が降臨した。二人は、何も言わず、志村がいた時と同じ活況のまま、動かない。

だが、寺木が、その静けさを破った。

「沖崎くん。ヒドいこと言って、ごめん。」

その言葉に、沖崎は振り返り、涙目の寺木を抱きしめた。

「……大丈夫だ。気にしてない。」

それからずっと、二人は抱き締めたまま、悪（志村新八）がいなくなった幸せを、改めて実感したのであった。

——正解——

「とまあ、こんな感じだ。ハッピーエンドだっただろう。」

そう言い放った葵に、新八はこらえきれなくて反論した。

「何がハッピーエンドですか！僕完全に悪キャラじゃないっすか！最後の『悪（志村新八）』とかもうヒドいの領域超えてます！『妙

にツツコミが多くてシスコンで、ツツコミしか能がない、地味で駄目なメガネ略して駄メガネなのに、銀魂の原作だとなぜだか準主人公というありえない位置に存在する、本当にウザい奴』とかもつとダメですよ！って言うかコレ、完全に葵さんが思ってることですよ？あと最後の『正解』って何ですか！？終わりって意味ですか！？」

葵は、わざとらしく大きなため息をつき、肩のあたりに両手を持っていき、「まったく。」という仕草をする。

「いやに長いツツコミだな。だからツツコミしか能がないと言われるんだ、貴様は。それに、だ。判定するのはお前ではない。寺門だ。……で？どうだった？」

感想を元止めているような葵の瞳に見つめられて、マイクを持った寺門は頷いた。

「通選組の沖崎くんがカツコよくて、とてもドキドキしました又キの○×。特に、『人と人との間柄を、卑怯な手で壊そうとしている奴なんか、寺木はやれねエ！』というセリフには、本当にほれちゃいそうだったーミネーター！」

それを聞いて、満足そうに微笑むと、葵は嘲笑のような笑いを新八に向けた。

「残念だったな、ツツコミマイスター。結構な好評じゃないか。」それから、瞳孔の開いた漆黒の目で睨みつけ、新八を威圧した。

「今度は貴様の番だ。どれだけの力があるか——貴様らに、通選組に勝てる力が存在するのか、見せてみる。」

挑むようなその口調に、新八はこぶしを固め、叫んだ。

「OFCは必ず僕らが頂きます！PSで本音出して、お通ちゃんのことをバカにするような人には、OFCの座は、この僕、志村新八がやりません！」

その刹那、葵と新八の間に、火花が散った。

第十三訓 知らないところで本音が出ていたりする（後書き）

夏休みは終わり、再び仕事or勉強シーズン到来！

今日までは、なんとか一日一話投稿（銀魂春祭りで一日だけサボりましたが……）を目指し、実行してきましたが、それも今日まで？
かもしれません。

更新率がちょっと低くなっていくと思いますが、これからはがんばります！！

ひじせんと葵、よろしくお願いします！！！！

第十四訓 3Dが苦手な人ってたまにいるよね（前書き）

ネタバレ注意です。

ハリポタのファンで、ハリーポッターと死の秘宝Part 2をまだ見てない方は、ここから先はちよつとネタバレしちゃうかもしれないので、まわれ右をお勧めします。

それでもよろしい方は、どうぞ！！

第十四訓 3Dが苦手な人ってたまにいるよね

「では、寺門通親衛隊の志村氏、前に出てきてください！」

葵とメンチを切り合っていた新八はファイと葵から顔をそむけると、司会者の方へ歩いて行った。

——絶対に、葵さんにはこの座は渡せない！！

「……神楽ちゃん、頼んだよ。」

神楽とのすれ違いざま、小さくそう呟くと、自信満々の声が返ってきた。

「任せるアル、ぱつつあん。私に不可能はないネ。」

新八は、頷くと、歩を進めて行った。

ここからはバーチャルでお読み下さい。

ここは、とある裏町の地下にあるバー。

その少年は、仕事帰りに、いつもそこへフラリと現れ、閉店と同時に去りゆく。

——ちよ、神楽ちゃん！？バーはダメって言ったじゃん！！

新八は心の中で叫ぶが、ナレーションは続く。

ここ最近は、「ゲリーポッターと死の秘宝パート2」と仕事の帰りに見に行こうと思って映画館へ足を運んでいたのだが、毎日満席だった。

——ゲリーポッターって何！？

3Dで見ようと思っていのに2Dしか空いていなくて、しょうがないから2Dで見ようと思ったら、いつの間にか空席がなくなっていたり……。

そんなことの繰り返しで、いつまで経っても「ゲリーポッター」が見れないので、今日はしかたなく、バーの方へ行ったのだが、なんと偶然に、その日だけは、「ゲリーポッター」の3Dも2Dも空い

ていた。

——関係ねエエエ!!

「ゲリーポッター」の見どころは、毎回主人公のゲリーがトイレにこもって腹を下してしまうところだ。

——いや、ゲリーってそっちのゲリー!? ちょ、作者!! 下ネタの方は書かない約束でしょ!? ってかこれ下ネタ!? ってか約束した!?

いやいや、心の中で約束したアルヨ、作者は。

——普通の喋り方になってますけどオオオ!?
ヤベ。ゴホン。

ところで、その少年には、好意を抱いている女性がいた。
寺門通というOしだ。彼女も、仕事帰りにこのバーに通っている。
チリンチリン。

バーの扉が開く音がして、ゲリーは振り向いた。

——ゲリーってあだ名なのか!? 僕のあだ名なのか!?

予想していたとおり、現れたのは寺門通——ではなく、チャイナ服を着た、スタイル抜群の美女だった。橙色の髪を頭の両側でぼんぼりにし、少し伏せがちの青い瞳。

「あら、こんにちは、ゲリーさん。」

その美女も、よくバーで顔を合わせる顔見知りだった。名を、ハーマニー・グレンジャーという。

——いや、ハーマニー・グレンジャーってアレか!? あの人なのか!? っていうかそれ以前に何でナレーションが出てくるの!!

ハーマニーはゲリーの隣の席に座ると、笑いながら話しかけてきた。

「しばらく、あなたここに来なかったわね。……何かあったの?」
尋ねられて、答えないわけにもいかないから、仕方なくゲリーはこり返した。

「あ、あの……。ゲリーポッターを見に行こうと思って……。でもまあ、結局は見れなかったけど……。」

「あら、奇遇じゃない。」ハーマニーはきれいに微笑んだ。「今日、

ゲリーポッター見に行つたのよ、私。最寄の映画館に寄つたけれど、3Dも2Dも空いていたわよ。ちなみに私は2D派だけど。」

マジかアアア！と、ゲリーは驚きの叫びを上げた。

——いや、叫んでないから！

ゴホン、とゲリーが咳払いすると同時に、またもや新しい客が。

「やあ、ゲリーにハーモニーじゃないか。」

そう言つて、ゲリーの隣に座つたのは、ホン・ウィズリーという、本好きの赤毛の少年だ。ちなみに、瞳の色は浅黄色で、サド笑いを口に浮かべている。

——完全に赤毛の沖田さんんんん！！え？沖田さん敵陣地じゃない！？

「僕、ついさつきゲリーポッター見に行つただけどき、」

——この期に及んでまだゲリーポッター？つてかゲリーの周りどんだけゲリーポッター好きの人間ばっかなんだよ！！

「いやあ、今回も面白かつたね。というよりも、最高傑作だったんじゃないかな。あれほど面白いのは見たことがなかつたね。特に、ヴォルデモートが灰となつて去りゆくときは、正直、ものすごい爽快感があつたね。」

「ちよつと待ちなさいよ。」そこで、ハーモニーが口を挟む。「確かに今回も良かったわ。でも、一番は『ゲリーポッターとアバカバンの囚人』よ。ゲイリー・ヤングマンが演じていたシリウス・ポワイトなんて最高だったわ。」

「いやいや、何を言ってるんだよハーモニー。アラン・ヒックマンのエスケイプ先生は最高だった。ゲリーを、本当は護ろうとしていたんだよ。あれほどいい先生はこの世に存在しないね。」

「何を言っているの。エスケイプ先生が本当はとてもいい人だったのは認めるわ。それに、アラン・ヒックマンも、見事にエスケイプ先生を演じ切ったわよ。でも、マイケル・バンボンのバンブルドア先生が、ちよつと悪人のように見えたと思うわ。」

「君こそ何を言っているんだい。ハーモニーとホンがキスしていた

だろう。アレを誰が見逃せと？」

「おまえっていうかホンさあ、まだ若いからそういうキスシーンとか好きなのかも知れないけどさ、大人の俺からの立場を考えるとだね、やっぱり一歩足を引いてみると、最初の「ゲリーポッターと賢者の石」とかどうよ？」

「普通にナレーション入ってきたアアア！ってか誰！？一人称「俺」だったよね！？」

しかし、新八の叫びは、誰にも聞こえない。

「いや、ナレーションには聞こえてるっしょ！！」

「そうヨ。銀ちゃんの言うとおりだワ。」ハーマニーが、少し訛りのある口調で言う。「サド野郎なんかに、銀ちゃんや私の思考が理解できるわけがないのヨ。」

「え！？銀さん！？」

「それを言っちゃいけねえぜ。」とホン。「僕はやっぱり今回のが一番だったと思うな。」

いやいや、だから十代後半の年頃の男女はね、そういうキスシーンとかで興奮するんだらうけども、俺みたいな、いうなれば「完璧な大人」や、神楽みたいなまだ純粋な心の少女には、そういうのは通用しないわけ。キスシーンで釣られるほど甘かねーんだよ、俺たちは。

「そうヨ。万事屋がお前らなんかに負けるわけないネ。」

「もう完全にキヤラ戻ってるよオオオ！万事屋とか普通に言っちゃってるし！！沖田さんに至っては一人称「僕」なのに口調が以前と同じイイイ！！」

新八は、言い争っている二人＋ナレーションの目の前で、バンと力ウンターを叩く。

「いい加減にしろオオオ！！お通ちゃんを！！お通ちゃんを早く出せエエエ！」

だが、そんなシャウトも、彼の心の中で虚しく響くだけだった。

第十四訓 3Dが苦手な人ってたまにいるよね（後書き）

お気に入り登録数が22件……。うーん……。
いつの間にやらこんなことに……。

ちよつと、嬉しすぎて涙が出ちゃいます。

評価して下さる方もいらっしゃるし、ひじせんも少しは人気がある
のか……。いや、ないのか？

とにかく、これからもよろしくお願いします！！

第十四訓 キャラは保つように

「オイ、チャイナア。」

ホンは、思い切りハーモニーの胸倉をつかんだ。

「万事屋ナメンだとオ？そりゃこつちのセリフだい。サド選組ナメンなコラア。」

「何だとコラア。」ハーモニーも睨みを利かせる。「お前ら通選組だろコラア。あともう一回行っとくけどなア、万事屋ナメンなヨコアラア。……あ間違えた、コラア。」

ホンとハーモニーは何度が暴言を吐き、言い争いをやめない。見かねたナレーシヨン（俺、銀さん）は、大きな吐息をつき、バーのマスターに目を向ける。

「目を向けるも何も、アンタナレーシヨンなんだからそもそも目とかないでしょーが!!」

寺門が出てこないののでイライラしているメガネが何やら叫んでいるようですが、気にせずにじゃんじゃん行っちゃいましょう。

「待ってヨ、銀ちゃん。」ハーモニーが、口を挟んだ。「ゲリーポッターの中で、どれが最高傑作なのか、これはとても大切な議題だワ。」

キャラを保とうと、口調を元に戻しながら、ハーモニーがそう発言すると、ホンも首肯する。

「そうですね、旦那。ゲリーポッターの最高傑作がいったいどれなのか、僕たちの間で決めようじゃありませんかい。」

「たたくしょうがねえ奴らだな……。俺は「ゲリーポッターと賢者の石」だつてのによオ。」

まあ、ここは折衷案を取って、マスターに聞きますか。

どうです？マスター？

それに続き、ホントハーモニーも、

「どう思いますか？」

とバーのマスターに尋ねる。

いや、尋ねるといふような穏やかな動作ではない。ギラリと狼のような鋭い双眸で、答えるよう、脅した。

「うーん、そうですね。」バーのマスターは、グラスのコップを吐きながら答える。「ゲリーポッターなら、あたしは不死鳥の騎士団とかの方が、断然好きですけど。」

ちなみに、そう答えるのは、紛れもない土方葵だ。

——何で葵さんなんん！？敵陣地の人まで来てんじゃん！！この人たち、人の演技中に何してんのオオオ！！

「いやほらさ、」葵は新八に言う。「ちよつと妨害し……。じゃないや、妨害しよつかな、って思ってた。」

「言い直そうとした割には何も変わってませんけど!？」

ツッコむ新八を、葵は笑い飛ばす。

「アハハ、いいじゃんいいじゃん。気になくてさア。」

「気にしますよ!!こっちはOFCかかって……。」

シャウトした新八の声が、途中から小さくなっていく。それを見て、ハーモニーとホンは、こちらを振り返った。

「どうしたのヨ、メガネ。」

新八は、尋ねられて、自分のテンションの低くなった突っ込みに首をかしげている葵を見つめ、答えた。

「……『アハハ』って、もしかして……。」

その言葉に、当の本人、葵以外の全員がハツとする。

あれ……。お前……。

「葵!？」「あっちゃん!？」

全員の声が重なった。

第十四訓 キャラは保つように（後書き）

「いい加減グリーポッターから離れるよ……。元ネタ知らない人とかいるかもしれないじゃん。」

そう心の中で思いながらも、先月見たハリーポッターと死の秘宝PART2が忘れられず、どうしても続けてしまいます。

これから忙しいので更新遅くなるかも知れませんが、飽きずに見てやってください^^;

土方兄弟：それ前回は言っただじゃん！！

第十五訓 ストレス発散も大事。……やりすぎは禁物。

「ど、どうしていきなり……。」「

驚きのあまり絶句してしまったハーモニーとホンを代わるように、新八が言葉を継いだ。

まるで初めて見るモノのようにじっと見つめられるので、少しばかりいぶかしげな顔をした葵は、首を傾げる。

「いきなりって……。何が？」「

「何言ってるんですか、葵さん！」新八は、目を大きくしながら言う。「今まで性格が変わって、さんざん真選組のみなさんをしごいて来たでしょ！？」

その叫びに、ああ、と葵は合点するような顔を作った。

「閣下のこと？」「

それから、困った表情を浮かべた。

「いや、あれはさ、同じ人格で違う人格だからさ、いつでるかかわらないんだよね。っていうか、あたしもこの頃その存在に気づいたんだけど。トッシーと同じだよ。」「

「いつでるかかわかんない、って……。そんな無責任じゃ。」「

新八は、肩をがっくり落ししながら呟くと、ホンも付け加えた。

「あっちゃん、俺たちやお前に死ぬほど扱かれたんだぜ。いつでるか見当もつかないんじゃ、防ぐこともできねーじゃねーか。」「

「はいはい。たまには扱かれなさい。」「澄ました顔で、葵はそう言い放つ。「トッシーにいつぱい迷惑かけてきたんだから、ちよっとくらいいいじゃん。」「

その発言を聞いて、ホンは葵をまじまじと、不思議そうな瞳で見つめた。

「……あっちゃん、どこか頭の部品でも壊れてるんじゃないかい？それとも、まだ葵閣下の人格が残ってるのか……。」「

確かに、葵が普段、土方の肩を持つことは少ない。それどころか、

「サド選組」として、マヨラーを苛めまくっている。それが、なぜだか今日は土方の味方のようだ。と、その時。

「残念だが総悟、お別れの時間だ。」

さつきよりも低い声音を聞いて、ホンは敬礼した。

「は、はい！葵閣下！」

どうやら、元に戻ってしまったようだ。

……俺もいつまでナレーションでできるかなあ。閣下こうちの葵と一緒にとか、ホントめげそうなんだけど。

「ナレーション。後で扱くから覚悟しておけ。」

ほら。見た？ってか読んだ？読者のみなさま？俺はこんなにもこの人からいじめられてるんですよ。ね？ひどいでしょ？

「……黙れ。」

ほらほら。さつきと違うじゃん。別人じゃん。誰これ？何これ？何

コレ。百景？

「黙れクズ。」

クズとかマジヒドいよ。

え？何？何でいきなり俺が嘆いてるかって？閣下の前にいるのに？うん、まあね、なんかね、人間ストレス発散が必要ですから。後で扱かれても、今は快感がありますから。ええ、そういうことです。

「旦那、これ以上は言わない方が身のためですぜい。扱かれるどころか、殺されやす。」

総一郎君、ご忠告どうも。

「旦那、総悟でさア。」

総一郎君の言う通り、葵は、無表情を貫き通しながらも、「黒いオラ」を発している。

「……どうやら、『例のあの人』ことアオイモートが復活してしまつたようネ。」

ハーマニーは、珍しく肩をビクつかせた。

「……寺門通親衛隊。」

ぼそりと、葵が言った。

「このファンレター戦からは、いったん引いてやる。正々堂々と寺門を落とすがいい。だが、心しておけ。」

葵の漆黒の瞳が、ギラリと光った。

「次の本選では、必ず我ら通選組が、勝利を手に……。」

「あのオ、すみませーん。」

葵の言葉を、誰かが切った。

「バカ!? 葵閣下の言葉を切るとか、ホントバカ!? …… あ、俺もバカか。」

「いや、このタイミングで来ると言ったら……。メガネお待ちかねの……。」

「…… ちょっと、聞きたいことがあるんですけど……。」

こちらに近寄ってくる人物に、全員が振り返った。

そう、メガネお待ちかねの……。

ゴリラだった。

第十五訓 ストレス発散も大事。……やりすぎは禁物。（後書き）

三訓跨って寺門通親衛隊のファンレター。次回も合わせれば四訓です。ね。長いです。……いつ終わるのでしょうか。

近頃は予約投稿（ちょっとやってみたかった^^;）なので、夜中の一時まで起きてるわけではないのですが、それでも眠いです。まだ夜の九時なのに。

講義中に寝ちゃおうっかな。

土方：仕事中に惰眠を貪るたあという了見だ。

冬瀬：何だよ母ちゃん、まだ講義中だぜ？

土方：講義中に寝る奴がいるかアアア！！！！

第十六訓 ゲリーとホン、どちらが好み？

「何でだアアア！！！！何でゴリラこんじやんが出てくるんだよオオオ！！！！」

ゲリーは、出せる限りの絶叫を上げた。

「いつになったらお通ちゃんは出てくるんだ！！ってか何で敵陣地の人たち見事にレッツパーリイしてんだよ！何で前回の本選一本目で気絶したはずの人たちが復活してんだよ！病院行きじゃなかったの！？」

「いや、ゲリーくん。」ゴリラ（なぜだかプラチナブロンドの髪）は、意地悪く苦笑した。「ゴリラと書いて近藤さんと読むのは止めてくれよ。それに、僕は近藤じゃない。ゴリコ・ゴリフォイド。」その発言を聞いて、ゲリーは更に叫ぶ。

「まだゲリポタネタを続けるつもりかアアア！！作者アア！出てこい！今すぐゲリポタの元ネタ知らない読者の皆様方に謝れエエエ！！！！」

しかし、そんな叫びは冬瀬には届かない。

地面に伏し、拳でがんがん床を殴るゲリー。

「いい加減にしろオオ！！お通ちゃんを、お通ちゃんを早く出せと言っているんだアア！！神様、そんなに僕を見捨てたいんですか！！そんなにOFCの座を僕に渡したくないんですか！！そんなに葵さんが可愛いんですか！！」

「それはしょうがないことだぞ、メガネツツコミマイスター。」葵——もといアオイモートは女王の微笑みを口元に浮かべる。「メガネをかけてる奴は、だいたい運が悪い。特にツツコミしか能がなくシスコン、かつアイドルにどっぷりつかっている低知能な十六歳の男ほど運が悪い奴などいやしない。」

「それって一個人を指してますよね！？僕のことですよね！？」叫ぶゲリーを上から見下ろし、アオイモートは言い放った。

「そうだが、それが何か気に触ったか？」

「触りますよ！触りますよどこるか抉えくられましたよ！」

「そうか。なら謝る。」

そう言っておきながらも、頭を一ナノも下げないアオイモートを見て、ゲリーはがつくりと肩を落とした。だが、それはただの「形」だけで、別に落胆はしていない。葵閣下のことだから、謝るなどあり得ない。謝れば世界の終わりを意味することになるだろう。

「さて、ゴリフォイ。ホン。そろそろ寺門——いや、ツウーの登場だ。私たちはいったん引こうか。」

「勝手に乗り込んできて勝手に引くんですか！？つてかツウーって何ですか！？『ジニー』ですか！？」

が、その瞬間——。

感じたことのある凄まじい殺気に、ゲリーは肝をちぢませた。

「前も言っただ。ツツコミは手を挙げて許可を求めてからだ」と

「

いつの間にか、自分の後ろに回り、喉元に刀をぴたりと密着させているアオイモートに、ゲリーは身体を震わせた。

「それからせめて伏せ字にしろ。『ジ——』か『——』だ。」

額に冷汗がうかんでいる新八は、顔を引きつらせながら首肯した。

「ジ——と言えば、」ふと、ゴリフォイが始めた。「あんまゲリーと釣り合わない気がするな。僕からしてみれば、ハーモニーとゲリーが良かったと思うよ。」

そこで、アオイモートがゲリーから刀を離し、反論する。

「確かにカップル的にはそれが一番だったな。役者もどちらも美男美女でお似合いだし。」

そして、考え込む。

「が、しかし、だ。私はホン役のルパート・プリントもなかなか良かったと思うぞ。それに、もしハーモニーとゲリーが結ばれれば、かわいいそうにホンは一人つきりだ。ジ——と結婚するわけにはかないからな。」

アオイモートの発言に、ホンは首を振る。

「僕的には、ダニエル・ラドグリルよりもルパート・プリントの方が好きですぜい。昔はダニエルの方が可愛い気もしたけど。」

「ちよつと待ちなさいヨ。」ハーモニーも口を挟む。「私はベビルが好きだったワ。映画版だとなかなか男前だったワヨ。原作の方だと、『もう一人の男の子』だったらしいし。映画でハーモニーとホンがナ。二に襲われそうになった時に、見事にグリ。インドールの剣でナ。二を斬った時は、思わず叫びそうになったワ！」

「いやいや、それより。」ゴリフォイが再び参加する。「ベビルが一番カツコ良かったのはあの時だよ。ゲリーが死んだふりをした後、ヴォルデホートがバグワーツを侵略しようとして、ベビルが思い切り思ったことを口にした時！あれは見事だったよ！！」

「ま、一言で言うとな。」アオイモートは腕を組むと、言った。

「ゲリー・ポッターは最高の映画、最高の小説ということだな。私は、司馬。太郎の幕末を描く物語も好きだが。結構アレには影響を受けたぞ。」

そこからまた司馬。太郎論争が続き、ゲリー以外の全員が、ギャーギャー喚く。

「ハア……。」

ゲリーは大きな吐息をつく。

「……もうダ……。」

チリンチリン。

しかし、ゲリーが言い終わる前に、バーの扉が開いた。

「すみませ〜ん。お店もう終わっちゃいましたか〜？」

聞いたことのある——いや、今までとてつもなく聞きたかった声を耳にして、ゲリーは振り返った。

第十六訓 ゲリーとホン、どちらが好み？（後書き）

深夜に投稿……。

ついに来ちゃいました。

どうしよう。ホントに講義中に居眠りしてしまいそうです。

感想送って下さるとうれしいです！

この頃ホントめげそうだアアア……。

第十七訓 何時何分何十何秒？

「……お通ちゃん……。」

ゲリーは思わずその名を口にしていた。それを聞いて、アオイモトは眉をしかめ、「ツウーだ。」と指摘する。

「……マスター、まだ、時間大丈夫ですか？」

時計を見ると、すでに閉店時間を過ぎている。しかし、アオイモトは、にこりと笑うと、「大丈夫。」と答えた。

ツウーはかわいくほつと胸をなでおろすと、ホンの隣に腰かけた。そこで、ゲリーはとんでもないことに気がつく。

――僕の隣、どっちも空いてないじゃん！……！！

そう、ゲリーを挟む二席は、ホントハーモニーが占めているので、ツウーはゲリーの隣に座りたくても座れない。

――ちょ、沖田さん！そこどいて下さい！

目で、ホンにどくように合図するが、ホンはゲリーを冷たい目で見つめながら、サド笑いを浮かべる。

――言つたはずだ。僕たちは君たちの妨害をするためにここに来たのだと！

――でも、さつき葵さん引くとか言つてたじゃないですか！

その言葉に、ホンは口笛を吹きながら、気楽に返す。

――あれ。そんなこと誰も言つてないけどな。それとも何？録音でもしたの？つていうか証拠出せよ。いつ僕たちがそんなこと言つた？何時何分何十何秒？

――沖田さん、アンタ小学生か！

こめかみに血管を浮かせたゲリーに、ホンは笑いながら呆れた顔で言つた。

――おいおい、少年心は忘れちゃいけないぜ。銭湯に行つても二百円ではなく半額の百円だ。

――それはもはや犯罪！アンタら本当に警察！？

がつくり肩を落とし、ゲリーはそれ以上何も言わなかった。——いや、言えなかった。敵陣地のメンバーレッツパーリイで、お通ちゃんを見事落とすことなんて、絶対不可能だ。それに何せ、隣に座れないという状況下にいる僕に、OFCの座は……。

おいちよつと待てばつつあん。お前落胆し過ぎだろ。

「……銀さん？」

ナレーシヨンの口調が変わったので、ゲリーはげっそりした顔のまま、天井を見上げる。見上げたところで、何もないのだが。

前回のOFCを思い出せ。前回のマヨラーも、お前と同じく、隣に座れないという状況だっただろ。そして、「田舎者男女が合コンの異様な雰囲気についていけない時の奇妙な連帯感」というテクを駆使し、見事にノリでお通を落とした！！大丈夫だ、新八。お前なら出来る！！

「いや、でも……。」

ゲリーは暗い顔のまま言った。

「……無理ですよ、やっぱり。だって前回は、敵メンバーの人、集合してなかったでしょ？」

「八時だよ！全員。合」じゃねーんだから心配すんな。それに考えてみる。さっきの「田舎者男女が合コンの異様な雰囲気についていけない時の奇妙な連帯感」は、周りの人間が異様なテンション、すなわちジブリネタやゲリポタネタなどで盛り上がり、他の人が全く理解できない話をしている時ほど使いやすい。その証拠に、見てみる、お前の後ろを！

促されて、ゲリーは振り向いた。

アオイモートを初め、ハーモニー、ホン、ゴリフオイは、ゲリポタ談義を未だ続けている。「この頃ゲリーは才能におぼれすぎだ」とか、「最終巻はあんまり好みじゃない」とか、「いやいや何を言ってるんだよ最終巻最高だよ！いずれにせよ、映画は最高だった！」とか、まあとやかく外野から見ればよくわからない話をしている。しかし、その隣で、ツウーはぼつりと静かに座っていた。ちらちら

とアオイモートたちの方を見て、何か言いたげだったが、それもかなわぬまま、沈黙を貫き通している。

ほらな、言っただろ？ 今なら落とせる。確実に。

「……。」

さっさとラブレター渡して、言うもん言えば、それでいい。失敗しても、それでいい。気持ちさえ伝えられれば、それでいい。

その言葉を聞いて、ゲリーはハッと顔を上げた。

……いや、お前ならできるって、信じてるぜ。

ナレーションの顔は見えなかったが、舞台裏で、ゲリーを勇気づけるように微笑んでいるのが想像できた。

——銀さん……。

ゲリーは、ぎゅっと拳を固め、自分が書いた、ポケットにしまっている手紙を手についた。

行ける気がした。今なら、行ける気がした。

心を決め、席からすっと立ち上がると、ゲリーはツウの方へと足を向けた。

「……あの、ツウちゃん。」

呼ばれて、ツウはゲリーを振り返る。

「ちよつと、外に出ない？」

しばらく、ツウは首をかしげていたが、やがて微笑むと、ゲリーと共にバーを後にした。

第十七訓 何時何分何十何秒？（後書き）

タイトル……。小さい時、誰かとケンカする時に使っていた言葉――。ちよつと懐かしいです。

でも、今から考えると、バカバカしい気もしなくはないです。……あの時の自分、いったい何をしたかったのだろう……。――。

第十八訓 ノリの付き合いはダメ

「……ありがとう、連れ出してくれて。」

バーを出て、暗い道を歩いている時に言われたいきなりの礼に、ゲリーは言葉に詰まった。

「私、あまりゲリーポッター知らないから、その……みんなが何を話してるかさっぱりだったの。」

その言葉を聞いて、ゲリーはどぎまぎしながら、ぎこちなく頷いた。「ぼ、僕もだよ。」

しかし、会話はそこでいったん途切れる。気まずい空気が、二人を包んだ。

歩を進めながら、二人は沈黙のまま、何か話のネタになるものはないか、必死で頭の中から探す。

「ねえ……。」

二人の言葉が重なり、ゲリーとツウーはくすりと笑った。

……悪イけど、俺ナレーションパス。こういう甘々な雰囲気無理。

じゃあ、私がやるワ。こういうの得意なの。

ツウーに気付かれないように、ゲリーは姿の見えないナレーションを睨んだ。

——頼むから雰囲気壊さないで!!

それから、気を取り戻して、手に握っている封筒を見つめる。

「あの……!」

持ちあわす限りの勇気を振り絞って、ゲリーはラブレターをツウーに手渡した。

一瞬、手紙を受け取ったツウーは驚いた表情をしていたが、やがてにっこり微笑んだ。

「……読んでもいい?」

赤面したゲリーは、がくがく首肯する。

ツウーが手紙を読んでいる間、生きた心地がしなかった。いろんな

ところから変な汁が出てくる。

——変な言い方やめて！！汗だから！変な汁じゃないから！！誤解を招いちゃうでしょ！！

緊張でブルブル震えているくせに、ツツコミを入れるゲリー。さすがツツコミメガネマイスター、あっぱれなり。

——うれしくねーわ！！

すると、ツウーが顔をあげて、ゲリーの方を見つめた。彼女も、顔が火照っていた。ゲリーは、心臓が更に早く脈打つのを感じた。

「……あの、ゲリーくん……。私……。」

ツウーは、何か言いたげな顔をしていたが、なかなか言葉はその口から発せられない。

「……その、私……。」

大きく息を吸い込み、目をつむると、ツウーは思い切って想いを言葉にした。

「私も、ゲリーくんのが好き！！私も、お付き合いたいです！！」

それを聞いて、ゲリーは思わず、「え……。」「と言葉を漏らしてしまった。あんまりにもあっさりと気持ちを受け取ってもらえたので、驚きと喜びが混在するような、複雑な表情をしていたが、やがて顔がぱあっと輝いた。

「……あ、はい！嬉しいですよ！！」

まあ、こんな感じでゲリーとツウーは幸せになりました。

それから二人の息子と一人の長女が生まれて、もうみんなハッピーでした。

——ゲリーポッターと幸せのラブレター THE END

第十八訓 ノリの付き合いはダメ（後書き）

なんとかゲリポタネタ、終了致しました（吐息）
今度はこんなに長くならによう、気をつけますー；

第十九訓 終わりよければすべてよし

バーチャルからリアルへと戻る。

「……最後、あまりにも適当でしたよね、ナレーション。」新八が、気のめいっただような表情でそう口を開く。「っていうか、一番大切なところでナレーション切り替わるって、銀さん……。アンタどんな神経してんですか。」

呆れた顔で尋ねられるが、銀時は何の悪びれもなく淡々と答えた。

「いちご牛乳みたいな神経。」

「いちご牛乳みたいな神経って何ですか！？っていうかもう最後めちゃくちゃでしたよ！！どうしてくれるんですか！！」

頭に血がのぼった新八に、神楽が、勝手にうんうんと頷きながら言った。

「まあまあそうカリカリするなヨ、新八。結局最後は幸せになれたから良かったアル。だからお前はいつまで経っても新八ネ。」

「それはこの際関係ないよね！？」

すると、今度は葵が口を挟んできた。

「メガネツッコミマイスター、お前、『終わりよければすべてよし』という言葉を知らないのか。三人もの子供に恵まれたんだ。良かったじゃないか。なあ、総悟。」

振られて、沖田は感心するような顔で、首を縦に振った。

「全く持って葵閣下の言う通りでさア。ねえ、近藤さん。」

「うん。いつも葵閣下の言うことは正鵠を射ている。感心するしか他あるまい。なあ、万事屋。」

「何で俺！？」

銀時がそうつつこんだところで、司会者と寺門が始めた。

「えー、まあね、バーチャル選は終了しましたが、どうでしたか？お通ちゃん。親衛隊のほどは？」

寺門は、未だ顔を赤くしたまま、返答する。

「最初が最初だったので、連れ出してくれた時には、いい人だなって思ってたけど、ラブレターを読んで、やっぱり好きになるタイプだったツパーは使いやすい！」

そっという寺門を見て、司会者は新たな会話を振った。

「ではでは、そこまでお通ちゃんをメロメロにした手紙を、読んでみましょう！」

その言葉と同時に、モニターに一枚の紙が映し出された。

しかし、それが目に入ってきた瞬間、新八の心に、「……あれ？」と疑念が芽生えた。

筆跡が、違った。新八は、元来字は下手ではないし、今回は寺門に渡すという特別な手紙なので、極力きれいに書いたつもりだった。しかし、手紙に書きしるされている文字は、明らかに幼稚園児レベルの文字だ。それに、漢字どころかひらがなまで間違っている。必死に解読した内容は、こんな感じだ：

「すりザリン好きじゃない

きのー源さくよんだ

ですノートおもしろい

すーザン・ボー。ズってタレだっけ？スーザン・ボ。ル？」

「……これのどこがいいのか、さっぱりなのだが。」

葵の言葉に、新八自身頷く。

「これ書いたの……もしかしたら、神楽ちゃん？」

それを聞いて、新八は大きく頷いた。

「そうアル。ナレーションが銀ちゃん、新八が役者、そして私が手紙を書いたアル。」

「ダメだよオオオ！それじゃ！」新八のシャウト。「打ち合わせだと、僕が手紙を書いて、渡す役だったでしょ？何で神楽ちゃんが……。」

「だってしょうがないアル。銀ちゃんが戻ってくるって思わなかつ

名前を間違えられた二人は、ユニゾンでツッコんだ。
という訳で、一対一で通選組vs寺門通親衛隊のバトルは、第三回戦へと持ち込まれた。

第十九訓 終わりをければすべてよし（後書き）

ラブレター、お気づきでしょうか？

文章のはじめの頭文字を縦に読むと、「すきです」になります。

これで、お通ちゃんを落としました。

……というより、文の内容を読んでなお銀さんが考えた展開にノレるお通ちゃん、尻が軽いというか頭が軽いというか……。

第二十訓 態度が良くても、点数良くても、職員室に呼ばれたら覚悟しておけ

外出した土方。

向かった先は、警察庁。

みたいな感じです。

屯所を出た土方に待っていた、驚きのこととは……？

第二十訓 態度が良くても、点数良くても、職員室に呼ばれたら覚悟しておけ

——その頃、警察庁長官執務室——

「で？何でアンタが俺を直々にここへ来させた？俺じゃなくて近藤さんにしろ。」

不満気に立っている土方が、デスクに足をどっかりと乗せて椅子に座る男、松平片栗虎に尋ねた。

「……俺は今忙しいんだ。前回の天導衆の件で、アンタが書類を全部真選組に回してきたせいで、副長室は書類の山なんだよ。それぐらいわかってるだろ？それに……。」

「はいはい、愚痴はそこまで。」

土方の話が長くなりそうになったのを悟り、松平は終止符を打つ。そして、大きなため息をつくと、静かに問うた。

「白夜叉のことは、前回話したな？」

眉をあげ、土方は頷く。それを見て、松平は再び言葉を継いだ。

「その件に関してだ。白夜叉、坂田銀時——。お前らの知り合いだな？」

「ああ、そうだ。」

気にいらぬ人間のことをこれから話されるのか、と思うと、どうしても苛々してしまい、行けないと思いながらも、土方は尻ポケットに入れていたタバコを一本口に銜えた。松平は、全く気にしない。「だいたい。」土方は口を開いた。「何で今頃そんな話をすんだ。それ、葵が入隊する以前の話だろ。それに、万事屋は何ら問題性がないとみて、おそらく間違いない。今は自営業して、子供二人雇って、大したことなんぞ何一つしてねー。」

「だが。」松平は鋭い双眸を土方に向ける。「お前から見て問題性がなくとも、天導衆にはある。」

土方は、それを耳にして眉をしかめる。

「……天導衆？」

松平は、珍しく真剣そうな顔をして、首肯した。

「そもそも、白夜叉というのは攘夷派だった。攘夷戦争に参加し、数々の天人を斬ってきた。ソイツのおかげで、俺たちは少なからず命拾いした。もし、攘夷戦争がなければ、地球は完全に天人のものとなり、俺たちは今頃奴隷扱いされているか、星になっているかのどちらかだ。今でさえ、地球人は天人にヘコヘコしながら生きてるんだからな。」

執務室の中央――すなわち、松平の目の前においてある椅子に腰かけると、土方は煙を口から吹かした。

「だから？ 野郎に『ありがとうございました。 By キヤバクラ好きの警察庁長官』とでも礼を言えと？」

「違う。」

否定した松平を、土方は片眉を上げながら見つめる。いつもなら悪ノリしてくるはずなのに。

「俺が言いてえのは、白夜叉は俺たちの恩人とも違わねエ人物。しかし、天人――すなわち、天導衆から見れば、白夜叉は危険このうえない。しかも、長らくの間、活動を休止してきた。だから、天導衆は考えたのさ。……奴は、今潜伏期間中で、暫くすれば、大量の破壊兵器を用いて、自分たちを滅するために襲いかかって来るだろうと。」

「ただの勘違いだろ。普通は、活動してねーんなら、攘夷との関係はなくなっただと考えるのが妥当だろ？」

松平は吐息をつく。

「天導衆はネガティブにしか考えられないんだよ。マイナス思考なの。」

「ああ、そ。」

フザけた口調の松平に、土方は顔をそむける。

「それで？ 結局アンタは何をしると？ 何のために、俺をここへ？」

その言葉に、松平の瞳が黒光りした。

「本題に移るぞ。」

それを聞いて土方はツッコむ。

「おせーわ。移るまでに何十行使ってたよ。」

が、松平は気にせず、土方に口を開いた。

「……天導衆から命令があった。」

不穏な響き。

土方は、少し身を固くした。

「天導衆は……。なんて？」

尋ねた土方に、松平は一つ間を置き、それから大きく息を吸うと、静かに告げた。

「白夜叉……暗殺。」

第二十訓 態度が良くても、点数良くても、職員室に呼ばれたら覚悟しておけ

「はぁ？」と思われる方も多いと思いますが、長々とした目で見てやっってください……

第二十一訓 二度あることは三度ある（前書き）

学校に向っている途中、朝電車に乗ったらガラガラ。電車の中で会った講師にあいさつすると、笑顔で「おはよう」と返してくれた。

……今日はいいい日になりそうだな、と思ったけれど、そもそも連休なのに今日学校があつたこと自体、不幸だったことに気が付いた。

ホントに最悪です。なんでほかのみんな学校ないのに私んとこだけあんの？

ちよつと先生、どうかしてください。

連休を……誰か私に三日間の連休をくれエエエ！

冬瀬志保の無駄に長い独り言

第二十一訓 二度あることは三度ある

土方は、その言葉を聞いた瞬間、絶句した。

一瞬、知り合いの銀髪の顔が脳裏に浮かんだが、すぐに首を振ってそれを追い出した。

「あゝ、とつつあん。」呆れた顔で、松平を見つめる土方。「白夜又暗殺？冗談じゃねー。気に入らねー奴とは言え、見知った顔を殺すなんて無理だ。」

そう言う部下の顔を見て、真剣そうな表情で松平は口を開いた。

「ああ。冗談だ。」

それを聞いて、土方はずっこける。

「前回の件はいつたいなんのためにあつたんだよ！読者が『オイコレなんだよ！次回のやるやる詐欺だったのかよ！』っていう苦情が来るぞ！！」

「いやだからさ、」いつもの顔に戻った松平。「作者が『白夜又暗殺とかおもしろそうじゃね？』とか言う理由からいきなり書き出したんだけど、投稿していなかった二日間、よく考えてみると次の話につなげずらいじゃんってことに気が付いてさ、結局はおじやんなんだよ。」

「ふざけんな！！葵と万事屋をどうやって両方助けられるか考えた脳に送ったグルコース返せコノヤロー！！」

「修飾詞なげーよ。」

軽くつつこむ松平。それに対して、怒り狂い、血管が浮いている土方。

さすがに今回はおいたが過ぎると思った部下は、上司に更に文句を言おうとしたが、その前に松平に止められた。

「愚痴はそこまで。……で、いきなりここから本題の本題に移る。」土方は、またキャバか？とため息をつく。

「いや、今回はキャバじゃない。おじさんは行きたいけどね。ま

たお前らに文句言われること山のごとしだからおじさんやめよくよ。だっておじさんいい子だもん。」

「一人でコントしてろ！俺はもう帰る！」

イライラを先ほど以上に募らせた土方は、踵を返し、松平に背を向けるが、その次の瞬間、上司が発した言葉に顔を引きつらせた。

「……今、葵どこにいますか？」

屯所にいる、と答えようと思ったが、松平がわざわざ聞くということには、何か裏がある。頭をフル回転させ、得た結果が……。

「……総悟たち、何か企んでいやがったな……。」

最近の部下たちの不可解な行動。自分たち兄妹に隠れるように、陰でコソコソしていた、近藤を含める隊士全員。

嫌な予感が、脳裏を過った。

「……何でとつつあんがそんなことを。」

不思議に思ったので口にする、松平は微笑した。

「おじさんもね、どちらかっていうと今の葵の方が好みだね。昔は気に食わないことがあると、いつでもガシガシ踏みつけられてたから。今は何があっても『人生の師』として崇めてくれてるし、現在の状態を保持したい訳で。」

そこまで言ってから、その瞳がギリリと光を反射した。

「……今ならまだ間に合うかもしれないぞ。場所は北。丸公園。」

それを聞いた瞬間、土方は九。下へ駕籠屋を走らせた。

「……たく、作者も読者の皆様に謝りやがれ。無駄な期待させてしまった代償はデケーぞ。」

松平の独り言が、警察庁長官執務室の何とも言えない空気に溶けた。

「えー、では本戦三回目に移らせてもらいます！……」
所変わり北。丸公園。

司会者の声で、会場のボルテージは一気に上がる。

「今のところ、一対一、この三回戦にて、決着が決まります！」

その言葉で、葵と新八の間で火花が散る。

——葵さん、僕は絶対に負けませんからね！お通ちゃんを愛してもないような人（それも女じゃん！）にOFCは渡しません！！
——それはこっちのセリフだ、メガネ。この私が手に入れようとしている座を奪い取るなど、取り柄がメガネ以外にないお前になど不可能なこと。……OFCの栄冠は、私が頂く。

しかし、そんな二人のメンチの切り合いも、司会者の一声で終了した。

「両チームのリーダーは、こちらへきて下さい！」

最後に一度だけ睨みを利かせると、二人はそれぞれ呼ばれた場所へと足を進めた。

二人が対峙する場所は、観客全員が試合を見られる、少し高い場所に位置しているため、階段を上らねばいけない。

階段を昇りきったところで、新八はとんでもないものを目にした。

「……何持つてるんですか、葵さん。」

葵が持っていたのは、二本の刀。どうやら、司会者から渡されたらしい。腰に差していたもう一振りの刀と和泉守兼紗駄は、葵の足もとに置いてある。

と、その時、葵の前に立つた新八の前に、葵が、持っていた刀の一本を放り投げた。

それを見て、新八は蒼白になった。

「……え？ウソ。斬り合いじゃないよね。葵さんとの斬り合いなんて、死んじゃうもんね。……うんうんうん、そくだよ。絶対にそくだよ。」

「あーぱつつあん。」一人で合点する（正確に言えばしようとしている）新八に、階段の下から銀時が声をかける。「刀持つてるんだから斬り合いでしょ。男なら根性^{ガッツ}つてもんを見せる！！」

「そうネ新八！」と神楽も拳を固めてみせる。「お前なら出来るって信じてるネ！たかが大食い大会アル！ちよろいものネ！」

「そりゃそくだよ、神楽ちゃんは宇宙並に膨張する胃の持ち主なん……。」

が、そこまで言った時、新八の言葉が止まった。

そして、もう一度考え直す。

——なんか、「大食い大会」って聞こえた気が……。

思わず司会者を振り返ると、司会者は頷いた。

「えー、では本戦三回目のルールへ移ります！本戦三回目は、大食い大会です！」

そう発表する司会者と、平然とそれを聞いている葵に、新八は驚くほかない。

——何ゆえに大食い大会イイイ！？

そんな新八の疑問に答えるように、司会者は言葉を継ぐ。

「お通ちゃんとデートする時に、もしもお通ちゃんが、『ごめん、私これ食べられないんだ。食べてくれないかなあ？』なんて言われた時、もしも既にディナーを食べ終えていたら、どうしますか？お腹一杯でも、食べるしかないですね。そんな時に、誰がお通ちゃんが食べられないものを食べられるのか、それを見極めるための最終戦です！」

——それってリーダーがどれだけお通ちゃんとの間を進展させたときの場合！？

しかし、新八のシャウトも虚しく、第三回戦は幕を開けた。

第二十一訓 二度あることは三度ある（後書き）

冬瀬志保、暴走 の巻き（by ちびまるこ）

白夜叉暗殺、考えればホントにつなげずらい話です。が、いつか必ず書いて見せようではないか！！

葵：読者の皆様方の期待（いや、期待されたのか分からないけど）を裏切ってくせして、何を開き直ってんのよオオ！！
冬：グフオツ。

サブタイは、第三幕の「作者は身勝手なものだ」の二度あることは三度ある、です。二度あることは三度あるしてほしくない二度あることは三度あるですね。

……二度あるということは、三度ある可能性がありますよ……？
土方：オイ！

第二十二訓 嫌いなものは無理に食べないように(前書き)

この頃、土方さんが出てこなくてさみしい……。

第二十二訓 嫌いなものは無理に食べないように

司会者が、椅子に座り、目の前のテーブルの上に置かれている数々の皿をじつと見つめているのを見ながら、口を開いた。

「それでは、ルールの説明です！ルールはいたって簡単！今持っている刀をフォークとナイフの代わりにして、並べられている、これ（・・・）を、出来る限り食べてください！」

新八は、司会者が言った「これ」を見て、嘔気が襲ってくるのを感じた。

並べられているこれ——土方兄妹にとっては新聖なるもの。が、常人から見ればただの不摂生極まりない、いわば「犬の餌。」——マヨネーズであつた。

「ってどんだけ葵さんよりイイ！？」シヨツクのあまりシャウトする新八。「開催者どんだけ葵さんよりなんですか！？マヨネーズをそのまま食べるとかありえませんか！」

隣を見ると、銀時と神楽も目をひんむいていた。どうやら、大食い大会ということはすでに知っていたマヨネーズを食すということは寝耳に水だつたらしい。

「…………どうしよう…………。」新八は頭を抱える。「土方さんじゃあるまいし、こんな大量のマヨネーズを胃の中に流し込むなんて…………。到底無理な話です。」

が、そこまで新八が言った時、さっきまで最終戦の内容に瞬きをしていた銀時が、ニヤリと笑いながら、葵を顎でしゃくった。

「おい、ぱつつあん。どうやらマヨネーズ苦手なの、お前だけじゃねーらしいぜ。」

「は？」と、少し間抜けな顔をして、新八は銀時の視線の方向へ目をやった。そして、驚く。

なんと、葵が大量のマヨネーズを見て、喜ぶどころか、まるで汚物を見るかのように顔を引きつらせていたのだ。

「……あ、葵さん。」気になって、尋ねてみる。「……そこ、飛びあがって嬉しい嬉しいって叫ぶところでしょ。どうしたんですか。」
「う、うるさい。」葵は不快そうな顔をして、マヨネーズを睨みつけた。「マヨネーズなどという調味料を、そもそも主食として大食い大会に出すのがおかしい。マヨネーズそのまま食べるとか、ありえない。」

「ええええええええええええ！？」

「おかしい。……熱はないようであらう。」

「……あの、葵さん。マヨネーズ、好きだったんじゃないですか。」

困った奴らだな、とでも言うように、葵は首を振った。

「いやいやいやありまくりですよ！土方さんと仲良く土方スペシャル食べてたじゃないですか！」

378

「以上！」

しばらく、無言の間。

その間、新八は、心の底から、希望が湧いてきたのを感じた。これで、寺門通OFCの座を手に入れられる……。そう思うと、興奮して、心臓の動悸がおさまらない。

が、それに対して通選組。

——マ、マズイイイ！

彼らは、絶望の淵になっていた。あと数ミリ足を動かそうものなら、ステュクスの河行き間違いなし。

——どうしよオオオオ！運営側に賂^{まい}まで渡して、葵閣下を勝たせようと画策したのにイイ！！だからマヨネーズにしたんだよ、大食い大会！なのに何でエエエ！？

——どうやら俺たち、完全に見誤ったようですね。毎日真選組で、何の表情も変えずに三食とも犬の餌を食い続けていると思っていたら、まさかの展開でさア。

沖田と近藤は、顔を見合わせ、顔を真っ青にしている。

——もしこれで葵閣下勝てなかったら俺たちどうなるんだよ！また毎日扱かれるのか！？

——もう覚悟していた方がよさそうですね。……俺たちに、もう明日はないと。

二人は、うつむきながら、残酷につきだされた現実に、打ちのめされた。

第二十二訓 嫌いなものは無理に食べないように（後書き）

昔書いた小説に評価が！

とても嬉しいです！

いつの間にか終わってた小説のお気に入り登録が、少しとはいえ増えていたり、近頃嬉しいことばかりがおきます（連休がないのは例外ですー；）

しかも気づかないうちに、この小説もお気に入り登録が26件に！！いつもこんな拙い文章の小説を読んで下さる皆様方、本当にありがとうございます！！><

第二十三訓 私の辞書に不可能という文字はない（ナポレオン・ボナパルト）

話が全く進みません……

今度からはもっと進んでから投稿するようにします——；

ピッポッパッ。

トゥルルルルル……。

トゥルルルルル……。

駕籠屋の中、発信音が響き渡る。電話の表示画面には、「総悟」と書かれている。

「……あんのやん総悟……！」

真選組副長、土方十四郎は、血走った目で、穴があくほど画面を見つめる。

と、その時、表示が、「発信中」の文字から、「通話中」へと変わった。その刹那、土方は、運転手が震えあがるくらいの大声で、電話の相手を怒鳴りつけた。

「総悟オオオ！ テメエ、葵をオオオ！」

「……心配いりやせんぜ、土方さん……。」

いつもは聞かない、元氣のない部下の声を耳にして、土方まで怒る気が失せた。

「……今、北。丸公園か。」

一瞬の間があり、それから沖田の声。

『そうでさア。……葵はそっくり葵閣下のままお返ししやす。もう、俺たちに明日は……ないんです。』

いったいなんのことを言っているんだ、と思っただ、土方はムツとした表情のまま、沖田に言った。

「俺も今そっちへ向かっている。いいか、葵に余計なマネさせたらぶっ殺すぞ。」

『ヘイ。』

ブチッ。

電話を切ると、土方ははあっと大きな吐息をつき、頭を抱えた。

「では、本戦第三回戦、スタートオオ！」

司会者の声で、恐る恐る新八と葵は、目の前にずらりと並べられているマヨネーズに手を出した。

——ってか刀をフォークとナイフの代わりにするっていうのは無理があるだろ。

銀時が、ぎこちない二人の動きを見ながら、心の中で呟いた。

——刀を口の中に入れろってか？刀をマヨの中にぶっさして、それを口に運べってか？

新八と葵の手は、銀時の呟きと共に止まった。二人とも、顔が真っ青だ。

「……無理ですって、こんなん食べるの……。」

ぼそりと言った新八に、葵もぎこちなく笑った。

「とうてい不可能な話だな、貴様では。」

「……貴様ってどういうことですか。僕には無理でも、葵さんになら出来るって言うんですか？」

ちよっと冷たくつつこむ新八。それに対して、葵は、冷汗を浮かべながらも、余裕の笑みを口に浮かべた。

「私の辞書に、『マヨが嫌い』という文字はない！！」

そう言ってから、刀を手にとると、葵はマヨネーズを皿の上に盛り、刀でそれを救ってから、そばに置いてあったパンに塗った。そして、迷いなく食べる。

「……いや、さっきマヨ食べたくないとか言っていましたよね。」

だが、新八も、ここは意地を見せるしかないと決意し、大きな深呼吸をすると、マヨネーズを口へ運び始めた。

「おーっとオオ！？今まで何の動きも見せなかった二人が、マヨネーズを……！」

新八と葵は、これでもかというほどの神速で、マヨネーズを皿にのせてはパンに塗ったくる。さすがに口の中に入れている時と、喉に流し込む時は冷汗を掻いているものの、そのスピードは二人とも劣らない。

「……近藤さん。」ぽつりと、沖田が言った。「コレ、葵閣下でも勝てるんじゃないですかイ？」

それを聞いて、近藤も、葵がマヨネーズを食らう姿を見つめながら、真剣そうな表情で頷いた。

「ああ。これならば、葵閣下が……いや、葵くんが勝つはずだ。」

少しばかり、希望が芽生えた二人。

そして――。

次に取った行動は、北。丸公園の入口へと急ぎ、土方を足止めすることだった。

第二十三訓 私の辞書に不可能という文字はない（ナポレオン・ボナパルト）

歴史上の人物の名言をサブタイにするのは、これで二回目ですね。

ナポレオンの名言、グサリときます（いい意味で）

やっぱカッコイイです、ナポレオン。

第二十四訓 負けず嫌いっていつのもいいかもね（前書き）

テンポのいい曲聞いていると、キーボードを叩く速度がメチャクチャ速くなりました。

ちなみに、今はRADWIMPSの「君と羊と青」を聞いてます。
N。Kのサッカーの主題歌（？）です。

第二十四訓 負けず嫌いつていうのもいいかもね

——く、苦しい……。

これが、只今マヨネーズを口に運び続け、動きを止めようとも止めることができない、新八と葵の率直な感想だった。

何度も言うが、二人ともマヨネーズが嫌いなわけではない。だが、そのままマヨネーズを主食として食べていると、さすがに嘔気が襲ってきた。

二人とも、同時に刀を床に置いて、手を口元に運んだ。

——さすがにもう無理……。

そう言いながら、新八と葵が諦めかけた時。

ふと、葵の瞳に、沖田と近藤が、全速力で出入り口へ向かっているのが見えた。自分が大変な時にアイツら何してんだ、と後で扱こうと決意したが、そんなことは、今はどうでもいい。とにかく、食べれるだけ食べなければいけない。そう思いながら、再び刀を手にとる。

「えー、制限時間は十分です！今、五分経ちました！あと半分です！」

今更司会者が制限時間なんかを発表する。遅いとばかりに、葵の方からマヨネーズのボトルが飛んできた。しかし、それでも司会者はめげずに勤めを果たす。

「今のところ、両チームと同じ量のキュー。ーマヨネーズのボトルを完食いたしました。十本です！三十秒に一本というところしよるか？常識では考えられないスピードです！！」

が、その時。葵たちは、刀を手放し、腹を抱え、地面に伏した。二人とも、腹が妊娠七カ月並みに腹が膨れている。それもそのはず、マヨネーズだけではなく、パンも同時に食べていたのだから。

「葵さん……。ギブのようですね。」そう言いながら、新八は肩で息をしながら、刀を握った。「でも、僕はまだまだ行けます。どれ

だけお通ちゃんが残したマヨネーズが大量でも、僕はその分だけマヨネーズを食べ尽すのみです！」

一瞬、葵の眉がぴくりと動いた。

「……挑発のつもりか、貴様。」

新八は、それを聞いてニヤリと笑う。

「そう聞こえませんでしたか？」

再び、葵の眉が過敏に動いた。そして、葵は妊娠七カ月の腹のまま、立ち上がり、そばにあった刀を取った。

「いいだろう、その挑戦、受けてやる。しかし、負けてから、後悔はするなよ。」

冷たく笑った葵に、新八も嘲笑を浮かべた。

「望むところです!!」

その言葉と同時に、二人の刀が動き、マヨネーズのボトルへとつつこんだ。

キキツ。

駕籠屋が止まった瞬間、土方は二千元、運転手に渡し、「釣り銭はいらねー。」と言いつつ、玉葱の建物へと走り去っていた。

そして、車に一人残された運転手の、小さな呟き。

「……お釣りっていうか……。乗車賃三千九百円なんですけど……。」

「

建物の前で、土方は予想外の人物たちに邪魔されていた。

「……総悟。葵はそっくりそのまま返すんじゃないかったか？」

そう言われて、沖田はニヤリと笑った。

「そのつもりだったんですけどね、明日の朝日が見え始めたんで、やっぱり葵は葵で返そうとおもいやして。」

それから、土方はもう一人に視線を移した。

「っていうか、何でアンタもいるんだよ。」

近藤は、歯を見せて笑うと、口を開いた。

「俺も葵くんには扱かれていたからな、元に戻ってもらわないと困る。」

土方は、それを聞いて、鋭い双眸で二人を睨みつけながら言った。

「近藤さん、総悟、そこをどけ。」

「嫌でさア。」「嫌だな。」

ユニゾンで返されて、土方は強行突破に出た。

「OCFの栄冠は、私ノ僕のだアアア！」

その叫びと共に、新八と葵の、マヨネーズを口に運ぶ速度はさらに上がり、それに連れられるように、観客席のボルテージも上がる。

「おおーっと！？ラストスパート一分です！残り五十九……。五十八……。」

カウントダウンが始まる。せかされて、さらに二人の動きは速くなっている。

——負けられない！！

二人とも、意外にも負けず嫌いだったため、ラストがどんどん盛り上がって行く。

「あと十……。九……。」

「葵イイイイ！」

どこかで聞いたことのある声で、葵と新八は思わず手を止め、顔を上げた。

すると、今度は違う声が。

「閣下！食べて下せエ！俺たちの未来は、アンタにかかってんでさア！」

何をいつているのかわからなかったが、何が起きたのか分からず、呆気に取りられていた新八を置いて、葵は再びマヨネーズを口に運び始めた。

——しまった！

それに一瞬遅れて、新八も目をマヨネーズへと戻した。

「いつけエエエエ！葵閣下アアアア！」

近藤の叫び声が聞こえた、その時。
「……」。――……。終了です!!」

第二十四訓 負けず嫌いっていつのもいいかもね（後書き）

次回……。

第四幕最終回！！

……かも（
↑

第二十五訓 貸し借り無し（前書き）

山崎退の扱かれ日誌（続編）

気絶したので何日目かわからない日目

目を覚ますと、見慣れた天井が視界に飛び込んできた。それから、いつも見る人たちの顔。

局長、沖田隊長、それから葵……閣下……。

俺は、企みがバレたのかと飛び上がり、葵閣下の目の前に土下座した。

「すいまっせーん！いや、もうマジで次からはあんなこと考えませんから！！葵閣下を元に戻そうなんて考えませんから！！局中法度に二度と背きませんから！！」

大声でそう言った俺に、葵閣下は、普段とは違う、少し高めの声で、「アハハ！」と笑い始めた。

「やだなあ、そんなにあたし怖かった？まるで独裁者に対する態度じゃん！！」

いや、閣下って呼ばれてる時点で独裁者……。とツツコみたくなるが、俺はそんなバカなマネはしない。したところでぶん殴られて殺されるのがオチだ。

「オイ、山崎。」隊長が、隣から口を挟んだ。「心配すんな。コイツア真正銘のあっちゃんでイ。」

その言葉に、俺は、思わず「は？」と漏らしてしまった。

「いやだから、」今度は局長が言葉を継いだ。「葵閣下じゃなくて、今の葵くんは、昔の葵くんだ。」

それを聞いて、俺は、ニツコリ笑いながらピースする葵閣下に目を向けた。

「いつもどおりの葵です。アハハ。」

俺は、シヨックのあまり、再び気絶した。

第二十五訓 貸し借り無し

それから数日後の朝。

いつもと同じように、銀時はデスクに足を放り投げ、神楽はソファでゴロゴロしていた。

まだ、新八は万事屋に来ていない。

「……この頃来ないアルな、新八。」ぼつりと、神楽が呟いた。「もしかして……。まだあのことに気にしているアルか？」

あのこと——OFCの結果である。神楽が口にした新八の状況を考えれば、どちらが「公式」の賞杯を受けたのかは、書くまでもない。「ったくよオ、」今度は銀時だ。「動きださねーと明日は始まらねーってことを知らねーのか？アイツは。さつさと来ればいいのによ。」

「そう、もしない相手に小言をいいながら、デスクからジャンプを取り出す。」

神楽は、「さつさと来ればいいのに」という銀時の発言に少しばかり眉を上げた。いつもなら、「あんなメガネ来なくていい。」とか言い放っているくせに、今日ばかりはどうやら違うらしい。と、その時。

「……おはよーござーます……。」

生気のない声が、万事屋の玄関から聞こえた。神楽はバツと立ち上がり、銀時はゆっくりとジャンプから目を上げる。ガララ、という音とともに、応接間の扉が開いた。

「新八！」

神楽が、新八を見て顔を輝かせた。

だが、新八は目の下を真っ黒にして、ずっと俯いている。

「……新ハイ。」銀時が、再びジャンプのギンタマンのページを開きながら切り出した。「葵、『公式』の座に座らなかつたらしいぜ。」

その言葉に、新八は顔を上げた。その表情には、少なからず驚きが含まれていた。

「どうやら、総一郎の話によると、葵は別にOFCになるために大会に出場したんじゃないらしい。ただ単に、葵閣下を成仏させるための儀式だったわけさ。」

それを聞いた新八は、「土方さんと同じこと言っんですね。」とぼそりと言う。

「『自分がOFCをとったせいで、もしも新八くんが嫌な思いをしているなら、謝つといてください。』って葵に言われてな。ついでに、こんなものまで。……おらよ。」

銀時は、そう口を開いたと同時に、どこからか取り出したのか、手に持っていた小さなカードを新八に向って抛った。

コツンと音がして、カードは新八の頭にぶつかり、地面に落ちた。

「何スか、これ……。」

そう呟きながら、新八はカードを拾い上げる。

そして、目を大きく見開いた。

「ウソ……。何で、これが……。」

銀時は、ニヤリと笑う。

「これで、貸し借りはなしだって言ってたぜ、マヨラ兄妹。きょうだい」

新八は、それを耳にして、「ちよつと真選組屯所に行ってきます!」と残すと、銀時たちに踵を返した。

その声には、さっきまでのズタボロの影はどこへやら、代わりに元気が満ち溢れていた。

「……貸し借りはなし、ね……。」

ぼつりと言って、銀時は微笑んだ。

第二十六訓 やっぱ残るもんは残る

「はい、じゃあ今日の会議始めます。」

局長、副長、副長補佐、そして十人の隊長が静かに座す部屋。ちなみに、副長は魂が抜けたただの抜けからである。理由は——ご想像がつくだろう。

「えーと、近頃の地殻変動に付いてなんだけど、嫌な噂が流れててさ……。」

そこまで言った時、山崎がひよつこりと縁側から顔を出した。

「すいません、会議中に。玄関に、これが置いてありました。葵さんあてです。」

そう残して、そそくさと去って行った。山崎が自分の代わりに置いて行ったのは、一枚のカードと、小さな紙切れ。

「情けなんかかけずに、次回は本気で闘いましょう。それまで、これは要りません。」

きれいな、しかし、ぶっきらぼうに書かれた文字の主を、葵は一瞬で察知した。

小さく微笑して、葵はカードを手にとる。

——了解、新八くん。

心の中で呟いて、葵はカードを懐にしまった。

「じゃあ、会議再開します。」

「あーもう俺生きてても意味ないわ。もう俺死ぬわ。もう切腹するわ。」

額を出血させながら、土方は頭を屯所の柱にぶつける。

ちょうどその時に廊下を歩いていた沖田が、その姿を見て、投げかけた。

「切腹すんなら、俺が介錯すんで心配しないで下せエ。ついでにあつちゃん俺が嫁にもらうんで、こっちも安心していいですぜ。」

しかし、いつもはそんな発言に怒りを爆発させる土方であったが、今日は柱にガンガン頭をたたき続ける。

「……隊長、もうダメですよ。副長が回復するには、もうしばらく時間が必要ですって。」

隊員の一人がそう言うのと、沖田は眉をあげ、「つまんねーな。」と呟いた。

「ああおおい……。戻ってきて……。戻ってきてくれエエエ……！」

土方の絶望の声に、ゾロゾロと隊員たちが集まってくる。こんな副長は見るのが初めてだ、と皆がそろって口を開いた。

すると偶然、葵がそんな土方の前を通りかかった。ちょっと眉をひそめ、兄の肩に優しく手を置く。

「……トッシー、あたしここだよ。」

しかし、土方は葵に首を振る。

「お前じゃないほうだって……。」

「いや、閣下もあたしだからね。ってかヒドいよ。あたし必要とされてない？」

冷たくつつこむ妹に、兄は答えない。

しかし、その時、葵のポケットに入っていた携帯から、どこかの魔法少女アニメの主題歌が流れてきた。

葵は、隊員たちが茫然としてそれを見るのも気にせず、携帯を取り出した。

「私だ。」

至極冷静な葵の言葉を聞いた刹那、土方の目に生気が戻り、土方は葵に抱きついた。

「葵イイイイ！俺はお前を待っていたアア！」

それから一日中、葵は涙目の土方に抱きつかれたまま責務をこなした。

「そんなにあたしが嫌なのかなあ。」

沖田が土方を引き剥がしてくれたおかげで、今、葵は部屋で一人きりで過ごしている。それから、ふと思い立ち、部屋中を埋め尽くしているポスターを、複雑な表情をしながら、一枚一枚丁寧にダンボールの中にした。

しかし、数枚だけは壁に残しておく。

「……なんか、妙な感じがするな。」

独り言をつぶやき、葵は苦笑した。

「これ、全部あたしが買って張ったのか……。」

やっぱりあたしでも好きだな。いや、もともと神経がおかしいのか、とか思っていると、葵の目は卓の上に置いてある一枚のカードへ行った。

——あれは……。

カードを手に取り、じつくりとそれを見つめた。しばらくしてから、今度は苦笑いではなく、微笑みを浮かべる。

そして、画鋏でカードを壁に飾った。

——これでよし。

葵は、満足する。

それから少しの後、山崎の声がした。それと同時に、叫び過ぎてガラガラになった土方の悲鳴。

「葵さん！副長が壊れましたアア！助けて下さいイイ！」

「葵イイ！どこだアア！」

ハア、と苦笑しながらため息をつく、葵は声のした方へと足を向けた。

「はいはい、今行くよ！」

部屋の壁に残されたカード。

「寺門通 公式ファンクラブ会員証

No.0000002 志村新八」

そう書いてあるカードには、微笑んでいる新八の顔があつた。

第二十六訓 やっぱ残るもんは残る（後書き）

第四幕終了です!!

今回は完全なるギャグパートでしたね。

今回はシリアスになってほしいな。ギャグ書いている時の反動がすごいです。死ぬほどシリアスが書きたくて仕方ありませんでした；

という訳で、第四幕、いかがでしたでしょうか？

最終回は、二訓に分けてしまいましたが、なんとか終わらせることができました……。

それもこれも、読んでくださっている皆様方のおかげです!! 本当にありがとうございます!! ><><><><

次は、おなじみのエピソードでシメたいと思います。

とはいえ、まだグダグダになるのは見えています……。（↑オイ

オマケ

えーと、もう見た方もいらっしやるかもしれませんが、神楽vs葵の絵です。葵が着ているのは、通選組隊服です。

<http://3645.mitemin.net/i31789/>

あと、「冠する」の字が「関する」になっている点には、ツッコみなしでお願い致します。（↑

それじゃあ作者の暴走を始めよう（前書き）

キャラ崩壊の可能性アリ

今回のエピソードでは、キャラ達の崩壊（特に高杉）が予想されま
す。

そんなキャラたちを見たくない方は、まわれエ右！！

それじゃあ作者の暴走を始めよう

「一ヶ月と二日間お疲れ！ 第四幕終了パーティー」

ドンドンドンパフパフパフ

『銀（銀時）：はい、終了！お疲れ！

一同：お疲れー！

カチン！

新（新八）：みんな、ビールでも飲んでるんですか？

銀：いやー、一応飲み会だからさ。あ、ぱっつあんも飲む？

新：いえ、結構です……。それに僕、未成年ですし……。

神（神楽）：遠慮するなヨパチ。それだったらビールじゃなくてジュースかなんか飲めばいいネ！

新：あ、そうだね……。ところでコレ、何ですか？

銀：これって？

新：いや、この……。なんというか……。

銀：ん？あ、このコーナー？題名は、「十五日間お疲れ！！第一章終了記念パーティー」ってことになっ……。」

ブチッ。

カセットテープが、乱暴に止められた。

「……なぜ、だ。」

「一ヶ月と二日間お疲れ！ 第四幕終了パーティー」という看板が立っている、第四幕終了専用の「エピソード室」。

そんな部屋の中には五人の影が。

言葉を発したのは、片目を包帯で隠した男。暗い顔をして俯き、目を瞑っていた。

「なぜだ……。なぜ今回は俺の出番がなかったんだ……。」

そう呟くその男の名は、高杉晋助。鬼兵隊総帥、「攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男」と恐れられる人物である。

だが、エピソード室での彼には、いつもの不気味かつ人を寄せ付けような妖しい雰囲気はなく、代わりに、周りまで元気がなくなる敗北感が漂っていた。

「なんで銀時は出まくってポケ連発してんのに、俺はポケられねーんだ……。『3年Z組銀八先生リターンズ 冷血硬派高杉くん』にしか俺のポケの居場所はねーのか……。」

「だ、大丈夫ツス、晋助さま！」隣にいた女が、自分を売り込むで出番だとばかりに立ち上がり、高杉の近くに駆け寄る。「晋助さまなら、絶対に主役級ツス！次章は、晋助さまのポケを連発させましょう！ここの作者はホントに弱いんで、今から脅して連れてくるツス！」

目をキラキラ輝かせ、女——来島また子は、高杉のことを見つめた。また子の発言を聞き、高杉はハッと顔を上げた。

「……お前……。」

そして、また子を抱きしめる。

「俺ア……俺ア……。」

愛しい人の腕の中に入ったまた子は、顔を上気させ、周りに人がいるのも気にせずに、「晋助さまアア！」と高杉を抱きよせた。

「大江戸青少年健全育成条例改正案反対イイ！」

え？とまた子はひきつった顔で、自分を抱きしめながらそう叫んだ人物を横目でにらむ。

「法律を律する暇があるなら己の心を律する術を覚えよ！！」
「……」

「マンガもアニメもない時代から、ロリコンは存在してるんだ！むきあいにする心を育むのが大切じゃないのか！ちなみに私はロリコンじゃない、フェミニストです。」

ガチャッ。

バン！バン！バン！バン！

また子の細い指が、拳銃の引き金を引くと同時に、高杉——ではなく、違う男が倒れこんだ。

「万斎先輩、晋助さまは？」

「……すぐに来るでござろう。」

いらいらしたまた子の問いに答えたのは、三味線を持ち、ヘドホンを耳にした男。サングラスが、部屋の明かりを受けて黒光りする。彼は、人斬りとして恐れられている、河上万斎である。

と、その時、万斎の言葉通り、エピソード室の扉が開き、中から、倒れこんだ武市と同じ格好をした——しかし、全く違う風格を持つ男が入ってきた。不気味な笑いを口元に浮かべ、用意されている椅子ではなく、中央に置かれていたテーブルにドカッと居座る。

「……確かに、俺の出番が少ねーな。」

ぼそりと、冷笑しながら男——真正正銘の高杉晋助は口を開いた。

「まあ、出なかったのは君だけじゃないけどね。」

次に言葉を発したのは、橙色の髪をした可愛らしい青年。青い瞳を輝かせながら、椅子に座って胡坐をかいている。——春雨第七師団団長、神威である。

「わしも出てないぞ。」

今度は、茶髪の少年。イヤホンをし、灰色の好奇心旺盛の瞳で部屋の中にいる人々を見つめる。例えるのなら、まるで犬のような少年だ。隣にいる橙色の青年のそばを離れず、じっとしているくせに、その目は絶え間なく、忙しそうにキョロキョロとしている。尻尾があれば、それをブンブンと振って、地面に叩きつけているだろう。「ってか、わしゃあ死きちゅうのか生きちゅうのかさえわからん。作者の頭の忘却の彼方じゃ。」

不満そうに言う少年、斬暴に、神威は微笑みながらなだめた。

「まあまあ、後で作者をぶっ殺してしまえばいいんだからさ、いいじゃないか。たぶん、さっき送った阿伏兔が、作者連れてくると思うよ。」

しかし、神威がそう言った時、扉が開いて、一人の男がバツの悪そうな顔をして入ってきた。

「悪いな、団長。作者今風邪だから出れねーってよ。アンタらにうつしてもいいなら別らしいが。」

「……遠慮しとくよ。」「……遠慮しちよく。」

兄弟のように、息ぴったりに二人は男――阿伏兔に返した。

「では。」万斎が、三味線を弾きながら始めた。「脅迫文でも送つたらどうでござろう。作者は心底臆病者故、それだけで拙者たちを出してくれると思うが。」

「あ、それいいツスね！」また子も賛成する。「それに、脅迫文だけなら、簡単にかけるツスよ！私、こう見えても学生時代は恋多き女だったんツス！」

「いや、ラブレターじゃないから。しかもあなた、絶対に告られる方じゃなくて告るほうだったでしょ、今の発言からして。」

倒れながら、武市がツッコむが、その瞬間にまた子の拳銃が火を噴く。

「……えーと、じゃあ脅迫文ってことでいいツスカ!？」

また子は尋ねるが、部屋に集まっているのは皆、人の質問に答えるような性格ではないので、無言。

だが、それは俗にいう暗黙の了解だったので、慣れているまた子は、続いて仕切る。

「それじゃあ脅迫文で、出番を奪うツス！」

高杉と一緒に作業ができるということ、ウキウキしながらテンションを上げるまた子だったが、あまりにも周りの反応がないために、がつくりと肩を落とした。

はてして、悪役ばかりの脅迫文作業、どうなるのだろうか。不安になるまた子であった。

それじゃあ作者の暴走を始めよう 其の二

「……。」

何とも言えない静けさが、部屋を包んでいた。

ただいま、エピソード室には、鬼兵隊の高杉晋助、来島また子、河上万斎、武市変平太、春雨の神威、斬暴、そして阿伏兔の七人がいた。

脅迫文を書こうと思い立った彼らであったが、いざ下書きに筆を走らせようとすると、全く手が動かない。

「晋助さま、万斎先輩……。これって最初、『拝啓』とか書いた方がいいんツスカね？」

「私の存在は無視ですか？」と武市。

高杉は、しばらく何も言わなかったが、代わりに万斎が口を開いた。「一応書いた方が丁寧になるでござる。書いておいたほうがよいと拙者は思うが。」

「……別に、脅迫文なんだから書かなくてもいいんじゃない？」

神威が隣から口をはさんだが、また子はそれには耳を貸さない。

「そうツスよね、書いたほうがいいツスよね……。じゃあ、最初は『秋晴れの心地よい季節となりましたが、冬瀬志保様におかれましては健やかにお過ごしのことと存じます』とかどうツスカ？」

「それはいかんぜよ。」斬暴が片眉をあげて言う。「そもそも、作者は健やかどころか喉がガラガラ、咳はゲホゲホ、それなのに宿題片づけなければという最悪の状態じゃ。それではただの嫌みじやろうが。」

その言葉に、また子はうーんと唸る。

「そうツスカ……。じゃあどうしたら嫌みつぽくならないんツスカね？」

「だから脅迫文なんだけど。」

しかし、神威の呟きは、再び無視された。その隣で、高杉は万斎か

ら借りた三味線をいじっている。

「『朝夕は冷え込んできていますが、お変わりございませんか。』」
ふと、そう発した高杉に、また子は目を輝かせる。

「さすが晋助さま！それにするッス！」

「いや、それじゃまだダメだろ。」今度は阿伏兔だ。「『お変わりありませんか』も、『健やかにお過ごしのことと存じます』も、作者が風邪だって知ってるのに書いてるんだから、まだ嫌みの領域だろ。」

それを聞いて、また子はふとほほ笑む。

「天人にはわからないと思うッスけどね、『お変わりありませんか』の方が直接な嫌みじゃないんッス。だから、これでいいんッス。」

「結局は同じじゃん。」と神威。

しかし、愛しの人の言葉を最初の文に書きあげたまた子は、「次ッ！」と気張る。

……が、すぐに何と書こうか再び迷い、肩を落とす。

「……万斎先輩、次、お願いッス。」

万斎は、振られて、指でコツコツとテーブルを叩きながら呟いた。

「『私どもは、週刊少年ジャンプ連載・銀魂のキャラクターを務めております、鬼兵隊の高杉晋助、河上万斎、来島また子、武市变平太、春雨の第七師団団長・神威、団長補佐・阿伏兔、団員・斬暴と申します。』」

音読されたものを、また子はそのまま下書きに書く。

「……ねえ、『キャラクターを務める』とか言うの？」

素朴な疑問を口にするが、神威はまたもや無視される。それを受け、軽い殺人衝動に襲われたが、それを抑え込み、口を閉ざした。

「『此度は、貴殿の小説のキャスティングとボケ&ツッコミのバランスについてご検討いただきたく、このような書面をお送りする次第です。』」

まるで、文章を目の前にして言葉を紡ぐ万斎に、また子は紙に筆を走らせながら感心する。

「『ご承知の通り、貴殿の小説は、主人公の、真選組副長補佐・土方葵をはじめとするキャラクターたちが、ギャグを交えながらシリアスなバトルへと展開していくコメディマンガとなっておりますが、中には我々のように、ギャグとは縁のない者どもがおります。そのうえ、我々は貴殿が執筆された第四幕には、全く顔を出しておりません。』」

「……もはや脅迫文じゃねーな。」

ぼそつと呟く阿伏兔に、頷く神威と斬暴。

「『小説が成立するには、読者の皆様はもちろん、キャラクターたちとの関係がとても大切だと存じます。突然で恐縮ではございますが、ぜひご一考頂くようお願い致します。』……これでどうでございます。」

「さっすが万斎先輩!!」

おお、つと目を丸くするまた子に、万斎はまんざらでもないような表情を浮かべた。

「……なんかもう、私の存在、忘れ去れていますよね。」

独り言を言った武市。だが、誰もそんな彼に目を向けることはない。「えーと、それじゃあ次はレターセット買いに大江戸デパートに行くッス!」

張り切るまた子に、万斎は吐息をつくが、高杉の手から三味線を取り返すと、「行くでござる。」と残し、また子とともに部屋を去って行った。

「……しゃーねー……。」

高杉は机から降り、キセルを燻らせながらまた子たちの跡を追った。それを見て、武市ははあっとため息を吐き、頭から出血したまま、仲間を同じく部屋を後にした。

取り残された春雨三人組は、ツツコみどころ満載な脅迫文と、それを書いた鬼兵隊に肩をがつくりと落とし、顔を見合わせた。

「……どうしようか。」

それじゃあ作者の暴走を始めよう 其の二（後書き）

初めて、ライトノベルなる小説の類の存在を知りました。

……つい最近のジャンルかと思えば、結構前からあったらしく……。
自分の無知ぶりに我ながら呆れかえります；

無知は罪なり、ですね；

……この頃、どんどん敬語が崩れていつています。これはドミノ倒しと同じで、一度崩れると二度ともどりません。それどころか悪化します。

まあ、昔っから崩れてましたけど……。；- -

それじゃあ作者の暴走を始めよう 其の三

「やっぱコレツスカね？ いや、でもこれも外せないしな。万斎先輩、どれがいいツスカ？」

大江戸デパート。江戸中、どこを探してもこのデパートほど大きな百貨店は存在しない。人通りも多く、テロリスト集団が白昼堂々と来られる場所ではない。

……が。鬼兵隊は、春雨三人組の制しも聞かず、真昼間にここへやってきた。あきれた三人組は、エピソード室で作者の愚痴でも言っているだろう。

ちなみに鬼兵隊の四人組は、無論、最低限の変装はしている。

「……また子さん、もう少し『脅迫文』を送るのにふさわしいものを選んでどうでしょうか。」

また子が武市たちに差し出したのは、二つのレターセット。一つ目。かわいらしいウサギが描かれている、いかにも『女の子らしい』ものだ。

二つ目。赤いハートマークが、ところせましと印刷されている封筒と、便箋のセット。これはどう見ても、女子が男子に告る時に使いそうだ。

「いや、でもコレかわいいじゃないツスカ。」

「かわいいとかそう言うの関係なくて、脅迫文を書くためなんですから、どんなのもいいでしょ。」

「どんなのもいいなら、やっぱ可愛い方がいいのに越したことはないツスよ。ね、万斎先輩はどれがいいツスカ？」

万斎は、レターセットが羅列してあるコーナーに立つと、「コレなんかどうでござる。」とまた子に手にとったものを渡した。

「あ、コレもかわいいツスね……。」

描かれているのは、キャラクター化された寺門通。愛らしくウィンクし、マイクを持っている右手を高々と上げている。

「最後に、『P.S. 寺門通ヨロシク』とか書いておけば一応宣伝になるでござる。あ、『ヨロシク』の後は、『』よりも、『』とか『?』とかのほうがいいでござるな。『?』の方が高感度アップでござる。ちなみに、コレを晋助が書けば確実に我らの傀儡となるでござる。」

「だから『?』とか要らないって。」

付け加えた万斎に、武市はまたもやツツコミ。

ギャグを連発する部下三人を、高杉は無表情で見ていたが、やがて三人が気付かないうちに、彼らの前から姿を消していた。

「……こんな感じですか。」

ぼつりと、武市が、また子と万斎に呟いた。武市の座っている机の上には、いろいろな色のマジックが転がっている。中には、金ラメやら銀ラメやら、女子が好みそうなペン類などもある。

「ん、さすがツスね、武市変態。」

「いや、先輩だから。変態じゃないから。」

最後の方には嫌みがくつついたが、また子は武市の達筆ぶりに心底目を丸くしていた。

万斎も、これでよしと頷いている。

「では読み直すでござる。」

――拝啓 冬瀬志保殿

朝夕は冷え込んでいますが、お変わりございませんか。

私どもは、ご存じのとおり、週刊少年ジャンプ連載・銀魂のキャラクターを務めております、鬼兵隊の高杉晋助、河上万斎、来島また子、武市变平太、春雨の第七師団団長・神威、団長補佐・阿伏兔、団員・斬暴と申します。

此度は、貴殿の小説のキャスティングとボケ&ツツコミのバランスについてご検討いただきたく、このような書面をお送りする次第です。

ご承知の通り、貴殿の小説は、主人公の、真選組副長補佐・土方葵をはじめとするキャラクターたちが、ギャグを交えながらシリアスなバトルへと展開していくコメディ小説（っていうのかな？）となっておりませんが、中には我々のように、ギャグとは縁のない者どもがあります。そのうえ、我々は貴殿が執筆された第四幕には、全く顔を出しておりません。

小説が成立するには、読者の皆様はもちろん、キャラクターたちとの関係がとても大切だと存じます。突然で恐縮ではございますが、ぜひご一考頂くようお願い致します。

PS・寺門通ヨロシク」

いくつかの微調整を行ったが文章だが、対して変わりはない。問題なしと見なした鬼兵隊（武市以外）は、満足そうに、寺門通の封筒を手にし、武市を残したまま郵便局へと向かった。

「……私、もう鬼兵隊止めようかな……。」

武市の冗談が、虚空に虚しく響いた。

その数日後――。

ピンポン……。

「あーはい。今行きます。」

とある星のとある街のとある番地に住む一人の俄物書きが、玄関のチャイムが鳴ったのを聞いて、治ったばかりの喉から声を発した。ガチャツ。

入口を開けたが、誰もいなかった。

おつかしいなあ、と一人で呟きながら、地面に視線を落とす。と、その時、血に似た赤い封筒が、目に飛び込んできた。

不気味に思いながらも、その封筒を手に取り、封を切った。

そして、ゲツと声を上げる。

目で追った文面には、鮮血を思わせる真っ赤な字で、こう書いてあった。

——俺らのこと、忘れてないよね。（笑）

忘れてたら……殺しちゃうぞ」

PS・何か鬼兵隊の河上……万斎？とかいう男の人が、「寺門通ヨロシク」とか言ってたから一応伝えておくね。あ、そうだ、「」じゃなくて「」だったかも。……あれ？「？」だった気もするよ。うなしないような。あ、いや、「」だったかも。まあいいや、ちゃんと伝わってなかったら君の理解力（読解力、もしくは絵文字、顔文字から人の心を察する能力）が欠けてるせいにしておくから、ヨ・ロ・シ・ク？

PSのPS・もしわしゃあお前まんの頭から消えていたんなら、土下座して百回謝れ！！んでもってそれが嫌だったら、わし中心の話書け！最終章でもなんでもいいから！

PSのPSのPS・PSの方が長くなつたね」

PSのPSのPSのPS・PSってどれくらい書いたんだろう。でも人間、PSを書きたくなるものだから、まあいっか（笑）

春雨第七師団団長・神威

並びに副団長・阿伏兔

団員・斬暴より

……と高杉晋助より

ちやっかりいいところを奪った高杉であった。

それじゃあ作者の暴走を始めよう 其の三（後書き）

んー、もはや脅迫文じゃない気がします；；

というわけで、無事にラストスパート終了！

目指すゴールまで辿り着きました！！

こんなグダグダな小説を読んで下さった皆様、本当にありがとうございます！！

というわけで、第四幕終了致しましたので、第五幕へと移りたいと思います。

今回は、脅迫文通りのことが起こるかも……??

第一訓 三人の男の憂鬱（前書き）

第五章、突入です！

第一訓 三人の男の憂鬱

「……フウツ……。」

キセルの甘い香りが、晴れた秋空に溶けた。

隻眼の男は、残っている右目で、目下に広がる江戸の町を見下ろし、さまざまな幅の道を行き交う人々を、何の感情もこもっていない表情で見つめた。

船の上から見下ろす街は確かに爽快だったが、男にとって眺めなぞどうもよかった。神無月——すなわち十月は、気分を悪くするもの以外の何物でもなく、街の情景を眺めているほど、彼の脳に空いている場所などなかったのである。

——偉大な人物が十数年前のこの月に亡くなったたつてのに、気楽なもんだ……。

男は、今度はあおむけになり、肘を手すりによりかけながら空を見上げた。広大な空には、雲ひとつない。だが、代わりに、異国の商船やらが、あちこちの方向から飛んできては、青い天の彼方へと消えていく。

大砲を持ってきて、思い切り弾をぶつ放したい気持ちを抑え込み、男は再びキセルを口元へ運んだ。

「……桂さん、どうかしましたか。」

部下——いや、同志に声を掛けられ、桂と呼ばれた男は、滑らかな黒い長髪を揺らしながら、振り向いた。

そして、心配そうにこちらを見る同志を見て、安心させるように微笑する。

「……何でもない。昔のことを、少し、な。」

そう呟いてから、懐かしい人の顔を思い浮かべた。

だが、すぐに記憶は戻ってこなかった。その人の顔など、もう十何年も見ていない。……見たくても、見られないのだ。

——神無月……。すでに十月か。月日が経つのも早いことだ。

心の中でぶつぶつ独り言をいいながら、桂は座っていた机から離れ、泊まっている部屋の窓辺へと身を乗り出した。

「ちょ、桂さん、見つかりますよ！」

黒髪がトレードマークのこの攘夷浪士は、一度見れば顔がチラつき、なかなか忘れられるものではない。それに、星中で指名手配されているので、街の電柱は、桂の「この顔に来たらピン！！！！……と来たら１１０番」という手配書でいっぱいだ。すぐに見つかってしまう。

自分を部屋の中に引き戻そうと慌てた同志に、桂は落ち着き払った声で言った。

「……この青い空を見上げると……。昔のことを思い出す。」

ふと、静かな声でそう語り出した桂に、同志は、理解できなくて複雑な顔をしながらも、桂を引き戻す動きを止めた。

「あの日は……。本当に物静かな一日だった。夜に出火するなんて思えないほどの、穏やかな日。今日のような青空の下、いつもどおり俺たちはあの人と共に山へ向かい、泥にまみれて帰って来た。親に叱られようが何だろうが、俺たちはあの人と共にいることが何よりのしあわせだった。」

少し不穏な響きに、同志は眉をひそめた。

「……だが、それもその日ではつたりと終わった。紺色の夜空が、まるで夕焼けのように鮮明な紅色で染まった時、一瞬何が起きたのかわからなかった。……でも、しばらくして分かった。あの人の邸が……炎に包まれていたと。」

少しの間、沈黙が部屋を支配した。

誰も口を開かず、重苦しい空気が桂と同士を覆った。

しかし、気まずい雰囲気を感じたのか、桂はいつもどおり悪戯っぽい笑みを浮かべると、同志を振り返り、言った。

「すまない。つい昔話を喋ってしまった。」

同志は、その言葉にほっと肩をなでおろしたが、窓から見える空へ

視線を移した桂の瞳に、再び暗い影が落ちたのを見逃した。

「んだよ、もう十月か……。」「カレンダーをめくり、その男は吐息をついた。『ったくよオ、ホントに歳をとると一年がさっさと過ぎ去っていくわ。もう俺の場合スペースシャトル発射のスピードまで来てるからね。』」

真剣そうな表情でそう口を開いた男、坂田銀時に、メガネをかけた少年が困ったような笑みを浮かべた。

「そんなこと言わないで下さいよ。まだ銀さんも若いじゃないですか。」「

「いや、確かにまだ二十代だけだよ、人の中には二十代で既に『オッサン』と呼ばれる人がいることも忘れるな。俺もそろそろ加齢臭がする歳だから危ないんだよ。」「

「怖いこと言わないでヨ、銀ちゃん。」「チャイナ服の少女が、読んでいたファッション雑誌から目を上げた。『そんなこと言ったら、私もうここに住めなくなるネ。銀ちゃんと住めないネ。加齢臭なんて御免アル。』」

メガネの少年、志村新八は、台所に向い、緑茶を入れながら再び言葉継いだ。

「そうやって悲観的に物事を考えると、本当に悪い方向に行っちゃうんですよ。ポジティブに考えましょう、ポジティブに。」「

言われて、銀時は「ああ、そうだな」と生返事をした。

妙にノリが悪いな。

肩を落とし、新八は吐息をつく。

とうの銀時本人は、虚ろな目で虚空を睨み、その後にカレンダーの「十月」という文字へ鋭い視線を移した。

——十月。

何か、不吉なことが起きそうな気がした。

第二訓 毎年恒例の行事って、必要ないのがほとんど（前書き）

すみません……。

今回は話がほとんど進まないうえ、ギャグでもシリアスでもない感じになりました……。

第二訓 毎年恒例の行事って、必要ないのがほとんど

「葵くん、まだそれを持っているのか。」

真選組の時計の針は、朝の六時十五分を指している。

兄である真選組副長・土方十四郎の隣で、土方と同じくマヨ井を口に運んでいた葵は、正面に座っている、真選組局長・近藤に尋ねられて顔を上げた。

近藤の不安そうな視線は、葵が腰に差している刀へと向いている。

妖刀、和泉守兼紗駄。

葵をへたれていないオタクという妙な人格、「葵閣下」へと変貌させた発端ともいえる刀。

真選組隊員は、みな、葵が未だこの業物を離そうとしないことに疑問を抱き、再び葵閣下が再来するのではないかと恐れていた。

「……これ、どこのお寺や神社に行つて抜つてもらつても、放せないんです。愛着でもついているのかなあ。それに……。」

葵は、困つたような顔で兄を見つめた。

「離したらトツシーが死んじゃいます。」

近頃はいつもどおりに責務をこなしている土方であつたが、もしも葵が妖刀を離せば、今度こそ命を落とすだろう。

——はあ。

心の中で小さな吐息をつき、苦笑した。

——ま、いつか。

「はい、という訳で、いつもどおりの仕事に就いてもらいます。」
軽い上司の声に、近藤、土方、葵、そして一番隊隊長である沖田総悟は、ゲッソリとした顔を作った。「いつもどおりの仕事」と松平が言つた時点で、必ず悪い方向へ行くのは目に見えている。

いつも悪い報せを持つてくる上司というのは、警察庁長官である、松平片栗虎。

「……また將軍さまのお守りか。」

松平は、生気のない声で言った土方に、「正解！」と親指を立てた。
「十月の二十七日、將軍には『稻荷橋』を通つてもらう！そこで、
お前らも全員馬上で警護！！」

「はあ！？」

思わず真選組四人組は驚きの声を上げる。

瞬きしながら、まるで珍しいものを見るかのように自分を見つめる
部下たちに、松平は続けた。

「毎年十月二十七日は、將軍が稻荷橋に参列する！いつもは他の奴
らが警護に回つてたんだがな、今回は何か違う星の要人が来てるつ
てことで、お前らが將軍の警護。」

タバコを吹かしながら、土方は眉をびくびく動かし、口を開いた。

「何、稻荷橋つて。」

松平の瞳が、キラリと光った。

「そういう名前の橋があんだよ。毎年恒例の行事だ。將軍が稻荷橋
を通つて、市民に顔を見せる、年に唯一の機会。」

あまり理解できないようだったが、土方は目をつむった。

「幾つか不満がある。」

一応、了解を求めるように言うと、松平は頷いた。

「まず一つ。」ギリリと、土方の開けた瞳が鋭く光を反射した。「
もしその仕事を引き受けたところで、馬上での警護は無理だな。た
えばの話だが、攘夷浪士が將軍の命を狙っていたとして、いきな
り將軍に襲いかかつてきた浪士を俺たちは馬からの上だと斬るこ
とも捕縛することもできない。」

その発言に、松平は「心配するな。」と言う。

「馬上で警護するのはテーマらの四人だけ。残りの隊士は馬には乗
らない。」

それを聞いて、土方は少し安心する。第一に將軍のお守りは御免だ
ったが、それ以上に、もしも將軍にかすり傷一つ負わせれば、全員
が切腹なのだ。それだけは避けたかった。

だが、もう一つ大切なことがあった。

「……隊員全員が警護に回るとすれば、テロがその日に偶発的に起きたらどうする？……いや、その日にテロが起きたら偶発的じゃねーな。完全に江戸の警備が手薄になっているところに付け込んでいる。江戸は危機にさらされるぞ。」

「そのことなんだが。」松平は、思い出したように始めた。「その日の江戸の警備は違う奴らに任せる。だからお前らは心配しないで將軍警護に専念しろ。」

「違う奴らがいるならそいつらに警護をさせるよ。俺たちはいつもの江戸警備の方が気楽だ。」

そう言った土方に、松平は首を振る。

「ダメだ。アイツらを正装させて警護に回したら、とんでもねーことが起こるぞ。」

「……とんでもねーことって……。」土方は不安げな顔になる。「誰だよ、ソイツら。」

尋ねられて、松平は余裕そうに答えた。

「万事屋。」

その言葉に、真選組四人は、口をあんぐり開けた。

第二訓 毎年恒例の行事って、必要ないのがほとんど（後書き）

この稲荷橋事件篇は、絶対に十月二十七日までに終わらせたいです。
なんかそういう願望が……（↑

ちなみに、今回の稲荷橋事件篇は、長編でも短篇でもない、中途半端な長さになると思います；

第三訓 説明文にはご注意を（前書き）

サブタイ通り、やたらと説明が長くなってしまいました……。。

第三訓 説明文にはご注意を

「万事屋アア!?」

土方と近藤が、絶叫した。

それに対し、葵と沖田は涼しい顔でそんな上司と兄を見つめる。

「意味わかんねーよ! 何で万事屋!? どこが万事屋!? とつぁん、
アンタ江戸の町を死体の山にするつもりか! アイツらが暴れ出した
ら止まらねーぞ!」

土方の叫びに、近藤也大いに頷く。

「だいたいなんで万事屋なんだよ! 江戸の警備は真選組の仕事でしょ!? だったら將軍の警護は万事屋でいいじゃん! それが何で俺たちがお守り役になんないけねーんだ!」

松平はフウーとタバコをくゆらし、サングラス越しに文句を言う部下二人を睨みつけた。

「ツベコ言わずに仕事に付け。ほら見ろ、マヨの妹は何も言わないで大人しく総悟と話を聞いているじゃねーか。」

妹を比喻に出されて、土方は気に食わなそうな顔をしたが、仕方なく言われたとおりに口を閉ざした。

「ハイ、じゃあオジサン、伝えたいことはもう伝えたんで、帰ります。」

「はやっ!」

立ちあがった松平に、土方と近藤のユニゾンのツツコミ。

「オイ、ちよつと待てとつぁん……。」

土方は、出て行った松平を追いかけるように部屋を辞したが、近藤は畳の上になっ転がると、大きな吐息をついた。

「……万事屋とか絶対無理だって……。」

「オイ、とつぁん。」

真選組の屯所の廊下で、土方が松平の肩に手を置いた。松平は、振

り返らずに何だと返す。

「……万事屋の野郎にこんな仕事押しつけて平気だとも思っ
たのか。奴は攘夷浪士だったんだぞ。それに、とつあんが俺に言っ
たんじゃねーか。奴が、攘夷時代に畏敬の念を込められ、『白夜叉』
と呼ばれていたことを。そんな奴に、江戸の警備を任せるのは危険
だ。」

松平は、しばらく沈黙を貫き通していたが、土方が全く口を開か
なくなったので、代わりに言葉を継いだ。

「近藤^{ゴリラ}は人がよすぎるうえ、口が軽い。だから、白夜叉の件は、真
選組屯所内でもお前にしか話していない。……いいか、良く聞け。
鬼兵隊に忍び込ませている密偵から、連絡が入った。」

その言葉に、土方はおおいに反応した。

「十月二十七日。……高杉^{やっ}は動く。確実に、江戸の町を火の海にし
ようと企んでいる。」

「だったらなおさら、万事屋なんかに……！」

「いいから聞け。」

慌てる土方を、松平は振り返り、肩に置かれた手を退けた。

「報告では、高杉と白夜叉は知り合いだったらしい。白夜叉に、高
杉の説得を任せれば……。」

「やめろ、とつつあん。」

土方は、眉をしかめた。

「そんなことをしても無駄だ。高杉は人間の説得に応じる奴なんか
じゃねー。人が人を欺くのを、平気で見ている野郎だ。」

今、土方の脳裏には、真選組の動乱の様子が、ありありと過ってい
た。

人の心のスキにつけいり、その人間のすべてを奪った男、高杉晋助。
土方は、そんな男が許せなかった。

「……知り合いだかなんだか知らねーが、万事屋に任せるのは危険
極まりない。江戸の警備は、俺たちに任せろ。」

鋭い双眸でそう言った土方に、松平は首を振った。

「話はまだ終わっていない。確かに、高杉の野郎は十月二十七日に、テロ活動を活発化させ、江戸をぶち壊すつもりだ。だが、高杉がまっしぐらに向うのは、江戸の中心地でも、江戸城でもね……。稲荷橋だ。」

「……。」

「稲荷橋の將軍の行列を乱す。それだけでいい。もともと、稲荷橋は將軍とその警護の者しか通れない。つまり、稲荷橋は將軍家の象徴でもある。……だから、もしも、一般市民どころかテロリストが稲荷橋を蹴散らせば……。」

語尾を切った松平に見つめられ、土方は、松平の言葉を続けた。

「……將軍の名は地に落ちる。」

場所変わって江戸はかぶき町、万事屋――。

「……ハイ、ツラくん？何でまた君がここにいるのかな？なんでこ言う時に限って君が出てくるのかな？ん？」

銀時は、口に微笑みを浮かべながら、必死で拳が目の前にいる長髪の男にうねりを上げないように抑えていた。

「いや、だから今日は大切な話があつて。」

「大切な話というとアレかな？Oweeの話かな？いや、もういいわ。アレ飽きたから。何ならジャンプ買ってきて。どうせ攘夷活動資金とか言って、意味が分からないことに使ってるんでしょ？だったらジャンプ買ってきてよ。もつとお金は有効的に使おう？ね？」

「だから今日はマジメな話だと言っているだろう……。」

マジメな話、というと、この長髪男の場合、たいていはゲーム機器の話だ。OweeやらPSやら、時には化石時代のゲームの話をしてくる。

だが、真剣な話を語り出すこともある。

そう、たとえば――。

「鬼兵隊と、春雨の話なんだがな。」

その二つの単語を聞いて、銀時は多いに失望した。

それならまだ、ゲームの話が良かった……。

だが、無視するわけにもいかず、部屋の中へ男を案内する。

運がよく、今日は連れの神楽も新八もいない。

銀時は、不幸中の幸いだ、とホツと肩を撫で下ろす。何故ならあの二人は、一度話に首をつっこむと、なかなか抜けてくれないのだ。

「……で？高杉がどうしたって？」

デスクに足を放り投げ、頭の後ろで手を組むと、銀時は男を見つめた。

「……実はだな……。銀時、稲荷橋というのを知っているか。」

その言葉に、銀時は、あー、と返事をする。

「アレだろ、何か將軍が通る橋……。何だっけ？將軍家の象徴？」

「その通りだ。」男は頷いた。「高杉は、十月の二十七に行われる、將軍家代々の行事を、ぶち壊そうとしている。それも、ぶち壊せば將軍が命の危険に晒されることのみならず、江戸中が混乱することになる。」

「何でだよ。別に橋くらいぶっ壊してもいいだろ。」

気楽に答える銀時に、お前は何かもわかっていないな、といながら、

男は松平が土方に説明したのと同じことを繰り返した。

稲荷橋が、將軍家の象徴であること。

どれだけ、それが將軍家にとって大切な橋で、そのうえで行われる行事が神聖であるかということ。

そして、將軍の行列を乱せば、江戸中が混乱するということ。

しかし、説明を聞いた銀時は、未だ解せない顔をしている。

「……江戸中が混乱する、ったってねエ……。あの將軍の橋が壊れても、別に俺は何にも感じねーけどな……。」

何度か顔を合わせたことがある分、命を取られるということに関しては少し気が引けたが、たかが橋一つのために江戸がメチャクチャになるのは、全く容易には想像できない。

男は、元来物分かりの悪いこの同窓に、はあっと失望の息を漏らすと、肩を落とした。

「……銀時、ことは鬼兵隊と高杉だけの問題ではない。……他にも、
とんでもないことが起こりうる。」

不穏な響きに、銀時は片眉を上げた。

「いいか、銀時。春雨が、全く持って妙な行動をしている。宇宙の
中でも、闇組織とのかかわりが深い星々のトップを、この江戸に招
いている。春雨とは何の関係もなく、春雨のその行動に危機感を持
った天導衆が、以前よりもピリピリしてきた。……春雨の動きは、
必ずや鬼兵隊とのつながりもあるはずなのだ。くれぐれも気をつけ
ろ。」

銀時は、はあ？と言った顔を作った。

「俺に気をつけろったって、何も変わらねーだろ。」

だが、そんな言葉も無視して、男は立ち上がると、銀時に踵を返し
た。

「というわけで、バイビー。」

「あ、オイ、ちょっと待て……。」

慌てて銀時がデスクから脚を下ろし、長髪が消えた玄関の方へ走っ
ていたが、その時には既に、男の姿はどこにもなかった。

「この頃、妙に忙しいね、阿伏兔。」

隣を歩いていた、まだ自分よりも年若い青年に指摘され、阿伏兔と
呼ばれた中年の男は、大きな吐息をついた。

「例の機会やら、天導衆の目くらましやら、他の星々の老いぼれト
ップの接待やら、俺の身体はもうボロボロだぜ……。オイ、斬暴、
お前代わりに仕事代われ。」

青年の隣を忙しくウロついていた、斬暴と呼ばれたその少年は、
阿伏兔に声をかけられ、

「えー。」

と不満声を洩らす。

「何でわしがほがなことしなきゃいけないいちや。仮にも父親じゃろ

うが！息子に頼らんと、自分の仕事は自分でやっちゃよき！」

確かに、理屈で言えばそうなのかもしれない。……し、そうじゃないかもしれない。

阿伏兔は、今度は身体全体を使って、失望を表現する。

「ったく、親不孝行者に恵まれちまったね、俺ア……。」

そう言いながら愚痴をつく阿伏兔を見ながら、斬暴はふざけながら舌を出した。その行為に、阿伏兔はイラっとして、斬暴の頭をベシツと叩いた。

「こらこら阿伏兔、息子はそんないじめるもんじゃないよ。」
微笑みながらなだめる青年。

——遠くから見れば、この三人組は、父親と、兄と弟にしか見えな
いが、実際は全く血が繋がっていない、赤の他人だった。しかし、
なぜだか妙な縁に結ばれていて、斬っても切れない関係だ。

「……ああ……。」

阿伏兔は宙に向って呟いた。

「誰か……。俺に安らかな休息をくれエ……！」

第三訓 説明文にはご注意を（後書き）

ちなみに、桂が言っていた妙な動きは、第六幕——斬暴篇に出てま
いります。

ところで……。

今日なんかの記念日じゃない？と頭をフル回転させた所……。

銀さんの誕生日じゃんんんん！！！！

（クラッカーの音）

お、お誕生日おめでとうございます、銀さん！

これからも、銀魂を盛り上げていってください！！

あ、これケーキです、どぞ……。

……という訳で、書いた私自身何が言いたかったのかわかりません
が、第三訓終了です。（↑

第四訓 危ない人のオンパレードには気を付けよう

四日前のこと。

「稲荷橋の行列を乱す。……それだけで、本当にいいんツスカ。」

部下の心配そうな言葉に、隻眼の男は冷笑しながらキセルを吹かした。

「今回は、別に將軍の首も、江戸の町も狙いじゃねー。」

「どうということツスカ。」

部下であるその女は、不安そうな顔をしたが、わからないのはいつものことだったので、軽く受け流した。

「とにかくにも、準備は整った。後は、宣戦布告するだけだな。」
男の言葉に、女は、またもや首をかしげざるを得ない。

「……今回は、誰にも気づかれずに江戸を火の海にするのが目的じゃねーんだ。狙いは、真選組の注意を惹きつけること。そして……。」

「男の口元が、獰猛な獣のように広がった。」

「あの人の弔いをするにだけだ。」

二日前、江戸の、とある橋。

遊行僧は、錫杖をもちながら、無言のまま、その橋の上で座っていた。

ふと、その僧の前を、一人の男が通り過ぎた。

嗅いだことのある「匂い」で、思わず僧は、深編み笠をあげ、その男を見上げた。

「……高杉。」

偶然、思いついた知り合いの名に、僧は思わずハツとする。

そう、あの「匂い」は……。

立ちあがろうとしたその時、一陣の風が吹き、一枚の紙切れが風上から飛んできて、コツリと僧の頭にぶつかった。

地面に落ちた紙を拾い上げ、内容を確認すると、目を丸くする。

——稲荷橋 高杉

送り主が、何をしたいのかは、「稲荷橋」という言葉を見ただけでわかった。しかし——。

なぜ、こんなことを伝えるのか。

なぜ、自分に伝えたのか。

いや、自分に伝えようと書いたもののなか。

いろいろな疑問頭に浮かんだが、それは無視して、「稲荷橋」という言葉に注目した。

灰色の曇天が、僧——桂の頭上に、押しつぶすかのように広がっていた。

——ああ……。

土方は、煙草を吹かしながら呟いた。

——来ちまった……。

そう、来てしまったのである。——稲荷橋の行事の日が。

既に、夜の七時を回った稲荷橋の周りには市民が我先に將軍を拝顔しようとひしめいていた。あたりはお祭り騒ぎで、警護なんて簡単にできる状態じゃない。

それに、いつの間にか松平が依頼したのか、万事屋三人組まで揃いに揃って江戸警備に当たっている。ちなみに、警備は三人だけでなく、卯の天災料理人やら、片目少女やら、マダオやら、危険と言えば危険な人物たちのオンパレードであった。

これが、土方のもう一つの悩み。

「もう一つ」と言うからには、他にも悩みがあった。

そう、無論それは……。

「すいません、副長。やっぱり隊長と葵さん、見つかりませんでした。」

山崎の一言。これが、本当の悩み事。

いつものことだが、この二人は任務があるということとく姿をくらまし、いつの間にか射撃の景品にまみれて帰ってくる。

射撃で景品を撃つ暇があるなら、テロリストを撃ちやがれ、と二人をしごきまわしたいところだが、その二人がいないことには扱くことはできない。

——もうダメだ……。

テロリストの話もいまいち理解ができない。高杉の件を話されても、しっくりこなかった。

「……チクショー……。」

星空が居座る夜空を、土方は持ち前の瞳孔開き気味の瞳で睨みつけた。

「てな訳で、チキチキ・侍だらけの江戸パトロール、おっぱじめましょーかー!!」

銀時は、並んでいる数十人の人々に向って、テンション高く声高に叫んだが、誰もそれにはノらない。

ちなみに、そこにいるのは志村新八、神楽、志村妙、お登勢、キャサリン、マダオ、柳生九兵衛とその柳生四天王（ストーカー込み）、その他モロモロである。

「……チキチキ・侍だらけの江戸パトロール、おっぱじめ……。」

「うるせーわ!!」

お登勢の蹴りが炸裂し、見事に銀時の頭にクリーンヒットした。

「何でお前そんなテンション高いの!? そんなに江戸パトロール好きなの!?」

「いや、なんかさ……。」「立ち上がりながら、銀時は弁解する。」「小さいころからの夢だったんだよね、パトカー乗ってパトロールとか。なまじ今回は真選組パトカーの半分を俺たち使えるわけだからね!? 俺は総大将なわけですよ、奴良組の。」

「総大将っていう言葉でぬら孫連想すんな!」

新八がシャウトするが、銀時のテンションは未だ下がらない。

「ほらほらみんな、パトカー乗らないと、銀さんおいてっちゃうよ。いいの？あ、いいんだ。それじゃあ先に行ってます。」

独り言をいいながら、パトカーに乗り込んだ銀時は、アクセルを踏み込んだ。

ブォン、という盛大な音とともに、夜の江戸の街へと姿を消した車を呆れ顔で見送りながら、その場にいた全員が呟いた。

「……テンション、高すぎだろ。」

しかし、彼らは知る由もない。

車内に入った瞬間の銀時の顔が、その時にはすでに、テンション高めなだけの男のものとは違っていたということ。

そして、彼の車が、パトロールの域には入っていない、稲荷橋へ向かっているということ。

第四訓 危ない人のオンパレードには気を付けよう（後書き）

オマケ第二弾

もし、銀の被魔師が実現したら。

こんな感じになるんですかね……？

<http://3645.mitemin.net/i32315/>

あの、髪の色とか、なんでタバコ加えてんだとか、ノーツコミでお願い致します！！><

実は、描く時に、青エクの燐くんはもちろんなんですが、銀八先生も使ってしまったて、思わずタバコを書きくわえてしまいました……。気づいた時にはすでにマッキー入れちゃったあとで……。

ごめんね、銀さん><；

オマケ其の二

<http://3645.mitemin.net/i32853/>

もしも、エンディングのアナグラに出ていたら……。

こんな感じですかね？

なんか「銀魂」の字がヒドくゆがんでる気がするのですが、スルーでお願いします。

第五訓 昔の出来事から学ぶように

「まったくフザケやがって……。何で俺まで葵たち探さなきゃいけないだ……。」

ブツブツ呟きながら、土方はポケットから携帯を取り出し、時間を見る。

七時二十三分。

稲荷橋の参列まで、あと四十分を切った。

「……クソ……。しょうがねー……。」

葵たちは諦めるしかない。

心を決し、土方はムツツリした顔のまま、將軍たちが控えている、稲荷橋近くの將軍家の下屋敷へと足を向けた。

と、その時、見たことのある二つの後ろ姿が目に見え込んできて、土方は目を見開いた。

ところで、とうの葵たち。

見つからないのは、無理もなかった。

彼らは、このお祭り騒ぎを楽しむどころか、土方たちに見つからないように身を隠しながら、とある人物を探していたのだ。

「あっちゃん、こっちにはいねーぜ。」

西の方向から手を振りながらこちらに向ってくる沖田に、葵は肩を落とす。

「やっぱダメかア……。でも、ここで引き上げるわけにもいかないしなあ……。」

顔を曇らす葵に、沖田は片眉を上げた。

「しかし、本当か？『稲荷橋を高杉が襲う』ってとつつあんが言ったのを聞いた、って……。」

その問いに、葵は迷いなく、「うん。」と即答する。

「だって、あの後トツシーの後を追ったら、とつつあんとトツシー

が話してたの立ち聞きしたんだもん。」

何の悪びれもなく、自分が立ち聞きしたとあつぴらげにいう葵に、今度は沖田ががつくりする番だったが、これを聞いたからには、余計にとある人物探し——すなわち、高杉探しに手を抜くわけにはいかなかった。

「……続けよつか。」

そう葵が口を開いた時に、大きな拳骨が沖田たちの頭を直撃した。

「お二人さんはそこで何をしていたのかな、ん？ コラア。」

ドスの利いた鋭い声に、葵は「おつ。」という声を出す。

「トツシー、いたんだ？。」

「いたんだ？、じゃねーんだよ。しかもなぜ？？」

「いや、かわいらしく言った方がトツシー喜ぶかなって。」

「俺はシスコンじゃねー！」

余計にキツイ一撃をくらう葵。

それを見て、沖田は胡散臭いものを見つめる目で、土方をジロジロ見た。

「土方さん、そのセリフを言うとき、顔は赤くしねー方がいいですぜ。」

それを聞いた瞬間、葵の「？」ですでに顔が赤くなっていた土方が、さらに真っ赤になった。

どうやら、シスコンが侵食してしまったらしい。

「……と、とにかく將軍の下屋敷へ向かうぞ！ たく teme エらのせいで……。」

ブツブツいいながら、土方は顔を見られないように隠して、ズカズカ歩き始めた。

勝手に残された二人は、顔を見合わせると、「はあ。」と吐息をついて、兄兼上司の跡を追った。

——あー……。ロクなことがありやしねー……。

土方は、横目で葵たちがついているのを確認しながら、不機嫌そう

な顔をして足を動かし続ける。

ふと、正面に向けた瞳に、深編み笠をかぶっている男が目に入った。女ものの紫色の着物を身に着け、キセルを吹かしていた。男は、目の前を通り過ぎると、煙のように土方の視界から消えた。

「……な……。」

その後ろ姿は、葵が真選組に入る前の事件と、解散騒動の時に、見たことがあった。

——高杉——

慌てて男が姿を消した人ごみの中へもぐりこんだが、その時には既に遅く、土方の身体は、虚しく人の波にのまれた。

「よオ、ヅラ。」

聞いたことのある声で、桂は振り返った。

「……高杉。」

ニヤリと笑うその男は、今では敵として危険視している人物。護身用の錫杖を強く握りしめると、桂は男——高杉に切り出した。

「今日……『祭り』をするらしいな。」

高杉は、何も言わず、不気味な笑みを桂に向けたまま、同窓の言葉に耳を傾けていた。

「止めておけ。稲荷橋で事件を起こそうなどと……。このままでは、本当に世の中が狂うぞ。お前の望んでいることではあるまい。」

未だ、高杉は口を開かない。

「数十年前——。お前と同じく、攘夷を志とした侍が、天人に弱腰だった將軍の名を落とそうと、稲荷橋でひと騒ぎした。將軍の行列に襲いかかり、將軍の首を取ろうとした。だが、警備に回っていた男に捕縛され、何とかその場は収まった。しかし、その翌日から攘夷論が盛んになり、侍のみならず、商人や百姓までが攘夷それを唱え始めた。幕府はその出来事の收拾を図るため、即時、行列に乱入した侍を打ち首獄門とし、その生首を町人たちに晒した。……この出来事は、攘夷戦争の発端とも言える事件だ。高杉、貴様もその男の二

の舞になりたいのか。」

その言葉に、高杉はクスリと笑うと、桂を置いて歩き始めた。

「打ち首獄門やら男の二の舞やら、んなこたア関係あるめーよ……。」

「

そして、肩越しに桂を振り返ると、見開いた眼で昔の朋友を見つめた。

「俺はただ壊すだけだ……。この腐った世界を……！」

キキッ。

ブレーキを踏み、銀時はあわてて車内から飛び出た。

松平から聞いた話だと、將軍の参列は、夜の八時から。

車に設置してある時計を確かめると、既に時間は七時三十九分。

昔は、同じ師のもとで学んだ友であり、今は敵でもある高杉が動くまで、あと二十分だ。

銀時は急いで、稲荷橋の周りを行き交う人々の中に飛び込んだ。

第五訓 昔の出来事から学ぶよつに（後書き）

十月二十七日まで、あと十五日をきりました……！

急がねば！

第六訓 教科書は失くさないように（前書き）

過去編（？）を捏造しました……。

第六訓 教科書は失くさないように

「……晋助、そんなところで何をしているのですか？」

優しい声音に、河原でゴソゴソしていた少年は、後ろを振り返った。
「もうすぐ、日も暮れます。早く家に入りなさい。」

少年の後ろに立っていた男は、物やわらかな視線で、少年を見下ろす。男の言うとおり、既に日の半分は、地平線に飲み込まれていた。しかし、そう言われても、少年は男の言葉に耳を貸さず、再び正面を向き、先ほどまで夢中だった作業を再開した。

男は、困ったな、とも言つように苦笑する。そして、少年の背後からひよっこりと顔を出して、少年の手元を見ると、少し目を丸くした。

「……猫、ですか。」

呟いた男に、少年はぶっきらぼうに頷く。

少年は、手負いの子猫を介抱していた。ケンカの時に、他の猫や犬にでもやられたのだろうか。ふさふさだったであろう灰色の毛には、褐色に変色した血が錆びついていた。

「……晋助、猫は家にいれてもいいから、早く入りましょう。」

その言葉に、少年はバツと振り返り、師である男の顔を伺った。師——吉田松陽は、にこやかに笑い、少年の腕の中でうずくまっていた猫を受け取った。そして、川辺をゆったりとした足取りで歩きながら、自邸へと足を向けた。

「銀時も小太郎も、あなたの帰りを待っています。急ぎましょう。」
にこにことした表情で言うつ、少年は気に食わなさそうにフンと鼻を鳴らしながらも、松陽に付いてきた。

「アイツらに待たれてもうれしくない。」

というより、アイツらが俺の帰りを待つわけがない。
言いたかったことの後半を、少年は自分の心に秘めた。言っても無駄な言葉だし、言ったところで松陽にからかわれるのがオチだ。「

晋助、照れなくてもいいんですよ。」と笑われて
しかし。

「晋助、照れなくてもいいんですよ。」

ついさっきまで言われるかも知れないと思っていた言葉で突如切り
出されて、少年は当惑した。

どうやら、松陽には、少年の心のうちは筒抜けだったらしい。

少年を優しい眼差しで見つめると、松陽はふと呟いた。

「晋助が、子猫に手当をするような性格だとは思いませんでした。」

「……べ、別に俺もするし。」

そつぽを向きながら無愛想に反論する弟子に、師は微笑する。

「そついうつつけんどこなところさえ直せば、もっと可愛いんです
がね。」

「うるせーな。」

表情を悟られないように、少年は松陽と別の方向に顔を向ける。夕
焼けのせいか、それとも他に理由があるのか、彼の頬は少し赤かつ
た。

「でも、私はいつもの晋助も好きですよ。……いえ、いつもの晋助
が好きです。」

言いなおした松陽に、更に少年は顔を赤らめる。

「アンタ、人からかって何が面白いんだよ。」

不機嫌そうな、しかしちよつと照れている声音に、すみません、と
松陽は謝った。

「ですが、私、別にからかっているわけではありませんよ。正直に、
あなたに持っている自分の感想を述べたまでです。ぶつきらばうな
ところも、可愛げがないところも、でも本当は心優しいということ
も、すべてひっくりくるめて好きだということを。」

「恥ずかしげもなくそういうことを言えるアンタ、尊敬するぜ。」

今度はこつちが揶揄したつもりだったが、松陽には利かない。

「その言葉、ありがたく受け取ります。」

松陽は、いつもの穏やかな笑みを浮かべて、そう言った。

深紅こきひの太陽が、その微笑みを照らしていた。

「オイ、起きろバカ杉!!」

大きな怒鳴り声と、暑苦しい熱気で、少年——高杉晋助は叩き起された。未だ思い瞼を開けると、一番見たくない二人組の顔が飛び込んでくる。晋助は、眠そうに目をこすり、寝ぼけた瞳で、自分を起こした銀髪の少年を睨みつけた。

「ンだよ夜中に。」

「ンだよじゃねー! 周り見てわからねーのか!!」

銀髪に言われて、晋助はようやく自室を状況を理解した。

……燃えていた。

自分の部屋が、淡い緋色に包まれていた。幸い、戸口だけには、まだ火の手が回っていないかった。

「……何だよ、コレ。」

「いいから早く脱出だ!」長髪の少年が、慌てて晋助を立ち上げらせ、戸に走った銀髪の後を追った。「高杉、貴様も早く!」

ぬくもりが残っている布団から離れると、晋助はあわてて学友の後を追った。

廊下に出ると、少年たちは駆け足で、師である松陽の部屋へと向かった。ムツとする高温のせいで、三人の身体は汗だらけになっている。

バン、という音と共に、松陽の部屋の戸が開いた。

「先生!どこですか、先生!!」

急いで部屋の中に駆け込み、師の姿を探すが、見つからない。

「せんせ……。」

ドオン!

屋根が崩れる音と同時に、三人組は強い力で押され、回廊の床に叩きつけられた。

「いて……。」

強打した頭をさすりながら起き上がると、少年たちは仰天する。

「……先生……。」

目の前で、松陽がいつもどおりの微笑みを口元に浮かべ、笑っていた。だが、その身体の上には、崩れ落ちてきた梁が、重そうにのしかかっていた。

「先生！松陽先生！」

少年たちはいつせいに師に駆け寄ろうとしたが、その前に松陽の口が開いた。

「……私のことはいいから、逃げてください。先に、他の書生たちは外に逃がしました。残っているのは、あなたたちだけです。」

「何を……！今出すから、待ってる！」

「言っているでしょう。逃げなさい。」

「バカ言うんじゃないねエ！アンタはわかってねエんだ！俺たちはアンタがいないと……。アンタがいなきゃ、俺たちはどうやって生きて行きやいい！？アンタは俺たちの道の道しるべなんだよ！」

晋助は必死に松陽に乗っている梁を、銀髪と長髪と共に持ち上げようとしたが、師は物やわらかにに笑うだけで、抜けだそうとする意思はなさそうだった。

「……道しるべ、ですか。いつの間に、私はあなたたちにとってそんな大層な存在になっていたのでしょうか。」

「のんきにグダグダ口回してるんじゃないねエ！さっさとここから出るんだ！」

「……聞いて下さい、三人とも。」

師の声が、あまりに穏やかだったので、思わず少年たちは手を止めた。

「私は、もう死んでも構いません。私は、すでに自分のすべきことを成しました。私は、あなたたちに自分の魂を伝えた。もう、それで十分です。」

「ふざけるよ！まだ俺たちは、アンタから少ししか学んでいねエ！アンタの魂、まだ少ししか感じてねエ！俺たちは……。」

「これから、あなたたちはさまざまなことを学んで行くでしょう。」

銀髪の少年の言葉を切って、松陽は微笑みながら口を開いた。

「当然、歩みを続けていれば、さまざまな困難にぶつかるでしょう。その時、どうするかはあなた次第です。……常に皆さんのそばにいられるかわかりません。ですから、あなたたちに、この言葉を送ります。」

少年たちは目を見開き、師を見つめた。

「……己の魂が信じる道を行きなさい。」

目の前で、師の邸が、落陽の如く燃え盛る。

「……せん、せい。」

紫色の髪の少年は、ぽつりと呟いた。他の書生が、松陽を置き去りに、自分たちを必死で建物から脱出させようとした間際、力の限り握り締めた一冊の書物。

「……俺は……。」

その冊子を見つめ、少年は呟いた。

「俺は、どうすりゃいい……。アンタがいなくなったこの世の中で、俺はどうやって生きていきゃいい……。」

透明の滴が、目からこぼれおちた。今まで、ないことだった。

師からもらい受けた教本の表紙が、涙で濡れた。

「……松陽先生……。」

少年の小さな呟きが、明るく染まる夜空に溶けた。

第六訓 教科書は失くさないように（後書き）

四日に一度は更新する、と決めていたのですが……。

（いらっしやるのかわかりませんが）待っていた皆さま、遅くなりました。申し訳ありません。><

テストのせいで、今週と来週、更新がおろそかになるかもしれませんが、よろしくお願い致します；

松陽先生と攘夷三人組の過去、思いつき捏造してしまいました；最後は、松陽先生に何を言わせようかわからなくなって、新訳紅桜編から一部頂きました……。

ところで、作者が張り切って書こうと思った銀エクなのですが！

次章が終われば、連載いたします！（たぶん）↑

プロットを練っていたつもりだったのですが、本文を書きだそうとしたところで止まりました；

青エクの致死節や、勝呂くんやら子猫丸やら志摩くんがブツブツ唱えているものを調べてみると、聖書や詩篇から出ているということ……。

あ、コレもう書くの止めようかな……。

なんて思ったりしましたが、よくよく考えてみると、やりがあるじゃないか！（↑

そんなこんなで、銀エク計画が進んでおります；

意味不明なあとがき、長々と申し訳ありませんでした；（*———）

第七訓　ちよつとでも危険だと思ったら、退くのが身のため

「……晋助さま？どうしたんツスカ。」

稲荷橋を眼下におく、とある丘。

今回の事件の首謀者、高杉晋助は、後ろから聞こえた部下の声に、振り返らず、何も答えず、黙っていた。

部下、来島また子は、いつものことだから気にしない。

「用意が整ったと、武市先輩が……。」

だが、未だまた子の言葉は、高杉に届かない。

そつとおこつ、と思い、また子はその場を離れた。

相変わらず、高杉は稲荷橋を見下ろしている。

お祭り騒ぎの稲荷橋。行き買う人々。子供たちがお面や綿あめを買う、数々の屋台。

それらすべてが、今から火の海に飲み込まれ、焼土と化す。

その風景を思い浮かべ、高杉は冷笑した。

ざまあみやがれ、愚民共よ。

貴様らのその浮かれた心、俺が阿鼻叫喚の如き地獄の業火で焼きつくしてやるつ。

心の中で呟くと、高杉は踵を返し、稲荷橋へと歩を進めた。

「テメエらアア！一体どこで道草食つてやがったアア！」

松平の獅子の如き咆哮が、將軍の下屋敷に響いた。彼の目の前には、ある程度盛装した、土方、葵、そして沖田の三人組。

「まったく行事まであと二十分切つてんだぞ！早く稲荷橋に向かえばカヤロー……！」

叱咤されて、葵はあわてて立ち上がり敬礼したが、それに対して、沖田は気楽そうに背伸びをしてから、葵の後を追うように部屋を出て行く。

「……とつつあん、今からでも遅くねー。稲荷橋の行事、中止にし

の方がいいんじゃないか。」

煙を吹かしながらそう言う部下に、松平は呆れた顔になる。

「お前、神経質だな。」

「神経質でも何でも言え。真選組おれたちの役目は、江戸の治安を守ること。いかに大切な行事でも、江戸を——いや、地球を危険に晒すような真似はできねー。特に、今回の相手は厄介だ。なんせ、攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男なんだからな。」

土方は、あくまで自分が「真選組の頭脳」であるということを理解している。それ故、頭の足りない部下たちを補うことが必要だった。今回の高杉の件も、誰も危機感を覚えていないから、自分が松平に提言するしかない。

「大丈夫だつて。少しくらいスキがねーと、モテねーぞ。」

「モテなくて結構だ。」

そう返しあつた二人は気付かない。土方には既に「重度のマヨラーである」という、どんな女性でもどん引きのスキがあるということ

を。
松平は、ふと腕時計へ視線を移し、時間を確認すると、慌てて土方に口を開く。

「あと十五分で参列だ。さっさと行つて来い。遅れるぞ。」

ドンと背を押された土方は、思わず煙をおおいに吸ってしまい、咳こんだ。

——高杉……。

人の波に弄ばれながらも、銀時は走り続ける。

——高杉……！

数知れない人々が群がる集まりの中、銀時は旧友の名を、何度も叫ぶ。

野郎は敵だ。

野郎は危険だ。

そんなことはわかっていた。

だが、今日という日——十月の二十七日に、江戸を火の海にすることは、「友」として許せなかった。

いや、それ以上に、同じ師のもとで学んだ学友として、止めねばならなかった。

——待ってろ、高杉！

銀時は、稲荷橋へと疾走した。

第七訓　ちよつとでも危険だと思ったら、退くのが身のため（後書き）

アレ？

十月二十七日までに終わらせるとか言っていないませんでしたっけ、私

……。

えーと、カレンダー、カレンダー……。

……。

十月の、二十三日？え？ウソでしょ？え？

あと四日……じゃん。

というわけで、文章を乱さず、ストーリーも崩さず、がんばっても
うスピードで更新していきたいと思います！（↑無理だよ；（泣）

第八訓 ナルシストは身の危険を感じない（前書き）

話が、少しは進みます；

第八訓 ナルシストは身の危険を感じない

「あの凛々しいお方が將軍さま？」

「あらまあ、まだずいぶんと若いのね。かなりイケメンじゃない？」

「そう？ 私はあの……。真選組の副長さんとか、一番隊隊長さんの方がカッコいいと思うよ。」

「え？ どの人？」

「ホラ、あの黒い隊服着た……。」

馬上でも聞こえる市民の声。

土方は呆れたように吐息をつきながら、將軍の前方を馬で進む。

ちなみに、將軍の前にいるのが、近藤と土方、後方の警備を、葵と沖田が任されていた。その他の真選組隊員は、その後ろに列を組み、いつ、誰が襲撃しても対応できるよう、態勢を構えている。

「ったく、俺たちもいい迷惑ですぜ。こんな愚民共のアホヅラを見るために、俺たちは稲荷橋（こいね）に来たんですかイ？」

ボソリと呟く沖田を、土方が窘める。

「少しは言葉に気をつける。ホントに聞こえたらどうするんだ。」

「別に、どうでもいいじゃありませんかイ。……なあ、あっちゃん。」

声をかけられて、考え事をしていた葵は、「え。」と目を見開き、苦笑した。

「ゴメン、そーちゃん。聞いてなかった。」

珍しく思いにふけていたようの葵に、沖田は眉を上げる。

「……高杉の襲撃の件、まだ気にしてるのか？」

「うん、まあ。」

腕につけている時計の針は、八時三分を指した。

もう、何が起きるのか分からない。一秒後、爆発が起きるかもしれない……。

真選組の日常に溶け込み、「緊張」を忘れていた自分の身体に、震

えが走った。

——あの頃は、こんなことはなかったのに……。遠い昔の記憶を思い出し、葵の表情に、影が落ちた。

——いねー……。いったい、どこにいやがるあの野郎！

稲荷橋の前。前方を見上げれば、近藤、土方、沖田、葵の顔が見える。しかし、銀時が探しているのは、腐れ縁で繋がっている真選組隊員ではない。

再び、あたりを見回す。

紫色の髪、キセル、女ものの着物。

ずっとこの三つの特徴を持った男を探したが、一行に見つからない。早く、ことが起きる前に止めなければ、この世を去ったあの人に顔向けができない。

「チツ……。」

舌打ちすると、銀時はいったん、その場を去った。

「……武市。準備はいいか。」

稲荷橋近く。

高杉は、隣に立っている無表情な男を見ず、口を開いた。

「ええ。万端です。」

その答えに、高杉は微笑んだ。

「そうか……。なら、やれ。」

その瞬間、男の手の中に握られていた小型の起爆装置を、親指で押した。

その時。

ドオオオン！

大きな爆音が西の方角からして、真選組隊士全員が刀の柄に手を置いた。

それと同時に、何が起きているのか分からず、参列を見ようと集ま

つていた人々が、悲鳴を上げる。

予想パターンに入っていたできごとなので、土方は冷静に状況を判断し、隊員に命令を下した。

「十番隊、九番隊は現場へ！四番隊から七番隊は、一般市民を稲荷橋から遠ざけ、安全を確保！」

その声に、隊員たちはいつせいに従った。

「なお、八番隊、三番隊は、將軍と同行し、下屋敷までご案内しろ！何が何でも、將軍の安全を一番に考えること！」

そこまで言うてから、土方は近藤に口を開いた。

「近藤さん、アンタは葵と、將軍のお供で下屋敷に迎え。あっちの方が安全だ。他の隊員は、この事態の処理に入る。」

「しかし……。」

近藤は眉を暗くする。

「心配すんな。ことが済めば、すぐにそっちに行く。」

そう言い残すと、土方はいつもの微笑みを口元に浮かべ、馬を爆発現場へと向けた。

「トシ……！」

近藤は、土方の後ろ姿を、じつと不安そうに見つめた。

「……近藤さん、俺が追いまさア。」

沖田の馬が、一歩前進した。

「野郎、一人ですべての片をつけられると思ってる、飛んでもねエナルシストですぜ。そう言う奴ほど、自分が危機的状況にいても、全く気付かずにお陀仏なんですア。」

近藤と葵にニヤリと笑うと、沖田はウィンクした。

「そいじゃ、俺はこれで。」

しばらく無言だったが、少しの後、近藤は頷いた。

「頼んだ、総悟。」

その言葉で、沖田は土方の後を追うように、馬を走らせた。

爆音がした瞬間、銀時の足は、音がした方向へと向いていた。遅かったか。

冷汗が、銀時の頬を伝う。

十月二十七日。

この日だけには、絶対にこんなことをしてほしくなかった。

……いや、今まで、あの高杉が我慢していたということが異様ともいえた。

あれほど、師であるあの人のめりこんでいた高杉が、今日という日に、事件を起こそうと画策していたことさえ看破できなかった自分が、恥ずかしい。

自分も、わかっていたはずなのに。

十月二十七日が、自分たちが袂を分かちた日だということを。

第九訓 案ずるより産むが易し

——高杉、お前のしようとしていることは間違っている。

銀時が爆破の場所へと向かったその時、稲荷橋に身を潜めていた桂も、同じく行動した。

——こんな弔い方、いったい誰が喜ぶ……。お前の願っていることではあるまい！

桂は、錫杖を強く握りしめた。

数十分後、無事、近藤、葵、將軍、そして警護についた三番隊と八番隊の隊員たちは、下屋敷へと到着した。

將軍がいる座敷の縁側からも、稲荷橋の方角で、煙が上がり、二発目、三発目の爆発が起きているのが見える。

「近藤さん、トッシーとそーちゃんたち……。大丈夫でしょうか。」

嫌な予感しかしません。」

「……そうだな。」

葵は、赤く染まった夜空を見つめながら、こぶしを握る。

「あたし……。トッシーの後を追います。ここであたしがじっとしている間にも、トッシーたちは高杉たちと戦っているかもしれない……。いえ、もう戦ってるでしょう。それに、あの人も……。」

あの人——銀時のことである。

彼なら、絶対に江戸警備なんて仕事ほっぽり出して、旧友を止めようと奔走するに違いない。それを悟ったのは、兄から、万事屋たちが、「快く」警備の依頼を引き受けたと知ったときだった。葵じぶんからの依頼ならともかく、あの万事屋三人組が、兄や上司の頼みごとを、喜んで買って出るわけがないのだ。するとすれば、その理由はただ一つ。……高杉を止めるため。

「……近藤さんは、ここで指揮を執ってください。あたしは、行きます。」

近藤は、そう言った葵を見下ろし、眉をひそめる。

「危ないぞ、葵くん。君はここにいた方がいい。」

「いえ、ここにいても、あたしはトッシーたちの無事を祈ることしかできません。後で本当に嫌な予感が的中して、焼土となった江戸と、それを食い止めようとした仲間の骸を見つめて嘆くよりは、今動いて、死んだほうがマシです。動いた後に、意外に簡単だったことに気がつくこともありますしね。」

言い放つ葵を見て、近藤は苦笑いする。

「葵くんは本当に、トシの妹だな。……行け。將軍は、俺たちが護る。」

葵は、一瞬、認めてくれたことを認識できずに間拔けた顔をしたが、やがてビシッと敬礼し、ニッコリ笑うと、「はい！」と返して、駆け足で玄關へと向かった。

「……無事で帰ってこいよ、お前ら。俺もここで、將軍を死守してやるから。」

残された近藤は、今頃戦場を駆け回っている仲間を想い、明るい色の夜空に向って呟いた。

「土方さん！」

部下の声が聞こえた気がして、土方は後ろを振り返った。

聞こえた気がした、ではなく、本当に聞こえていたらしく、土方の視界には、一番隊の沖田総悟が、馬に乗ってこちらに向って飛ぶように駆ける姿が映っていた。

「お前、なんでここに。」

自分に追い付いた沖田に、土方は不快そうな顔をしながら尋ねた。

「理由なんてありませんよ。ただ、土方さんだけじゃ、やっぱり足りないと思ひましてね。」

「心配すんな。十番隊と九番隊の連中もいる。なにも俺一人で動くわけじゃねーよ。」

吐息をつく土方を見て、沖田はムツとした顔をつくる。

「その隊の統率をすんのは、アンタだけでしょ。つまりは、アンタだけが頭。……もう一人くらいいいねーと、大変でしょ。」

新しく取り出した煙草に火を点けながら、土方は少しばかり興味深そうな顔を作る。

「俺の身を案じてくれてんのか。」

その言葉に、沖田は鼻で土方をあしらう。

「バカいわねーで下せエ。俺アアンタに死なれると、葵にどやされるでしょうから、それを避けてーだけでさア。それに、俺はまだ、葵を嫁に迎えることを眼中に入れてるんですぜ。兄貴を助けることさえできなかった男の元に嫁ぐのは、葵も嫌でしょう。」

「ふざけんな！ 葵はお前なんかにやらねーぞ！」

「ヘイヘイ、わかりやしたわかりやした。」

困った奴だな、とでも言うように、沖田は上から目線で土方を見下ろす。

土方は今にも暴れだしそうな身体を必死で抑え込み、何とか平常心を保った。

少しは注意しようと、土方が口を開きかけたその時。

「副長オオオオ！ いました、高杉です！！」

部下の声がして、土方と沖田、声の方向を振り返った。真選組隊服を身にまとった数人の隊員が、こちらに向って手を振っている。その内の一人が指差すところに、まるで点のようだったが、幾人かの人物の影を確認できる。

「でかした！」

土方たちは、急いでその向きに馬を走らせる。
が、そこで止まった。

「待てよ、アレって……。」

土方と沖田の視界に入った、高杉の目の前に立っている人物。

白い着物の着流しに、黒いブーツと木刀。
オナ

——万事屋の主人、坂田銀時であった。

「……銀時。」

思わぬ人物の来訪に、高杉はわずかながら、口元を吊上げる。

「お前が来ているとはな。……お前も参加するか、弔いに。」

その言葉に、銀時はケツとバカにするように鼻を鳴らした。

「誰が参加するかよ、そんなクソつたれたイベント。……それに、こんなやり方で弔われても、あの人は喜ばねーよ。」

「その通りだ。」

ふと、隣から声がして、銀時は振り向いた。

「高杉、貴様がしたいのはこんなことではあるまい。地球を守るという志を、俺たちと同じくしたお前が、なぜ江戸を襲う？」

いつになく、真面目な顔をした、長髪の男。――桂小太郎。

「……ツラ、お前も来てたのか。」

驚く銀時に、桂は呆れた顔をする。

「お前に高杉の情報を教えたのを誰だと思っている。紛れもない俺だぞ。俺が来ぬはずがあるまい。」

それもそうだと思いなおし、銀時は桂と共に、高杉に向き合った。

「今からでも遅くねーんだ。さっさとこんなの止めて、帰りやがれ。」

高杉は、そう言われてニヤリと笑う。

「知ってるか？ 始めた祭りは中断しねーのが原則だぜ？ 一度始めちゃったんだ。もう戻ることはできめーよ。」

それを聞いて、銀時と桂は持っていた刀を構えた。

「そうか。なら……。」

「俺たちが止めるまでだ。」

「……あれは……。万事屋！」

土方は目を見開いた。

「何で野郎がこんなところに……！」

そこまで呟いてから、土方は松平に言われたことを思い出す。

銀時、桂、高杉らの三人が、攘夷戦争で共に戦ったことのある仲だ

ということ。

だが、疑問があつた。

「万^{やろ}事屋……。止めにかかつてるのか？それとも……。」

結託していたり、とか？

文章の終わりは、自然と声に出されていなかった。

ふと、葵が頭の中に現れて、「そんなわけないじゃん。銀時の旦那が結託？ムリムリ。ありえないね。」と全力で否定する。

そんな妹を振り払うと、土方はそれでも一応、妹の考える方向へと自分の思考を移転する。

——とつつあんは白夜叉を使って高杉を止めるとか言っていた。……その言葉に従っているのか、はたまた自分の判断で高杉を止めようとしているのか……。

「オイ、総悟。俺たちも行くぞ。」

沖田は声をかけられて、珍しく、素直に「はい。」と返した。

第九訓 案ずるより産むが易し（後書き）

サブタイは、葵の

「後で本当に嫌な予感的中して、焼土となった江戸と、それを食い止めようとした仲間の骸を見つめて嘆くよりは、今動いて、死んだほうがマシです。動いた後に、意外に簡単だったことに気がつくこともありますしね。」

という言葉から取りました。

そして気がつけば、もうすぐ百部……？

第十訓 傍観者にいい奴なんていない

「万事屋アア！」

後ろから聞こえた大声に、銀時と桂は振り返った。

「……マヨ方！」

馬に乗った知り合い二人と、真選組隊服を着た男たち二十人ほどが押し掛けてきて、銀時はあわてた。

桂は笠をさらに深くかぶり、自分が攘夷浪士の桂小太郎であることをバレないようにする。

唯一、その場で、高杉だけが余裕そうに紫煙を燻らせていた。

「……攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男——高杉晋助。お前の戦友、だったな。」

土方の呟きに、銀時は、どこでそれを、と訊こうとしたが、以前から、なぜだか土方が自分の正体——白夜叉であったということを知っていたことを思い出し、口を閉ざした。

「今日こそ、お前の首を取らせてもらうぜ。」

背中に悪寒が走るような笑みを浮かべると、土方は刀の柄に手を置いた。

高杉には、自分の妹を殺されかけた。

今の土方の心を、憎しみが占めていた。

「……今日がテメーの命日だ。覚悟しろ。」

しかし、そう言われても、高杉は冷笑するのを止めなかった。まるで、遠い昔から自分の勝利が確定していたかのように。

「おー、やってるやってる。」

三十分ほど前まで、高杉が立っていた小高い丘の上。

今度そこを訪れたのは、アホ毛アンテナを持った青年に、傘を手にした中年の男、そして、イヤホンを耳にした少年だった。

「……兄貴ら、ここで何するが？」

少年に尋ねられて、アホ毛の青年は能面のような微笑みを崩さずに答える。

「別に。俺たちは見るだけだよ。」

「見るばあでいいが？闘わんと、つまらん。」

「楽しいもつまらないも関係ないよ。これは遊びじゃない。元老^{うっえ}からの命令だ。断れないんだよ。」

笑いながらそう言う青年に、中年の男はケツとそつぽを向く。

「団長が断らないように、必死で説得した俺を褒めてもらいたいのなんだよ。あそこで断っていたら、俺たちは今頃首チョンパだったぜ。何せ今回は、春雨一大計画なんだからよオ。」

「でも、」と青年は男に視線を移す。「本当に見張るだけでよかったのかな？」

その言葉に、男は吐息をつく。

「どうせ後で、もつと危なっかしい仕事が待ってるだろうよ。」

それを聞いて、青年は微笑をさらに深くし、少年も「キャッホイ！」と喜びの声を上げる。

常人ならざる神経を持つ上司と義息子^{むすこ}を持って、自分はどれだけの苦労人なのだろうと、男は思った。

「……幕府の犬か。俺たちが出るとこ出るとこ駆け付けなくちゃいけないーたあ忙しいねエ、アンタらも。」

ククッ、と独特の笑い声を上げると、高杉は土方を睨みつける。

「で？妹さんはどうした？」

土方は馬から飛び降りると、気に食わなそうに煙草を路上に捨てる。

「テメエには関係ねー。神妙にお縄を頂戴しやがれ。」

高杉は煙を吹かすと、周りにいた部下たちに目くばせする。

「お縄頂戴しろと言われて頂戴する罪人が、星の数ほどいる犯罪者の中でいったい何人いると？……俺の計画はまだ終わっちゃいねー。俺が江戸をぶっ壊すまで、幕府^{テメーら}の犬ども全員、犬小屋で待機してる……！」

その言葉が合図だったかのように、高杉が口を閉ざしたとたん、一斉に攘夷浪士たちが襲いかかってきた。目で数えるだけで、五十人は軽く超えている。それに対して、真選組隊員は二十人ほどしかない。

「ひるむなアア！かかれエエエエ！」

土方の怒声を聞いて、圧倒的数の差で怖気づいていた隊員たちは再び刀を握り直し、向かってくる浪士集団に襲いかかった。

乱戦開始から十五分。

既に銀時、桂、真選組、鬼兵隊、全陣営の兵隊たちは、疲労しきっていた。

が、高杉のみ、優雅にキセルの煙を吹かす。一行に、刀を抜く気配はない。

荒い息のまま、刀で身体の均衡をとりながら、土方と桂、そして銀時は、高杉を射るような瞳で見つめた。

「……高杉、貴様……。」桂が怒りを含んだ声で言った。「刀を抜け。部下だけ戦わせて置いて、貴様だけ何をしている。」

土方もふらふらしながらも、刀を構えると、高杉に口を開いた。

「自分だけ余裕ぶつこいて、天上から傍観か？……ふざけんじゃねーぞ。卑怯者^{ひきょうもん}が。」

高杉は、その言葉に、蔑むように笑った。

「その状態で刀を交えてどこまで持てる？死に急ぎてーのか？」

確かに、土方の身体は、あちこちから出血し、傷だらけだった。鬼の副長と言えど、数十人を相手取りにするのには、かなりの無理があった。

「……土方さん、ここはいったん引いた方が……。」

自分と同じく重傷を負った沖田を見て、土方は齒切りする。

——あん時、意地張らずに近藤さんと葵さえ連れて来ていたら……。せめて、葵だけでも……！

と、その時、高杉がキセルをしまった。何をするのかと土方が疲れ

きつた顔を上げる。

「逃げろオ！」

遠くから、銀時が叫び、こちらに来るのが見えた。

しかし、銀時が土方に駆け寄るよりも早く、高杉が神速で長ドスを抜き出し、土方に攻め込んできた。

——危な……。

本能的に、土方は最後の力を振り絞って刀を振るう。そのかいあって、最初の一撃は避けられたが、再び高杉が刀を振り上げた。

——ダメ、か……？

バン！

銃声が聞こえたと同時に、高杉の右腕から鮮血があふれ出た。なにことかと思い、弾が飛んできた方向に目をやると……。

「……。」

無言になった二人の視線の先にいたのは、拳銃を構え、こちらに向って走ってくる、一人の少女の姿だった。

高杉は銃弾を受けたところを左手で押さえつけると、いったんその場から退く。すると、銃を腰にしたまた子が高杉に駆けつける。

「一年に一度の將軍さまの参列だよ？台無しにするなんて、どうかしてる。」

呆れた声で言う少女に、高杉は鋭い視線をやった。

あたしたち

「真選組の仕事、あなたたちのせいで増えちゃったじゃん。……さ

つさところから引いて。攘夷浪士大量検挙するのにも、こっちもつかれてるの。」

高杉が見上げる先には、刀と拳銃を両手にほほんでいる、葵がいた。

第十一訓 師の背中つてのは大空よりずっとデカイモンだ

「葵！」

今度は、土方、葵、沖田の三人の声が被さった。

微笑んでいる割に、葵の真選組隊服は大量の紅の液体で汚れていた。

「その傷……。」

「大丈夫。返り血だよ。」

土方が言い終わる前に、葵は笑いながら短く返す。しかし、そんな言い訳は土方には利かない。

「ウソつけ。お前が傷だらけなんだから。」

「だあかあらあ、大丈夫だって。ね、そーちゃん。」

沖田は振られて困った顔をする。彼も、葵に付いている血が返り血ではなく、手前の血だと気付いていたのだが、葵に言われて違うとは言い難かった。

「……オイオイ、無理しねーほうがいいぜ、葵。」

銀時にまで口を出されて、葵は頬を膨らませる。

「ハイハイわかりましたよ認めればいいんですよ！確かにこれは返り血じゃありません！さつき鬼兵隊の襲撃に遭ったんです！でも大した傷じゃないから平気です！以上！」

承伏しながらも未だ意地を張る葵に、銀時、土方、そして沖田は苦笑し、その他の真選組隊員も、それを見て微笑んだ。

少しの間、戦場に和やかな空気が訪れる。

しかし、それもつかの間、また子の拳銃が火を吹いた。

「小娘エエエ！晋助さまを傷つけるとは、許さないツス！」

慌てて銃弾を避ける葵。そして、手に持っていた拳銃をまた子に向けて構え、撃った。数発撃った後、二人は滑らかな動きで、弾を入れ替える。

また子は、葵の動作を見て、目を丸くした。その速さは、自分のそれに近い、いや、互角のものだった。

葵もまた子も、相手方の攻撃を軽くかわす。

が、その瞬間、また子の肩に、葵の銃弾が当たった。また子は思わず引き金を引く動作を止めた。

「もっらいー！」

二カツと笑い、その期に乗り、葵はさらに弾を命中させた。

また子は、その場に倒れる。

葵も同じく、動きを止めると、肩をがっくり落とし、へなりと地面に膝をついた。

「ゴメン、トッシー。」苦笑いすると、葵は土方を見上げた。「ちよつと疲れちゃった。さつきも暴れたからかなあ。」

ついさつき、葵は「鬼兵隊の襲撃に遭った」と簡潔に表現していたが、実際は数十人の浪人を相手にした後、土方たちの元まで走ってきたのだ。

「いい。後は俺たちに任せろ。」

もとより、葵の怪我が深いものだったということは、一目みればわかっていた。これ以上無理すれば、身体が持たないだろう。

「……総悟、お前休みを兼ねて葵の介抱してろ。」

命令されて、沖田は眉根にしわを寄せて土方を見つめた。

「そいつあこつちの台詞セリフでさア。アンタの方が重傷でしょ。」

「うるせー。ツベコベ言わずに、たまには上司おれの言うことも聞きやがれ。」

さして有無を言わせぬ声でもなかったが、沖田はもう一度土方を見つと見ると、しばらくしてから頷いた。

「ヘイヘイ、わかりましたよ。ですが、条件がひとつありやす。」

その言葉に、土方は何だと返す。

「もし俺が休憩してる間、命落したりしたら、葬式メチャクチャにしてやりやすぜ。悲しむ葵の顔は見たくないんでさア。」

土方は、こちらから視線を外さない沖田を見つめ返していたが、やがて大きな吐息をつく、刀を握り締めた。

「俺が妹悲しませることすつかよ。それよりテメエの方も気をつけ

るよ。敵さん、お前たちを狙わねエとは限らねーぜ。スキに付け込んでグサリということもありうる。お前の『介抱』の中に、『護衛』という名目があることを忘れるな。」

沖田は、それを聞いて小さく微笑んだ。

「高杉イイイイ！」

再び乱戦が開始し、土方、銀時、桂の三人は、いつせいに鬼兵隊めがけて攻め込んだ。他の真選組隊員も、攘夷浪士を斬っては退き、斬っては退きを繰り返す。

やがて、攘夷浪士の数はどんどん減ってゆき、奇跡的に、真選組隊士の数が、浪士たちの数を上回った。

が、ふと、その時、発砲音がして、土方は振り返った。しかし、時はすでに遅し。三発もの銃弾が、土方の両肩と、膝に命中していた。状況が呑み込めず、思わず土方は「は？」と間拔けな声を出し、足の力が抜けて、地面に座り込んだ。銀時、桂も呆気にとられた表情で、土方と共に、弾が飛んできた前方を視界に入れる。

そこには、冷汗を流しながらも、銃口を土方に向けたまた子が、高杉のそばで倒れていた。

「……お前、か……！」

土方は立ち上がろうとするか、膝を打たれたせいか、全く動けない。両肩の痛みも激しい。

すると、これで最後と言わんばかり、再びまた子の細い指が黒い撃鉄を引き、弾が当たった土方は、その場に崩れ落ちた。

「お、オイ、マヨ！」

銀時は土方に駆け寄ったが、土方は気絶していた。

桂も、乱戦の際に懷から取り出した刀を手に、高杉に向って吠えた。「いい加減にしろ！幕府の犬と言えど、今の貴様が行っている活動は、もはやただの破壊行動でしかない！地球を憂うその心をどこに捨て置いた！？」

高杉は、撃たれた右手をがっくりぶら下げながら、冷笑する。

「どこに捨て置いた？そんなもん、俺アとつくに忘れて行つたよ。

……今日、な。」

その言葉に、銀時と桂はこぶしを握り締める。

十月二十七日。

自分たち三人が、それぞれの別の道を歩み始めた——いや、各々の思想が、違う方向へ向かった日。

そして、その発端となった、あの出来事。

それが起きたのは、ちょうど十数年前の今日だった。

「……高杉。貴様、まだあの日を……。」

「お前らこそ、忘れなくても忘れられないんじゃないかねーのか？特に銀時。俺やヅラもそうだが、お前はあの日から、すべてを失った。そうだろう？」

指摘されて、銀時は苦い顔をする。

「あの頃失くした仲間^モを取り戻そうと必死なんだろう、お前。見ていると哀れだぜ。真選組とつるみ、呑気に、『なんとなく』生きるお前を見ていると、こっちまでがつくりくらア。」

「……れ。」

銀時がボソリと呟いた。

「今までお前は何を思っ生きてきた？松先生がいなくなったこの世の中で、何を持って生きてきた？仲間か？絆か？そんなものは関係ねー。俺たちが亡くなった先生にできることはなんだ。」

「……まれ。」

「つまらねー人間関係求めて下界彷徨つてるテーマに、もう獣の声は聞こえねーんだよな。ならもう一度聞かせてやろうか！？松陽先生が亡くなった、今日この日になア！！」

「黙れつつてんのが聞こえねエのかクソヤロオオオ！！」

獣のように、獰猛な、大きな笑みが広がった高杉に、銀時は、まさしく夜叉の形相で襲いかかった。感情に押されるまま、銀時は力の限り木刀を振るう。逆腕で攻めていた高杉も、段々と防戦一方になつていく。

すると、高杉が一瞬のすきを見せた刹那、銀時が力の限りを使った一撃が、高杉の胸を突いた。

血を噴き出し、目を見開き、高杉は地面に伏した。

怒りが赴くまま、銀時は再び木刀を振り上げ、下ろそうとした。
が、その瞬間――。

鴉が飛びまわる。

屍がそこらに転がっている。

血なまぐさい臭いが漂う。

そんな戦場で、一人の少年が、死体のうち一つに腰かけながら、遠い空を見上げていた。

広くて、ちよつと得たいのしれない大空。だけど、人から奪うことしかできない少年にとって、この空は恐れを抱く存在であると同時に、憧れでもあった。

と、その時。

「屍を食らう鬼が出るときいて来てみれば……君が、そう？」

声がして、少年は後ろを振り返ろうとした。しかし、その前に、大きな、温かい男の手が、自分の頭に乗った。

「またずい分と、カワイイ鬼がいたのですね。」

少年は、パンと手を振り払い、持っていた刀の鞘を、半刀身、抜いた。

「刀も、屍からはぎとったんですか。」

少年は、構えを解かず、まるで鬼のような鋭い目で男を睨んだ。

「童^{わらし}一人で屍の身ぐるみをはぎ、そうして自分の身を護ってきたんですか。たいしたもんじゃないですか。」

ついぞ、男は笑みを崩さず、口を開き続ける。光り輝く刃を見てもなお、男の表情にあせりは見えない。いや、それどころか、こちらが焦ってきた。

「だけど、そんな剣、もういりませんよ。」

男は、己の腰にさしていた刀を握る。

「他人^{ひと}におびえ、自分を護るだけに振るう剣なんて、もう捨てちゃいなさい。」

襲^襲って……くるのか？

少年は身を固くし、男の手が、刀を鞘から抜き出すのを待つ。

しかし、男がとった行動は、自分が予想していたものは全く違っていた。

「くれてあげますよ、私の剣。」

男は、自分の唯一の武器である刀を、ヒョイと少年に向かって抛った。そして、くるりと踵を返す。

「剣^{そいつ}の本当の使い方をしりたきゃ、付いてくるといい。これからは剣^{そいつ}を振りなさい。」

少年は、去りゆく男の後ろ姿を、じっと見つめた。

その背中は、自分の頭上に広がる青空よりも、ずっと広く感じられた。

——待つて。

ふと、心の中の自分が、男に向ってそう言った。

「敵を斬るためではない。弱き己を斬るために。」

待つて。

「己を護るためではない。己の魂を護るために。」

待つて。

松陽先生——。

第十一訓 師の背中つてのは大空よりずっとデカイモンだ（後書き）

あと一部で百部！！！！！

第十二訓 ナ。トのサ。ケが示すとおり、復讐なんてロクなものじゃない（前書

百部来たアアア！

第十二訓 ナ。トのサ。ケが示すとおり、復讐なんてロクなもんじゃない

高杉の頭めがけて木刀を振りおろそうとした銀時の手が、間一髪のところまで止まった。

死を間近に感じた高杉の着物は、汗でびしょびしょになっている。

「ハア、ハア、ハア……。」

感情のまま暴れていた銀時の身体がようやく止まり、高杉も、わずかながら、肩の力を抜いた。

「銀時……。落ち着け。」

後ろから、桂が銀時の肩に手を置くと同時に、銀時の殺気が、まるで風船がしぼむかのように、しゅんしゅんと小さくなっていく。

「……殺るなら殺れ。」ぼそりと、高杉が呟いた。「『俺達や次会ったときは仲間もクソも関係ねエ。全力でてめーをぶった斬る』だつたんじゃないのか？」

「そんなに殺されてーんなら、いいぜ、今度こそその腐りきった脳みそ、俺が叩つ切つてやらア。」

再び木刀を構える銀時。それを睨む高杉。

襲う者と襲われる者、両者の間に険悪な空気が流れ、火花が散つた。しばらく、沈黙が降臨する。その間だけ、まるですべてが一時停止したかのようにとまり、音が耳に入ってこない。

するとその時、銀時の瞳から、殺気が消え、静かな光だけが残った。

「……くだらねー。」ぼそりと銀時が口を開き、木刀を降ろす。「

俺達やてめーを殺しにきたんじゃないよ。このバカバカしい祭り妨害に来たんだ。さつさところから退け。お前の出番は終わりだ。」

「怖気づいたか？ 銀時。」冷汗をかきながらも、高杉は冷笑ながら言った。「さつきから言ってるだろ。殺るなら殺れと。俺ア何度も同じこと言つのは好かねー性質たちなんだな。」

それを聞いて、銀時は微笑む。

「そいつア奇遇だ。俺も同じ言葉を繰り返すのはあまり好きじゃね

「よ。俺達や前を殺しに来たんじゃねー、さつさところから退けつつてんのが聞こえねーのか。」

少しの間、高杉は無表情のまま、唇を固く結んでいたが、やがて、銀時を嘲笑するかのような笑みを口元に浮かべた。

「やはりお前には、もう獣の呻きが聞こえねーようだな。まだあめーよ。」

その言葉に、銀時の眉がぴくりと動いた。

「……人間殺すのに躊躇いがありすぎる。この世をぶっ壊す意思がなさすぎる。お前にはねーのか。恨みが、憎しみが、怒りが。この世界に対する思いがねーのか？俺達からあの偉大な人を奪ったこの世界へ、そういう思いがねーのか？……お前は……いや、銀時とツラは、松陽先生がいなくなったこの世界で、どうやって生きる？」
問いが向けられた銀時と桂は、何と答えようか躊躇する。それを見透かしていたかのように、高杉は再び言葉を継いだ。

「俺だったら真っ先に答えるぜ。松陽先生を奪ったこの世界を、跡形もなく消してやる、ってな。テメーにはそういう決心がねー。だからこの世界で、そうやってのうのうと生きていられる。テメーらは、牙を失くした獣になり下がった、ただの臆病者だ。」

言われて、銀時はフンと鼻を鳴らした。

「臆病者で結構だ。だが、ひとつだけ付け加えておくぜ。俺たちが臆病者のように、テメーもただの卑怯者だよ。」

高杉が、その言葉に反応して自分の刀の柄に手を置いたが、銀時はものともせず、瞳に凄味を保ちながら続ける。

「テメーは復讐して自分が英雄だとかなんと思ってるかもしれねーけどよオ、気付けよ。お前はただ逃げてるだけの、ただの卑怯者だ。この世の中に復讐して、先生を失った悲しみを紛らわせてるだけの腰ぬけ野郎だ。」

高杉は、柄から手をはなし、その言葉にニヤリと笑って、声高に叫んだ。

「確かに復讐は俺の我かもしれねーよ。だが今の俺達に何ができる

！？あの人を奪ったこの世界に復讐する以外、俺達にできることがあるのか？できることもしねーまま、そこらでおめおめと生きていける臆病者テメーらと俺は同じじゃねーんだよ！」

「違ーよ！」銀時は、旧友の目を、じつと見つめ、返した。「テメーは忘れてーだけなんだろ。松陽先生がいなくなつた悲しみを。持っている憎しみすべてを以てして、自分と同じ不幸を、この世の中に生きている人間すべてに味あわせたいだけなんだろ！」

銀時は、木刀を強く握りしめたまま、続ける。

「俺達にできることをしてーんだろ。だつたら地べた這いずりまわつても、汚れだらけになつても、自分の武士道テメーのルールだけは忘れずに、汚く生きていきやーいいんだよ！……それが、俺達にできる、唯一のことなんじゃねーのか！？」

それを聞いて、高杉の目が見開かれる。

すると、ふと、守っていた桂が、切り出した。

「臆病者が卑怯者に説教させてもらう。俺達は似た者同士だ。大切な人と同時に、師をも失くした。……それぞれ、やり方は違えど、必死でやれることをしてきた。攘夷戦争あのときの時まではな。」

桂は、静かに続ける。

「貴様は、前、言ったな。俺達は、確かに始まりこそ同じだったが、全く持つてバラバラの方向を見ていたと。それは認めよう。しかし……。俺達は同じ地面から顔を出し、それぞれ別の方向を向いて育つてきた木の枝だ。離れようとしても、離れることはできん。……

所詮……根は同じなのだ。」

高杉の瞳をじつと見つめると、桂は続けた。

「……月並みなことを言わせてもらうが、復讐なんぞロクなものではない。しばらくしてから、己の道を振り返って見る。転がっているのは屍のみ。人は離れ、己はただ一人復讐の道に立つ。お前には、そうなつてほしくない。」

そこまで言ってから、桂は、高杉に手を差し伸べた。

「……高杉。戻ろう。貴様のいるべき場所へ。」

第十二訓 ナ。トのサ。ケが示すとおり、復讐なんてロクなものじゃない（後書

あともう少しで終わります！！><

第十三訓 同じ幹と違う枝

「……冗談じゃねー。」

しばらく、高杉は差しのべられた手を見つめていた。しかし、なんの感情もこもっていないその瞳には、迷いも見えなければ、決心の意も見えなかった。

やがて、高杉は、無表情のまま、差しのべられた手を跳ねのけた。

桂は、無言になる。

「言っただろ。コイツア俺の我だと。復讐は俺の好き勝手やり放題にやらせてもらう。テメーらに関係のあることじゃねー。」

高杉はくるりと踵を返し、その間際、隣に倒れていたまた子に声をかけた。

「立て。」

しばらくまた子は動けずにいたが、高杉に言われて、少し経つと、ヨロヨロながらも起き上がった。

「……よく聞け、テメーら。」

いったん足を止め、後ろを振りかえらずに高杉は口を開いた。

「今回は先生に免じて退いてやらア。だが、次回はこうはいかねーぜ。……首洗って待つてな。」

そう捨て置いて、高杉は再び歩き出した。未だ消え去っていない土煙の奥に、高杉の姿は消えて行った。

桂は、ぐっと深編み笠を深くかぶり、錫杖を強く握りながら、目を閉じた。瞼の裏に、去りゆく同窓の姿が、ありありと浮かぶ。

——同じ根から別れた枝……。

ふいに、自分の言葉をもう一度呟く。

そして、苦笑した。

——俺は何を言っているのだから……。

「……そう言うわけだ、銀時。」

銀時を透かし見て、桂は別れの言葉を告げた。

「もうすぐ真選組が来るだろう。俺はここで失礼させてもらうぞ。」
自分に背を向けた桂に、銀時は眉を上げる。

「そう言うわけってどういうわけだよ。」

「そう言うわけだ。」

答えにならない返答をし、微笑んだ桂は歩き出す。彼の顔に、どこか和やかな表情が見えたのが気のせいだろうか。

そんな桂の後ろ姿を見つめ、銀時は自分のクリクリの天然パーマ頭をかきむしった。

「まったくいつもこいつも……。」

高杉が消えた方向を無愛想な瞳で睨みつけながら、銀時は呟やく。

「……首洗って待っている？そりゃこっちのセリフだ。」

肩を落とし、これからどうしようと思いを回した銀時の瞳に、黒髪頭の男が映った。

どうしたものかと迷ったが、銀時は盛大なため息をつく、その男の方向へ歩み寄って行った。

「どこ行き腐っていやがったこの甘党天然パーマメントがアアア！
若い女性のものとは思えないような蹴りを炸裂させた新八の姉、志村妙は、銀時に殴りかかった。

「奴良組の総大将だったのは誰だコラアア！あん！？私たちの総大将になるつたのは誰だアアア！テメエがいなかったおかげでこっちは大変だったんだぞ！爆発が起きたり攘夷浪士のテロがあったりどうしてくれんだよオオオ！」

いや、俺、今その事態の鎮静化を図ってきたところなんですが。

しかし、この女にいい訳をしようものなら、それこそ地獄行きだ。

「……すいません、次回から気をつけます。」

これ以上、妙の怒りを肥大化させないために、銀時はできるだけ謙ったように言うが、それでも妙の感情は収まらない。

「あん！？謝って済むなら世の中に警察いらねーんだよ！」

そんなこんなで、銀時はその夜一晩中、妙の暴行に遭った。

それを見つめるその他かぶき町住人達は、微笑みながらその様子を
見守っていましたとさ。

「微笑みながらってそこ微笑むところじゃないでしょオオオ！」
銀時の叫びが、平和が再び訪れた江戸を照らす空に響いた。

――十月二十七日。

先生が、亡くなった日。

先生、高い空の上から、俺のことが見えるか？

俺は、アンタの教え通り、自分の道を進んでいる。

第十三訓 同じ幹と違う枝（後書き）

101部って、101匹わんちゃんを思い出します（笑）

第十四訓 たまには借りもいいんじゃない？

土方十四郎の気絶しちゃいました日誌

うつすら目を覚ました俺の瞳に、知り合いの顔が飛び込んできた。

葵に近藤さん、総悟に山崎、その他もろもろの真選組隊員。

何事かと思つて、今度はばっちり瞼を開けて身を起こすと、こちらをガン見していた葵と、ごつりと頭をぶつけた。

いて、と葵は一瞬だけ頭をさすつたが、すぐに俺の名（トツシーだけど）を叫びながら抱きついてきた。

「土方さん、」ふと、総悟が口を開いた。「今度からは、アンター人で戦場行くの、やっぱ止めて下せエ。遅いから心配してアンタのところに行ったら、万事屋の旦那が、アンタを背負つて、下屋敷へ向かうところでしたぜ。」

「万事屋が！？」

あちゃー、と俺は頭を抱える。これは借りだぜ、とか言われること山のごとしだ。

「まあでも今回の事件のおかげで、そこらに転がっていた攘夷浪士を大量検挙しやしたし、これで幕府も、俺達に借りができるってもんでさア。」

総悟が満足そうに言う。

……いや、借りができたの俺なんだけど。

しかし、そんな俺の心の呟きを他の連中が知る由もなく、今度は葵が口を開いた。

「幕府なんてどうでもいいよ！それよりトツシーが無事でよかった！銀時の旦那がトツシーを連れてきたとき、あたし死んだかと思つて心臓飛び出しそうだったんだから！ただでさえ疲労してたのに！」抗議する葵に、俺は珍しく苦笑しながら、悪かったな、と謝る。

「それと。」総悟が言った。「アンタ、俺の言うこと、ちゃんとき

ちつと聞いていやしたか？もし俺が休憩している間、命を落としたら葬式メチャクチャにしてやるといったはずですよ。」

「いやでも、こうしてちゃんと帰ってきたわけだし……。」

だが、俺の言葉も虚しく、総悟は立ち上がると刀を抜き、腹黒い笑みを浮かべると、刀を振り上げた。

「そうは言いやしたが、続きを聞いて下せエ。俺ア葵の悲しむ顔を見たくないともいいやしたが。土方さんの死体を見た時の葵の顔と言ったらそりゃあ……。というわけで真選組副長・土方十四郎。一番隊の組長である俺が肅清してやりまさア。そこに直れ！」

「死体じゃねー！ってか葵を口実に、俺を殺そうとしてるだろ、お前！……！」

襲いかかろうとした沖田を、近藤や山崎が慌てて押さえつける。俺はそんな奴らを背に、自由の利かない足を必死に動かしながら、総悟の攻撃が届かない部屋のすみまで移動した。

この不自由な体の時に、総悟の襲撃を受けたら、命なんていくつあったりゃあしない。

だが。

ぎゃあぎゃあ叫ぶ真選組隊員。いつものように騒がしい屯所。俺はふと、やっぱりここが俺の居場所何だと実感した。

そして同時に――。

「土方死ねこのヤロオオオ！」
ドオオオン！

爆発音が、屯所中に響いた。

……総悟のせいで、俺が毎日死にかける居場所なんだと。

第十四訓 たまには借りもいいんじゃない？（後書き）

一応、これで第五幕が終了致しました！

長篇でも短篇でもなく、グダグダで何を伝えたいのかいまいちよくわからなかった第五幕……。

葵もほとんど出てこなかったし……。

まあ、そんなこんなでメチャクチャな話でしたが、なんとか十月二十七日に終わりました！！

そして、次の篇は……。

斬暴過去編です！！！！

待っていてくれ給え斬ちゃん！！

私が今そっちに行きますウウ！

斬：近寄るなアア！この変態がアア！

ガチャツ、バン！バン！

作者が斬暴による襲撃を受けました。

これで、今回のあとがきは終了とさせていただきます。

葵：ええええええええ！？

（……長くて意味のわからないあとがき、申し訳ありませんでした；
次回はお馴染みエピソードです）

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

注意

阿伏兔が壊れています……。あと、少し神威も……。

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

「……出ちよらん。」

変声期を終えたばかりの少年の声。

「ほとんど出ちよらん。なんで脅迫文のいいとこ盗んでいっただけの鬼兵隊の奴らが、あんなに出ちゆうのに、本文を書いたわしらが二回しか出ておらんちや？不公平じゃ！こがに不公平なことがあつてええがか！？」

ボサボサの茶髪を掻きまわして、少年はギャーギャーあめく。

「ふざけるな！わしはお、必死で頑張ってきたんじゃ。春雨の第七師団の団員になるまで、血がやきむような努力をしてきた！そのわしが……。一ほとんど出ちやーせん！冬瀬め、自分が考えた才^{むすこ}キャラを出さないとは、その所業許しがたし！！その腐った脳みそに、わしが銃弾ぶち込んでやるぜよ！！」

着ている黒いチャイナ服から、どこからともなく物騒な拳銃二丁が現れる。

「これであいつを殺ればいいんじゃ……。フハハ、フハハハハハ！」

「ソイツには、俺も賛成だな。」

ふと、隣で壁にもたれかかっていた青年に声をかけられ、斬暴と呼ばれた少年は嬉しそうな顔をする。しかし、その横では、中年の男が不機嫌そうに立っていた。

「もうすぐでこの小説も終わるんだろ？次幕で最終幕なんだし、その時もどうせ真選組とかいう組織メインなんだろうし、ここで終わらせるのも悪くないね。」

「そうじゃろ、神威兄い！やっぱ兄貴はわかってくれるのぉ！」

抱きつかれて、青年——神威は、弟分の斬暴の頭をヨシヨシと撫でると、微笑みながら、呆れかえった顔の男に声をかけた。

「で？阿伏兎はどうする？」

神威の部下兼斬暴の父親代りである阿伏兎は、はあっとため息をつ

く。

「お好きにしてくれ。だが、俺アもう知らねーからな。何があつても、お前さんたちの行動とはいーっさい関係ない！誰かの帰り討ちにあつておつ死^ちんでも、俺は絶対に墓参りに行かない！供え物もしない！」

「ハイハイ、わかりましたよ。……それじゃあ斬暴、行こうか。」
声をかけられて、斬暴はウンと大きく頷いた。

三十分後。

阿伏兔は、回廊をノンビリ歩いていた。
どうせ二人のことだ、すぐに気が変わるだろう。
そう高をくくって、うーんと背延びをする。

——しかし。

「副団長。団長と斬暴が地球に向って行つたのですが、元老^{うえ}からの命令で？」

後ろから現れた部下の言葉で、阿伏兔は硬直した。

——マズイマズイマズイマズイマズイ……。

只今、春雨戦艦の回廊の同じ場所を、何度も行き来している阿伏兔の頭の中には、「マズイ」という言葉しか回っていなかった。

理由は単純。

義息子^{むすこ}と、その兄のような存在である自分の上司が、作者を殺そうとしていることであつた。

仮に、彼らが言うとおり、本当に作者が春雨の話を書かないとしていたら、別に問題はない。だが、ことはそんな簡単なものではなかった。

その要因は、一日前にさかのぼる。

「親父い。」

呼ばれて、阿伏兔は振り返つた。視界に、小走りでこちらに向つて

来る斬暴が入ってきた。

どうした、と駆けつけた斬暴に聞くと、義息子であるこの少年は、「ほれ。親父宛ての手紙じゃ。」

と、手に持っていた、一枚の封筒を手渡した。

礼を言つて、封筒を開いてから、少し驚く。

内容が、とてもとても丁寧に書かれており、送り手側が、こちらに恐縮していることがありありと伺えたのだ。

春雨第七師団副団長・阿伏兔様へ

先日は大変なご無礼を働き、本当に申し訳ありませんでした。

第五幕では、鬼兵隊の皆様を中心として、「稲荷橋篇」と書かせていただきましたが、第六幕では、「春雨篇」と称し、斬暴様をはじめとする、春雨第七師団を先頭に物語を書かせていただくことになりました。

また、この件に関しては、阿伏兔様だけにお伝えしたく、このように手紙を送りました次第でございます。

神威様や斬暴様には、サプライズにしたいので、ぜひともお二人にはご内密にお願い致します。

冬瀬志保

そうとう緊張して書いたらしく、達筆だったが、紙は乾いた大量の汗のせいで、ごわごわになっていた。

「……なあるほどねえ。」

いつも不機嫌な阿伏兔には珍しく、ちよつと嬉しそくに微笑む義父^{ちち}を見て、斬暴は「どうしたがじゃ。」と尋ねてきたが、阿伏兔はニマニマしながら何でもないと答える。が、その笑いを疑問に思ったのか、斬暴はちよつといぶかしげな顔をしていたが、やがて阿伏兔同様、脂下^{やしろ}がったような表情になると、言った。

「何じゃ、女かえ。」

「ちげーよ。」

「ならなんなんじゃ、そのニマーつとした顔は。」

「何でもない。」

「照れん方がええぞ、親父。神威兄いもずっと親父のことをわらいながら見とるぜよ。」

確かに、斬暴の言うとおり、神威は、いつもとは違う笑みを口元に浮かべて、こちらを見ている。

「隠しても無駄だよ、阿伏兔。長年の付き合いを馬鹿にしないことだね。」

「しちやいねーよ。」

「してるくせに。」

「してねーって。」

否定する阿伏兔に、今度は義兄弟そろって言ってきた。

「してるくせに。」「しちよるくせに。」

それから一日中、阿伏兔は二人に付きまとわれ、その度に「手紙見せろ。」とか「女でしょ。」とか、「隠したちいいことなんぞあらんぞえ。」などとからかわれたが、阿伏兔は手紙を守り抜いた。

しかし、それが祟ってしまった。

今は、アイツらのことだから、どうせすぎに気が変わるのだろうと侮っていた自分を、ひどく後悔している。

一時間ほど阿伏兔は頭を抱えていたが、やがて戦艦に積んである、一人用の船に乗り込んだ。

目的は、ただ一つ。

バカ上司とバカ義息子むすこを止めること。

そして、見事サプライズを成功させ、二人を喜ばせること。

ふと、義息子とその義兄あにが、躍り上がって笑顔になる顔を思い浮かべて、阿伏兔は微笑んだ。

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

「ハッピーハロウィン！！！！ってなわけで飲んじやいませよオオオ！」

「おおおおおお！！！！！」

少女の声で、真選組屯所は大賑わいになる。

「いや、ハロウィーンはいいね！！ホラ、トッシーも年に一回しかない仮装デーだよ？着替えなよ。」

どこかのイギリス映画で見たことのある魔女の衣装を着て、少女――真選組副長補佐・土方葵は、兄である十四郎の肩を揺する。

「着替えるも何も……。俺はそういうふざけたことはやらねえから衣装持つてねエよ……。ってかイギリスって言っちゃっていいの？この世界の雰囲気壊しちゃっていいの？」

「そうやって堅苦しいこと考えてると、世の中渡るのが大変だよ。」
『渡る世間は鬼。かり』なんだからさ。」

「いいの？言っちゃっていいの？名前出していいの？」

「名前出していいとかダメとか、仮装していいとかダメとか、そういうのは全てティッシュにくるめてゴミ箱行き！今日ばかりはハロウィーンなんだから、『ゲリポタ』の衣装着なさい！」

「あ……。『ハ』から始まるほうじゃなくてそっちの『ゲリポタ』？一か月ぶりの登場？」

そうやって兄妹が言い争っている、隣から、一番隊の沖田が、彼もまたゲリポタ衣装を着て、顔をひよっこり出してきた。

「あらら土方さん……。アンタまだ衣装着てないんですかい？俺が着替えさせてやりやしようか。」

「いやいいよ、お前がやるとんでもねーことになりそうだから。」
土方は断るが、沖田は「安心して下せエ」となかなか引かない。

「俺、こう見えても寺子屋時代、『早替えの達人』と言われていやしたんですぜイ。更衣室で誰よりも早くはやく着替え、勢いあまり

そのまま女子更衣室の方へのぞきに行っただけだ。」

「くだらねーからやめろ。お前それ、ただ女子更衣室のぞきたいだけだろ。」

「冗談よして下せエ。俺はそんなことしやせんよ。逆に言うと、女子の方が男子更衣室来てましてから。葵も来てましたから。『沖田君カッコイよね。』とか言っていましたから。」

「ふざけるよ！これもまた世界観崩壊の発言じゃん！ってかそれ以上葵が男子更衣室のぞくわけねーよ、お前のことカッコイイとか思わねーよ！」

「えー？そーちゃんカッコイよ。」

一応自分の意見を述べる妹に、土方は「お前どっちの味方！？」と叫ぶが、「そーちゃんの味方。」と、何当たり前のこと聞いているの？という顔で、あっさり一蹴されてしまい、がつくりと肩を落とす。

「じゃあ土方さん。」

ふと、沖田が口を開いた。

「衣装替えしましょうか。」

言われて、土方は、「ああ……。」という表情をした。思い出せば、事の発端は土方の仮装であった。

「あっちゃん、お前も手伝え。」

「はい。」

土方は、大人しく部下に従う葵を見ていたが、なぜだか嫌な予感がした。

「それじゃあ土方さん、ちょっとキツイ衝撃が来るんで、目えつぶつとして下さい。大丈夫です、一瞬ですから。」

ガチャ。

二つのバズーカが、土方の前で構えられた。

「はい、三！二！一！」

ドオオオン！

バズーカ^{いやなよかん}の弾が、土方の頭にドストライクした。

所変わって、真選組屯所の中庭。

「おらんのう……。」

ぼつりと、一人の少年の声が、雲ひとつない夜空に溶けた。

「ハロウィーンじゃから、ここにおると思ったんじゃが……見当違いだったぜよ。」

少年は、異様な格好をしていた。これもまた、どこかの魔法使いを主人公とした映画に出てくる悪役たちが着ている衣装を身にまとい、しかしながら、それに似合わないイヤホンを耳にし、双眼鏡を構え、真選組屯所内を観察していた。

「意外に地味に部屋で本でも読んでるんじゃない？『世にすこむ日』、あと五十ページで全部読み終わるって上機嫌だったし。」

隣の茂みで身を潜めている青年に言われ、少年は感心したような声を出した。

「『世にすこむ日』かえ……。あれ、四巻くらいなかった？」

「あつたよ。昨日と今日で一完丸読みしたんだって。あの作者にしては頑張ったんじゃないの？それに、『世にすこむ日』のあとは、絶対『燃えちまえよ剣』を数週間で読破する！とか豪語してたし。テストあんのに何やってのかなあ。」

「ってか兄貴、何でもがに知っちゅうがか？それ以前に、何でも上機嫌って知っちゅうがか？行ったがか？会いに行ったがか？」

「……いや。」

「一瞬、間があつた気がする。」

「気のせいだよ。」

しばらくの間、二人は無言になった。青年は、その間、手に持っていた『魔法の杖』をブンブン振りす。ちなみに、今の文で分かったと思うが、この青年も、実はイギリス映画の悪役たちの服を着ている。

「ハロウィーンかあ……。」「

青年は呟いた。

「悪くないかもね。」

「地球って案外広いんだなア……。」

江戸上空。屍喰い人^{コ・フ・イ・タ}の衣装を着、面をかぶり、ホウキに跨りながら、阿伏兎は真選組屯所を探していた。部下から聞いたところによると、上司と義息子は、真選組へと向かったらしい。

宇宙一の銀河系シンジケートが、地球の警察機関に乗り込んで大丈夫なのか、いやそれ以上に、自分の上司に、第七師団団長としての自覚があるのか、阿伏兎は上司の神威を問い詰めたかった。

……っていつか俺もこんな格好してて大丈夫？

素朴な疑問が頭に浮かんだが、これは無視することにした。

「真選組屯所……。アレか？」

阿伏兎の目に映ったのは、大きな屋敷。中庭に面している縁側から、光が漏れていた。高空からでも、人々が酒を食らっている——いや、逆に食われてる——騒々しい物音が聞こえる。

阿伏兎は、誰もいない路地に降りると、跨っていたホウキを、路上に捨て置いた。

屯所らしき建物の前に立つ。

「特別警察 真選組屯所」

という大きな表札が、建物の門にかけてあった。

ここに間違いないと、阿伏兎は確信する。

小さな深呼吸をすると、真選組の敷居を跨いだ。と、その時。

「あゝ。真選組に、何か御用ですか。」

気弱そうな声が聞こえて、阿伏兎は、声がする方を振り返った。地味そうな男が、またもや「あの映画」の制服を着て、バツが悪そうに立っていた。

「……あ、いや……。」

「あ、そうか！」男が、いきなり叫んだ。「沖田隊長だな。副長を脅そうとでも画策してるんだな。」

何かの勘違いをして、「俺はその案を看破したぜ」というような余裕そうな表情をする男に、阿伏兎は正直戸惑ったが、これはいける

んじゃないかと、彼の調子に合わせた。

「そうなんですよ。隊長殿が、副長殿を脅せ脅せつてうるさくて。この衣装もやつとのことでトンキホーテで手に入れて来たんですから。感謝して下さいよ。」

そう言った阿伏兔に、男はすみませんと頭を下げた。

「いかせん、ハロウインだって言うんで、年中仕事サボってフザケてる沖田隊長が、それ以上にテンションあがっちゃって……。天下の真選組が、本当にお恥ずかしい話です。」

「いえいえそんなことないですよ。」と阿伏兔は面の向こう側で苦笑する。「こちらの上司は、テンションあがるどころか殺気があがつちやいましてね、止めるのに大変なんです。」

心の中で、何もウソを付いているわけではないし、と言いつける阿伏兔。

男も微笑笑をすると、屯所の玄関へと、阿伏兔を案内しながら口を開いた。

「お互い、『危ない』上司を持って大変ですね。うちも、つい最近、副長の妹さんが帰ってこられて、これがまたいいお人なんですけど、その沖田隊長とつるんでいましてね……。」

男の口は止まることを知らない。

阿伏兔は、こんなにも簡単に、隊士が隊内のことを語っていいのだからかと思っただが、それは軽く受け流した。

「ここです。」

男の口と共に、男の足が止まったのは、大きな座敷のところだった。しかし、「脅し」にちゃんと配慮しているらしく、できるだけ、人の死角である襖を開いて、阿伏兔を部屋の中に入れた。

「隊長……。」

男は小さく呟きながら、栗色の髪をした少年——いや、もう青年といえる歳だろう——に近寄り、「ドツキリの仕掛け人の方が、来て下さいましたよ。」と言う。

阿伏兔は、ここでバレるか危ぶんだが、ここは何とか誤魔化そう

と、必死で申し開きを探す。

「山崎。」

青年は、山崎と呼ばれた地味な男に、怪訝な顔を向けた。

「俺アたしかにドッキリ仕組んだが、もう仕掛け人は呼んだぜ。」
青年の言葉を聞いて、阿伏兔は良い言い訳を見つけ出した。何かの手違いがあり、阿伏兔が真選組のドッキリに来てしまったことにすればいい。

「ホラ、あそこで屍喰^{コイブ・イーター}い人の面かぶってる二人組。」

ふと、青年が指差した方向に、阿伏兔の目が行った。そして、仰天する。

なんと、仕掛け人二人が被っている面からは、青と灰色の瞳がこちらを覗き、手を振っていたのだった。

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

「世にすこむ日」↓「世に棲む日」

「燃えちまえよ剣」↓「燃えよ剣」

「どこかのイギリス映画」「ゲリポタ」「どこかの魔法使いを主人公とした映画」「イギリス映画」↓「ご存じのとおり」「ハリー・ポッター」

「^{コブ・イーター}屍喰い人」↓「^{デス・イーター}死喰い人」（ハリーポッターに出てくる、悪役たちの総称のようなものです）

ハリー・ポッターファンの皆様、司馬遼太郎の小説のファンの皆様、申し訳ありません。

いやいや、作者も好きなんですよ！？ハリーポッターと司馬遼太郎の本！大好きですよ！

……愛ゆえこうなっただと思ってください……。 （↑

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

眠い……。

そして神楽ちゃん……。愛しの神楽ちゃん……。

遅くなったがハッピーバースデー！

(* · ·) / . . . * 【祝】 * . . . \ (· · *)

神：遅いアル！

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

——なんでこうなんのオオオオ！？

阿伏兔は、内心、出来る限りの絶叫を上げた。

だが確かに、阿伏兔の叫びも尤^{もつと}ものことである。

この小説を書いた暇人を始末しようと動いた二人であつたのに、いつの間にやら地球の警察組織の塹に入り込み、それどころか座敷に上がり、ドツキリを企てた真選組の隊長と共にいる。

これはどういうことだと、阿伏兔は呆れざるを得ない。

——お前さんたちそこで何してんのオ！？作者ぶつ殺すって張り切ってただろうがすつとこどつこい！

目でそう伝えてきた阿伏兔に、二人——神威と斬暴は、面の向こうでニコニコしながら、こちらも目で語る。

——なんかこう、成り行きで。

——どんな成り行き！？

——作者が、書くのめんどくさうて、かいつまんだちや。

——どれだけかいつまんだんだよ！？

阿伏兔は、二人を止めようと必死になっていた自分を思い出し、出来るだけ大きな吐息をついて、自分が感じた虚しさを表現する。

と、その時、二人の少女の喧騒が、玄関先から聞こえた。玄関から奥のこの座敷まで声が届く^このだから、よほどの大声で言いあっている^るのだろう。

「何で真選組^ニにあなたが来るの！」

「別にいいネ！昨日は神楽ちゃんの誕生日だったアル！おまえもそこで跪くヨロシ！」

「跪くわけないでしょ！あなたは家に帰って、酢昆布でもしかぶつてなさい！っていうか昨日誕生日って虚しくない！？」

二つの声のうち一つを聞いて、阿伏兔の眉がぴくりと動き、無意識のうち、目が神威へ行つた。面のせいで顔が隠れ、表情が伺えなか

ったが、きつとその向こうでは、神威は辛辣の顔をしているだろう。……いや、いつもの微笑みの仮面が待ち受けているかもしれない。ふと、足音がこちらの座敷に近づいていることに気がついた。数えると、足音は四つ。四人分だった。

「神楽ちゃん……。引き上げようよ。今日は万事屋でお祝いすればいいんだし。姉上やお登勢さんたちも来てくれるって……。」

「そうだよ。まったく何でわざわざこんなマヨネーズ臭いところに銀さんがこなきやならねーんだ。」

「二人ともうるさいネ。昨日は私の誕生日だったし、百部突破したし、前投稿した時はハロウィンだったし、何かもうお祝いムードアル！今ならサドと、マヨの妹略してマヨシスを成敗することができるネ！奴らも、今日くらいは気を抜いてるはずアル！」

「何か作戦立ててるようですけど無駄ですう。そのマヨシスが作戦聞いてちゃいましたあ。」

阿伏兔の、再び大きなため息。声だけで、誰だかわかった。

同僚二人、交戦した相手が二人——しかも一人は上司の犬猿の仲の妹——、地球の警察機関の隊士——。やっていられない。こうにも会いたくない面々がそろってしまつとは。しかも、拳を交えた仲の者には、いくら相手が自分がだれなのか知らなくとも、気まずい。

——お二人さん、帰ろう。どうせ、作者暗殺は中止したんだろ。

あまりの気まずさに、耐えきれなくなつた阿伏兔が、目で切りだした。

しかし、神威と斬暴は、ブンブン首を振る。

——確かに暗殺は中止したけど、ハロウィンパーティーはまだ終わつとらんぜよ。

——ハロウィン十月三十一日そのものは過ぎたけどね。

子供染みている返答に、さすがに阿伏兔の堪忍袋の緒が切れそうだったが、何とか我を取り戻した。

不意に、障子が開き、四人の人物が入ってきた。

読者の皆様はご存じ、万事屋三人組、そして真選組副長補佐・土方

葵である。

葵と万事屋組の一人、神楽は、未だ睨みあつてメンチを切り合っている。

すると、今度はこの二人のみならず、銀髪の侍——坂田銀時と、副長と呼ばれていた男——土方の間にも、火花が散る。

しかも、阿伏兔はとんでもないことに気がついた。

銀髪の侍と言えば、神威が狙っていた男だ。

無意識に、再び阿伏兔の目は神威に向く。果たして、動くかどうか——。

阿伏兔は、神威がいきなり乱闘を始めないよう、天に祈った。自分たちが春雨だとバレて、地球人に襲われたらとんでもないことになる。無論、地球人風情を倒すのは一瞬のことだが、大変なのは、「銀髪の侍」と、「上司の妹」であつた。彼らは、一筋縄ではいかな

いだろう。帰ろう、と再度阿伏兔は二人組に催促するが、それは当然の如く無視される。

ふと、その時に、あたりが真つ暗闇になつた。

その瞬間、阿伏兔の頭に、最低の状況が、ありありと浮かんできた。シチュエーションしもこの暗闇が、真選組の奇襲だとしたら——。

似合わず、阿伏兔は焦り、神威たちの方へ足を向けた。が——。

ひゅーどろどろどろー。

よくお化け屋敷などでよく聞くBGMが流れ、阿伏兔は「は？」と動きを止めた。

「ひゅーどろどろどろー。」

おどろおどろしい声——しかし、よく知っている声を聞いて、阿伏兔は更に耳を澄ませた。

すると、その刹那、三人の大きな悲鳴が、部屋中に響いた。

「出やがったアアア！屯所にととうモノホンの幽霊出たアアア！」

「落ちて多串イイ！アレはアレだ……ゲリポタの屍喰う人だ！ウコープ・イーター

ン、そうだよ！絶対……！そうだと……思う……。」

「銀時の旦那アア！今なんか声小さくなりませんでしたか！？なんか……見たんですか……。」

「お前も声小さくなってるだろうが！今なんか見たんだろ！葵も何か見たんだろ！……ヤベ、俺も見ちゃった。」

土方の声を最後に、それ以上、人々の悲惨な声は聞こえなくなり、代わりにバサツと人が畳に倒れたような、乾いた音がした。

と、照明に明かりが戻った。部屋の明かりのスイッチと思しきボタンに手を当てていたのは、先ほどの栗色の青年——真選組一番隊長・沖田総悟である。

阿伏兔は、先ほど倒れた音がした方向に視線を変えた。そこには、白目を剥いて、まるで死体のように動かず、顔が真っ青のまま、地面に伏した土方葵、土方十四郎、そして坂田銀時がいた。そして、その後ろに、屍喰い人の面をかぶった二人組。

「いやあ、いい演技だったよ、三人とも。」

沖田が、パチパチと拍手をする。無論、その拍手は、何もしていない阿伏兔にも向けられていた。

「これで土方さんは白目剥いて副長の座を剥奪……のはずだったんだが……まさかのあっちゃんまで気絶とはねエ……。副長兄妹揃ってオバケが怖いだなんて、天下の真選組がそんなバカげた話がありやすか。ねえ、近藤さん。」

阿伏兔は呆気にとられた表情をするが、沖田の発言からすると、暗くなるどころからはじまり、昏倒した三人組の絶叫やは、この沖田が仕掛けたドッキリであり、神威と斬暴はそれを手伝ったということである。

「まあそういうな、総悟。」局長、近藤は、苦笑しながら、なだめるように沖田に言う。「人には一つや二つ、欠点があるんだ。オバケが怖いくらい、かわいいもんだよ。」

「そうなんですかねえ。」

沖田はイマイチ解せない顔をしていたが、やがて、葵の元へ近寄り、

「おい。」と起こし始めた。

それと同時に、万事屋の残された二人も、オーナーに駆け寄った。もっとも、神楽は暴走して、銀時の頭をふんずけていたのだが。

その後、真選組隊員（土方兄妹は除く）と万事屋従業員はおおいに騒ぎ、翌日になって、その時屯所にいなかった出張帰りの隊士に見つかるまで、泥酔して寝ていた。春雨第七師団も、なんとか暴れることなくその夜を終え、夜明け前に、抜き足差し足で屯所を抜けたという。

無事に阿伏兎は作者暗殺の暴挙阻止という任務を終了し、斬暴へのサプライズを守り抜いた。

そして……。

それから数週間、万事屋オーナー・坂田銀時、真選組副長・土方十四郎、副長補佐・土方葵が、夜中、一人で手洗いに行けなくなったのはここだけの話。

作者の暴走とか言っていましたけど訂正します。キャラたちの暴走でした 其の

無事(?)に第五幕&エピ終了致しました!!

エピローグ、最後がアレだったのはスルーでお願いします!

……もうネタが底をついてきたうえ、寝不足でキーボードを打つ指までかすんで見えてきています……。

あれ?もう何言いたいのかわからなくなってきました……。

ちなみに、第五幕の「稲荷橋事件篇」ですが、これは司馬遼太郎先生の「世に棲む日々」の「御成橋事件」おなりばしから、少々アイデアをいただきました。

一応、ここに書かせていただきます><

ここから冬瀬の趣味全開の読書感想文(「世に棲む日々」と「燃えよ剣」です。ちょっとネタバレ?)

505

先ほどまで書きましたが、この頃、睡眠不足がハンパないです。今でももう瞼が閉じかかっています……。

宿題とかに追われているのもちろんなのですが、それ以上に「燃えよ剣」にどっぷりハマりました。

それと世に棲む日々……!読み終わったのですが、最高の一言に尽きます!一・二巻は正直言ってそこまで好みではなかったのですが、高杉晋作が出てきてから、もうのめりこんでしまつて……。

もう、高杉さんは「スゲー」のひとつことに尽きます。それ以外に何がある?みたいな感じです(↑

ホントウに天才なんですよ、高杉さん><

自分が予想したとおりにことが運んだり、本当に天がついているくらい運がいいし、何よりも軍師!

高杉さんが亡くなった時、さして泣くところでもないのに、なぜだ

か涙目になっていました。（↑

「燃えよ剣」なんです、ダメですね……。いい意味で。私、寝る間も勉強する間も（↑オイ！！）おしんで読んです。

土方さん、嫌いじゃないんですけど、十四郎の方が自分的には好みです。ちよつと怖いです><;

でも、沖田は……！絶対総司派です！カワイイ！やばいくらいカワイイ！歳三と一緒に歩いたり喋ったり、共闘しているところとかもツボにハマります！なんかミツバさんと一緒の時の沖田そのままです。一人称「私」ですけど……。

近藤さんは銀魂と全く同じです。大好きです、ゴリさん。

それにしても、と思ったのが、やっぱり空知先生、司馬遼太郎の作品、好きなんだなあ、ということですよ。

もう、銀魂に出てくるものの全てが「燃えよ剣」に入っています！特に、上巻の前半の部分なのですが、

「あれが竹刀でなく真剣なら、七里研之助をああは容易に撃てたかどうか」

「わかりません」

と桂は言った。

相手にならない。田舎の小流儀派に教えにゆくと、かならず歳三のようなのがいて、

——実践にはいかなものでしょうか。
という。

桂は馴れている。

（新潮文庫 司馬遼太郎作 燃えよ剣 上巻 から引用）

というところで、まっ先に思いついたのが柳生篇！！

もうそのまんまじゃないですか！？あの北大路と土方（十四郎の方

です）が戦うシーンと……！！

ちなみに、「桂」というのは、お察しの通り「桂小五郎」——ツラ
のモデルの方です。まだその時は真選組は結成しておらず、桂も一
介の道場の門下生で、近藤たちは田舎道場で、他流儀の門下生たち
としょっちゅう喧嘩をしていました。その喧嘩の助っ人に、桂が斎
藤道場の塾頭として来ていたらしいです。

……すみません、眠い時はいつもこんな感じになります。

もはや「世に棲む日日」と「燃えよ剣」の読書感想文でした、銀魂
がミックスした……。

これからは、恐らく毎日あとがきにこういうことを書いていくと思
います……。

（↑オイオイオイ！

長々としたあとがき、申し訳ありませんでした>（——）<>（

——）<>（——）<

第一訓 みんな所詮は同じ（前書き）

すみません！！

昨日の感想文なのかあとがきなのかわからないものはモチロンですが、今幕では、神威が壊れる予定です！！

先に謝らせていただきます！！（――（――；（――（――；

第一訓 みんな所詮は同じ

天人も地球人も同じだ。

違うところと言えば容姿、身体能力だろうか。

が、所詮は食って動いて寝る。そこは同じだ。

天人は、地球人を猿やら野蛮やら罵るが、地球人からみても天人は貪欲だし、何より非道だ。

地球人が最も大切にしている魂——武士道を持っていない。

ちなみに、俺は地球人だ。しかし、己の道うじのちは捨てて、天人になった。思ったより簡単だった。もともと武士道そんなものなんて、俺なんかは持ちあわしちやいなかったからだ。

だが、それは間違っていた。

人が変わるなんて、そんなに簡単じゃなかった。

でも、俺は後悔はしていない。

幾らこの手で尊い命を奪おうと、幾らこの身を血で汚そうと、俺はこの道を進む。

それが、俺の道だから。

それが、彼らの道だから。

それが、修羅の道だから。

それが……。

だから。

夜を駆ける者の道

第一訓 みんな所詮は同じ（後書き）

前回は本当にすみませんでした！！！！

深夜のノリは、恐ろしいものです……。あんな長ったるいふざけた感想文を書くなんて、ホントにどうかしていました……。

みなさんも、気を付けてください。（↑気をつけるのはお前だけ！

でもでも、「燃えよ剣」は「燃えよ剣」で、「銀魂」とは違ういいところがあるな〜と思いました。まる！！

あれ？作文？

第二訓 春の雨と書いて「はるさめ」と読む（前書き）

すみません、五日間も投稿していなかったのにも関わらず、とても短いです。

そして、眠いです……。

第二訓 春の雨と書いて「はるさめ」と読む

「どう？イヤホンの調子は。」

義兄に尋ねられ、少年——斬暴は、グツと親指を突き出した。

「良好ちや！」

ウインクする斬暴に、義兄である神威はいつもの微笑みのまま、「そいつは良かった。」と返す。

「そういえば斬暴。」ふと、神威が思い出したように口を開いた。

「イヤホン（それ）、そろそろ手入れした方がいいんじゃないのかな？戦闘用に特化しているものだけど、もう使い始めて何年も経つてるでしょ？それに、君はそれがないと生きていけないも同然。壊れた後じゃあ、收拾が付かないだろうからね。」

言われて、春雨本部の戦艦の回廊を歩いていた、斬暴の足が止まった。

思えば、このイヤホンがなければ、自分は挨拶すらマトモにできない人間だ。もし、神威と会わなければ、自分はどうなっていたのだろう。

怖ろしいことを想像してしまい、思わず背筋がゾツとする。

しばらく、斬暴が立ち止まったのに気が付かず、神威は先に回廊を歩いていたが、やがて振り返った。

放心しているように、立ちつくしている斬暴を見て、神威は首をかしげた。

「どうかした？」

声をかけられて、斬暴はハッと顔を上げた。意識が飛んでいたようだった。

「いや、なんちゃあない。」

そう答える声には、どこことなく力が抜けている。神威は、更に首をひねざるを得なかった。

——その数十分後、春雨本部——

「……天導衆の返答はどうだった。」

風除け布で顔を隠した一人の男がそう口を開くと、もう一人が返した。

「応ずる、と。今すぐにでも手に入りたい資源を、未だ蔓延^{はびこ}る猿どもにとられておる……。奴らも、出来るだけはやくその猿どもを排したいところ。賛成するのは当たり前だろう。」

「……まあ、それもそうだろうな。」

口元を隠した布の奥から、クク、と奇妙な笑い声が漏れる。そして、集まっているほかの男たちに、鋭く、細い目を向けた。

「それでは……。ぬしら、用意はよいか。」

こくりと、全員が頷く。

「ではことを運ぼうではないか……。」

男の言葉が、部屋に怪しく響いた。

第二訓 春の雨と書いて「はるさめ」と読む（後書き）

遅くなりましたけど……。

斬ちゃんよ、（一日遅れの）ハッピーバースデー！！！！

いやいや、冬瀬忘れていたわけじゃないんだよ！？でもさあ、なんかさあ、ちよつと小説何書こうか行き詰っちゃってさあ、この数十行（？）かくのに一時間もかかったんだよ、続きとどうつなげようか迷って。

……とか何とかいい訳を言っていました、ただ単に忘れていただけです。

ネタも詰まりましたけど。

頭の悪い人間（＝冬瀬志保）は、計画を作らずして小説を書かないことですね。

本当に、これ如きを書くのに一時間もかかりました。

眠いのもありまして！><（↑ただのいい訳

長くなりましたが、斬ちゃんよ、君の誕生日はエピか何かで祝ってあげるから許しておくれ！

斬：誰が許すかアアア！

第三訓 ジャンプはため込まないように

手に持っていた新聞に、大きく書かれた「またもや攘夷テロ！真選組、今回も浪士逮捕できず」の文字。いつたい、これで何回目だろうか。この見出しを見て、溜息をつくのは。

「……ここ数週間で何回テロ起きてんだよ……。」

その呟きを聞いて、万事屋オーナー・坂田銀時の書斎を片付けていた従業員・志村新八が、新聞を見ようと、ひよっこりと顔を覗かせ、ああ、と漏らした。

「もう、毎日のように事件が起きていますよね、攘夷浪士によるテロ……。真選組の皆さんも、大変でしょう。」

「いや、『毎日のように』どころか、きまって朝刊と夕刊で出てくるからね、このニュース。朝夕のダブルパンチですよ。ホント、最悪のニュースを口から吐き出してくる双竜ダブルドラゴンですよ、コレ。」

そう言った銀時に、ソファアに寝転んでいたもう一人の従業員・神楽は女性雑誌から目をあげた。

「マジでか。双竜ダブルドラゴンアルか。連蓬のダブル將軍アルか。」

「正確にはトリプルドラゴンだけだね。」と新八が付け加える。

はあ、と大きな吐息をし、銀時は背延びをした。

「まったく近頃は、依頼は一つも入ってこないしテロは多発するし……。」

「……最悪だなあ。」

新八は、大量のジャンプを抱えると、玄関へと向かった。

「それじゃあ銀さん、僕、ジャンプ捨てのついでに買い物行ってきます。……あ、逆か。買い物ついでにジャンプ捨てに行ってきます。」

銀時の返答も聞かず、新八は万事屋を後にした。

銀時は二、三週間前のジャンプにとても面白いのがあったのを思い出し、急いで新八のあとを追いつ、ガラリと玄関の引き戸を開けたが、その時はすでに、ゴミ収集車ジャンプが宝の山を、汚いゴミの中に放り込ん

だ後だった。

——その数時間前、真選組屯所——

「土方さん。起きて下せエ。」

声が、自分の上から降ってきたような気がした。

「土方さん。もう六時四十三分でさア。朝餉タイムも終了しやしたぜ。」

が、起きれない。先日、書類処理のせいで、夜中の三時を回るまで起きていたせいだからだろうか。

「土方さん。最後の忠告でさア。起きて下せエ。」

嫌な予感がしたが、身を起こせないのだから、しょうがない。そんな理由をかまけ、微動だにしない。

と、その瞬間——。

「土方死ねコノヤロオオオ！」

ドオオオオオン！

いつも通りの朝。

真選組屯所から、大きな爆発音がした。

嗚呼、やっぱり起きていればよかったと、真選組副長・土方十四郎は深く後悔した。

「この頃、浪士の動きが活発だよね。」

土方葵の一言が始まった、朝の会議。

頭に爆弾がクリーンヒットして懲りたのにも関わらず、土方の頭からは、ついぞ眠気が吹っ飛ばない。確かに、起きればよかったと悔いはしたが、どうやら今の本心は先ほどとは違うところにあるらしい。

そんな兄の現状を知る由もなく、葵は続ける。

「江戸で大火事があったと思ったら浪士の仕業。幕府御用達のおおだなの主がやられたと思ったら浪士の仕業。ここ二週間で、江戸の中だけでも被害は二十九件。多すぎだよ。」

その言葉に、隊士全員がうんうんと頷く。

「関係のねエ話だが……。」ふと、一番隊の沖田総悟が口を開いた。「天人の数も、常時に比べれば二倍くらいは増えているぜ。巡回中によく出会う。」

それを聞いて、「あ、自分もそう思います！」という声が上がった。

「それに……あまり確信は持てないのですが、」と隊士は言った。

「市中を見廻っている時に会う天人は、黒い噂の絶えない星の連中ばかりだと。」

「黒い噂……と言うと？」

眉を上げた土方の質問に、隊員は首肯した。

「たとえば、犯罪組織——例をとると、宇宙海賊団春雨との関連が疑われている星の連中。阿片の原料となる食部の栽培をおこない、春雨のような組織に売りさばいている星の連中……。等々です。天人はどれも似ているものばかりで、どれがどれなのか、はつきりとは言えませんが……。」

なるほど、と、真選組局長・近藤は合点した。

「天人か。しかし、見た目で数がわかるほど、大幅に天人の入国数が上がったとは、入局^{うえ}管理局の連中からは聞いていないぞ。」

そう近藤が疑問視したのと同時に、監察の山崎退が手を上げた。

「スミマセン、それについてちょっと報告なのですが。」

発言の許可を求められ、近藤勲と、土方は、こくりと首を縦に振った。

山崎は手元の書類に目を落とし、言葉を継いだ。

「近頃、江戸の港を出入りしている、異国船の数が、通常の二倍近くになっています。それも、違法で寄港している船^{もの}がほとんどです。取り締まりをしようにも、どうやら異国の首領株が絡んできているのが大多数……。少しでも俺たちが妙なマネをすれば、天導衆に報告間違いなし。即刻真選組^{おれたち}切腹ですよ。」

「つまり、」柱に寄り掛かっていた土方が、独特の鋭い双眸で、山崎を見降ろした。「かいつまんで言うと、だ。異国船が違法で港に

寄っている。しかし、奴らは天導衆とのつながりがあり、取り調べができないと。」

山崎が、はい、と返す。

「しかもその船に、攘夷浪士らしき陰が出入りしているうえ、阿片などの売買も、考えられます。そうなれば、最悪ですね。」

阿片——既に、春雨絡みで阿片関係の事件があった。それも、幕府の重鎮もそれに加担しており、真選組がその重鎮を攘夷浪士たちから守るという、とんでもない仕事を押し付けられたこともある。

——まさか、また春雨が……。

そう考えたが、やがて思い直した。そんなことが、あるはずがない。相当大暴れして、天導衆も春雨も懲りたはずだ。

しかし、事実、いい噂がない星の連中——それも春雨との関連性がある面々が界限を往来しているとなると、懸念を持ちざるを得なかった。

それに、さらなる問題は「その船に、攘夷浪士らしき陰が出入りしている」ということである。異国を忌嫌って攘夷々と唱える浪士たちが、何ゆえ天敵である天人の船に乗っているのだろうか。

……一つだけ、思い当たる節がある。最も天人に近づいている、高杉晋助率いる武装集団——鬼兵隊。

もしも奴らが関わってくれば、面倒なことになってくるだろう。

「……山崎。」瞼を閉じ、土方は部下に命令を下した。「取りあえず、港の見張りを続ける。毎日俺に、何があったか報告をするんだ。どんな小さなことでも、伝えてくれ。」

「はい！」

山崎はビシッと敬礼した。

——鬼兵隊、か……。あぶねエな。

不意に見えた空が雲で覆われつつあるのを見て、土方は眉を暗くした。

第三訓 ジャンプはため込まないように（後書き）

…… 青の被魔師、やっと全巻読むことができました。

五巻以外持つていて、一から四巻までは読んでいたのですが、五巻がなかったために、続きを知ることができなかったのです……。

それも五巻の表紙、まさかの坊^{ぼん}じゃん！勝呂くんじゃん！土方さんじゃん！（↑

これでもか、と読みたくてしようがなかった五巻を、やっと先日手に入れました。

一ヶ月間、帰る途中に必ず本屋を三軒回り、五巻を探しまわりましたが、収穫なし。他の書店に行っても、五巻だけないという不幸体質。一ヶ月間あんばん生活に浸っていた山崎さんと同じくらい不幸な境遇にいました。

つてか何コレ？日記？不幸日記か何かですか？（↑オイオイ

そんなこんなで、銀の被魔師、略して銀エクを書き始めようかなあという感じです。

…… ちなみに、副題の Silver Exorcist がカッコイイとか思っ、中二病全開（なのかな？；）の冬瀬ございました。

あ、ご感想、お待ちしております^^♪（↑がめつい！！

第四訓 自分の言ったことが、自分が言いたかった意味で相手に伝わるとは限

お待たせ(?) 致しました! 一週間 + 一日ぶりの投稿でございます。
今回は、冬瀬にしては長めです。

第四訓 自分の言ったことが、自分が言いたかった意味で相手に伝わるとは限

「またお前か。つかお前何？お前はいつも悪いこと起きる前にやってくるよね？嫌がらせですかコノヤロ。」

例の通り、銀時がそう言つて万事屋に入れないようにしている人物は、攘夷浪士・桂小太郎。江戸中で指名手配され、今やそこの電柱すべてが、彼の写真がはつてある手配書でいっぱいである。

「いや、別に故意に來ているわけではないが。」

いつもどおりの涼しい顔でそう言つと、桂は、とにかく中に入らせろ、と言ひ残し、勝手に万事屋へと入り込む。

が、今日は前回のように、銀時のみが家にいるわけではない。神樂や新八も業務（というほどのものでもないが）にあたっている。

「あれ、桂さんじゃありませんか。どうかしたんですか？」

「今日もまた鬘をかぶっているアルか。どうアルか？鬘の調子は。」

桂は、ずかずかと応接室まで踏み込むと、「ツラじゃない桂だ」とお決まりの台詞を返す。

そして、ぼすつという音と共に、ソファーに身を沈めた。

仕方なく、銀時も目の前の長いすに座り、年がら年中死んでいる猩^{しょうじょう}紅の瞳を桂に向ける。

新八と神樂は、そんな銀時の両脇に腰かけた。

「……で？今日も悪い報せですか？」

万事屋従業員の二人は、「今日も」という銀時の言葉につつかかったが、彼らが疑問を口にする前に、桂が始めた。

「まあ、決して良い報せではない。……聞くか。」

銀時は、ケツとそつぽを向くと、

「へいへい。聞きやいーんだろ、聞きやあ。」

とぼそりと呟く。

その後に、ホントは聞きたくねーけどな、と付け加えるが、桂は、まるで銀時の皮肉を耳にしていなかったかのように、うむと頷くと、

言葉を継いだ。

「江戸の港の船なのだが、違法船が常時に比べると、裕に二、三倍は数が多くてな。それも、武器や砲弾を搭載しているものが多数あるそうだ。その中でも異様なのが、『霧雨丸』という船で、『爆火砲』と呼ばれる、宇宙の中でも、最も破壊力が強い大砲を積んでいる。しかも、だ。その大砲、二十門あるのだが、すべて標準が江戸に設定されているらしい。」

それを聞いて、さすがの銀時も、わずかながら反応した。

「……標準が江戸、って……。」

「つまり、」桂が銀時の言葉を引き取る。「二十門全門が弾を放てば、江戸は火の海になるだろう。爆火砲となれば、たった一門で半径五十キロの地域を灰にできるのだから、そんな大砲を二十門も積んでいるとすれば、船は少なからず春雨等の大きな犯罪組織の持ち物だ。」

春雨、犯罪組織。

万事屋三人組は、その言葉に、眉根にしわを寄せた。

「俺はさらに船の調査を進める。幕府も妙な動きをしているし、街の中も今まで通りではないかもしれない。注意を怠らないように頼むぞ。」

真剣な表情の桂に、しょうがなく銀時は頷いた。

さて、そのころ、「爆火砲」を積んだ霧雨丸——春雨の第二母艦では。

「あんたのおかげで、どうやら無事に密航できたみたいだ。まあでも、違法船がこれだけ多く密入国していると、少なからず地球人の連中に気付かれると思うけどな。」

アホ毛アンテナの青年、神威が、椅子の上で胡坐を掻いて、精密な彫りが施されているテーパーを挟んだ向こう側に座っている隻眼の男を微笑みながら見つめた。

部屋は十五本の柱で支えられ、こちらにも美しい彫刻が彫られている。

妙に、威圧感のある部屋で、終始誰かの視線を感じた。

「でもまさか、あそこまで派手に暴れるとは思わなかったよ。案外、派手好きなんだね。ねえ、斬暴。」

声をかけられて、神威の椅子の足もとに、これもまた足を組んで読書に没頭していた、斬暴と呼ばれた少年が顔を上げた。

「え？あ、ああ、そうじゃのう。丘から見えとつた橋からは、爆発の煙が拝めたぜよ。」

斬暴はそう述べてから、自分が床に座っているため、卓の向こうにいるうえ、椅子に腰かけていて見えないはずの片目の男を見上げた。その男、名は高杉晋助。

元は、吉田松陽の下で思想を学んでいた、「書生」という立ち位置に近い、「生徒」だった。現在はおちこちでテロを起こし、「攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男」と恐れられている人物である。「別に」と、高杉は始める。「俺アテメーらのためにあそこまで暴れたんじゃねエ。俺は……。」

そこまで言ったが、ここで言葉はぷつりと途絶えた。これ以上先を言うのは、不要だと思ったのだろう。相変わらずの冷笑を口元にたたえ、不敵な空気をその身に纏っている。

——俺は只、あの人の弔いをしたただけだよ。

まあ、あの人が地下で顔を合わせた時、喜んでくれるかは別だがな。心の中でそう付け加え、高杉は一つ息を吸うと、椅子から立ち上がった。

「俺の役目はこれで終わりだろう。後はテメーらの好きにやりな。」

……俺ア真選組の目を前回のようには逸らせ、テメーらが催そうとしている、史上初の『大儲け』に協力してやった。それ相応の返しは受け取った。それで終わりだ。鬼兵隊は一旦撤退させてもらうぜ。」

そう言い送り、扉へと向かう。

「まだだよ。」

常時の微笑みを浮かべたまま、神威は続ける。

「まだだよ。あんたの仕事はまだ終わっちゃいない。むしろ、これからとも言つべきだ。……あんたの役目が、真選組の目を逸らすためだけだったって？ 冗談じゃないよ。あんたの役割は、そう……世界を潰す、でしょ？」

高杉は、足を止め、くるりと神威を振り返った。

「世界を潰したいなら、春雨にもう少し協力すれば？」

微笑を湛えている神威の真意を見破るは、連木で腹を切るよりも困難である。

高杉も、それに劣らず薄く笑うと、再び春雨の二人に背を向け、足を進めた。

「天人と徒党を組むほど、鬼兵隊は落ちぶれちゃいねーよ。だがまあ」

いったん言葉で止め、高杉は一瞬の間を置くと、

「存外、とんでもねえ阿呆と一緒に踊るのも、悪かねーな。」

「……そう。でも、気を付けてよね。俺もまだ、あんたとは存分に踊れていない。」

神威の言葉を聞いたか聞かなかったか、高杉は、戸の向こうへと消えて行った。

「さあて、今の言葉、元老共のジジイ共にはどう聞こえたかな。」

その発言は、足元にいる斬暴に向けられたわけではない。部屋の十本の柱のうち、最も高杉がいたところに近い柱から、一つの人影が現れた。

「団長。頼むから言動は慎んでくれ。俺達の会話も、その『ジジイ共』に聞かれていることを忘れるな。」

中年の年頃、ボサボサの頭に、少し生えたヒゲ——神威の部下にして斬暴の義父、阿伏兎である。

「この部屋には、隠しカメラと盗聴器が仕掛けられていることを忘れたのか？ 『ジジイ共』は高杉との会話をずっと見て、聴き、奴を試した。もしかしたら、今も俺達を試しているかもしれねえ。」

隠しカメラに盗聴器。この部屋に入ると、誰かの視線を感じるとい
う、それである。

神威は、部下の言葉に、未だ高杉が消えた扉から顔をそらさず、「
まさか。」と返した。

「忘れてるわけないでしょ。でも、阿伏兔も言っちゃったね、『ジ
ジイ共』って。それも二回も。」

「始めたのはあんただろ。」

「ハイハイ。」

それにしても、と神威は続ける。

「ホントに大丈夫かな。『天人と徒党を組むほど、俺たちは落ちぶ
れちゃいねー』か。はてさて、元老共がこの言葉をどう受け取るか
……。」

「のう。」

ふと、足元の斬暴が、ひざ上に広げられていた書物から目を離し、
会話に首を突っ込んできた。

「もし元老が『否』と判断すれば、高杉はどうなるのかえ。」

阿伏兔は、義息子の質問に、ぼそりと答える。

「仮に高杉が春雨のために働こうと思わざるも、使い道があると元
老が推定すれば、まだ生きていられる。だが、もしも利にならない
とわかれば、即刻鬼籍に入るころになるだろうな。」

「今の高杉は、使い道になるのかえ？」

一瞬、阿伏兔は閉口したが、やがて答えた。

「なる、だろうな。だが、地球での『大儲け』が終わりや、使い道
なしとなる。しかも、知る必要のないことを知りすぎたうえ、協力
な武装集団を擁しているあの獣は、すぐに始末される。」

それを聞いて、十五歳という、未だ、少しばかり幼さが残っている
少年は、死の刃を背に感じた。

今更ながらも、自分がどれほど恐ろしい組織にいるかを、思い知ら
された。

使用価値在りと元老が判断すれば、自分は生きていられる。

だが、使用価値無しと判断されれば――。

無論、殺される。

一瞬、もし、八年前の自分が、神威^{かれら}たちに付いていかなば、どうなっていたのだろう、と思案した。こんな恐ろしい思いは、味わわなかっただろう。しかし、付いていかなかったとして、自分に将来^{さき}はあったのだろうか。

けれど、斬暴はそこでいったん思考を遮断した。これ以上、「もし」のことで愚考を重ねていても、何の得にもならない。それどころか、嫌な思い出ばかりが思い出されてくる。

今は、「昔」よりも、「今」のことを考えねばならない。

のみならず、つい最近、神威や阿伏兔に内緒――それどころか、誰にも知らせずに、いや、知らせてはならない、自分がやってしまったとある「仕事」を算段に入れると、これから自分が春雨の中でも「裏切り者」として処断される可能性もあるのだ。

そう、危険な仕事だった。

しかしながら、この「仕事」を成し遂げるということこそ、自分が自分であるという所以でもあるように思える気もした。

……やはり、自分は……。

再び、斬暴は思弁を止める。

ここからは先は、自分の一番思い出たくない記憶だ。思い出せば、良くても発狂するだろう。

遠い記憶を、まるで臭いものに蓋をするかのように、パンドラの匣^{はこ}におさめると、斬暴は再び手元の本に目を落とした。

そんな義弟と義息子を、神威と阿伏兔はいぶかしげな視線で見つめていた。

第四訓 自分の言ったことが、自分が言いたかった意味で相手に伝わるとは限

「大儲け」が、これからの物語に関係していきます。

斬暴の言う、「もし元老が『否』と判断すれば」というのは、もしも元老が、高杉が春雨に協力する気がないと判断すれば、という意味です。

少しわかりずらくて申し訳ありません；

またまた読書感想文（今回は短いです。そしてネタバレあり）（↑オイ）

近藤と土方が決別したところ、涙目で読んでいました。（これから「燃えよ剣」を読まれる方にネタバレにならぬよう、どのシーンでとは言いませんが）

あの土方さんが、まさか涙して近藤さんに抗議するだなんて……！

！こっちも涙でてるじゃないですかコノヤロー！！

そのうえ、近藤さん、あなた、死に行くようなものでしょう……。でも、「男が求める美しさ」ってカッコいいですね。自分の武士道を持つ近藤勇昌宜と土方歳三義富、両仁を私は本当に尊敬致します。

と、今回はここで読書感想文終了です。

ところで、銀魂本誌のことなのですが、「見廻り組篇」が読みたくてしょうがありません。

リア友さまに、

「ジャンプでやってたよ。のぶめちゃんかわいい。」

とおっしゃって頂いたのですが、アニメ見てからマンガを読む私には未だ読めないのです。

まだ四十一二巻どころか四十一巻でさえ買っていないのに。四十二巻

を読むはずがないではないか！

そのうえ、「銀さんが、真選組に自分が白夜叉だってバラす」ということを聞いた瞬間、私は気絶しかかりました。

待て待て、言っちゃいかんって。

「それにね、こう、バラし方がカッコよくて、こう……。」

と説明なさるところで寸止め致しました。

「ダメだって！アニメで見ないとダメだって！！！！！」

……それに……。

もし真選組が元から銀さん〃白夜叉ってしっていたらさあ……。

白夜叉暗殺篇、書けないじゃないか。

第五訓 「」と『』（前書き）

今回のタイトルには、意味なんてありません。そのままです。
なぜかって？

それは……本文を読んでからのお楽しみです。

そして今回は……。Mなあの人が登場です。

第五訓 「と」

『なーに？』

「いえ、だからその……。」

『なーに？』

「いやだから何度も説明しているように……。」

『なーに？』

「だから幕府中央暗部が……。」

『なーに？』

「……。」

『なーに？』

「松平公、いい加減になさってください。今は至極マジメな話をしている最中です。」

『……まったくお前は、ユーモアが利かない奴だな。で？幕府中央暗部がどうしたって？』

「ですから、幕府が春雨との密約を交わしました。」

『それは、真選組の騒動の後に気がついた。』

「ええ、それは知っています。……春雨は天導衆と組んで、地球の破壊を企てています。」

『……。』

「……いえ、言葉を間違えましたわ。人間——地球人を追い払い、地球の星そのものを、他の星の連中に、競りにかけようとしています。……今回は、情報源が情報源だけに、あまり確かな情報ではないのですが。」

『それで？』

「爆火砲を積んだ戦艦一隻を、地球によこしてきています。搭載されているのは爆火砲のみならず、数えきれないほどの武器——銃やミサイル等もあります。裕に、小型銃だけでも千丁は超えているでしょうね。」

『……爆火砲は、何門だ。』

「二十門。」

『……。』

「いずれ援軍が来ることも考え、地球人は十分警戒していたほうがいいでしょう。」

『……もはや、確かな情報という域を超え、爆火砲が搭載されている時点で、春雨と天導衆が地球人を星から追い出すのは確かなことになっているな。』

「そうかもしれません。」

『そうかもという？』

「ただの脅しの可能性もあるということです。春雨や天導衆ならば、極秘裏に計画を進めることでしょうし、なにより決して私たち御庭番や真選組の密偵等に、計画が始動する前まで気付かれないように動くと考えるのが妥当です。しかし彼らは、こうも簡単に手のうちを見せた。……ただの脅しのために爆火砲を用いたのかもしれない。もしくは、畏かも。」

『それを踏まえれば、他にも可能性が出て来るな。』

「といたしますと？」

『すでに、その計画が始動している……とか。』

「……考えたくありませんが、その可能性も十分あり得ます。」

『俺は真選組を使って、何とか江戸を護ることにする。お前はお前で、できるだけそれに関する情報を集めてくれ。』

「了解しました。」

ブチッ。

ツーツーツー……。

第五訓 「」と『』（後書き）

御覧の通り、地の文がまさかの「ブチッ。ツーツーツー……。」「
しかないという……。」「
なんか悲しい……。」「
そして短い……。」「

第六訓 類は友を呼ぶ

「ふざけるな……。爆火砲が二十門……。」

いつになく、怒気と焦りの表情が含まれた、真選組副長・土方十四郎の静かな声。先ほどまで向かい合っていた卓に、さっきからコツコツと指を叩きつけ続けている。

「そんなのを撃たれたら、江戸はおるか、地球は吹っ飛ぶぞ。」

「いや、土方さん……。」

声をかけた監察の山崎退を、土方の鋭い双眸が睨みつける。

山崎は、見た目は冷静にしているも、一目で憤然しているとわかる上司をどうなだめようか思いあぐね、眉根にしわを寄せる。

「と、トッシー……。」

山崎の隣で正座していた葵も、少なからず兄の焦り方に動揺する。

「ねえ、落ち着いてよ……。」

「……。」

土方は、返さない。

何も知らないお前が口を挟むな、という顔である。

「ジミー……。爆火砲って何？」

山崎は、ジミーじゃありません山崎です、と露骨に不快そうな表情を浮かべると、しょうがなく葵の問いに答えた。

「爆火砲は、たった一門で、半径五十キロの地域を焼土と化すことができる大砲です。『霧雨丸』という船に、二十門搭載されてあるのがわかったんです。」

半径五十キロの破壊力を持つ大砲が、二十門も……。

葵の背筋を、悪寒がさする。

「……あ、俺は他の隊員に伝えてきます。」

そう言つて、山崎は気まずい空気から逃げ出そうと立ち上がり、襖に手をかけるが、がしりと葵に掴まれた。

——ぬけがけは許しません。幼い淑女^{レディ}を憤っている狼の前に置いて

行く気ですか、あなたは。

その目が、怒りと共に、山崎にそう伝える。

——いや、狼狽て葵さんの兄上でしょ。付け加えさせてもらいますけどね、十五歳は幼いの領域には入りません！せめて十歳までです。あと、葵さんは淑女^{レディ}じゃありませんから。

山崎が返答した瞬間、山崎の腕を握っていた葵の手に力がこもり、ばきりと骨が折れる嫌な音がした。

「いつてええええ！」

絶叫する山崎。

しかしそれが逆にドS精神をくすぐったのか、不機嫌な兄を目の前にしながらも、葵は微笑みながら山崎への攻撃を開始する。

「ちよちよちよつと！ここでドS発動させないでください！それにその設定、遙か昔に忘れ去られてたでしょ！作者の記憶の忘却の彼方だったでしょ！」

「大丈夫。作者のページを見てきなさい。自己紹介の欄のところにちゃんと『物覚えがいい』って書いてあるから。勉強以外だけど。」

「『物覚えがいい』じゃなくて『物覚えが速い』！確かに冬瀬さん一回文章読んだだけですぐ覚えちゃいますけどね、一時間後には忘却の彼方なんです！いいと速いは違うんです！」

「いい訳は終了？こつからが本場でえす！」

ぎいやあああ、と山崎の悲惨な悲鳴が副長室に響く。
が、しかし。

「やめろ、お前ら。」

部屋の主の声で、山崎の絶叫と、葵の動きがピタリと止まる。

「騒ぎたいなら外で騒げ。俺の部屋の中は迷惑だ。」

山崎は、これがチャンスだとばかりに土方の隣に座る。

「あ、俺は副長の手伝いをしてるんで、どうぞ葵さんは外に！」

「いや、やつぱ迷惑だから山崎、お前も出る。」

急に考えを改めた土方は、隣の山崎を、まるで子猫のように首根っこから掴み、ポイと葵の方へ抛る。

待つてましたとばかりに葵はそんな山崎を軽々とキャッチし、お姫さま抱っこするような格好になると、

「ご協力ありがとうございます。」

言い残して、副長室を出て行った。

山崎の不幸はここでは終わらない。

何と廊下で、偶然沖田に出会ってしまったのである。

「お、おおおおお沖田隊長!？」

沖田は、お姫さま抱っこされている山崎を、聊いさか恨めしそうな視線で見降ろし、

「あり。お前こんなところで何してんの。」

冷やかな声で尋ねる。

土方のような鋭い瞳で見つめられ、蛇に睨まれた蛙のように動けなくなつた山崎の代わりに、葵が答えた。

「話すとちよつと長くなるんだけど、ジミーがちよつとあたしに失礼なこと言つたから、お仕置きタイムかな。」

それを聞いて、沖田は腹黒い笑みを浮かべると、ボキリと拳を鳴らす。

「そうか。なら俺も参加しようかな、お仕置きタイム。……あつちやんにお姫さま抱っこされてるお仕置きタイムだけど。」

最後の言葉は葵には聞こえなかったが、山崎の耳にはしっかりと届いていた。

それから数分後、観察山崎退の叫喚が江戸中に響いたのは、言うまでもない。

第六訓 類は友を呼ぶ（後書き）

久しぶりに近くの書店に行ってみると、「怪盗クイーンシリーズ」の新作が出ていて、思わず買ってしまいました。

オイオイ、お前の歳になってまだそれか？

といわれそうでしたが、私は好きですもん、怪盗クイーン！カッコイイですもん！そして面白いですもん！

……まあなんだかんと言っておりましたが、怪盗クイーンに未だハマっている冬瀬でございました。

新作を買ったついでに、「ダンタリアンの書架」の二巻を購入しました。>>

アニメは録画してコンプリートしたんですが、小説の方は全く手をつけていなかったの、とっても嬉しかったです！

そして……原作がライトノベルだと知らなかった私って一体……。

という訳で、冬瀬の近状報告でありました。

（長い！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717u/>

銀魂—土方葵の真選組日誌—

2011年11月27日19時51分発行